

# 亀井・城山

寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場  
築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書

— 本 文 編 —

財団法人 大阪文化財センター

亀井・城山正誤表

頁	行	誤	正
6	第1表-28	樋野ヶ池窯跡 窯跡	樋野ヶ池窯跡 古墳時代
9	17~18	方格規矩鏡内行花文鏡	方格規矩内行花文鏡
19	19	西側の暗灰色粘土堆積域	西側の暗灰色粘土層堆積域
	21	層厚は2cmである	層厚は20cmである
27	5	縄文時代晩期の	縄紋時代晩期の
30	17	生駒西麓の胎土の	生駒西麓型の
70	22	生駒西麓の	} 生駒西麓型の胎土の
80	31	//	
95	6~7	I層-暗褐色粘土層 II層-黒褐色粘土層	I層-黒褐色粘土層 II層-暗褐色粘土層
96	105図	III 暗灰色シルトと	III 青灰色シルトと
102	17	生駒西麓の	} 生駒西麓型の
104	31	//	
107	118図	II 茶色粘質シルト	茶褐色粘質シルト
116	23	生駒西麓の	生駒西麓型の
120	29	暗茶褐色粘土の1層	褐色粘土の
121	5	生駒西麓の	生駒西麓型の
142	15	生駒西麓の	生駒西麓型の
184	6	外径で	外円と
191	9	いく課程で流入し	いく過程で流入し
195	20	調査する査技術が改良されるこ とができた。低湿地	調査することができた。調査技 術が改良されるなら、低湿地
200	24	3077	3037
201	12	きめの細粒の	きめの細かな

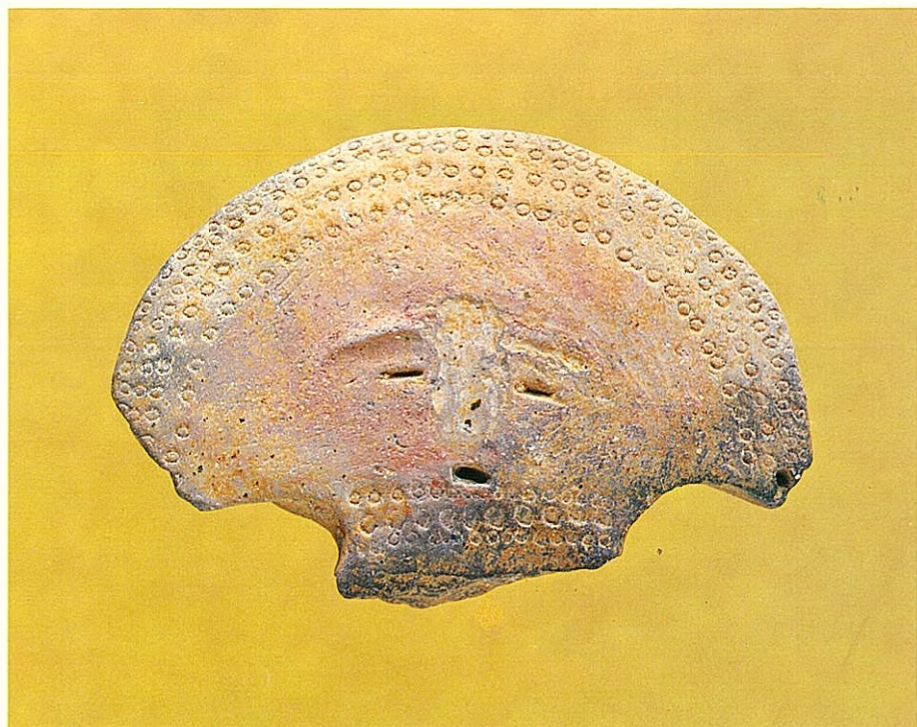
頁	行	誤	正
211	7	9.0 cm	9.0 m
236	22	小形壘形土器	小型壘形土器
256	28	総数 723 点である(第2表)	総数 786 点である(第3表)
273	3	明確遺構	明確な遺構
	10	遺概	遺構
275	16	第V様 前半	第V様式
278	10	中心孔の円形	中心孔の円径
279	6	輝緑岩	輝緑岩
304	20	後原高左右の脇部	後原高44.2cm、左右の脇部
374	22	第5章	第V章
381	註④	引用文献5に	瓜生堂に
382	参考文献	中西靖人	中西靖人他
396	(註)(3)	内田雄二郎教示	丸田雄二郎教示
463	15	貝殻	貝殻
	22	略	ほぼ
	図 版		
	40上	J-4区柱痕	J-4区柱根
	127上	361-1	361-3
		361-2	361-1
		361-3	361-2
	127下	359-5	359-3

# 亀井・城山

寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場  
築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書

— 本文編 —

財団法人 大阪文化財センター



分銅形土製品 (SD3041出土)



亀井古墳2号主体部全景（南から）

## 序 文

“亀井、城山”は、瓜生堂遺跡と共に弥生時代以来の河内の“クニ”の歩みと河内平野の生成を刻み込んだ代表的な集落遺跡です。この遺跡は、大和盆地の水を龍田口で集水し、狭隘な亀瀬<sup>あい</sup>を経て、河内平野に向けて一気に奔流する大和川の代表的な支流の一つである平野川の縁辺に立地し、川の恵と厳しい自然条件<sup>めぐみ</sup>の洗礼を受けながらその集落を如何に維持し、調和・発展させてきたかを物語ってくれます。

本書は、八尾市南亀井町、並びに大阪市平野区长吉出戸町の地に、大阪府土木部が進めている寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場並びに飛行場（南北）幹線特殊マンホール建設計画が施工されるに及んで、昭和53年5月から昭和55年12月まで調査を実施してきた当該亀井、城山遺跡の調査結果を収録したもので、今回の調査によって、亀井、城山遺跡の実態の解明に一層大きく貢献出来得るものと確信します。

これらは偏に、大阪府（土木部）はじめ調査関係各位並びに一般多数の方々のご協力、ご援助の賜物と深く感謝すると共に、今後とも温かいご支援を賜わるよう切望してやみません。

昭和55年12月

財団法人 大阪文化財センター

理事長 加藤 三之雄

## 例 言

1. 本書は、大阪府土木部が進めている寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場並びに飛行場（南北）幹線特殊マンホール建設に伴う、八尾市南亀井町所在亀井遺跡並びに大阪市平野区長吉出戸町所在城山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書で報告する亀井遺跡並びに城山遺跡の調査は、財団法人大阪文化財センターが、大阪府土木部東部流域下水道事務所の委託を受けて実施したものである。
3. 本調査に要した費用208,106,000円は、すべて大阪府が負担した。
4. 亀井遺跡並びに城山遺跡の調査は、昭和53年5月24日から昭和55年3月25日までの間実施した。
5. 出土遺物の基礎的整理を主とする遺物整理作業も発掘調査と並行して実施した。また、本書の作成にかかる総括的な整理作業は、昭和55年6月1日から昭和55年12月25日までの約7ヶ月間に実施した。
6. 本調査は、大阪府教育委員会の指導の下、財団法人大阪文化財センターが実施した。調査並びに本書作成に関係した者は以下の組織表のとおりである。

### 調査関係者組織表

事務局	理事兼事務局長	井上定清
	事務局次長兼総務課長	筒井康雄
	主幹兼庶務係長	阪上允子、主査 田中喜代子、主事 秋山芳廣、立石紀代、灰本明子、千野和久、田口宗義、鎗山洋子
	主幹兼普及係長	福岡澄男、技師 片山彰一、平井貞子、技能員 立花正治
	業務課主幹	棕尾孝彦
調査総括責任者	業務課長	堀江門也
調査担当	業務課主幹兼第1係長	中西靖人、第4係長 高島 徹、第5係長 酒井龍一、主査 辻内義浩、井藤暁子、技師 寺川史郎、尾谷雅彦、畑 暢子、金光正裕、国乗和雄、舟山良一、村上富貴子、清原弘美、広瀬雅信

7. 自然史関係の調査については以下の方々に依頼した。（順不同）

大阪市立自然史博物館 那須孝悌（地質・層序・植物・花粉・石質）・同 樽野博幸（地質・層序・動物・石質）・同 日浦勇（昆虫）・同 宮武頼夫（昆虫）・同 山西良平（動物）・立命館大学 原秀禎（地理）・大阪教育大学付属高校平野分校 野口寧也（珪藻）・大阪産業

大学 坂本清子（花粉）

8. 古墳出土遺物の取上げ・保存処理については、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターの多大な協力を得た。
9. その他の出土遺物の保存処理については財団法人元興寺文化財研究所に委託した。
10. 本調査では、大阪大学・大阪外国語大学・大阪教育大学・大阪キリスト教短期大学・大阪芸術大学・大阪針灸専門学校・大阪モード学園・大手前女子大学・関西大学・関西学院大学・近畿大学・神戸市外国語大学・四天王寺女子大学・立命館大学等の学生諸氏の参加・協力を得た。
11. 本書の執筆分担は、目次に示したとおりであるが、第9章・第10章については、調査担当者全員の討議をふまえて、寺川・尾谷・那須・樽野の4名が起稿したものである。
12. 本書の編集は、寺川・尾谷が行った。
13. 本調査にあたっては、写真・実測図などの記録を作成すると共に、カラースライドも多数作成した。広く利用されることを希望する。



## 凡 例

1. 遺跡は、アルファベット記号と4桁の数列の組合せで表記した。

アルファベット記号は、SD…溝、SE…井戸、SK…土坑、SX…その他の遺構、NR…自然流路、を表わしている。

4桁の数列の最初の数字は、時代を表わし、3…弥生時代、4…古墳時代、9…室町時代以降、を示している。

4桁の数列の下3桁は、同一時代の同種の遺構の一連番号を表わしている。

NR3001・SX4001については、2時代以上にわたって存在した遺構であるため、最古の所属時代の番号を、後の時代においてもそのまま使用した。

2. 遺物実測図の縮尺率は、一部の例外を除いて、土器・木器を4分の1、土製品・石器・金属器を2分の1に統一している。
3. 遺構実測図の縮尺率は、30分の1・40分の1・60分の1・80分の1・200分の1のいずれかに該当させている。
4. 同一遺構内出土の遺物実測図には通し番号を付した。また、遺物実測図の番号と写真図版の遺物番号とは、一致させている。
5. 「生駒西麓型」の胎土とは、土器の表面観察に依り、いわゆる生駒西麓に由来するものに酷似するものを示す。
6. 打製石器については、とくに石質を記していないが、すべてサヌカイト製である。
7. 引用、参考文献については、第6章のみ編・著者をアルファベット順に記載し、他の章については編・著者を五十音順に記載した。

# 亀井・城山

寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場  
築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書

## 目次

巻頭カラー写真図版

序文

例言

第Ⅰ章	はじめに	堀江門也	1
第Ⅱ章	遺跡地周辺の地理的、歴史的背景		
第1節	自然地理的背景	原 秀禎	3
第2節	歴史的背景	尾谷雅彦	8
第Ⅲ章	調査の目的と方法	高島 徹、那須孝悌	
第1節	既往の調査と提出された問題点		11
第2節	今回の調査の前提となった既往の調査		12
第3節	調査の目的		12
第4節	調査の方法		13
第5節	調査区地区割り方法		14
第Ⅳ章	基本層序		
第1節	弥生時代遺物包含層までの層序	寺川史郎	15
第2節	弥生時代の遺物包含層（第Ⅱ層）	金光正裕	19
第3節	地山層以下の沖積層	那須孝悌、樽野博幸	20
第4節	縄紋時代の海成層について	那須孝悌、樽野博幸	25
第5節	低位段丘層相当層	那須孝悌、樽野博幸	25
第6節	中位段丘層相当層	那須孝悌、樽野博幸	26
第Ⅴ章	遺構及び遺物	高島 徹、尾谷雅彦、寺川史郎、金光正裕、畑 暢子、清原弘美、広瀬雅信	
第1節	概略		27
第2節	弥生時代前期		33
第3節	弥生時代中期		35
第4節	弥生時代後期		183
第5節	弥生時代遺物包含層		256
第6節	古墳時代		295

第7節	飛鳥時代・藤原時代	324
第8節	室町時代	328
第9節	江戸時代以降	329
第Ⅶ章 遺構・遺物の検討		
第1節	いわゆる亀井産の土器の検討 ——畿内第Ⅲ様式古段階の土器を中心にして——	畑 暢子 335
第2節	亀井遺跡出土第Ⅳ様式土器について	清原弘美 341
第3節	亀井遺跡の石器生産 ——畿内・弥生集落における一様相——	酒井龍一 352
第4節	銅鐸形土製品	寺川史郎 367
第5節	亀井遺跡出土の分銅形土製品について	金光正裕 371
第6節	亀井出土の紡織具について	広瀬雅信 374
第7節	亀井古墳の検討	高島 徹 383
第8節	古墳時代中期における築堤工事について	尾谷雅彦 394
第Ⅶ章 自然遺物		
第1節	動物遺体	樽野博幸、山西良平 397
第2節	昆虫遺体	日浦 勇、宮武頼夫 405
第3節	植物遺体	那須孝悌 413
第4節	花粉分析	那須孝悌、坂本清子 423
第5節	珪藻分析	野口寧也 433
第Ⅷ章 古墳出土の木棺の取り上げと副葬品の保存処理 沢田正昭、秋山隆保		
第1節	経過	439
第2節	木棺の取りあげ	440
第3節	短甲の復原	443
第Ⅷ章 亀井遺跡の変遷 寺川史郎、尾谷雅彦、那須孝悌、樽野博幸		
第1節	概要	444
第2節	弥生時代中・後期の環境と生活	447
第3節	古墳時代中期の土木工事について	454
第Ⅸ章 まとめ 寺川史郎、尾谷雅彦、那須孝悌、樽野博幸 455		
附 章 飛行場（南北）幹線特殊マンホール建設に伴う城山遺跡の発掘調査		
第1節	特殊マンホールNo.2建設工事に伴う城山遺跡の発掘調査	国乗和雄 457
第2節	特殊マンホールNo.3建設工事に伴う城山遺跡の発掘調査	酒井龍一 461

## 挿 図 目 次

第 1 図	地形分類図	2
第 2 図	等高線図	3
第 3 図	1 m 等高線図	4
第 4 図	遺跡分布図	7
第 5 図	地区割図 (1/600)	13
第 6 図	基本層序模式図	15
第 7 図	弥生時代遺物包含層断面図 (1/60)	17・18
第 8 図	亀井遺跡HT地点における T. P. - 3 m までの地質柱状図	20
第 9 図	府道中央環状線での地質断面図の位置	22
第 10 図	府道中央環状線に沿う地質断面図	23・24
第 11 図	縄紋式土器実測図	27
第 12 図	S D 3024 出土遺物実測図	33
第 13 図	S D 3025 出土遺物実測図	33
第 14 図	S D 3026 出土遺物実測図	34
第 15 図	S D 3027 遺構平面図 (1/60)	34
第 16 図	S D 3027 出土遺物実測図	35
第 17 図	ピット出土遺物実測図	40
第 18 図	ピット出土遺物実測図	41
第 19 図	ピット出土遺物実測図	42
第 20 図	S K 3001 出土遺物実測図	43
第 21 図	S K 3002 出土遺物実測図	44
第 22 図	S K 3007 土層断面図 (1/60)	44
第 23 図	S K 3008 出土遺物実測図	44
第 24 図	S K 3008 出土遺物実測図	45
第 25 図	S K 3009 遺構平面図 (1/60)	45
第 26 図	S K 3009 出土遺物実測図	45
第 27 図	S K 3009 出土遺物実測図	46
第 28 図	S K 3010 出土遺物実測図	46
第 29 図	J - 8 区 N d 層出土遺構平面図 - S K 3011・S K 3049 - (1/60)	46
第 30 図	S K 3011 出土遺物実測図	47
第 31 図	S K 3012 出土遺物実測図	47
第 32 図	S K 3013 出土遺物実測図	48
第 33 図	S K 3014 出土遺物実測図	48
第 34 図	S K 3015 出土遺物実測図	49
第 35 図	S K 3016 出土遺物実測図	49
第 36 図	I・J - 4 区 N d 層出土遺構平面図 - S K 3017・S K 3046 - (1/60)	50
第 37 図	S K 3017 出土遺物実測図	50
第 38 図	S K 3020 出土遺物実測図	51

第 39 図	S K3022出土遺物実測図	51
第 40 図	S K3024遺構平面図及び土層断面図 (1/60)	52
第 41 図	S K3024出土遺物実測図	52
第 42 図	S K3025・S K3026土層断面図 (1/60)	52
第 43 図	S K3026出土遺物実測図	53
第 44 図	S K3029出土遺物実測図	53
第 45 図	S K3032出土遺物実測図	54
第 46 図	S K3032出土遺物実測図	54
第 47 図	S K3033・S K3034遺構平面図 (1/60)	55
第 48 図	S K3033出土遺物実測図	55
第 49 図	S K3034出土遺物実測図	56
第 50 図	S K3036出土遺物実測図	56
第 51 図	S K3037遺構平面図及び土層断面図 (1/60)	57
第 52 図	S K3037出土遺物実測図	57
第 53 図	S K3038出土遺物実測図	58
第 54 図	S K3040遺構平面図及び土層断面図 (1/60)	59
第 55 図	S K3040出土遺物実測図	60
第 56 図	S K3040出土遺物実測図	61
第 57 図	S K3040出土遺物実測図	62
第 58 図	S K3041遺構平面図及び土層断面図 (1/60)	63
第 59 図	S K3041出土遺物実測図	64
第 60 図	S K3041出土遺物実測図	65
第 61 図	S K3041出土遺物実測図	66
第 62 図	J・K-5区Ⅱd層出土遺構平面図—S K3043・S K3044・S K3050— (1/60)	67
第 63 図	S K3043出土遺物実測図	68
第 64 図	S K3043出土遺物実測図	69
第 65 図	S K3045出土遺物実測図	69
第 66 図	S K3048遺構平面図及び土層断面図 (1/60)	71
第 67 図	S K3049出土遺物実測図	71
第 68 図	S K3051出土遺物実測図	71
第 69 図	S K3053出土遺物実測図	72
第 70 図	K-4・5区Ⅱd層出土遺構平面図—S K3054— (1/60)	72
第 71 図	S K3054出土遺物実測図	72
第 72 図	S K3056土層断面図 (1/60)	73
第 73 図	S K3056出土遺物実測図	73
第 74 図	S K3060出土遺物実測図	73
第 75 図	S E3001遺構平面図及び土層断面図 (1/60)	74
第 76 図	S E3001杭見通し図 (1/60)	75
第 77 図	S E3001出土遺物実測図	75
第 78 図	S E3001出土遺物実測図	76
第 79 図	S E3001出土遺物実測図	76
第 80 図	S E3001出土遺物実測図	77

第 81 図	S E3002遺構平面図及び土層断面図 (1/40)	78
第 82 図	S E3002出土遺物実測図	79
第 83 図	S E3002出土遺物実測図	79
第 84 図	S E3003出土遺物実測図	81
第 85 図	S E3008出土遺物実測図	81
第 86 図	S E3009遺構平面図及び土層断面図 (1/80)	82
第 87 図	S E3009出土遺物実測図	83
第 88 図	S E3009出土遺物実測図	84
第 89 図	S E3010遺構平面図及び土層断面図 (1/40)	85
第 90 図	S E3010出土遺物実測図	86
第 91 図	S E3013・S D3011遺構平面図及び土層断面図 (1/60)	87
第 92 図	S E3013出土遺物実測図	88
第 93 図	S E3013出土遺物実測図	88
第 94 図	S E3014遺構平面図及び土層断面図 (1/40)	88
第 95 図	K-6区Ⅱd層出土遺構平面図—S E3015・S K3055・S D3010— (1/60)	89
第 96 図	S E3015出土遺物実測図	89
第 97 図	S E3016遺構平面図及び土層断面図 (1/40)	90
第 98 図	S E3016出土遺物実測図	90
第 99 図	S E3016出土遺物実測図	90
第 100 図	S D3001土層断面図 (1/60)	91
第 101 図	S D3001出土遺物実測図	92
第 102 図	S D3001出土遺物実測図	93
第 103 図	S D3001出土遺物実測図	94
第 104 図	S D3003土層断面図 (1/60)	95
第 105 図	S D3004遺構平面図及び土層断面図 (1/80)	96
第 106 図	S D3004出土遺物実測図	98
第 107 図	S D3004出土遺物実測図	99
第 108 図	S D3004出土遺物実測図	100
第 109 図	S D3004出土遺物実測図	101
第 110 図	S D3005土層断面図 (1/60)	101
第 111 図	S D3006出土遺物実測図	102
第 112 図	S D3009出土遺物実測図	103
第 113 図	S D3009出土遺物実測図	103
第 114 図	S D3010土器出土状況及び土層断面図 (1/60)	104
第 115 図	S D3010出土遺物実測図	105
第 116 図	S D3010出土遺物実測図	105
第 117 図	S D3011出土遺物実測図	106
第 118 図	S D3012土層断面図 (1/40)	107
第 119 図	S D3012出土遺物実測図	108
第 120 図	S D3013土層断面図 (1/40)	108
第 121 図	S D3013遺構平面図 (1/40)	109
第 122 図	S D3013出土遺物実測図	111

第 123 図	S D3013出土遺物実測図	112
第 124 図	S D3013出土遺物実測図	113
第 125 図	S D3013出土遺物実測図	114
第 126 図	S D3014土層断面図 (1/60)	115
第 127 図	S D3014出土遺物実測図	117
第 128 図	S D3014出土遺物実測図	118
第 129 図	S D3014出土遺物実測図	119
第 130 図	S D3015土層断面図 (1/40)	120
第 131 図	S D3015出土遺物実測図	120
第 132 図	S D3016遺構平面図及び土層断面図 (1/40)	121
第 133 図	S D3016出土遺物実測図	121
第 134 図	S D3017・S D3018遺構平面図及び土層断面図	122
第 135 図	S D3017出土遺物実測図	122
第 136 図	S D3018出土遺物実測図	123
第 137 図	S D3020・S K3028土層断面図 (1/60)	123
第 138 図	S D3020出土遺物実測図	123
第 139 図	H-17区出土遺構平面図及び土層断面図	125・126
第 140 図	S D3021出土遺物実測図	127
第 141 図	S D3021出土遺物実測図	128
第 142 図	S D3021出土遺物実測図	128
第 143 図	S D3023土層断面図	129
第 144 図	S D3023出土遺物実測図	132
第 145 図	S D3023出土遺物実測図	133
第 146 図	S D3023出土遺物実測図	134
第 147 図	S D3023出土遺物実測図	135
第 148 図	S D3023出土遺物実測図	136
第 149 図	S D3023出土遺物実測図	136
第 150 図	S D3023出土遺物実測図	137
第 151 図	S D3023出土遺物実測図	138
第 152 図	S D3028土層断面図 (1/40)	139
第 153 図	S D3028遺構平面図 (1/30)	140
第 154 図	S D3028出土遺物実測図	143
第 155 図	S D3028出土遺物実測図	144
第 156 図	S D3028出土遺物実測図	145
第 157 図	S D3028出土遺物実測図	146
第 158 図	S D3028出土遺物実測図	147
第 159 図	S D3028出土遺物実測図	147
第 160 図	S D3029・S D3030・S K3028遺構平面図及び土層断面図	149・150
第 161 図	S D3029出土遺物実測図	151
第 162 図	S D3029出土遺物実測図	152
第 163 図	S D3029出土遺物実測図	153
第 164 図	S D3029出土遺物実測図	154

第 165 図	S D 3029 出土遺物実測図	155
第 166 図	S D 3029 出土遺物実測図	156
第 167 図	S D 3030 出土遺物実測図	158
第 168 図	S D 3031・S K 3036 遺構平面図及び土層断面図 (1/30)	159
第 169 図	S D 3031 出土遺物実測図	162
第 170 図	S D 3031 出土遺物実測図	163
第 171 図	S D 3031 出土遺物実測図	164
第 172 図	S D 3031 出土遺物実測図	165
第 173 図	S D 3031 出土遺物実測図	166
第 174 図	S D 3031 出土遺物実測図	167
第 175 図	S D 3038 出土遺物実測図	167
第 176 図	S D 3040 出土遺物実測図	170
第 177 図	S D 3040 出土遺物実測図	171
第 178 図	S D 3040 出土遺物実測図	172
第 179 図	S D 3040 遺構平面図及び遺物実測図	173
第 180 図	S D 3040 出土遺物実測図	173
第 181 図	S D 3040 出土遺物実測図	175
第 182 図	S D 3040 出土遺物実測図	176
第 183 図	S X 3001 遺構平面図及び土層断面図 (1/30)	178
第 184 図	S X 3001 出土遺物実測図	178
第 185 図	S X 3002 遺構平面図 (1/30)	179
第 186 図	S X 3002 出土遺物実測図	179
第 187 図	S X 3002 出土遺物実測図	180
第 188 図	S X 3003 遺構平面図 (1/30)	180
第 189 図	S X 3003 出土遺物実測図	181
第 190 図	S X 3004 遺構平面図 (1/30)	182
第 191 図	S K 3004 遺構平面図及び土層断面図 (1/60)	183
第 192 図	S K 3004 出土遺物実測図	184
第 193 図	S K 3004 出土遺物実測図	184
第 194 図	S K 3004 出土遺物実測図	185
第 195 図	S K 3039 遺構平面図及び土層断面図 (1/40)	186
第 196 図	S K 3039 出土遺物実測図	187
第 197 図	S E 3004 遺構平面図及び土層断面図 (1/40)	188
第 198 図	S E 3004 出土遺物実測図	188
第 199 図	S E 3005 遺構平面図及び土層断面図 (1/40)	188
第 200 図	S E 3005 出土遺物実測図	189
第 201 図	S E 3006 遺構平面図及び土層断面図 (1/40)	190
第 202 図	S E 3006 出土遺物実測図	191
第 203 図	S E 3007 遺構平面図及び土層断面図 (1/40)	192
第 204 図	S E 3007 出土遺物実測図	192
第 205 図	S E 3011 遺構平面図及び土層断面図 (1/40)	193
第 206 図	S E 3011 出土遺物実測図	193



第 207 図	S E3011出土遺物実測図	194
第 208 図	S E3012出土遺物実測図	194
第 209 図	S E3012出土遺物実測図	194
第 210 図	S D3008土層断面図 (1/40)	197
第 211 図	S D3008出土遺物実測図	198
第 212 図	S D3008出土遺物実測図	199
第 213 図	S D3032土層断面図 (1/60)	200
第 214 図	S D3032出土遺物実測図	201
第 215 図	S D3032出土遺物実測図	201
第 216 図	S D3033土層断面図 (1/60)	202
第 217 図	S D3033出土遺物実測図	204
第 218 図	S D3033出土遺物実測図	205
第 219 図	S D3033出土遺物実測図	206
第 220 図	S D3033出土遺物実測図	207
第 221 図	S D3033出土遺物実測図	208
第 222 図	S D3033出土遺物実測図	209
第 223 図	S D3033出土遺物実測図	210
第 224 図	S D3033出土遺物実測図	210
第 225 図	S D3034土層断面図 (1/60)	211
第 226 図	S D3034出土遺物実測図	211
第 227 図	S D3035土層断面図 (1/60)	211
第 228 図	S D3035出土遺物実測図	212
第 229 図	S D3035出土遺物実測図	212
第 230 図	S D3036土層断面図 (1/60)	213
第 231 図	S D3036出土遺物実測図	214
第 232 図	S D3036出土遺物実測図	215
第 233 図	S D3037土層断面図 (1/60)	216
第 234 図	S D3037出土遺物実測図	216
第 235 図	S D3041土層断面図 (1/60)	216
第 236 図	S D3041出土遺物実測図	220
第 237 図	S D3041出土遺物実測図	221
第 238 図	S D3041出土遺物実測図	222
第 239 図	S D3041出土遺物実測図	223
第 240 図	S D3041出土遺物実測図	224
第 241 図	S D3041出土遺物実測図	227
第 242 図	S D3041出土遺物実測図	228
第 243 図	S D3041出土遺物実測図	229
第 244 図	S D3041出土遺物実測図	230
第 245 図	後期溝変遷模式図	232
第 246 図	NR3001土層断面図 (1/60)	233・234
第 247 図	NR3001出土遺物実測図	238
第 248 図	NR3001出土遺物実測図	239

第 249 図	NR3001出土遺物実測図	240
第 250 図	NR3001出土遺物実測図	241
第 251 図	NR3001出土遺物実測図	242
第 252 図	NR3001出土遺物実測図	246
第 253 図	NR3001出土遺物実測図	247
第 254 図	NR3001出土遺物実測図	248
第 255 図	NR3001出土遺物実測図	249
第 256 図	NR3001出土遺物実測図	250
第 257 図	NR3001出土遺物実測図	251
第 258 図	NR3001出土遺物実測図	252
第 259 図	NR3001出土遺物実測図	253
第 260 図	NR3001出土遺物実測図	254
第 261 図	NR3001出土遺物実測図	255
第 262 図	SX3005遺構平面図及び土層断面図	256
第 263 図	第Ⅱ層出土遺物実測図	263
第 264 図	第Ⅱ層出土遺物実測図	264
第 265 図	第Ⅱ層出土遺物実測図	265
第 266 図	第Ⅱ層出土遺物実測図	266
第 267 図	第Ⅱ層出土遺物実測図	267
第 268 図	第Ⅱ層出土遺物実測図	268
第 269 図	第Ⅱ層出土遺物実測図	269
第 270 図	第Ⅱ層出土遺物実測図	270
第 271 図	第Ⅱ層出土遺物実測図	271
第 272 図	第Ⅱ層出土遺物実測図	272
第 273 図	線刻土器拓本	275
第 274 図	赤色顔料塗布土器実測図	277
第 275 図	紡錘車・銅鐸形土製品・土玉実測図	278
第 276 図	第Ⅱ層出土遺物実測図(磨製石斧)	281
第 277 図	第Ⅱ層出土遺物実測図(磨製石斧)	282
第 278 図	第Ⅱ層出土遺物実測図(石庖丁)	283
第 279 図	第Ⅱ層出土遺物実測図(石庖丁)	284
第 280 図	第Ⅱ層出土遺物実測図(石庖丁)	285
第 281 図	第Ⅱ層出土遺物実測図(石鏃・石錐・石槍)	288
第 282 図	第Ⅱ層出土遺物実測図(石槍)	289
第 283 図	第Ⅱ層出土遺物実測図(砥石)	290
第 284 図	第Ⅱ層出土遺物実測図(敲石)	291
第 285 図	第Ⅱ層出土遺物実測図(勾玉・管玉)	292
第 286 図	第Ⅱ層出土遺物実測図(不明鉄器・銅鉄)	292
第 287 図	弥生時代遺構全体図(1/200)	293・294
第 288 図	弥生時代遺構全体図(1/80)	付図
第 289 図	弥生時代遺構全体図(1/80)	付図
第 290 図	古墳墳丘断面図(1/80)	295

第 291 図	1号主体部実測図 (1/40) .....	296
第 292 図	2号主体部実測図 (1/60) .....	297
第 293 図	2号主体部棺上遺物出土状況実測図 (1/80) .....	297
第 294 図	2号主体部棺内遺物出土状況実測図 (1/20) .....	298
第 295 図	1号主体部出土遺物実測図 .....	299
第 296 図	2号主体部棺上出土遺物実測図 .....	301
第 297 図	2号主体部出土鞆実測図 .....	303
第 298 図	2号主体部棺上出土遺物実測図 .....	304
第 299 図	2号主体部棺内出土遺物実測図 .....	305
第 300 図	2号主体部棺内出土遺物実測図 .....	306
第 301 図	2号主体部棺内出土遺物実測図 .....	307
第 302 図	堤西側杭列出土状況平面図及び見通し図 (1/40) .....	310
第 303 図	堤土層断面図 (1/40) .....	311・312
第 304 図	堤東側杭列出土状況平面図及び見通し図 (1/40) .....	313
第 305 図	堤杭列出土遺物実測図 .....	314
第 306 図	堤杭列出土遺物実測図 .....	315
第 307 図	S X4001出土遺物実測図 .....	318
第 308 図	S X4001出土遺物実測図 .....	319
第 309 図	S X4001出土遺物実測図 .....	320
第 310 図	S X4001出土遺物実測図 .....	321
第 311 図	S X4001出土遺物実測図 .....	322
第 312 図	古墳時代遺構全体図 (1/200) .....	付図
第 313 図	S X4001出土遺物実測図 .....	323
第 314 図	S X4001出土遺物実測図 .....	325
第 315 図	S X4001出土遺物実測図 .....	326
第 316 図	S X4001出土遺物実測図 .....	328
第 317 図	S D9002出土遺物実測図 .....	328
第 318 図	室町時代遺構全体図 (1/200) .....	329
第 319 図	NR9001平面図及び土層断面図 .....	330
第 320 図	NR9001出土遺物実測図 .....	331
第 321 図	NR9001出土遺物実測図 .....	332
第 322 図	S E9001遺構平面図及び土層断面図 (1/60) .....	333
第 323 図	S E9002遺構平面図 (1/80) .....	333
第 324 図	S E9003遺構平面図断面図 (1/40) .....	334
第 325 図	壺のタイプ分類 .....	336
第 326 図	甕のタイプ分類 .....	337
第 327 図	鉢のタイプ分類 .....	337
第 328 図	高杯のタイプ分類 .....	338
第 329 図	細頸壺のタイプ分類 .....	338
第 330 図	無頸壺のタイプ分類 .....	338
第 331 図	I-1・2地区第Ⅱ a層出土土器実測図 .....	347
第 332 図	I-1・2地区第Ⅱ a層・b層出土土器実測図 .....	348

第 333 図	I-1・2地区第Ⅱb層出土土器実測図	349
第 334 図	近畿地方の地質構造図	352
第 335 図	亀井遺跡出土の打製石器類、石核、剥片実測図 (1)	356
第 336 図	亀井遺跡出土の打製石器類、石核、剥片実測図 (2)	357
第 337 図	亀井出土紡錘車の法量傾向図	375
第 338 図	亀井および池上出土紡錘車の法量傾向図	375
第 339 図	亀井出土円盤の法量傾向図	375
第 340 図	池上出土円盤の法量傾向図	375
第 341 図	紡錘車と円盤の関係	378
第 342 図	弥生時代の織具	378
第 343 図	亀井試掘調査出土の織具	378
第 344 図	モクズガニ	400
第 345 図	動物遺体	403
第 346 図	動物遺体	404
第 347 図	昆虫遺体	411
第 348 図	植物遺体	421
第 349 図	E・18区HT花粉ダイアグラム	427
第 350 図	主要な花粉タクサの変化	429
第 351 図	花粉・胞子	431
第 352 図	珪藻	437
第 353 図	珪藻	438
第 354 図	木棺の取りあげ	441
第 355 図	短甲の復原	442
第 356 図	特殊マンホール位置図	457
第 357 図	層位模式図	457
第 358 図	古墳時代遺構平面実測図	458
第 359 図	周濠出土埴輪実測図	458
第 360 図	古墳周濠の柱及び掘方断面図	459
第 361 図	黒色粘土層出土遺物実測図	459
第 362 図	黒色粘土層出土遺物実測図	459
第 363 図	弥生時代遺構平面実測図	459
第 364 図	基本層序	461
第 365 図	各層遺構平面実測図及び東壁土層断面実測図	462
第 366 図	貝層出土土師器実測図	463

## 表 目 次

第 1 表	遺跡地名表	6
第 2 表	貨泉出土地名表	185
第 3 表	包含層出土土器破片統計表	274
第 4 表	亀井遺跡出土第Ⅳ様式器種別個体数	342
第 5 表	大阪湾沿岸主要遺跡出土の石斧類	360
第 6 表	甲冑出土古墳（三角板革綴短甲と他の甲冑類との伴出関係）	389
第 7 表	動物遺体リスト	398・399
第 8 表	1975年の調査で発掘された脊椎動物遺体	401
第 9 表	亀井遺跡出土昆虫遺体一覧表	406・407
第 10 表	亀井遺跡出土植物遺体一覧表	418・419
第 11 表	産出頻度の低いタクサ	428
第 12 表	珪藻核の出現頻度	435
第 13 表	亀井遺跡変遷表	446
第 14 表	自然遺物出土遺構一覧表	452・453

# 第 I 章 は じ め に

亀井遺跡は、八尾市南亀井町地内を中心とした一辺約 500m 四周にその存在が知られている。城山遺跡は、亀井遺跡の南に近接する大阪市平野区长吉出戸町地内を中心として南北約 1 Km にも及ぶことが知られている。

ところが、大阪府は、府下全域を東、南、北の 3 ブロックに分割して下水道事業を計画、施工中の東ブロック内、寝屋川南部流域下水道事業の一環として亀井遺跡の所在する八尾市南亀井町 3 丁目地内に長吉ポンプ場、城山遺跡の所在する大阪市平野区长吉出戸町地内に飛行場（南北）幹線特殊マンホール等築造工事を施工するに先立って、事業担当の大阪府東部流域下水道事務所から当該地域に包蔵される埋蔵文化財（遺跡）の取扱いについて大阪府教育委員会に協議があった。

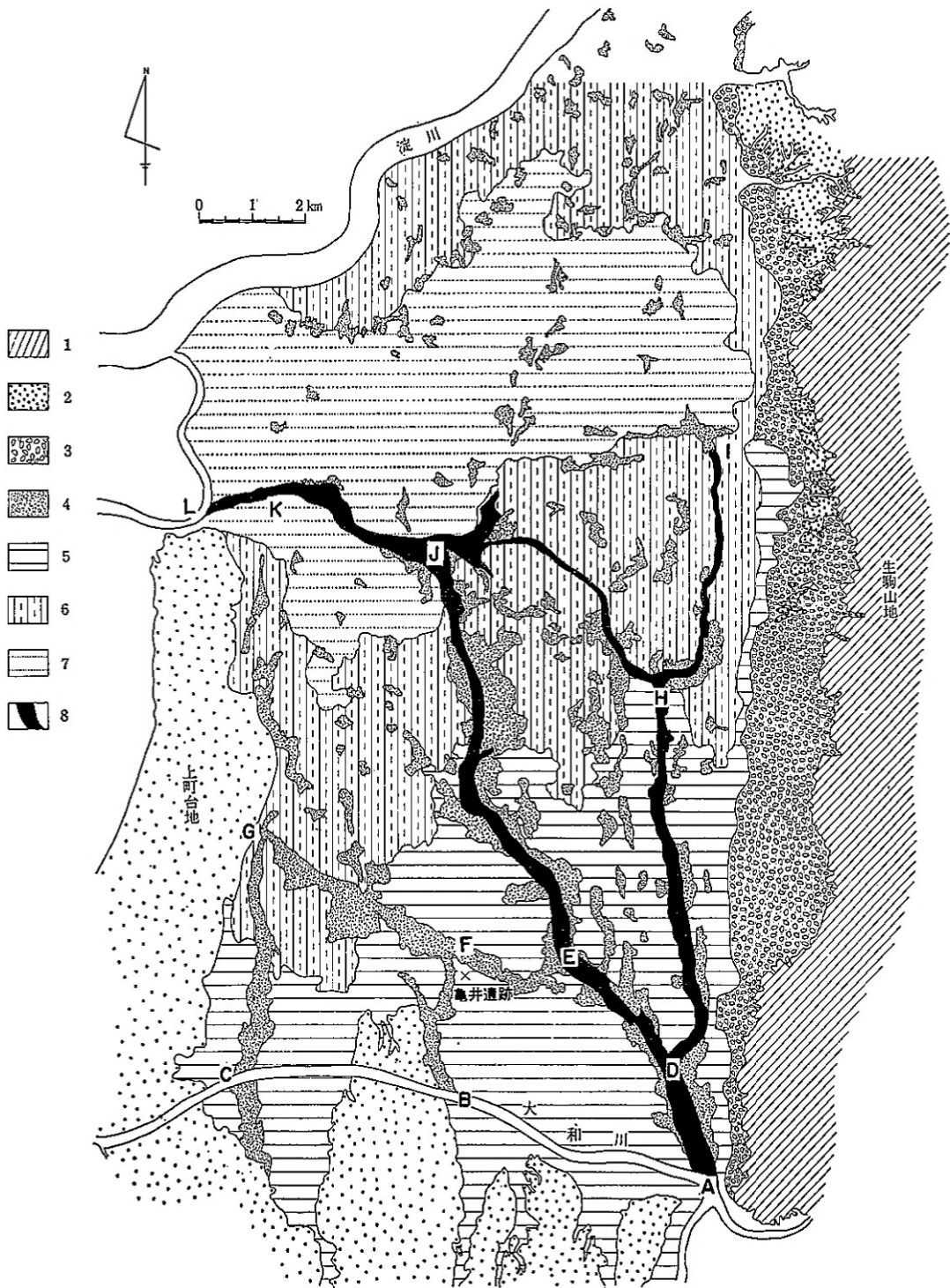
協議を受けた大阪府教育委員会は、「当該地は、亀井、城山遺跡の一画に含まれるため遺構等の有無、範囲等を確認するために試掘調査を実施する必要があると認める。」とし、更に「試掘調査は、財団法人大阪文化財センターに委託して実施されたい。」「調査の結果によって今後の取扱いについて再度協議されたい。」旨、回答された。

この回答を受けた東部流域下水道事務所は、さっそく財団法人大阪文化財センターに調査を依頼すると共に協議を重ねて、昭和52年6月25日、財団法人大阪文化財センターと大阪府東部流域下水道事務所の間に発掘調査の委託契約を締結し、同年7月5日より9月3日まで現地調査を実施した。

この試掘調査の結果、当該地域内に大きな弥生時代集落の他、古墳時代から中、近世の集落の遺存が推定されると共に遺跡の範囲、埋没深度、包含層の状況等が確認されるに至った。

この試掘調査結果を受けた大阪府東部流域下水道事務所と大阪府教育委員会は、再度協議を重ねて遺跡の保存方法等を検討したが、結局、工事予定地内を十二分な発掘調査を実施し、その結果を基に最終的な協議と検討を重ねることとなった。

発掘調査については、再度、大阪府教育委員会の指導もあって、大阪府東部流域下水道事務所から財団法人大阪文化財センターに調査依頼があり協議を重ねた結果、昭和53年5月23日、財団法人大阪文化財センターと大阪府東部流域下水道事務所との間で、同年5月24日より昭和55年3月31日までの予定で、現地調査並びに遺物整理、報告書作成の委託契約を締結した。しかし、調査途上、予想以上の遺構遺物の検出をみたため、現地調査を昭和55年3月25日まで延長して実施した。また、これがため当初契約期間内に十分な遺物整理と報告書作成が不可能となったため、昭和55年6月1日より同年12月25日までの予定で別途、昭和55年5月31日に委託契約を締結し、遺物整理並びに報告書を作成して、ここに全ての調査を完了した。



1. 山地 2. 段丘 3. 扇状地 4. 自然堤防 5. 扇状地性低地  
 6. 三角州性低地 7. 潟湖性低地 8. 旧河道

第1図 地形分類図

## 第II章 遺跡地周辺の地理的・歴史的背景

### 第1節 自然地理的背景

#### 1 地形分類

河内平野は、東を生駒山地、西を上町台地、北を淀川、南を現大和川によって画された、東西約10Km、南北約20Kmの長方形をした沖積低地である。この低地の形成には、海水準の昇降による侵食基準面の移動と、旧大和川と淀川による堆積作用、さらに地盤の沈降運動と近年の地盤沈下との相互作用があずかっている。現在みられる地表面形態は、1704年（宝永元年）に大和川が付替えられた当時の地形を色濃く残している（藤岡 1972）。第1図地形分類図をもとに、河内平野の地表面形態について概観してみよう。（第1図）

#### a 山地

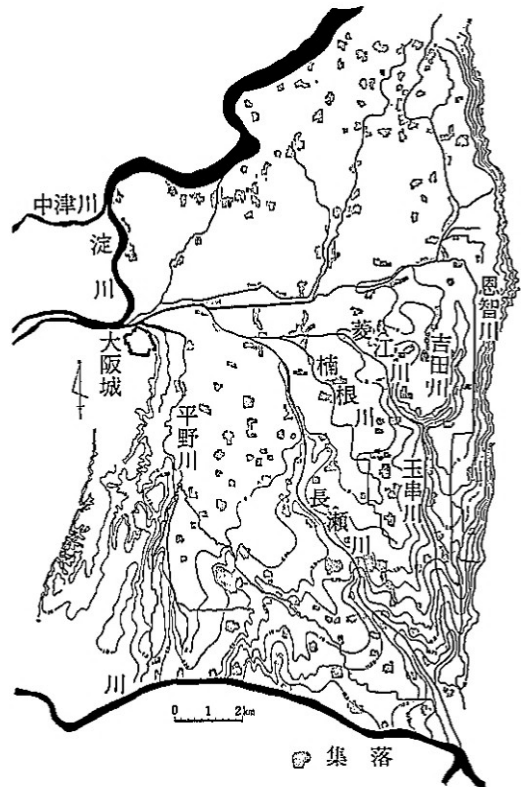
山地は、主として花崗岩で構成されている生駒山地を示している。河内平野に面する山地西麓部で、南北に数本の断層が走り、山地と平野との対照は明瞭である。

#### b 段丘

当地域の段丘面は、上位・中位・下位・沖積の4面に区分することができる。上位段丘は、寝屋川市の太秦、国守町付近に一部みられるのみで、上町台地や大和川南部に発達する段丘面は、大半が中位段丘である。また、下位段丘は、大和川南部の中位段丘を開析した河川沿いにみられ、沖積段丘は、下位段丘の縁にごく一部存在するのみである。

#### c 扇状地

生駒山地西麓に発達する傾斜地を一括して扇状地とした。これは、生駒山地西縁を南北に走る断層を境として、山地側が隆起し、風化された花崗岩が小河川の侵食によって押し出されることによって形成された地形である。新旧2面に区分が可能であり、高位の面は傾斜がより急である。このことは、生駒山地の上昇にともない、面の高さや傾斜が変化したものと思われる。

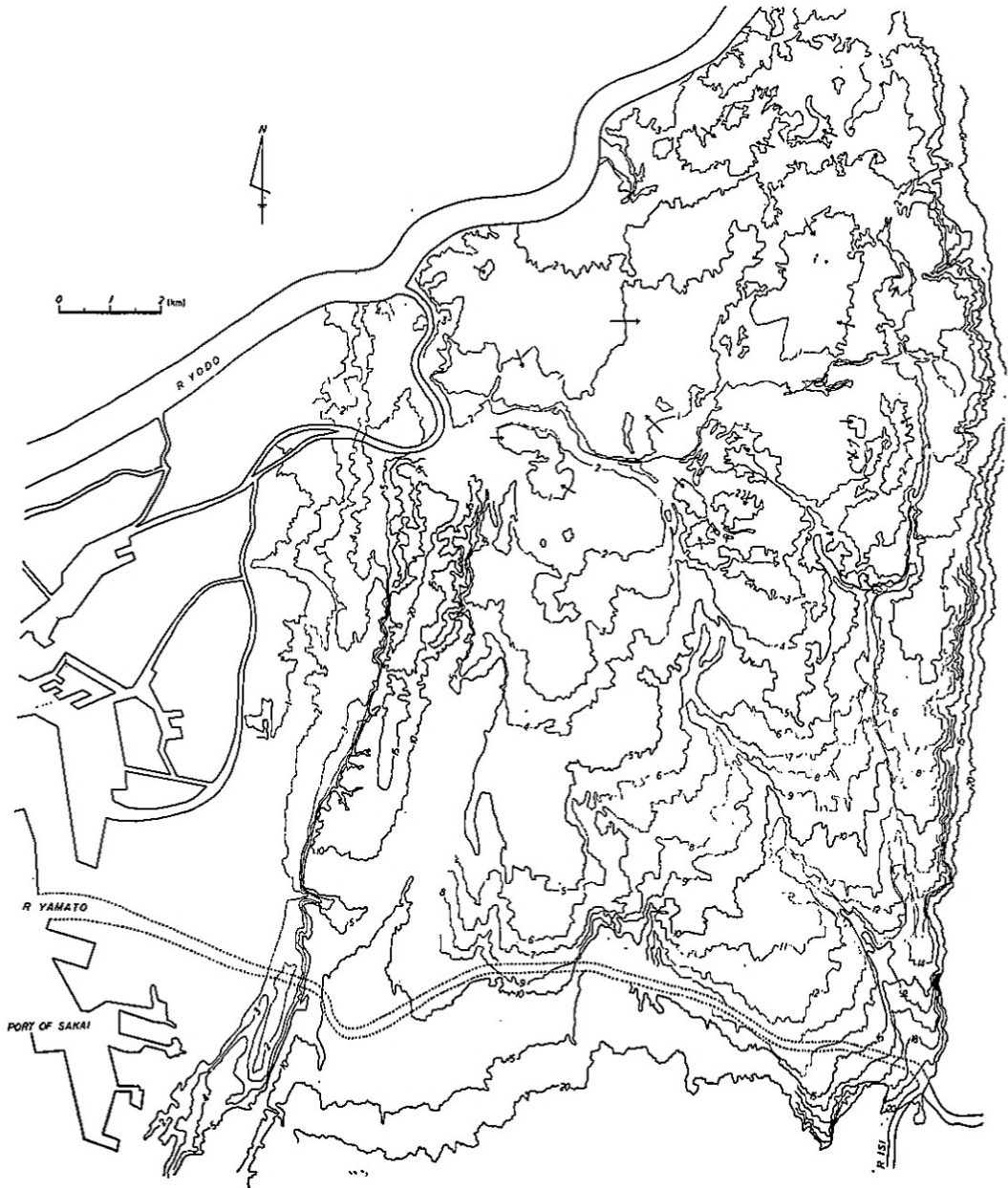


第2図 等高線図



#### d 自然堤防

自然堤防は旧大和川や東除川などの河岸に沿って発達するものと、それらに沿わず沖積平野上に分布するものに分けることができる。これらの自然堤防は、旧大和川などの河道変遷によって形成された微高地で、自然堤防の連続性から旧河道を復原することが可能である。特に顕著なものは、東除川、西除川の延長上の自然堤防列と、それらが合流する北西方向に延びる自然堤防列である。これらの自然堤防の存在は、地形だけではなく仮製2万分の1地形図に示された集落



第3図 1 m 等高線図

の分布からも裏付けられる（第2図）。

#### e 扇状地性低地・三角州性低地・潟湖性低地

これら3つの低地は、旧河道、自然堤防間に認められる低地で、一般には後背湿地として区分されている。

扇状地性低地、旧大和川の形成した地形面と考えられる。生駒山地西麓の扇状地とは、傾斜、堆積物、形成過程等が異なっている。第3図をみると明らかなように、石川が大和川に合流する地点より、ほぼ同心円状に扇型をなした等高線配置がみられる。これは、5m等高線付近で、傾斜変換線をむかえ、次の三角州性低地へと移行する。

三角州性低地は、標高2～5mに至る後背湿地である。かつての潟湖に淀川と旧大和川が流入した際に形成された三角州の頂置層堆積面と考えられる。

次に、標高2m以下の凹地を潟湖性低地とした。江戸時代には、深野池や新開池として知られた低湿地である。また、近年では内水洪水の多発地帯としても知られている（大矢・中村1969）。

#### f 旧河道

大和川と石川の合流点から北西方向に延びる長瀬川、玉串川、菱江川、吉田川水系を旧河道とした。これらの水系は、天井川化しているため、周囲の後背湿地と自然堤防より1～3mも高く明瞭な河道跡を残している。

## 2 亀井遺跡周辺の地形的特徴

河内平野の沖積低地においては、弥生時代にまでさかのぼりうる地形面は残存していない。それらはすべて現地表面下数mのところ埋積されており、河内平野における地盤の沈降と大和川水系による埋積作用が、はげしかったことを物語っている。当亀井遺跡においても、現地表面下3m付近に、古墳時代、弥生時代の遺構面が埋積されている。

河内平野の現在の地表面形態は、1704年（宝永元年）に河道が付替えられた後、大和川による顕著な堆積活動は行われていないため、当時の形態をよく保存している。新田開発や地盤沈下、宅地造成の盛土等によって、改変をうけている地域もあるが、1704年当時の地形については、かなりの精度で復原が可能である。

当時の大和川は、石川との合流点A（第1図）から、A—D—E—J—K—Lと続く長瀬川、並びにDから分岐しHへと続く玉串川、H—J間の菱江川、H—I間の吉田川の4つに分流していた。これらはいずれも天井川化しており、堤防によって河川が固定されていたことを示している。

それ以前の旧河道については、自然堤防列の連続性から推定される。亀井遺跡周辺において、もっとも顕著な旧河道跡は、現大和川から北へ延びるC—G間の西除川、B—F間の東除川があげられる。これらの旧河道は現大和川への付替えによって放棄された河道であり、非常に明瞭で

ある。一方、E—F—Gへと続く自然堤防列も顕著である。この自然堤防列で示される河川が長瀬川から分離したのは、6～7世紀（建設省国土地理院 1965）、あるいは9世紀中頃（服部 1978）とも推定されており、さらにこの水系こそが、かつての大和川本流であったとする見解もある（服部 1978）。いずれにしても、E—F—Gと続く自然堤防列を形成した河川が弥生時代、古墳時代を通じて同位置を流れていたか否かについては、地形学的には不明である。

なお、今回の発掘に伴う地質学的調査によって、亀井遺跡付近では、縄文海進最高頂期の後、沖積層上部砂層堆積期を通じて、扇状地～氾濫原的環境が継続し、しばしば自然堤防も形成されていたことが明らかとなった。詳細は第IV章を参照されたい。

〔引用文献〕

大矢雅彦・中村祝恵 1969 「寝屋川流域内水洪水の地理学的研究」資源科学研究所集報 72  
 建設省国土地理院 1965 「土地条件調査報告書（大阪平野）」  
 服部昌之 1978 「大阪平野低地古代景観の基礎的研究」『歴史地域研究と都市研究（上）』大明堂  
 藤岡謙二郎 1972 「大和川」学生社

第1表 遺 跡 地 名 表

番号	遺 跡 名	時 代	番号	遺 跡 名	時 代
1	亀 井 遺 跡	弥生～江戸	19	久 宝 寺 遺 跡	弥生～室町
2	国 府 遺 跡	旧石器～奈良	20	友 井 東 遺 跡	弥生～古墳
3	長 原・城 山 遺 跡	旧石器～鎌倉	21	河 合 遺 跡	弥 生
4	恩 智 遺 跡	縄紋～弥生	22	大 泉 遺 跡	弥 生
5	馬 場 川 遺 跡	縄紋～弥生	23	恩 智 垣 内 遺 跡	弥 生
6	船 橋 遺 跡	縄紋～奈良	24	上 田 町 遺 跡	古 墳
7	八 尾 南 遺 跡	弥生～古墳	25	西 の 山 古 墳	古 墳
8	山 賀 遺 跡	弥生～鎌倉	26	花 岡 山 古 墳	古 墳
9	瓜 生 堂 遺 跡	弥生～平安	27	向 山 古 墳	古 墳
10	巨 摩 廃 寺 遺 跡	弥生～室町	28	樋 野 ケ 池 窯 跡	窯 跡
11	瓜 破 遺 跡	弥生～古墳	29	土 師 ノ 里 遺 跡	古墳～室町
12	瓜 破 北 遺 跡	弥生～古墳	30	若 江 北 遺 跡	弥生～鎌倉
13	小 若 江 遺 跡	弥生～古墳	31	心 合 寺 山 古 墳	古 墳
14	衣 摺 遺 跡	弥 生	32	郡 川 西 塚 古 墳	古 墳
15	中 田 遺 跡	弥生～古墳	33	郡 川 東 塚 古 墳	古 墳
16	東 弓 削 遺 跡	弥生～鎌倉	34	高 安 古 墳 群	古 墳
17	小 阪 合 遺 跡	弥 生	35	高 井 田 横 穴	古 墳
18	加 美 遺 跡	弥生～古墳	36	平 尾 山 千 塚	古 墳



第4図 遺跡分布図 国土地理院発行 2.5万分の1地形図「大阪東南部」使用

## 第2節 歴史的背景

亀井遺跡周辺には数多くの旧石器時代から近世までの遺跡が分布しており、以下、各時代別に列記する。

### a 旧石器時代

亀井遺跡の南東約6Kmの大和川と石川の合流点を見降す国府台地末端部には、著名な国府遺跡が位置する。戦前から縄文時代の遺跡として知られており、1917年喜田貞吉によって「大形の粗雑な石器」が粘土中より出土したことが報告されている（喜田 1917）。これをきっかけに、1918年浜田耕作によって調査が行なわれた。この調査時には旧石器時代の確認よりも、縄文時代の人骨に注目された。しかし、報告書の中で、「大形粗石器」（浜田 1918）が旧石器の形式を遺留すると考えられた。このような経過から1957年、1958年の調査によって、旧石器時代の遺跡と確認された。出土した横剃ぎのナイフ形石器は国府型ナイフ、またその技法は瀬戸内技法と呼ばれ、その標式遺跡となっている。

また、当遺跡の南2Km、羽曳野丘陵の末端に位置する長原遺跡からもナイフ形石器、舟底形尖頭器が出土している。

### b 縄紋時代

縄紋時代になると、生駒山麓の南部地域、当遺跡から東へ約5Kmに恩智遺跡が現われる。恩智遺跡は、縄紋時代前期からの遺物が出土している複合遺跡である。また、この恩智遺跡の北5Kmに、馬場川遺跡、南に約5Km、亀井遺跡から南東に約6Kmの大和川の川床には、晩期の標式遺跡である船橋遺跡、また南の台地上には、前述の1918年の調査で人骨が多数出土した国府遺跡（浜田 1918）が所在する。

上記の遺跡以外には、最近の調査で縄紋時代晩期の石器製作跡や自然流路が検出された長原遺跡、縄紋時代後・晩期の自然流路が検出された八尾南遺跡が南の丘陵上に位置している。

また、西の上町台地には森ノ宮遺跡や岸ノ里遺跡が所在している。

### c 弥生時代

前述の恩智、船橋、国府、長原遺跡などでも弥生時代前期の遺物が発見されている。また、亀井遺跡から北へ約5Kmの長瀬川の自然堤防にはさまれた後背湿地の微高地には、前期古段階から始まる山賀遺跡、中段階から始まる瓜生堂遺跡が所在する。この様に、弥生時代前期に入ると遺跡は低地に進出してくる。

そして、上記の遺跡以外にも亀井遺跡から南西約3Kmの羽曳野丘陵末端に、貨泉を出土した瓜破遺跡が所在する。また、西の上町台地東縁、当遺跡の北西約5Kmに所在する桑津遺跡、大阪湾に面した遠里小野遺跡からも前期の土器が出土している。

中期に入ると、上記の遺跡も存続し、瓜生堂遺跡などは、多数の方形周溝墓や足跡、住居跡などが検出されている。また、瓜生堂遺跡の立地する玉串川・長瀬川両河川の間には、小若江遺跡

が現われ、長瀬川と平野川の間には衣摺遺跡が現われる。更に、長瀬・玉串の両河川の分流域、亀井遺跡の南東約4Kmには、中田、東弓削、小阪合の遺跡が所在する。また南西約5.5Kmの丘陵上には北花田遺跡、西の上町台地西側には前述の遠里小野、山之内、住吉6、7、8号地点の各遺跡が分布する。

後期になると、当遺跡の北約1Kmには加美遺跡、久宝寺遺跡が所在し、更に3Km北には友井東遺跡が現われる。南西約5Kmには河合遺跡が所在する。

これらの諸遺跡の中で、銅利器を出土している遺跡がある。北の瓜生堂遺跡からは銅戈、加美遺跡からは銅剣が出土している。瓜破遺跡からは貨泉が2枚、東の恩智遺跡、南東の国府遺跡からは銅鏃が出土している。この国府遺跡の北東約2Km、亀井遺跡から約6Kmの、高尾山山頂附近の大泉遺跡からは、大正時代に多鈕細文鏡が出土している。また、恩智遺跡の東約5Kmの生駒山中、恩智垣内山、及び都塚山から銅鐸が出土している。垣内山銅鐸は外縁付鈕式で表面には流水文と原始絵画が鑄出されている。都塚山銅鐸は六区袈裟禪文が鑄出されている。いずれの遺跡も、亀井遺跡からは5～6Km圏内である。

#### d 古墳時代

前期に新しく出現する遺跡はあまり知られていないが南西約5Kmに所在し古式土師器の標式遺跡となっている上町遺跡はその1つである。また南東の中田遺跡からは「しがらみ」が検出されている。南西の瓜破遺跡に隣接する瓜破北遺跡も古式土師器を出土し、包含層からは方格規矩鏡内行花文鏡の鏡片が出土している。また、北の小若江遺跡も古式土師器の重要な遺跡として著名である。

前期古墳は、生駒山西麓、当遺跡より北東約7Kmに北から、西ノ山、花岡山、向山の3前方後円墳が所在する。さらに、南東7Km、石川に面する玉手山丘陵上に、玉手山古墳群が所在する。

中期になると、集落遺跡として最近確認された今池遺跡がある。当遺跡の南5Kmに位置し、掘立柱建物や金銅製鈴が出土している。また、上町台地の西側の大阪湾側には、タコ壺や土錘を出土する遺跡が点在している。弥生時代から続いている遠里小野遺跡や住吉第1、3、4、5、10地点などである。また、最近、八尾南遺跡や土師里遺跡からは住居跡群が検出されている。

中期の府下の古墳は、当遺跡の南西の百舌鳥古墳群、南東の古市古墳群の2大古墳群に代表される。が、従来、確認されていなかった平野低地域にも検出され始めている。亀井遺跡の南、長原遺跡では塚ノ本古墳を中心とした方墳群、円筒埴輪棺が検出された。その東、八尾南遺跡でも方墳が検出されている。更に、最近の近畿自動車道の調査で、巨摩廃寺、山賀遺跡の各遺跡からも埴輪や古墳が検出され、従来の立地観をくつがえしている。生駒山西麓では、前方後円墳の心合寺山古墳、郡川西塚、東塚が所在している。また、上町丘陵では、御勝山、茶臼山、帝塚山の前方後円墳が所在している。

後期は、生駒山地西麓部に群集墳が出現する時期である。生駒山地南部の西側中腹に山畑、高安古墳群が、また山地南端山麓には、平野、太平寺、安堂、横尾、線刻画で著名な高井田の各古

墳群が所在する。この東北側には、雁多尾畑、青谷、平尾山千塚などの群集墳が集中している。更に南の玉手山丘陵にも安福寺の横穴群が所在している。

古墳以外では、長原遺跡の後期の水田跡、そして、南約6 Kmに位置する樋野ヶ池では須恵器の窯跡が確認されている。

#### e 古墳時代以降

7世紀、亀井遺跡の周辺では大規模な土木工事が行われた。「日本書紀」崇神天皇62年10月条、推古天皇15年(607)冬条に記載されている依羅池の比定地は、当遺跡の南西約5 Kmに位置している。また、当遺跡の南東、奈良県との県境高安山には天智天皇6年(667)に高安城が築かれ、最近、遺構の残存も確認されている。更に、西側の上町台地上には大化元年(645)、孝徳天皇、難波長柄豊碓宮、そして、天平16年完成の聖武天皇、難波宮が築かれている。

奈良時代になると、文献には河内平野における数多くの洪水、治水記事が見られ、河内平野における、水との闘いの一面を知る事ができる。

遺跡周辺には寺院跡も知られている。北約5 Kmには巨摩廃寺(平安～室町)、若江寺跡(飛鳥～鎌倉)、また、北西約1 Kmには鞍作廃寺(奈良～平安)、南約2 Kmには瓜破廃寺(奈良)の各寺院跡が所在している。また、東の生駒山地南端の西麓には、北から教興寺、大興、太平寺、安堂、高井田の各寺院跡が所在し、いずれも奈良時代の創建である。

また、当遺跡の南側一帯は大阪市域でも条里遺構が残存している所である。亀井遺跡の周辺は古来、丹比郡に属し、丹比郡の条里は古道大津道に里の起点を置いて施行されている。遺跡の南、長原遺跡ではこの条里に規制された大溝を伴った平安～鎌倉にかけての集落跡が検出されている。

中世末から近世初頭にかけて、当遺跡の北、久宝寺は一向宗西証寺を中心とした寺内町として発展する。また、北西の平野郷は水運、陸運の交通要路が集中している所から、中世末には堺と並び防衛の為に環濠をめぐる自由都市として発展し、江戸時代に入っても河内、大和の商業の中心として繁栄していた。更に、大和川付替え以後、木綿などの商品作物の作付け面積も増え、河内平野は近世の一大農業先進地域へと変貌してゆく。

以上の様に、亀井遺跡周辺は各時代の遺跡が多く分布している。前述の遺跡の中で、当遺跡と同じく、弥生時代、古墳時代の遺構、遺物が検出される遺跡として東の恩智遺跡、西の桑津遺跡、南の瓜破遺跡、北の山賀、瓜生堂遺跡が所在し更に、瓜破を除いて、各遺跡間の距離は約5 Kmの等距離を計る特徴があり、注目される。また、南の長原遺跡、八尾南遺跡では、古墳時代中期の古墳、住居跡が検出されており、距離的にも近接しており注目されるべき遺跡であろう。

〔註〕 (1) 日本書紀、仁徳11年10月「茨田堤を築く」の記載以降、奈良時代、続日本紀天平13年(741)4月22日「河内と摂津と河堤を相争う…」などの洪水、治水の記事が大國史などに表われる。

#### 〔引用文献〕

- 喜田貞吉 1917 「南河内郡古代遺跡に就いて」 大阪府史蹟調査委員会報 第4号  
浜田耕作 1918 「河内国府石器時代遺跡発掘調査報告」 京都帝国大学文学部考古学研究報告 第2冊

## 第三章 調査の目的と方法

### 第1節 既往の調査と提出された問題点

亀井遺跡の最初の発掘調査は、昭和43年、平野川改修工事に際して多量の弥生式土器が出土したことに起因して、その改修工事に併行して行われた。この第1次調査の結果、延長200mの改修工事実施区域の全域に、遺物包含層の存在が確認され、夥しい量の弥生式土器の出土は、当該地域に大規模な遺跡の存在を示唆するものであった。しかし、多量の遺物を含む黒色粘土層中からは、畿内第Ⅰ様式から同第Ⅴ様式までの各時期の土器が出土するとともに、下層の青灰色砂層中から畿内第Ⅴ様式の土器の出土することが確認された。このため、これらの遺物包含層は旧大和川水系の河川の氾濫による2次堆積層で、余り遠くない場所から運ばれたものであろうと結論され、遺跡の原位置は他の場所に求められることとなった。その後、当遺跡については、その範囲の確認と、遺跡の原位置の探索を目的とした範囲確認調査が、第2次から第5次まで、昭和44年から昭和48年にかけて、大阪府教育委員会によって行なわれた。また、昭和48年には、財団法人大阪文化財センターによって、近畿自動車道関連の試掘調査も実施された。大阪府教育委員会による範囲確認調査は、平野川の周辺を中心に、総計27ヶ所の試掘坑を設定して行なわれた。その結果、第2次調査では、遺跡の拡がり東西約500mに及ぶこと、弥生時代遺物包含層の中心が黒色粘土層であること等が確認された。さらに、第3次調査においては、黒色粘土層は、府道中央環状線と平野川の交叉する付近を西限とし、それより平野川に沿って東南に約250m、平野川流域に南北50～100mの範囲に分布し、すり鉢状の地形に存在するものと推定された。また、当遺跡の土層は全て2次堆積物であり、それらは、黒色粘土層の堆積した時期、須恵器を含む砂層の堆積した時期、褐色粘土層の堆積した時期の3時期に大別され、第1の時期は、畿内第Ⅴ様式の終末前後と考えられた。さらに、遺跡の原位置については、当遺跡の東あるいは東北の余り遠くない所と推察された（石神 1971）。第4次調査では、黒色粘土層の下層の青灰色粘土層面で、弥生時代前期と中期のピットが、計3個検出され、当遺跡に遺構の存在することが確認された。各土層の堆積については、弥生時代前・中期の生活面と考えられた青灰色粘土層の上に、遺物を含まない暗青色砂層及び青灰色砂層が堆積し、その後、遺物を多量に含む黒色粘土層が堆積したとされ、各土層の堆積時期は、暗灰色砂層が畿内第Ⅴ様式以前、青灰色砂層が第Ⅴ様式以降、黒色粘土層が弥生時代後期から6世紀中頃までの間とされた（田代・中井 1972）。第5次調査は、亀井遺跡の南限と、第4次調査で検出された遺構の性格の確認を目的として実施された。その結果、遺跡の南限は推定されるにいたったが、明確な遺構の確認はなされず、第4次調査で検出された遺構の性格の解明は将来に残されることになった（中井 1973）。財団法人大阪文化財センターによる近畿自動車道関連の試掘調査は、それまで遺跡の有無が確認されていなか



った府道中央環状線中央分離帯内の、平野川以南と、国道25号線以北について行なわれた。その結果、遺跡の範囲は、さらに南北に拡大していることが明らかとなり、南北にも約 500mの拡がりをもつことが明らかにされた（中西・辻内・妹尾 1972）。

## 第2節 今回の調査の前提となった既往の調査

昭和48年以降、亀井遺跡については、遺跡の埋没深度の深いこと等の理由により、本格的な発掘調査は、実施されることがなかった。このため、今回の大阪府東部流域下水道事務所による長吉ポンプ場建設のための事前調査の実施にあたっては、遺構等の有無、範囲等の確認を目的とした試掘調査が行われることとなった。試掘調査は、昭和52年7月から同年9月にかけて行なわれた。この結果、大阪府教育委員会による第4次範囲確認調査以外では、全く遺構の発見されなかった当遺跡において、弥生時代中・後期のピット、井戸、溝等が検出されるにいたった。このため、青灰色砂(粘)質土に、弥生時代の生活面があったことが確認されるとともに、当該地域内には、大規模な弥生時代集落の遺存していることが推定された。また、従来、全て2次堆積物であるとされた弥生時代遺物包含層についても、遺構との関連を考慮する必要のあることが指摘された。

一方、1975年度に大阪ガスのガス管埋設に伴うシールド工事が、府道中央環状線の西側、平野川の両岸で実施され、長原遺跡調査会によってシールドの発進・到達堅坑の発掘調査が行なわれた。この発掘では水辺に設営されたと思われる木組遺構を伴う落ち込みが検出され、多数の朱ぬり完形土器を含む弥生時代中・後期の遺物と共に、動・植物や昆虫などの自然遺物が多数出土した。動物遺体ではイノシシやカワウソなどと共にシカの骨や角の加工残片が非常に多く、植物遺体ではイネ、ウリ類、モモなどと共にナスビの種子が出土するなど、自然遺物の構成が河内平野における既知の資料と著しく異なっており、考古遺物の特異性ととも注目された。また、石神（1971）、田代・中井（1972）、中井（1973）などで、当地域の遺物包含層が他地域の遺跡が流失した結果当地域に流入堆積した2次堆積物であるとされていることに強い疑念がもたれた。しかし発掘域があまりにも狭少であったため、これらの問題点は未解決のまま残されていた。

## 第3節 調査の目的

試掘調査の結果は、今回の発掘調査において明らかにされるべき問題点を、明確に指し示したものと云えた。すなわち、当遺跡における弥生時代集落の有無の確認と、従来から全て2次堆積層であると結論されていた弥生時代遺物包含層の再検討が、調査の開始にあたって提出された大きな課題であった。

また、いままで、弥生時代の遺跡としてのみ注意されてきた傾向のある当遺跡について、弥生時代以前及び以後の各時代の遺構、遺物の有無の確認、換言すれば、亀井遺跡の現代にいたるまでの変遷過程の解明への努力は、それが当遺跡の研究史のなかでの空白部分でもあり、当遺跡の

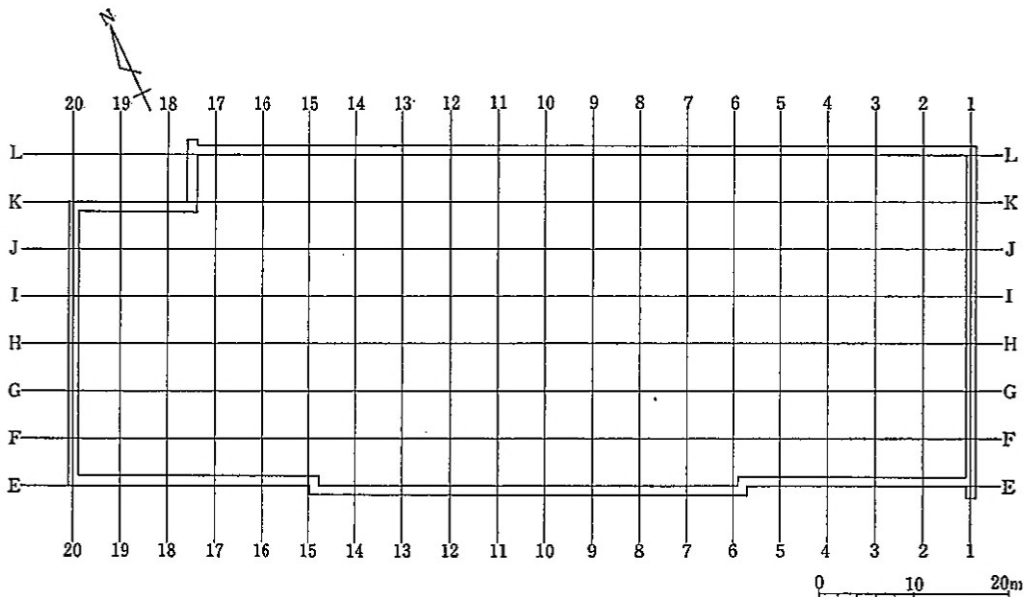
構造を理解するためには、ぜひ必要な作業であった。また、このことは、今回の調査が当遺跡における初の大規模調査であるという点からも、われわれに与えられた課題であったといえる。

## 第4節 調査の方法

調査の開始にあたって、われわれは、以上のような課題に対処すべく調査方法の検討を行った。その結果、当遺跡が低湿地に存在するという条件を考える時、考古学的方法による遺跡の調査・検討にプラスして、遺跡地周辺の自然環境の変遷の復元をはじめとした自然科学分野からの遺跡の検討が、有力な調査方法の1つとなろうと考えるにいたった。このため、多くの自然科学分野の研究者の方々に参加を要請し調査に当たった。

発掘にあたっては、層序の確認を優先させる目的で調査区の周囲に幅 1.5mの試掘溝を設け、発掘担当者と地質学分野の参加者として層序、層相変化等を検討した。試掘溝底よりさらに下位の地層について予察的知見が必要な場合には、試掘溝内でハンドオーガーおよび検土杖によって試掘を実施した。発掘は単層毎に行なった。1枚の単層中は、可能なかぎり葉理に沿って掘るようつとめたが地層が厚くしかも連続性の良い葉理が存在しないような場合は10cm単位の任意分層発掘を行い、また、特に遺物包含量の濃密であったHライン以北、9ライン以東の部分については、各区画内を1m×1mの小区画に分割して、遺物の取り上げを行った。また、土層観察用のアゼは、出来る限り長期間残すこととし、必要に応じて再検討することを心掛けた。

当遺跡が営まれた当時の自然環境を復元するため、発掘過程で採集された哺乳動物、爬虫類、魚類、貝、昆虫等の動物遺体や植物遺体を同定・検討するとともに、花粉分析や珪藻分析のような微化石分析を実施した。また、遺跡の立地環境を明らかにするため、周辺地域の自然地理調査



第5図 地区割図 (1/500)

を実施するとともに、既存のボーリング資料や、発掘終了後の掘削工事の折に観察された地質資料にもとずいて地表下約40mまでの層序を検討した。なお、土層の観察・検討については、地質学分野の研究者との、現場での共同作業につとめるとともに、自然遺物の採集、分析資料の採集についても、専門の研究者の助言のもとに、共同作業を心掛けた。また、種子、微細な骨等の採集のために1部の遺構内の堆積物を水洗篩別した。

## 第5節 調査区地区割り方法

調査区全体の地区割りは、第5図に示すように5m×5mの区割を設定して行い、遺物の取り上げも、遺構内出土遺物以外は、この区画毎に行った。本書における遺構の位置等も原則としてこの区画によって示している。地区割りの基準線は、調査区全体を囲むポンプ場本体部建設の為にコンクリート連続壁に合わせた。基準線の方位はN-26°-Eを示す。各区画の地区名は、南北線を数字、東西線をアルファベットで示し、区割の東南の交点の番号を東南優位の原則に従って用いた。

### 〔引用文献〕

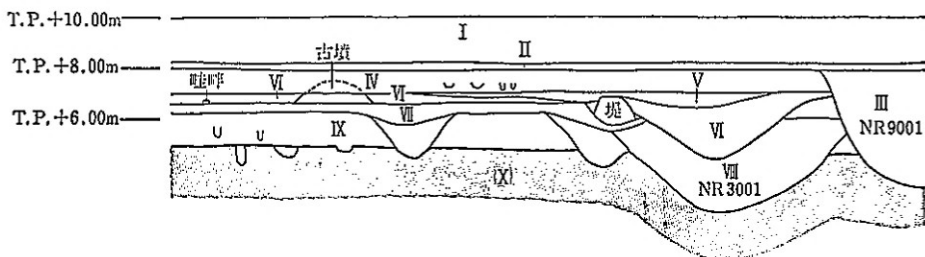
- 石神怡 1971 『八尾市亀井遺跡発掘調査概要』 大阪府教育委員会  
田代克己・中井貞夫 1972 『亀井遺跡発掘調査概要Ⅱ』 大阪府教育委員会  
中井貞夫 1973 『亀井遺跡発掘調査概要Ⅲ』 大阪府教育委員会  
中西靖人・辻内義浩・妹尾直子 1974 『近畿自動車吹田～松原線建設予定地内亀井遺跡他2遺跡  
第1次発掘調査報告書』 財団法人大阪文化財センター

## 第IV章 基本層序

発掘地域における地層は、後述する旧平野川（NR9001）及びNR3001によって大規模に侵蝕されたり各時代の遺構によって失われている。その為基本層序の全てが観察されうる場所は少ないが、遺構内の堆積物や、人為的な盛土などを除外した上で発掘地域内外に広く認めうる基本層序を以下の各節で略記する。

### 第1節 弥生時代遺物包含層までの層序

- 第Ⅰ層** 調査区全域を覆う産業廃棄物及び残土の層で厚さは約2m。上面（現地表面）は平坦でT.P.+10.0m。
- 第Ⅱ層**（暗灰色砂質シルト層） 近年までの水田土壌で全域に見られる。層厚0.2m。
- 第Ⅲ層**（砂・シルト—互層，粘土層） 旧平野川跡と思われるNR9001の曲流部に堆積した地層で堆積と部分的侵蝕を何回かくりかえしている為、地層の連続性はきわめて悪い。下部は基底に中礫層を有する粗粒砂層、中部は細粒砂層・中粒砂層・シルト層の複雑な互層、上部は粗粒砂混りのシルト層及び黄褐色粘土層を主体とする。最大層厚は約3m。
- 第Ⅳ層**（黄褐色シルト層） 全域を覆ってほぼ水平に堆積し、層厚0.8m。本層は、さらに次の3層に分けられる。上位より、第Ⅳa層（黄褐色極細粒砂混りシルト層）、第Ⅳb層（黄褐色シルト層：多数の細かい植物の根の跡に酸化鉄が沈着し微少なマンガンノジュールが散存する）、第Ⅳc層（灰黄褐色極細粒砂混りシルト層）。第Ⅳa層およびそれより下位の地層をけずってNR9001が流れ、さらにNR9001が埋没した後に第Ⅳa層上面より井戸が掘削されている。第Ⅳb層上面では中世の溝やピットが検出されている。
- 第Ⅴ層**（暗灰色粘土層） F-7区を中心とし南北方向を長軸とする楕円形の範囲内にレンズ状に堆積している。E-5区以南に舌状に延びる可能性があるが調査区域外の為不明。最大層厚0.6m。本層中部には連続性に乏しい植物遺体層が数層挟在し、また下



第6図 基本層序模式図

部には塊状の炭酸第一鉄が点在する層準が介在する。

**第Ⅵ層**（偽礫層） S X4001の最深部に向って北及び西側から急傾斜で堆積している3層の偽礫層から成る。この偽礫層を上位より第1・第2・第3偽礫層とよぶ。各々の偽礫層は、中礫及び第Ⅴ層及び第Ⅰ層以下の粘土層に由来する最大径40cmの角礫状の粘土塊、完形品を含む多量の土器、石器、木器等から成り基質（マトリックス）は粗粒砂及び細礫から成る。各偽礫層の間層には中粒～粗粒砂層を挟在し、又第Ⅴa層（第2偽礫層）の直下には粘土を含む植物遺体の薄層を伴う。第1偽礫層から第2偽礫層に至る各層はS X4001の東西にも中礫大の粘土偽礫を含む粗粒砂層として薄く広がりその延長はE-19区以西に及ぶ。また、第2偽礫層及びその上下の砂層はS X4001の東にも広がり堤の西側斜面にまで到達するが、この地点では偽礫は含まれず、粗粒砂層・植物遺体層及び粘土層の薄層となっている。各偽礫層の分布高度及び最大層厚は次のとおりである。

第1偽礫層 上面はT. P. +6.1m～5.0m。下面是T. P. 5.8m～3.2m。最大層厚は1.5m。第2偽礫層をおおって堆積している。

第2偽礫層 GH3区まで延び、砂の薄層に漸移する。上面T. P. + 6.0m～3.0m。下面T. P. +5.9m～2.7m。最大層厚1.5m。

第3偽礫層 第2偽礫層に一部切り込まれている。上面T. P. +5.3m～4.1m。下面T. P. +5.0m～4.1m。最大層厚は0.5m。

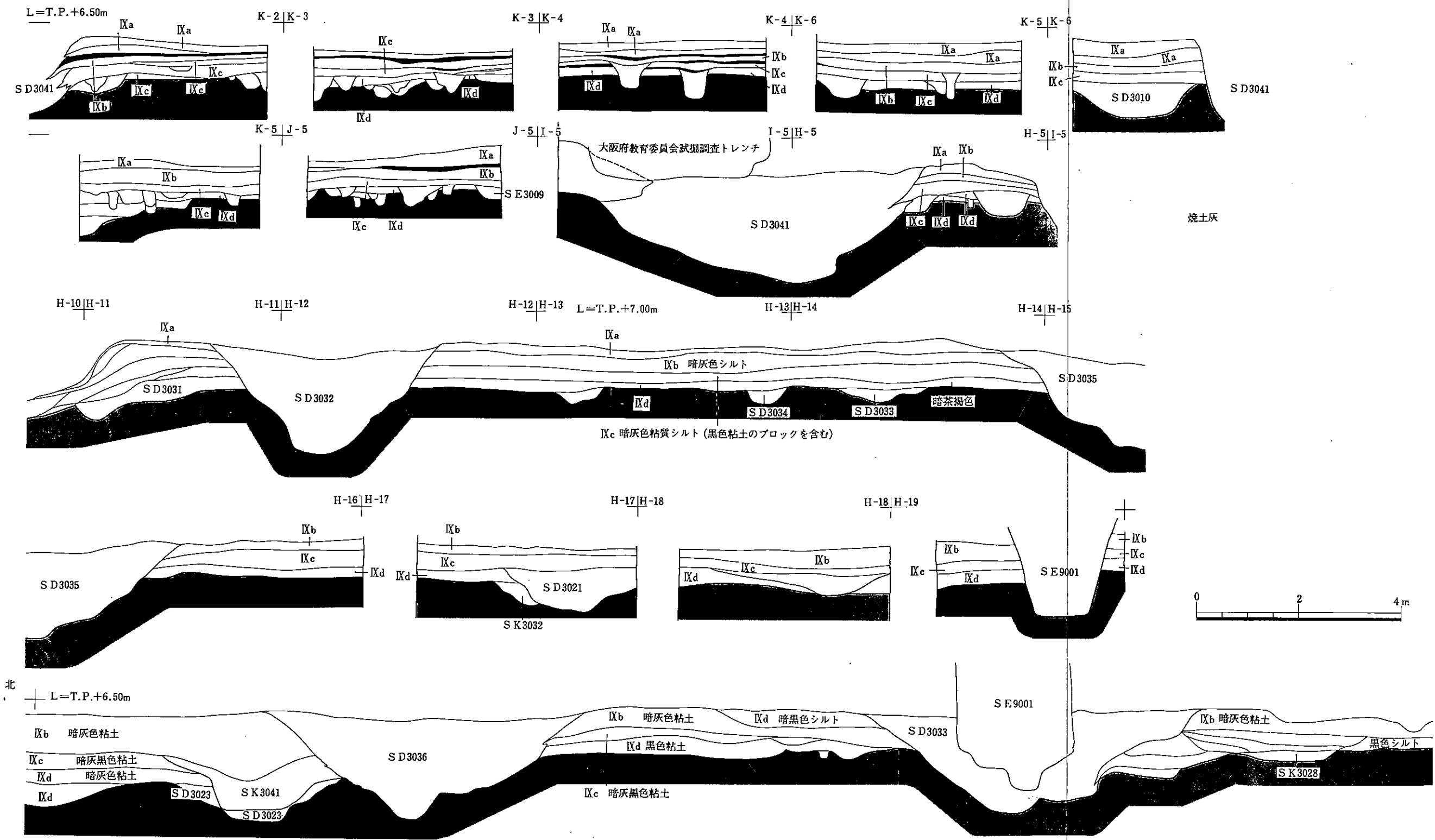
**第Ⅶ層**（青灰色シルト層） 第Ⅴ層の分布域及び第Ⅷ層を覆い溝遺構の凹所で厚く堆積する。最大層厚0.4～0.6m。最下部は中粒砂であるが上部に向って漸次細粒化し、最上部はシルトと成る。この第Ⅶ層上面には古墳が築かれている。

**第Ⅷ層**（粗粒砂層） J-8区以北の自然流路（NR3001）に堆積する砂層でS X4001等によって部分的に失われているが、Jライン以北及び5ライン以東に残在する。Jライン以北では最大層厚2.3m、上面T. P. +5.0m。5ライン以東では最大層厚3.5m、上面T. P. +6.0m。

**第Ⅸ層**（弥生時代遺物包含層） 黒色粘土層と暗灰色粘土層を主とする地層で4層に分層できる。上面はほぼ水平でT. P. +6.20～6.00m、層厚0.5～0.8m。

※本層については次節に詳述する。

**第Ⅹ層**（青灰色シルト層：地山層） 当遺跡のベースになる層で弥生時代最下位遺構面を形成する地層で、調査区全域にほぼ水平に堆積する。上面はT. P. +5.30～5.50m。



第7図 弥生時代遺物包含層断面図 (1/60)

## 第2節 弥生時代の遺物包含層（第Ⅸ層）

これまでの試掘調査において、「旧大和川の氾濫による、余り遠くない場所からの2次的堆積層」（中井 1973）とされていた黒色粘土層は、調査区域北東部—Hライン以北・9ライン以東一において認められる。また、9ライン以西では暗灰色粘土層が堆積している。

黒色粘土層からは、多量の土器が出土し、ピット・土坑・井戸・墓など多くの遺構が検出された。また、層中には厚さ2～10cmの焼土・炭・灰層が数層認められた。これに対して、暗灰色粘土層からの遺物の出土は少なく、検出された遺構も、溝と土坑のみであった。ピット群が検出されたのは、S D3031の北側でS D3014の東側のみであった。

試掘調査における地層観察と任意分層発掘による掘り下げの過程で、弥生時代遺物包含層（第Ⅸ層）は、基本的に4層に分けることができた。北東部黒色粘土層堆積域においては鍵層の挟みによって各層を明瞭に分層できるが、西部暗灰色粘土層堆積域では層相も異なり、鍵層もないため各層の境界が不明瞭な場合もあった。

第Ⅸa層—13ライン以東の最上位に重なり、地山の青灰色シルトと更に下層の暗褐色粘土をブロック状に含む層である。S D3041の両肩では約30cmと厚く堆積し、周辺に行くにしたがって10cmと薄くなる。本層の上面からS X3005が検出されている。

第Ⅸb層—北東部では、本層最上部の炭・焼土・焼砂の薄層を鍵層として、第Ⅸa層と区別される。黒褐色粘土層で層厚は5～10cmである。本層の上面からは、第Ⅴ様式の井戸（S E3004・3005・3006・3007・3011・3012）・溝（S D3032・3033・3034・3035・3036・3037）が検出された。西側の暗灰色粘土堆積域には、溝が集中している。

第Ⅸc層—北東部では、最上部の焼土・灰層を鍵層として第Ⅸb層と区別される。黒褐色粘土層で層厚は2cmである。焼土・灰層の直下で多数のピット・土坑・井戸が検出された。特にJ—4区内の遺構では、焼土・灰層が厚く堆積し（層厚約15cm）、その下部には多数の炭化材が集積していた。暗灰色粘土層堆積域では、黒色粘土をブロック状に含む層で、層厚は北東部より漸増して約35cmとなる。

第Ⅸd層—北東部では、最上部に厚さ3cmの灰層または青灰色シルトのブロックが堆積しており、これによって第Ⅸc層と区別される。炭・焼土・細かな青灰色シルトのブロックが含まれる黒色粘土層である。9ライン以西では、層厚25cmの暗褐色粘土層でほぼ水平に堆積している。本層の上面からは、S K3024・3043・3044・3049・3050、S D3021が検出されている。

〔引用文献〕

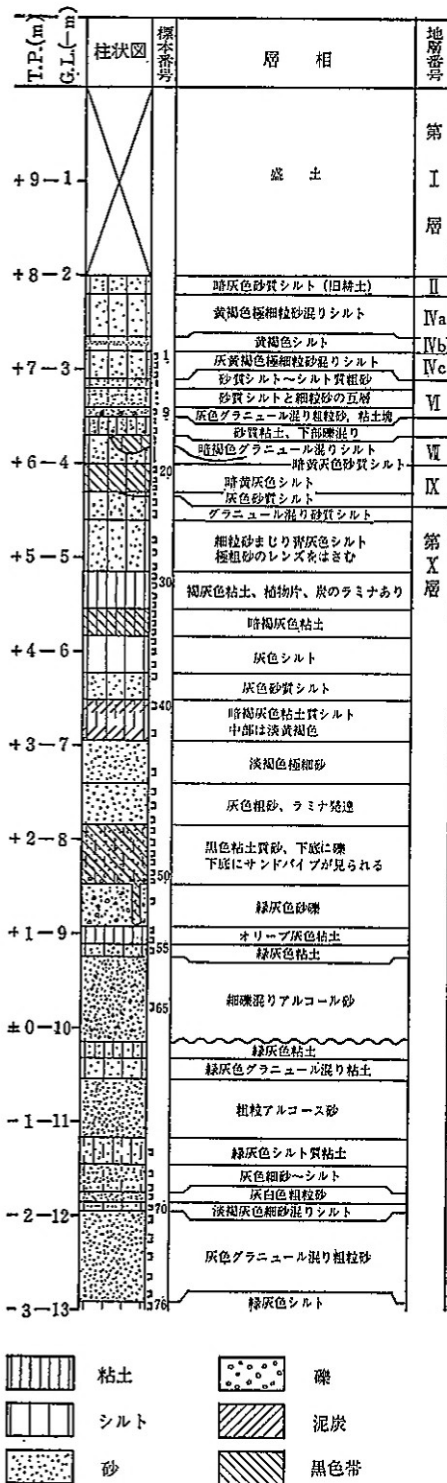
中井貞夫 1973 「亀井遺跡発掘調査概要Ⅲ」 大阪府教育委員会

### 第3節 地山層以下の沖積層

当遺跡の地山面を形成する青灰色シルト層（第Ⅰ層）は、層厚約 1.2mで、連続性は良いが、中・下部の側方への層相変化は激しく、ところによっては粘土層や砂・シルト互層、粗粒砂層などに漸移的に変化する。下部約 0.4mは細かな炭片のラミナを約10枚挟在する褐灰色粘土層で、その直下には層厚約 0.3mの暗褐灰色粘土層があるが、遺物および遺構は検出されていない。これより下位約 1.1m（T.P.+約 3 m）までは灰色シルト層で、最下部には層厚約 0.15mの黒色シルト層が2層挟在されるが、遺物はやはり検出されていない。

T.P.+約 3 mより下位には淡褐色極細粒砂層（層厚0.5m）と灰色粗粒砂層（層厚0.4m）が続き、後者の下面は部分的に下位の地層を1～2 mの深さまで侵蝕して暗灰色シルト層や細粒砂層をレンズ状に挟在する細礫層を堆積している。

上記の侵蝕を受けていない所では、灰色粗粒砂層の直下に層厚0.6～0.8mの黒色粘土質砂層がある。本層は黒色粘土を基質とする細～中礫混りの淘汰の悪い砂層で、下面は起伏に富み、凹入部を埋める本層下部（層厚 0.2m）にはオキシジミ、ハマグリ、コオロギ（ウミナナ科）、カキ、ミドリシャミセンガイなどの海棲貝類および腕足類の殻が密集している。凹入部の底面に接して径5～10cmの花崗岩やチャートの亜角～亜円礫が点在し、それらの一部にはカキ殻の付着痕を有するものもある。また、本層の下面からは、砂管（サンドパイプ）状の古生痕が数多く穿たれ、黒色粘土質砂または粗粒砂によって充填されているが、貝殻密集部によっておお



第8図 亀井遺跡H T地点におけるT.P.-3 mまでの地質柱状図



われぬ微高地状の部分からの生痕よりも凹入部底面からのものの方が長く(最大長45cm)、分布密度も高い。生痕と共に古乾痕と思われる不規則な割れ目も観察された。本層の下面はF-5・6区ではT. P. + 2 m (G. L. - 8 m)、E-19区ではT. P. + 1.5 m (G. L. - 8.5 m)で、北西方向へ低くなっているが、地層の厚さは変化しない。本層を以後「含貝海成層」と略称する。なお、本層からは焼けこげのある木片と、きわめて小さなサスカイトの破片が各1点出土した以外には考古遺物は検出されなかった。

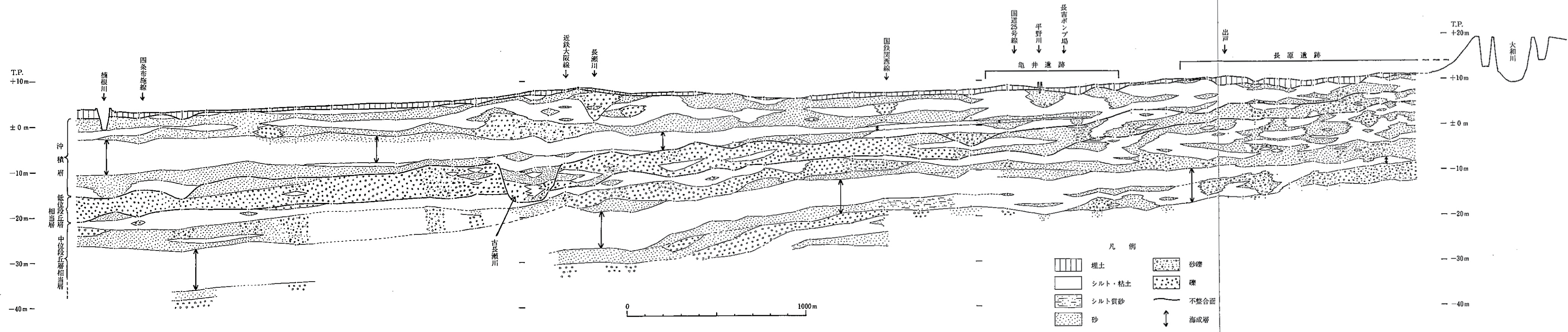
含貝海成層の直下には著しく風化した細礫を含む緑灰色砂礫層(基質は白色～明紫灰色粘土: 層厚0.8m)、オリーブ灰色粘土層(層厚0.1~0.2m)、緑灰色粘土層(層厚0.1m)と続きいずれもよく締って堅い。さらにその下位には層厚約0.9mの細礫混りアルコース砂層が重なっているが、この層は非常に緩く、下面はしばしば下位の地層を著しく侵蝕する。この面が沖積層と低位段丘層相当層とを分ける沖積層基底面と考えられ、今回の発掘地域においてはT. P. - 0.2m (G. L. - 10.2m) 付近に位置する。

府道中央環状線ぞいに実施されたボーリングによれば、沖積層基底面すなわち埋没低位段丘面は、北へしだいに高度を下げ、亀井遺跡の北約5.3kmの楠根川付近では、T. P. - 15m前後となる。中央環状線が長瀬川と交叉する付近では、この面に下位の低位段丘層相当層と中位段丘層相当層をけずり込む埋没谷が見られる。この埋没谷は比高14mに達し、非常に連続性の悪い河成の礫・砂あるいは粘土によって埋積され、さらにその上位は海成粘土層によっておおわれている。この埋没谷は、ウルム氷期極相の最大海水準低下期に、古長瀬川とも呼ぶべき河川の下刻作用により形成されたものと考えてよいだろう。海成粘土層の上位にもやはり河成と考えられる礫層が発達し、ウルム氷期とよく似た位置に川が復活したことが明らかである。この川はわずかに位置を変えながらも、現在に連続するものである。但し、よく知られているように現長瀬川は1704年の大和川つけかえ工事によって、その流水量が著しく減少し、現在では痕跡的に残されているにすぎない。



第9図 府道中央環状線での地質断面図の位置 (矢印で示す)

国土地理院発行 2.5万分の1地形図  
「大阪東南部」の一部を使用



第10図 府道中央環状線に沿う地質断面図 上下に並ぶ点の位置がボーリングデータ

## 第4節 縄紋時代の海成層について

前節で記した含貝海成層は、堆積物の層相および層厚から考えるとそれほど長期間にわたって堆積したものは考えられず、縄紋海進最高頂期の短い期間に堆積したものと考えられる。言い換えれば、亀井遺跡が河内湾の最奥部における古海岸線付近に位置していたことになると共に、河内湾の最高海面が、T. P. + 2 m (O. P. + 3.3m) を越えるものであったことを示している。

この含貝海成層に続く堆積物は、中央環状線沿いのボーリング資料によっても確認され、当遺跡より南80m (平野川と中央環状線との交点より南へ 210m) まで続いているが、それより南では、もはや海成層は存在しない。これらの知見は、梶山・市原 (1972) と基本的に一致している。

一方、この海成層は北へ向ってしだいに高度を下げると共に層厚を増し、楠根川付近においては上面が T. P. - 2.8m、下面が T. P. - 10.5m となり層厚 7.7m に達する (第10図)。また層厚が増すと共に、層相は最上部を除いて淘汰のよいシルトないし粘土となる。

〔引用文献〕

梶山彦太郎・市原実 1972 「大阪平野の発達史」地質学論集 7. 101—112

## 第5節 低位段丘層相当層

第3節で述べたように、発掘地域においては T. P. - 0.2m 付近に沖積層基底面、すなわち埋没低位段丘面が存在する。発掘地の発進堅坑部において、この面の直下には、緑灰色グラニュール混り粘土層、その下位に緑灰色グラニュール混りシルト層と重なる。このシルト層は、非常にかたく締っていた。

府道中央環状線沿いの地質断面図 (第10図) では、低位段丘層相当層は主として砂層ないし砂礫層からなり、中部あるいは上部に、シルトないし粘土のレンズを挟んでいる。層厚は亀井遺跡付近では 4~6 m であり、第10図の範囲内で最大 7 m 前後である。

(下村ほか 1980) によれば、東大阪市の府道築港一枚岡線沿いの断面において、埋没低位段丘面直下には、「埋没黒ボク土」とも呼ぶべき黒色粘土層が観察された。今回の調査地あるいは府道中央環状線沿いの断面においても、この「埋没黒ボク土」が存在するかどうか、観察あるいは資料を検討したが、確認されなかった。おそらく、両地域における低位段丘層相当層堆積末期の堆積条件または低位段丘層相当層堆積後の侵蝕条件の差によるものだろう。

## 第 6 節 中位段丘層相当層

亀井遺跡付近では、およそ T. P. - 5 m 付近から下位に存在する。その上面つまり低位段丘層相当層下底の不整合面は、府道中央環状線沿いに北へ向ってしだいに高度を下げ、楠根川との交点付近ではおよそ T. P. - 20 m となる。ボーリング調査によれば中位段丘層相当層は上部非海成層・中部海成層・下部非海成層に 3 分することができる。上部非海成層の上半部は粘土～シルト層が卓越し、下半部は砂～砂礫層が発達する。亀井遺跡から南では層相変化が極めて激しいが、上記の傾向は変らない。

中部海成層は、長瀬川付近より北では全層ほぼ一様な海成粘土層であるが、南へ向って下部がしだいに砂質となる。さらに出戸交叉点付近から南では、海成粘土層中に連続性の悪い砂礫層を挟在する。中部海成層の分布は那須・樽野（印刷中）により、出戸交叉点の南およそ 810 m まで確認されていたが、今回使用した資料によれば、さらに南まで（出戸交叉点から約 1050 m）広がっており、その付近で尖滅することが明らかとなった。尖滅地点での標高は、T. P. - 8 m である。

# 第V章 遺構及び遺物

## 第1節 概 略

### 1 遺跡の概略

亀井遺跡は、弥生時代の集落跡から江戸時代の平野川まで8層の遺構が重なった複合遺跡である。また、遺物は縄文時代晩期の土器から江戸時代の染付け磁器まで出土している。

当遺跡は、発見された当初から弥生時代前期～後期まで続く遺跡として知られていた。今回の調査でも弥生時代の遺構、遺物は最も顕著であったが、しかし、弥生時代だけでなく古墳時代中期からも注目すべき遺構、遺物が検出された。以下、各時代別に概略を記す。

#### a 縄紋時代

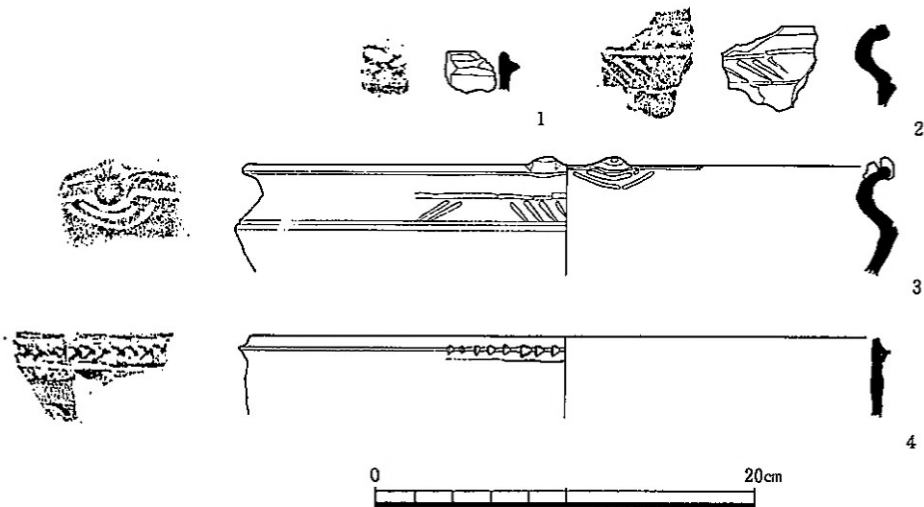
遺構は検出されなかったが、晩期の土器片が4点出土している。この遺物の出土から、亀井遺跡の周辺に縄紋時代の遺跡が存在する可能性が推察される。(第11図)

#### b 弥生時代

青灰色シルトの地山面、包含層に遺構が検出された。特に、T. P. + 5.5m前後を測る青灰色シルトの地山面に大半の遺構が検出された。

前期の遺構としては、後世の遺構によって切断された溝が4条検出されている。遺物も少量溝内より出土している。遺構、遺物は少ないが、亀井遺跡で初めて人間が大地に行動を起した痕跡である。

中期になると遺構、遺物が急激に増加する。特に調査区の北東部には柱穴や井戸、土坑が集中



第11図 縄紋式土器実測図

している。溝は合わせて29条検出され、S D3028、3029から土器が一括出土している。また、S D3014、3029、3031は、柱穴検出の有無の界となっている。井戸は10基検出されており、S E3001からは銅鐔形土製品、杓子状未製品が出土し、注目される。土壙は53基検出され、調査区全域に分布している。これらの土坑の中で、S K3037、3040からは一括して土器が出土し、S K3041からは籾や炭化玄米、藁灰、動・植物遺体が多量に出土している。また、前記の遺構以外に、甕棺、木棺、土壙墓が検出されている。木棺墓（S X3004）は包含層中より検出され、人骨が出土している。甕棺（S X3002）の内部からも幼児骨が出土している。S X3003のように性格の不明な遺構もある。

後期になると遺構の数は減少するが、溝や川など水利に関係する遺構が大規模となり幅5 m以上に達すると、大規模化する。検出数は6条で、特にS D3036の底からは鉄斧が溝底より出土している。東側には幅約12mを測るNR3001が東から北へ曲流し、その北側に幅約6 mのS D3041が並行して流れていた。NR3001からは土器、石器が多量に出土した。更に、S D3041からは、多量の土器、石器と共に銅鐔形土製品、分銅形土製品が出土した。溝以外に、井戸が6基検出され、S E3006は自然木の削り抜きの井戸枠を有していた。井戸は、このS E3006の周辺に集中していた。また、井戸以外に土坑が2基検出され、S E3004からは埋土中より貨泉、銅鏃が出土している。更に北東部、連続壁によって切断されたS X3005が検出され、人骨が出土している。

#### c 古墳時代・古墳時代以降

古墳時代に入ると、亀井遺跡は大きな流路の氾濫原と成り、その溢流水によって遺跡全体が覆われ、堆積土によってNR3001の川幅なども縮小された。しかし、中期になると再び安定する。

中期になると、調査区の東北隅に古墳が築かれた。そしてその後、すぐ南側のNR3001に直交するように堤が築かれている。古墳は墳丘や周溝の一部を消失していたが、主体部がかろうじて残存していた。主体部は2基で、どちらも木棺直葬墓であった。1号主体部からは小型の鉄製素文鏡が出土している。また、2号主体部は保存が良く、内部からは漆塗りの武具類が出土し、また、棺外の韆に塗布してあった漆膜から直弧文が検出された。

古墳の南側に築かれた堤は、自然木、転用材、草によって補強された大規模なもので、用いられた土砂は古墳の周溝を埋めている。また、川を挟んだ西側では水田の畦畔が検出され、堤、水田との関係を、想起させられる。更に、堤の西側、NR3001の跡には、S X4001と大規模な掘り込みがなされている。

そして水田、川も、S X4001に流れ込んだ偽礫層によって覆われる。S X4001は大きな凹地となる。この偽礫層から、多量の弥生式土器や須恵器、鉄斧、人骨、玉類が出土した。

後期以降、この凹地は大きな沼沢地となり、中世には消滅してしまう。この沼沢地からは、木器類や植物遺体が出土し、土器も少数出土している。

中世になると、発掘地付近は安定し、顕著な遺構は現れなくなる。条里方向と合致する溝が3条と浅いピットが検出され、何らかの人の活動がうかがわれるのみである。

近世になると、調査区の北西部に平野川旧流路（NR9001）の一部が検出される。そして、川の肩部には、伏流水を取るための井戸が掘られている。これらは農作業に利用されたであろう。

上記のように、亀井遺跡の今回の調査区は、縄文時代から江戸時代、そして現代まで、時代によって種々の有様を示している。

## 2 土器の概略

亀井遺跡出土土器を説明する前に、出土土器の様相を簡単に述べておきたい。

### a 縄紋時代

縄紋式土器は出土点数が少なく、深鉢・浅鉢形土器の口縁部が4点出土しているだけである。いずれも晩期である（第11図）。

### b 弥生時代

弥生式土器は、多量に出土している。今回出土の土器の場合、第Ⅱ様式と第Ⅲ様式古段階、第Ⅲ様式新段階と第Ⅳ様式を現在の整理段階では明確に様式区分することができないものが多かった。よって便宜上、第Ⅱ様式—第Ⅲ様式古段階と、第Ⅲ様式新段階—第Ⅳ様式として取り扱い記載したものもある。なお分類の基準及び名称・用語については、原則として『弥生式土器集成・本編』（小林・杉原編 1968）及び、『紫雲出』（小林・佐原 1964）、『池上遺跡・土器編』（井藤・他 1978）を用いた。

以下亀井遺跡出土土器の様相を記す。

〔第Ⅰ様式〕 中・新段階の、壺・壺用蓋・甕形土器が数点出土している。壺形土器は、ヘラミガキ調整で、口縁端部に篋描綾杉文を施すものや、無文のものである。甕形土器は、ハケメ調整で頸部と腹部に篋描沈線を施し、口縁部に刻目を施している。

〔第Ⅱ様式〕 壺・細頸壺・無頸壺・鉢・甕形土器等が少量出土している。新しい段階に属するものが多い。壺形土器は、球形に近い体部に長い頸部から大きく開く口縁部をもつものと、短く外反する口縁部をもつものがある。前者は、頸部から腹部に直線文を施す。無頸壺形土器は、球形に近い体部に内彎した口縁部をもち、外面に直線文と波状文を飾るものである。鉢形土器は、椀形を呈するものと、口縁部が外反するものがある。前者は口縁部に刻目を施すものや、腹部に直線文を施すものがある。後者も口縁部に刻目を施すものがある。甕形土器は、倒鐘形の体部に丸くなだらかに外反する口縁部をもつものが多い。「く」の字に外反する口縁部をもつものもある。調整は、ヘラミガキ・ナデ<sup>12)</sup>・ハケメ調整等である。明らかに他地方から運ばれたものとして、和泉産の壺、「大和型」（井藤他 1978）といわれる甕が出土している。

〔第Ⅲ様式〕 器種は壺・細頸壺・無頸壺・台付無頸壺・壺用蓋・水差・鉢・台付鉢・高杯・甕・甕用蓋形土器等が出土している。第Ⅲ様式の土器が一番多量に出土している。壺形土器は、球形の体部に太く長い筒状をなす頸部から外反する口縁部をもつもの、算盤玉形の体部に太くやや短い筒状をなす頸部から外反する口縁部をもつもの、算盤玉形の体部に細くしまった頸部と外



反する口縁部をもつものがある。これらは、いずれも口縁端部を拡張し、口縁端部、頸部から体部上半を簾状文等の櫛描文で飾る。他に、胴の張る体部に短く直立する頸部から水平近く屈曲する口縁部をもつもの、丈高の体部に外開きの頸部をもち、さらに曲折して直立する口縁部をもつもの等がある。前者は無文のものが多く、後者は頸部に指頭圧痕の凸帯を施し、口縁部外面に櫛描文か凹線文を施すか、無文のものもある。細頸壺形土器は、球形の体部をもち、口頸部から腹部にかけて櫛描文で飾るもの、算盤玉形の体部にためでやや短めの口頸部をもち、櫛描文、凹線文を施すものがある。無頸壺形土器は胴の張る体部に内彎する口縁部をもつもの、短く外反する口縁部をもつものがある。無文である。水差形土器は、やや胴の張る体部に口縁部は把手側が弧形に挟られている。鉢形土器は、碗状を呈す直口のもので無文か口縁部に列点文等を施すもの、胴の張る体部に水平気味に屈曲する口縁部又は段状口縁部をもち、体部に櫛描文を施すもの、外に開く胴底部から屈曲し、口縁端部が外方に突出し刻目を施したものと等がある。高杯形土器は、直口するもの、水平口縁部をもつものがある。無文が多いが、前者は口縁部外面に列点文、凹線文を施すものもある。後者も凹線文を施すものがある。脚部は柱状から裾広がりのもので杯部と脚部の接合は「円板充填法」による。甕形土器は、倒鐘形を呈し、口縁部は「く」の字に外反するもの、水平気味に屈曲するものがある。口縁端部は上方、上下両方に拡張したもの、拡張しないものが同数程度ある。端部を折り曲げ刺突文を施したものともある。内外面の調整はヘラミガキ・ハケメ調整が多い。他地域からの混入は明確でないが、生駒西麓の胎土の土器は全体の $\frac{1}{2}$ 程度を占める。他の様式でも第Ⅲ様式程多くないが見られる。

〔第Ⅳ様式〕 器種は壺・細頸壺・無頸壺・水差・鉢・高杯、器台・甕形土器等がある。壺形土器は、大きく広がる口頸部をもつもの、胴の張る体部に短く直立する頸部から水平気味に屈曲する口縁部をもつもの、丈高の器体の上に外開きの頸部をつけ、さらに屈曲して直立する口縁部をもつもの等がある。前者は口頸部を櫛描文で飾り、後二者は口縁端部又は口縁部を凹線文で飾るものがある。細頸壺形土器は、口頸部が短めのもので、口頸部に凹線文を施すものと無文のものがある。無頸壺形土器は、胴の張る体部に内彎する口縁部をもつもの、短く外反する口縁部をもつものがある。前者は台付のものがあり、口縁部と脚部に凹線文を施している。後者は腹部に櫛描文を施すものがある。水差形土器は、口頸部に凹線文を施す。鉢形土器は、碗状を呈し口縁部に凹線文を施すものがある。高杯形土器は、直口の杯部をもつもので口縁部に列点文を施すもの、凹線文を施すもの、無文のものがある。柱状の脚部に篋描き沈線文を施すものは、第Ⅳ様式によく見られる特徴である。杯部と脚部の接合は、「円板充填法」によるもの、上半中実のものがある。脚部内面はヘラケズリ調整が多い。器台形土器は、口径が底径をしのぎ、口縁端部を拡張し、その外面に凹線文、円形浮文等を施す。体部にも太い凹線文帯を2段に分けてめぐらし、その間に下半部に大きく挟った丸い透し穴を配置する。甕形土器は、胴の強く張る形態で、体部下外面をヘラケズリ調整するものもあるが、内外面ハケメ調整が多い。第Ⅲ様式新段階の甕形土器との区別は明確でなく、拡張した口縁端部に凹線文を施すものも少ない。

〔第Ⅶ様式〕 第Ⅰ～第Ⅳ様式まで続けて主な調整法であったヘラミガキ、ハケメ調整からタタキ調整に変わり、成形も粘土紐の積み重ねがよくわかる雑なつくりのものが多く、器種は壺・長頸・細頸壺・無頸壺・短頸壺・鉢・高杯・器台・手焙形土器等が出土している。第Ⅲ様式に次いで出土量が多い。壺形土器は、球形に近い体部に直立したのち外に開く口頸部をもち、口縁端部は下方に拡張し、端部に凹線文、櫛描文、円形浮文等を施すもの、胴の張る体部に短く外反する口頸部をもつもの、丈高の体部に短く直立する口頸部をもつもの、二重口縁部をもつもの等がある。短く直立する口頸部をもつものが多い。無文のものが多く、体部縦ヘラミガキ調整が多い。鉢形土器は、小形の直口鉢と外反する口縁部をもつものがある。前者は作りが粗雑でタタキ調整や未調整であり、後者は外面ヘラミガキ調整を施している。高杯形土器は、浅い碗形の杯部と比較的低い脚台をもつもの、曲折して立つ口縁部をもつ杯部と裾広がり高い脚台（第Ⅳ様式から続く柱状の脚をもつものもある）をもつもの、外側に稜をもちさらに斜めに大きく開く口縁部をもつ杯部で裾広がり脚部をもつもの等がある。器台形土器は、口径が底径より大きく、口縁部は拡張せず円形浮文を施している。甕形土器は、「く」の字に外反する口縁部をもつものと受口状口縁部をもつものがある。タタキ調整によって仕上げられたものがほとんどある。壺・高杯形土器に赤色顔料を施したものが多い。

#### c 古墳時代

古墳時代の遺物は、須恵器と土師器が出土している。須恵器は、田辺(1966)、中村(1978)の編年を基本にしている。亀井では、中村(1978)によれば、Ⅰ型式に属するものが多く、蓋杯、高杯、甕、器台、壺、甕が出土している。杯身は、口径が小さく、たちあがりはやや短めで、受部は短く丸味をもち、底部はやや丸味をもつものが多い。静止ヘラケズリ調整を施すものもある。高杯は、有蓋と無蓋高杯がある。有蓋高杯の杯身は、たちあがりの高さは器高のほぼ2分の1で、底は平らに近く、たちあがりは内傾し、端部は丸く仕上げている。脚部は、「ハ」の字に開く。無蓋高杯は2種類ある。1つは、底の比較深い枕状をなし、口縁部は直立に近く端部は丸く、口縁部外面に2条の凸線がめぐり文様帯を囲んでいる。脚は、四方の台形の透し窓をもつ。体部に把手を1個つける。もう1つは、杯蓋を逆転させたような形の杯をもち、口縁部はゆるやかに外反し、脚は「ハ」の字に開き、端部近くに凸線をめぐらす。甕は、頸部からゆるやかに外反する口縁部をもち、端部に凸線を施す。格子タタキやカキメ調整が見られる。器台は、高杯形器台で、体部に見られる凸線はその上下方を沈線状に下げることによって相対的に隆起した如くにみせるものである。以上等から、Ⅰ型式でも前半のものが多く、一部、稜の退化した杯蓋等Ⅰ型式後半～Ⅱ型式と思われるものもある。

#### d 飛鳥・藤原時代

飛鳥・藤原時代の遺物は、須恵器と土師器である。須恵器は、田辺(1968)、土師器は西(1978)の編年を基本とする。須恵器は、蓋杯、土師器は、杯、甕、短頸壺が出土した。土師器杯は、口径17.5～18.0cm、器高5.1cm前後で、内面に2段放射線文と螺旋文をつけ、口縁端部は肥厚とい

うよりわずかに内側に屈曲するものと口径14.6~16.2cm、器高 5.8cm前後で、内面は1段の放射線文と螺旋文をつけ、口縁部外面のヘラミガキは粗く、底部外面はヘラケズリするものがある。

この坏の時期は、7世紀中頃~後半で他の遺物もおおよそ当てはまる。

#### e 中・近世

奈良・平安時代に当てはまる時代の土器は出土しなかった。中世の遺物として、土師小皿が1点出土した。同志社入学校地学術調査委員会編(1978)を参考に類別すれば、鎌倉時代末~室町時代初となる。

近世の遺物は、陶磁器碗、すり鉢、軒丸瓦等が出土している。磁器碗に印判による染付を紫味の強い濃紺のペロ藍を用いて施されたものがなく、古伊万里系の網手文をもつもの、単調な藍染付に濃淡の調子をそえた濃の技法が見られること等から、明治時代にまで下ることなく、江戸時代のものであると考えた。軒丸瓦も側縁が巾広になり、円形の頭と短い尾の巴文であり、その他の遺物も江戸時代におさまると思われる。

以上、おおまかな把え方で、往々にして把え違いもあると思われるので、適切な教示を願う。

#### 〔註〕

- (1) 松尾信裕氏に御教示願った。
- (2) 弥生式土器の調整の説明でヘラナデとしているのは、ハケメがなく板状のものでナデている調整である。
- (3) 多量の角閃石、黒雲母、石英、長石等を含み、褐色を呈するという概念で、目で観察して判断した。
- (4) 従来いわれてきた丈高の体部に短い口頸部をもつものは壺の中に含んだ。ここでは胴の張る体部をもつものをさす。

#### 〔引用文献〕

- 井藤暁子、上西美佐子、藤田雅子、清原弘美 1978 「池上遺跡 第2分冊 土器編」 大阪文化財センター
- 小林行雄、杉原荘介、他 1968 「弥生式土器集成一畿内」 本編
- 田辺昭三 1966 「陶邑古窯址群Ⅰ」 平安学園
- 同志社入学校地学術調査委員会編 1978 「同志社キャンパス内出土の遺構と遺物」
- 中村 浩 1978 「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」 「陶邑Ⅲ」所収 大阪府教育委員会
- 西 弘海 1978 「土器の時期区分と型式変化」 「飛鳥・藤原京発掘調査報告Ⅱ」所収 奈良国立文化財研究所

## 第2節 弥生時代前期

前期の遺構は溝が4条検出されただけである。

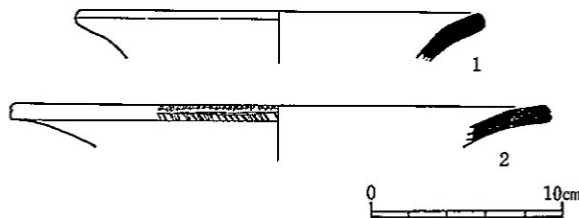
## 1 溝

SD3024 (第288図) 北東←→南西方向に走り、上部幅1.5m~2.0m、深さ0.15mを測る。東をSD3037に、西をSD3036に切られており、現存長は約4.0mを測る。

出土遺物 (第12図)

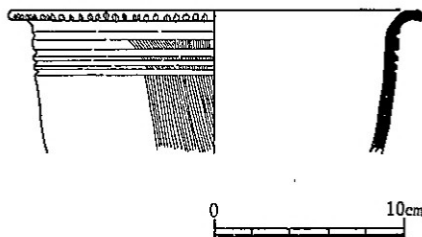
〔土器〕 壺形土器(1・2)等が出土した。第1様式新段階である。

(1)は復元口径21.0cmを測り、端部は丸い。(2)は復元口径28.1cmを測り、口縁端部に沈線を施し、上下に綾杉文状にヘラで刻む。



第12図 SD3024出土遺物実測図

SD3025 (第288図) SD3026を切っているのがわずかに断面で確認されたにとどまる。SD3024とSD3026との切合いが精査にもかかわらず平面で確認できず、一部肩を検出したにとどまった。上部幅1.0m、底部幅0.7m、深さ0.15mを測る。堆積土は、下から灰黒色粘土質シルト(ブロックで青灰色シルトを含む)、青灰色シルト・灰色極細粒砂・灰黒色粘土質シルトのブロック層である。



第13図 SD3025出土遺物実測図

出土遺物 (第13図)

〔土器〕 甕形土器等が出土した。第1様式新段階である。復元口径21.6cmを測り、なだらかに外反する口縁部をもつ。端部に刻目を施し、口縁部直下にハケメ調整の上に4条の沈線を施す。外面に煤が付着する。

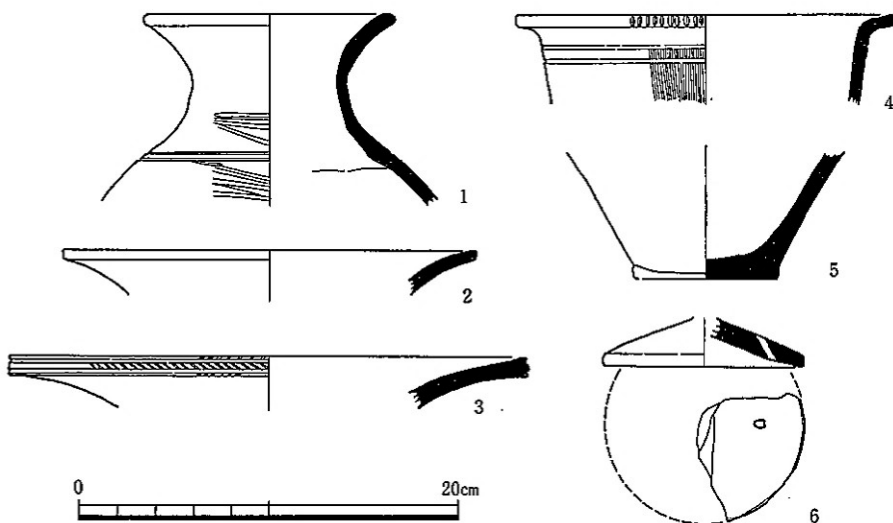
SD3026 (第288図) 北東←→南西方向に走り、SD3024とほぼ平行している。前後関係は明らかではない。上部幅1.3m~1.4m、底部幅1.0m、深さ0.2mを計る。北東をSD3023に、南西をSD3036に切られていて、現存長は4.5mを測る。

堆積土は下から、灰色極細粒砂・黄白色極細粒砂・灰黒色粘土質シルトのブロック層、灰色粘土・灰色極細粒砂・灰黒色粘土の薄層、灰色極細粒砂、灰黒色粘土質シルト、黄白色極細粒砂、灰色粘土・青灰色粘土のブロック層である。

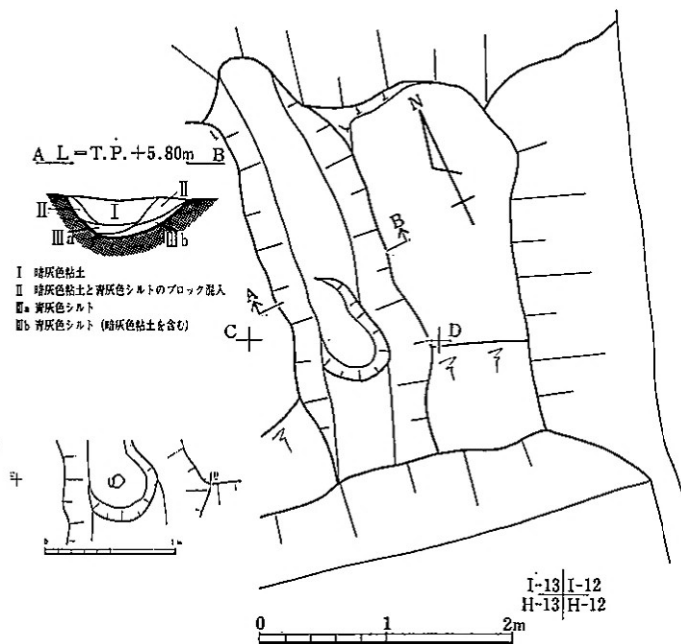
出土遺物（第14図）

〔土器〕 壺形、甕形、壺用蓋形土器等が出土した。第1様式新段階である。

壺形土器（1・2・3） （1）は復元口径13.4cmを測り、口頸部は丸く外反し、肩部に2条の沈線を施す。内面はナデ調整である。（2・3）の口縁部は外に開く。（2）は復元口径22.0cm、（3）は27.4cmを測る。（3）は端部外面に2条の沈線を施し、その間をヘラで綾杉文状に描く。



第14図 SD3026出土遺物実測図



第15図 SD3027遺構平面図（ $\frac{1}{60}$ ）

甕形土器(4・5) (4)は復元口径20.0cmを測り、口縁部は丸く外反する。口縁端部を刻目、口縁部直下にハケメ調整の上を2条の沈線で飾る。内面はナデ調整で、外面は煤が付着する。(5)は底部片で底径7.6cmを測り、2次的に火を受け、調整等は不明である。内面に炭化物が付着する。

壺用蓋形土器(6) 復元口径10.8cmを測り、穿孔あり、内外面ヘラミガキ調整である。

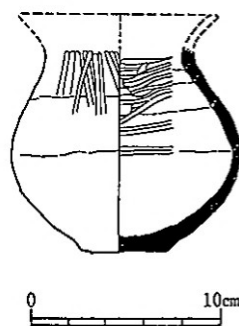
SD3027(第15図) I-13区で検出された。地山面から掘り込まれ、上部幅0.95m~1.1m、底部幅0.4m、深さ0.3m。

ほぼ南北に走り、南側をSD3028に、北側をSD3036に切れ、現存長は約3.4mを測る。

埋土は、地山(青灰色シルト)に暗灰色粘土が混合層、両肩部斜面は暗灰色粘土と青灰色シルトのブロック層、その上は暗灰色粘土層である。

出土遺物(第16図)

〔土器〕 小型壺形土器等が出土した。第I様式である。最大腹径12.0cm、底径4.4cmを測り、内外面はもろく剥離している。外面に煤が付着する。



第16図 SD3027出土遺物実測図

### 第3節 弥生時代中期

#### 1 ビット群

今回の調査区内では明確な竪穴住居や建物は検出されなかった。しかし、柱穴と推測されるビットは多数検出されている。これらのビットの掘り込み面は第Ⅴ層ないし青灰シルトの地山面上と考えられる。

ビットの検出範囲はSD3014、SD3031の東側及びNR3001に囲まれた北側に集中している。グリッド番号に置き換えればE-9~11区、F-10・11区、G-10・11区、H-3~6区、I-2~7区、J-2~7区、K-1~7区の各地区である。これらの地区以外ではビットは全く検出されなかった。また、SD3041、NR3001の検出された位置では、SD3041、NR3001によって多数のビットが消失していると考えられる。以下、各グリッド毎に記す。

E-9・10区、F-10・11区 SD3014より東側に集中する。ビットの規模は径が15~20cm、深さ20cm前後と、径30~50cm、深さ30~50cmとに大別でき、前者が最も多い。遺物は破片が多く、図示できなかった。

G-10・11区 SD3031の南東側に集中している。ビットの規模は径10~20cm、深さ20~30cmと、径25~30cm、深さ20~30cmとに大別でき、両者の検出数は変わらなかった。

H-3~6区、I-1・2・7・6区 NR3001とSD3041の間に細長く残存した地区で幸じ

てピットが集中していたのが判かる。規模は径20cm、深さ20cmを測るのが多かった。

J-2~7区、K-1~7区、I-4区 SD3041の北側、J・K-2~5区にピットが一番集中した地区である。ピットの規模は径15~20cm、径25~30cm、径35cm以上に大別でき、深さは10~50cmを測った。これらのピットの中で、J-3区P43、K-4区P6の各ピットから炭化材と柱痕が検出されている。また、J-4区P78から390片、I-2区S K3048南側ピットから485片のサヌカイトの小剥片が出土した。

出土遺物（第17図、18図、19図）

〔土器〕

E地区ピット（第17図）

E-13区 ピット2

甕形土器（1）等が出土した。第Ⅲ様式である。復元口径12.5cmを測り、丸く外反する口縁部をもつ。内面はナデ調整と思われる。生駒西麓型の胎土である。

E-17区 ピット3

壺形土器（2）等が出土した。第Ⅲ様式である。口縁部が欠損している。底部径10.2cm、最大腹径30.5cmを測り、丸い体部である。体部上半は直線文で飾り、内面上半部は指押え及び指ナデ調整で、下半部内外面は剝離して不明である。生駒西麓型の胎土である。

H地区ピット（第17図）

H-2区 ピット4

甕形土器（5）等が出土した。第Ⅲ様式である。復元口径42.6cmを測り、短く外反する口縁部で、端部は下に拡張する。端部外面に刺突文を施す。生駒西麓型の胎土である。

H-5区 ピット6

甕形土器（4）等が出土した。第Ⅲ様式新段階である。復元口径14.8cm、最大腹径19.4cmを測り、胴の張る体部に、「く」の字に外反し端部は上に突出する口縁部をもつ。外面上半部はハケメと思われ、内面は上半部がハケメ、下半部がヘラケズリ調整である。下半部外面に煤が付着する。

H-5区 ピット7

甕形土器（3）等が出土した。第Ⅲ様式新段階である。復元口径14.1cm、最大腹径16.2cmを測り、やや胴の張る体部に、「く」の字に外反し端部は上下にやや肥厚する口縁部をもつ。内外面ハケメ調整で、外面全体と内面下半部に煤が付着する。

I地区ピット（第17図）

I-4区 ピット11

鉢形土器（6）等が出土した。第Ⅲ様式である。復元口径49.6cmを測り、短く外反し、端部が下に拡張する口縁部をもつ。端部外面に簾状文を飾り、その上に刺突文を施す。体部外面も簾状文を施す。生駒西麓型の胎土である。

## J地区ピット（第17、18図、19図）

## J-3区 ピット12

甕形土器（7）等が出土した。第Ⅲ様式である。復元口径12.4cmを測り、水平気味に屈曲する口縁部をもつ。生駒西麓型の胎土である。

## J-3区 ピット13

甕形土器（8）等が出土した。時期は第Ⅲ様式である。復元口径15.4cmを測り、水平気味に外反する口縁部をもつ。内外面のヘラナデ調整である。外面全体と内面下半部に煤が付着する。生駒西麓型の胎土である。

## J-3区 ピット14

壺形（9）、甕形（10）、鉢形（11）、高杯形（12）土器等が出土した。第Ⅳ様式である。（9）は復元口径16.0cmを測り、胴の張る体部に短い筒状の頸部から短く外反し、端部は上につまみ上げる口縁部をもつ。端部外面に2条の凹線と刻目が施される。外面はハケメ調整で、胴部に列点文を施し、内部は頸部がハケメの他はナデ調整である。（10）は復元口径14.8cmを測り、丸く外反する口縁部をもつ。外面は剝離が著しく、調整は不明である。（11）は復元口径21.8cmを測り、下すばまりの体部に段状口縁部をもつ。内面はヨコナデ調整である。（12）は復元口径25.8cmを計り、外に開く体部から屈曲して直立する口縁部をもち、端部は内外にやや肥厚する。内外面は2次的に火を受け、調整は不明である。生駒西麓型の胎土である。

## J-3区 ピット15

高杯形土器（13）が出土した。時期は中期である。上半部中実の脚であり、内面はナデ調整、外面は剝離が著しく不明である。

## J-3区 ピット16

甕形土器（15・16）等が出土した。第Ⅲ様式である。（15）は復元口径12.4cmを測り、丸く外反する口縁部をもつ。生駒西麓型の胎土である。（16）は復元口径14.0cm、最大腹径18.4cmを測り、「く」の字に外反する口縁部をもつ。内面は体部上半がナデ、下半が指押え調整で煤が付着する。

## J-3区 ピット17

高杯形土器（14）等が出土した。時期は中期後半である。柱状の脚片であり、内面にしぼり目が見られる。

## J-4区 ピット19

甕形土器（17）等が出土した。第Ⅲ様式である。復元口径12.8cmを測り、丸く外反する口縁部をもつ。外面はハケメの上をヘラミガキ調整、内面は指ナデ調整である。外面一部に煤が付着する。生駒西麓型の胎土である。

## J-4区 ピット20

甕形土器（18・19・23）等が出土した。第Ⅲ様式である。（18）は復元口径17.2cmを測り、外



反する口縁部で、端部は下に粘土を巻き込み、上部に刻目を施す。内面は口縁部がヘラミガキ、体部がナデ調整である。内面に煤が付着する。生駒西麓型胎土である。(19)は復元口径13.6cm、最大腹径13.6cmを測り、あまり胴の張らない体部に丸く外反する口縁部をもつ。外面はヘラナデの上をヘラミガキ調整、外面は荒いハケメ調整である。(23)は底部片で底径8.2cmを測り、内面はハケナデ調整を施す。生駒西麓型の胎土である。

J-4区 ピット21

壺形(20)、甕形(21)、土器等が出土した。第Ⅲ様式である。(20)は復元口径18.2cmを測り、外反する口縁部をもつ。端部は下に拡張し、簾状文で飾る。生駒西麓型胎土である。(21)は復元口径20.8cmを測り、丸く外反する口縁部をもつ。内外面はハケメ調整である。

J-4区 ピット22

甕形土器(22)が出土した。第Ⅲ様式新段階—Ⅳ様式である。復元口径13cm、最大腹径15.4cmを測り、水平気味に屈曲する口縁部をもち、端部は上方につまむ。外面上半部はハケメ、下半部はヘラケズリ、内面上半部はハケメ、下半部は指ナデ調整である。内外面に煤が付着する。

J-4区 ピット23

甕形(24)、鉢形(25)土器等が出土した。第Ⅲ様式である。(24)は復元口径20.8cmを測り、水平気味に屈曲する口縁部をもつ。外面に煤が付着する。生駒西麓の胎土である。(25)は復元口径23.0cmを測り、直立する口縁部をもつ。口縁端部は内外にやや肥厚し、刻目を施す。内面はハケメ調整である。

J-4区 ピット24

甕形土器(27)等が出土した。第Ⅲ様式である。復元口径14.4cmを測り、水平に屈曲する口縁部をもつ。生駒西麓型の胎土である。

J-4区 ピット25

高杯形土器(26)等が出土した。時期は中期である。脚部片で、脚裾部径が13.3cmを測り、内面はしぼり目が見られる。裾端部内外面と脚部外面1部に煤が付着する。

K地区ピット(第19図)

K-3区 ピット27

甕形土器(28)等が出土した。第Ⅳ様式である。復元口径15.4cmを測り、「く」の字に外反する口縁部をもつ。端部は上方につまみ、凹線を施す。外面はタタキメの上をハケメ調整、内面はナデ調整である。

K-4区 ピット28

鉢形土器(31)等が出土した。第Ⅲ様式である。復元口径29.8cmを測り、内彎気味の口縁部をもち、端部は内外にやや肥厚する。

K-4区 ピット29

壺形土器(29)等が出土した。第Ⅲ様式古段階である。復元口径15.0cmを測り、外反する口縁

部をもち、端部は下に拡張し、刻目と簾状文で飾る。

#### K-5区 ピット30

甕形土器(30)等が出土した。時期は中期である。復元口径16.0cmを測り、水平気味に屈曲する口縁部をもつ。端部は上下にやや肥厚する。口縁部外面に煤が付着する。

#### 〔石器〕(第19図)

##### H地区ピット

#### H-3区 ピット5

石鏃(36)、長さ2.2cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm、重量1.0gの凹基無茎式の石鏃である。A面基部にわずかに自然礫面、B面基部に大剝離面を残し、周辺から剝離調整を施す。

スクレイパー(38)長さ7.5cm、幅3.4cm、厚さ1.9cm。両面とも剝離面からなる。一部に階段状剝離を混える。ほぼ中軸線上に最大厚をもち、両側辺に向って急に薄くなる。

#### H-5区 ピット8

石錐(39)長さ3.2cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm、錐長0.3cm、錐幅0.3×0.2cmを測る。楕円形の扁平な石錐である。両面とも中央に大剝離面を残し、周辺から剝離調整を施す。A面下端に自然礫面を残す。頭部下方に浅く抉りを加えて錐部をつくり出す。頭部先端も使用のためか白っぽく変色する。

#### H-5区 ピット9

石錐(35)縦長の頭部に先細りの長い錐部をもつ。長さ7.5cm、幅1.7cm、厚さ1.4cm、錐長1.8cm、錐幅0.7×0.5cm。大きめの剝離で頭部を調整し、小さな剝離を加えて錐部をつくり出す。頭部先端から中程にかけて両面に研磨痕を見る。

##### K地区ピット

#### K-4区 ピット31

石鏃(34)平基無茎式。長さ2.0cm、幅1.1cm、厚さ0.3cm、重量0.9gを測る。両面とも大剝離面の周辺を剝離調整する。先端は鋭い。

#### K-5区 ピット32

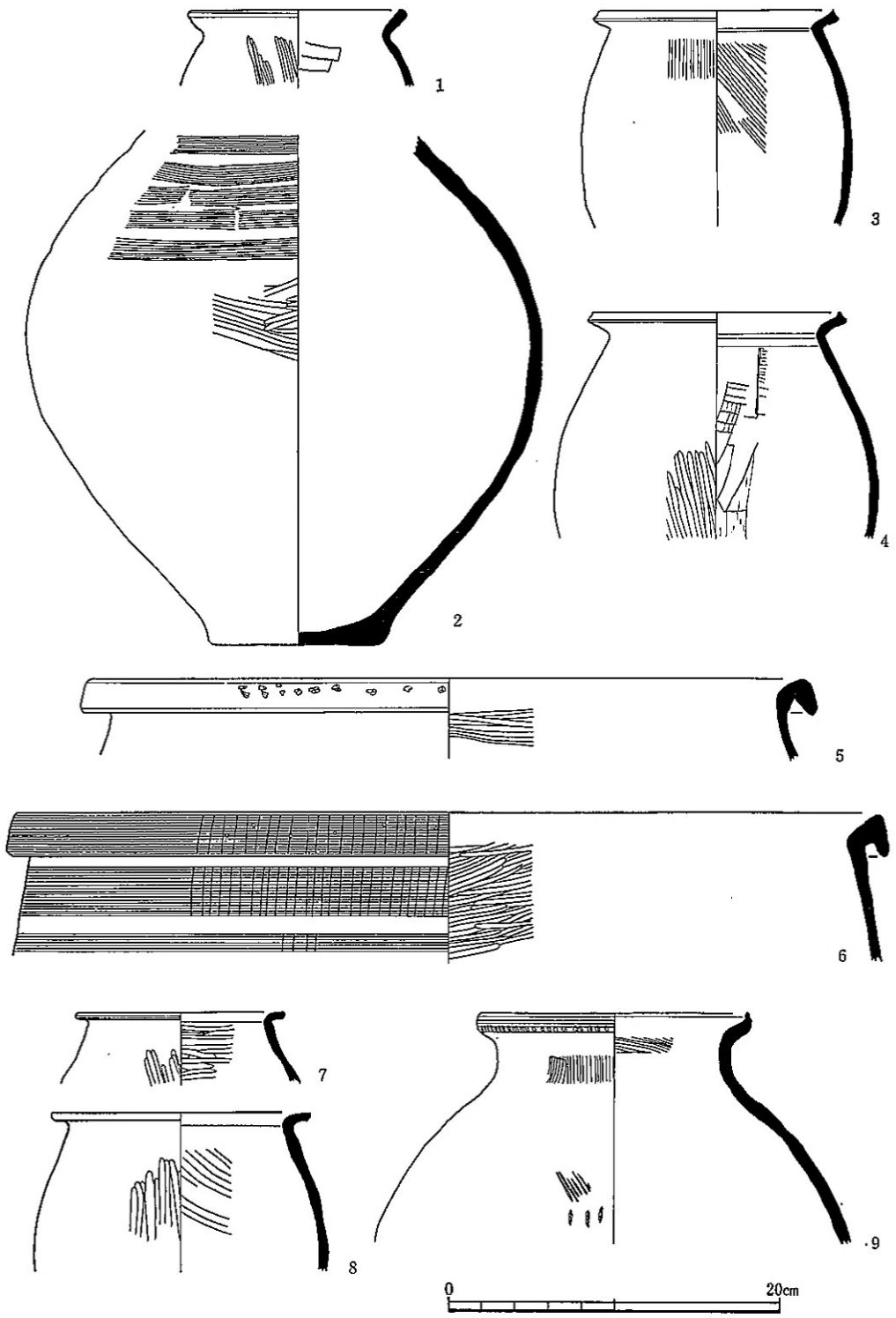
石鏃(41)基部欠損。現存長2.4cm、幅1.3cm、厚さ0.2cm、重量0.9gの扁平な石鏃である。先端は摩滅のため丸い。両面とも大剝離面の周辺に剝離調整を施す。

#### K-5区 ピット33

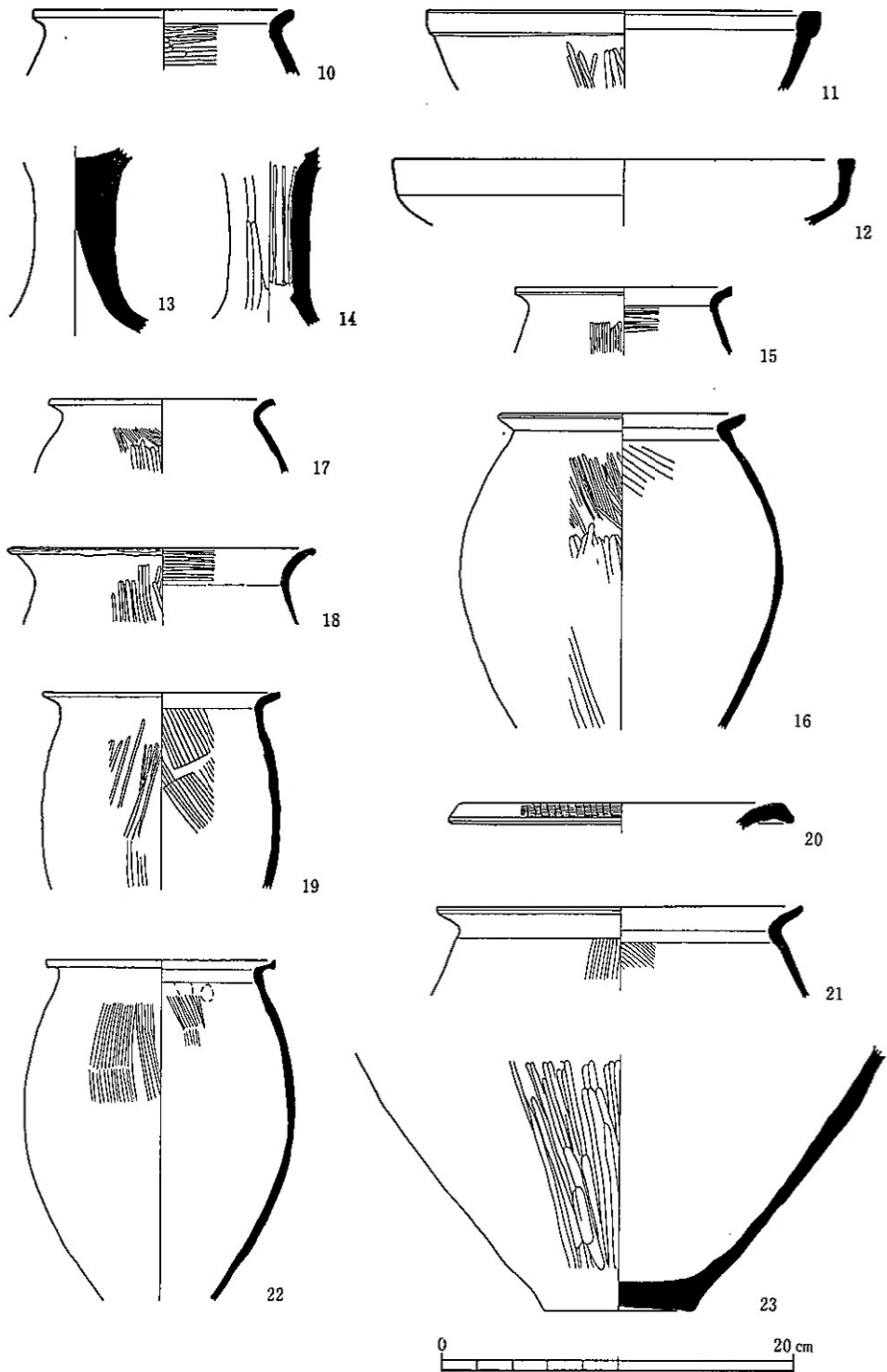
石鏃(37)尖基無茎式。長さ3.1cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm、重量1.8gを測る。A面下方に大剝離面と自然礫面、B面中央に大剝離面を留め、両側辺から剝離調整を施す。

#### K-5区 ピット34

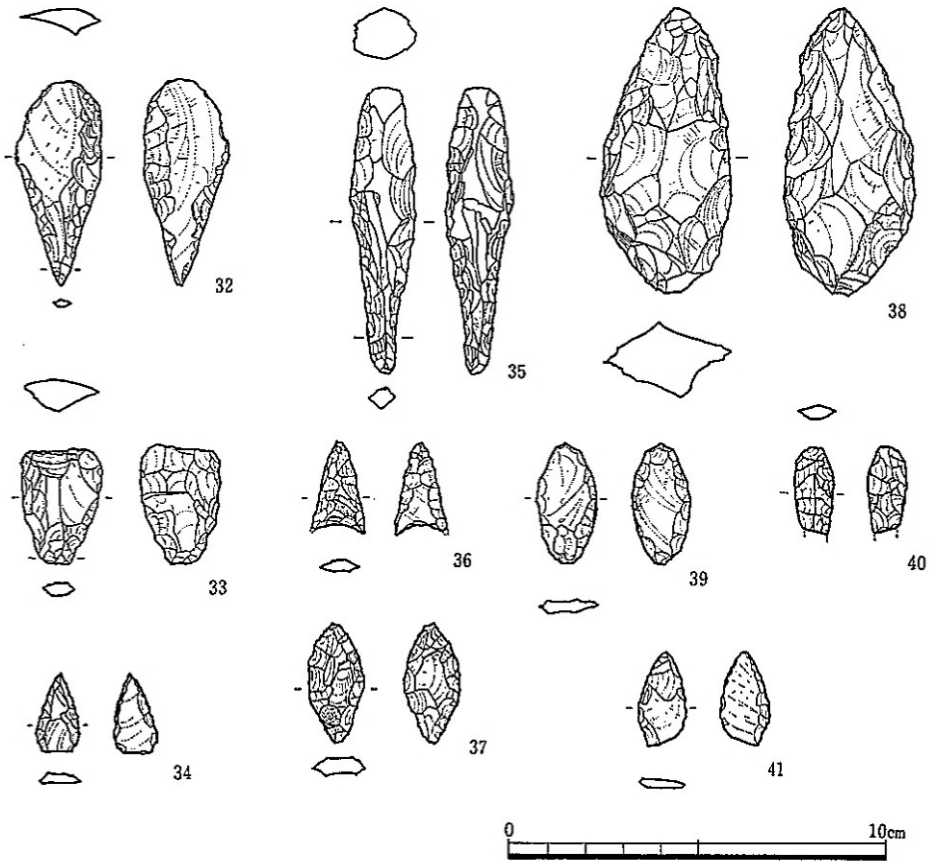
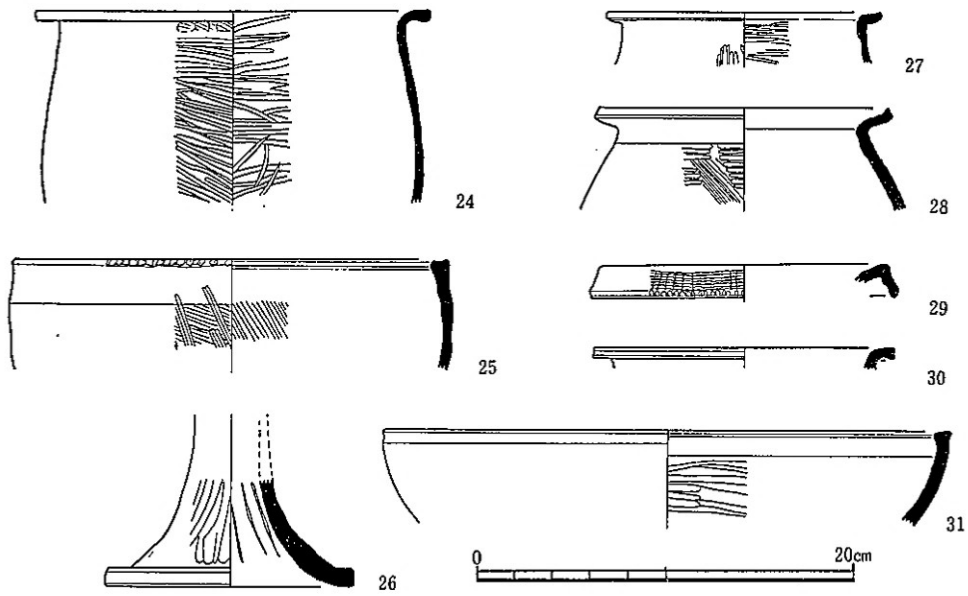
石錐(33)ずんぐりした不整四辺形を呈する。長さ3.1cm、幅2.1cm、厚さ0.9cm、錐長0.6cm、錐幅1.0×0.6cm。頭部上端に自然礫面、A面中央に大剝離面を残し、周辺から剝離調整を施す。



第17図 ピット出土遺物実測図



第18図 ピット出土遺物実測図



第19図 ピット出土遺物実測図

E地区ピット

E-9区 ピット1

石錐(32) 不整楕円形の頭部の先端がすぼまってそのまま錐部になる。長さ5.5cm、幅2.2cm、厚さ0.7cm、錐長1.1cm、錐幅0.7×0.5cm。両面とも大剝離面の周辺に剝離を加えて調整する。

J地区ピット

J-4区 ピット26

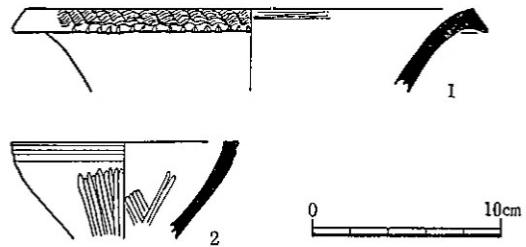
石錐(40) 頭部のみ残存。頭部と錐部の区別が明瞭でないタイプの石錐である。現存長2.3cm、幅1.0cm、厚さ0.4cm。両面とも両側辺から剝離調整を施す。

2 土坑

SK3001(第289図) H-2地区で検出された。NR3001によって北側を削られている。平面形は、現存部で円形を呈する。径0.9m、深さ0.3mを測る。埋土は、暗褐色粘質シルトの一層である。

出土遺物(第20図)

〔土器〕 壺形(1)、鉢形(2)土器等が出土した。(1)が第Ⅲ様式新段階~Ⅳ様式で、(2)が第Ⅲ様式古段階である。(1)は復元口径25.0cmを測り、口縁部に波状文と刻目を施す。内外面ナデ調整である。生駒西麓型胎土である。(2)は復元口径11.9cmを測り、口縁部は面を成し、外面に凹線文を施す。



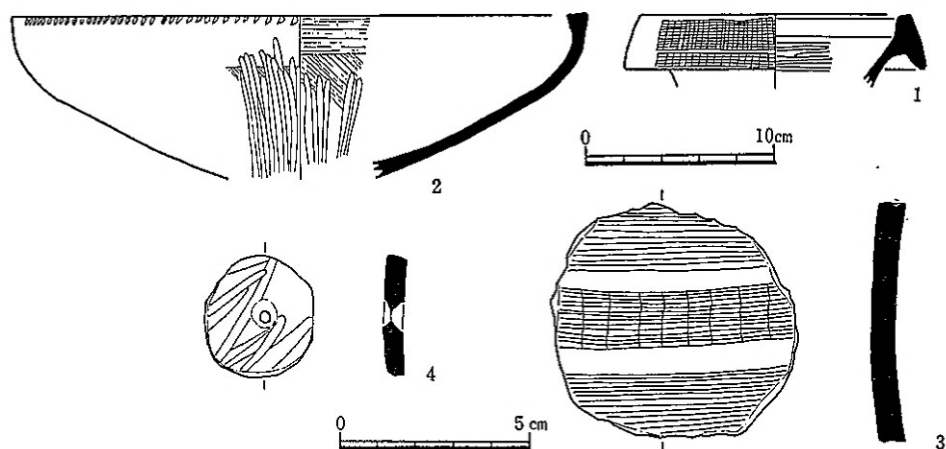
第20図 SK3001出土遺物実測図

SK3002(第105図) I-1区で検出された。SD3004と重複する。SD3004よりも新しい。平面形は円形を呈する。径1.0cm、深さ0.7mを測る。断面形は、底面から0.2mで、幅0.2mのテラスを有する2段掘りの形態を呈する。埋土は、暗灰色粘質シルトと焼土・灰・炭化物の薄層が互層をなす。

出土遺物(第21図)

〔土器・土製品〕 壺形(1)、高杯形(2)土器、土製円板(3)、土製紡錘車(4)等が出土した。土器は第Ⅲ様式である。

(1)は復元口径14.2cmを測り、外反する口縁部をもち、端部は上下に拡張する。籐状文を飾る。生駒西麓型胎土である。(2)は復元口径30.2cmを測り、外に開く体部から直立する口縁部をもつ。端部は内外に肥厚する。口縁端部に刻目を施す。(3)は径6.3cmを測り、直線文と籐状文を飾る土器を利用し、周縁を打ち欠いている。生駒西麓型胎土である。重量は40.5gである。(4)は径3.2cmを測り、土器片を利用し、穿孔は両面から施す。周縁は打ち欠き磨いてい

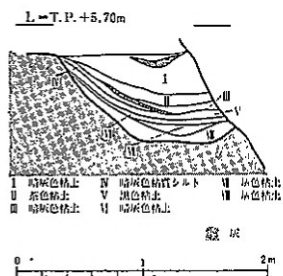


第21図 SK3002出土遺物実測図

る。重量は7gである。

SK3005 (第289図) H-5区で検出された。SE3002の西側に位置する。平面形は円形を呈する。径1.0m、深さ0.05mを測る。埋土は暗灰色シルトの1層である。

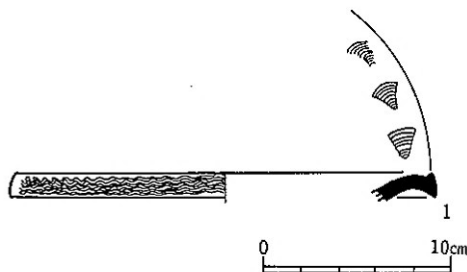
出土遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。



第22図 SK3007土層断面図(1/50)

SK3007 (第22図) G・H-5区で検出された。NR3001、SX3002と重複する。南側をNR3001によって、北側をSX3002によって削平されている。平面形は楕円形を呈する。長径1.5m、短径1.0m、深さ0.6mを測る。埋土は、灰色粘土と灰で8層に分けられる。I層、III層中には、厚さ5cmの灰層が挟在している。VIII層には、地山の青灰色シルトがブロック状に混入している。主軸方向は、N-1°-Wである。

出土遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。



第23図 SK3008出土遺物実測図

SK3008 (第289図) H-5区で検出された。周辺のピット群と重複する。平面形は、隅丸長方形を呈する。長辺1.16m、短辺0.35m、深さ0.3mを測る。主軸方向は、N-2°-Wである。

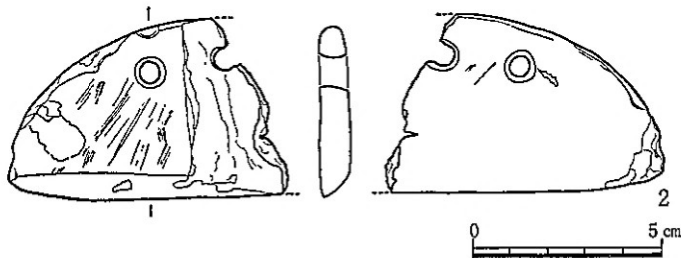
出土遺物 (第23、24図)

〔土器〕 壺形土器 (1) 等が出土した。第Ⅲ様式古段階である。

復元口径21.8cmを測り、口縁端部はやや上下に拡張する。口縁端部に波状文、内面に扇形文を施す。

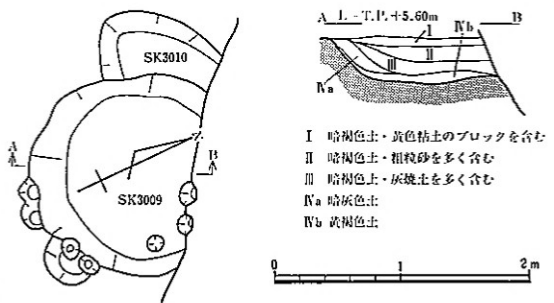
〔石器〕 (第2図) 石庖丁1点が出土している。

直線の片刃で背部は彎曲する直線刃半月形である。刃先は磨滅し、背部は研磨されている。現存長7.4cm、幅4.7cm、厚さ0.85cmを測る。



第24図 SK3008出土遺物実測図

SK3009 (第25図) H-5区で検出された。SK3010、SD3041と重複する。北側はSD3041によって削られている。SK3010との新旧関係は明らかにできなかった。平面形は円形を呈する。径1.5m、深さ0.4mを測る。埋土は、上位よりⅠ層—粗粒砂と地山の青灰色シルトのブロックが混入する層、Ⅱ層—暗灰色シルト層、Ⅲ層—褐色土層の3層に大別できる。Ⅱ層には、厚さ10cmの焼土、灰、炭化物層が挟在している。

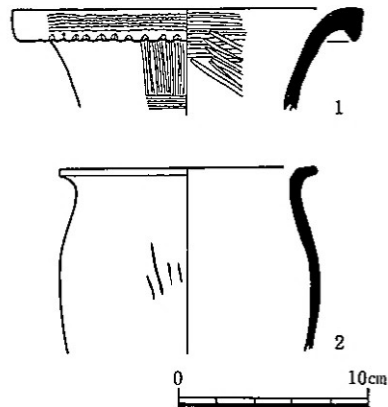


第25図 SK3009遺構平面図 (3/6)

出土遺物 (第26、27図)

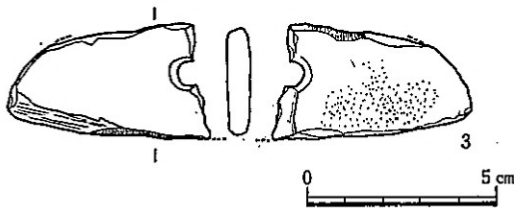
〔土器〕 (1・2) 壺形 (1)、甕形 (2) 土器等が出土した。土器様式は第Ⅲ様式古段階である。

(1) は復元口径18.5cmを測り、口縁端部は下方に拡張し、刻目を施す。端部に6条の波状文、頸部に直線文を施す。(2) は復元口径13.6cm、最大腹径13.7cmを測り、丸く短かく水平気味に外反する口縁部をもつ。内外面はナデ調整である。生駒西麓型胎土である。

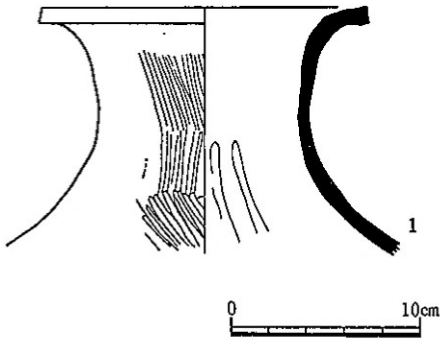


第26図 SK3009出土遺物実測図

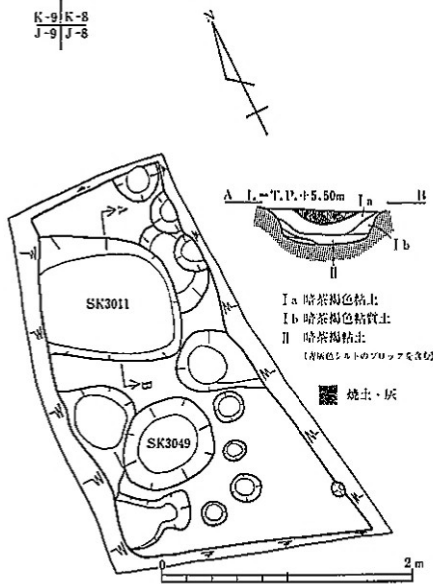




第27図 SK 3009出土遺物実測図



第28図 SK 3010出土遺物実測図



第29図 J-8区IX d層出土遺構平面図  
—SK 3011・SK 3049— (1/20)

る口縁部をもち、端部は上下に拡張する。端部外面は、12条の列点文と11条の簾状文で飾る。生駒西麓の胎土である。(2)は復元口径12.4cmを測り、直口する口頸部をもち、外面に6条の凹線を施す。内面はハケメ調整の後、ナデ調整を施す。(3)は復元底径4.8cmを測り、外面ナデ、

る。外面に煤が付着する。

〔石器〕 石庖丁(3)1点が出土している。刃部は、わずかに外彎し背部は彎曲する。刃潰れ、背潰れがみられる。B面には敲打痕が認められる。現存長5.2cm、幅3.1cm、厚さ0.6cmを測る。

SK 3010 (第25図) H-5区で検出された。SK 3009、SD 3041と重複する。北側をSD 3041によって削られている。平面形は楕円形を呈する。長軸0.95m、短軸0.6m、深さ0.4mを測る。主軸方向はN-43°-Eである。

#### 出土遺物(第28図)

〔土器〕 壺形土器等が出土した。第Ⅲ-Ⅳ様式である。復元口径17.0cmを測り、肩部との境が明確でない短い筒状の頸部に外反する口縁部をもち、端部は上下にやや肥厚する。頸部外面はハケメ調整、内面ナデ調整である。

SK 3011 (第29図) J-7区で検出された。西側はNR 3001によって削平されている。平面形は、隅丸長方形を呈する。長軸1.1m、短軸0.9m、深さ0.3mを測る。埋土は暗茶褐色粘土層である。第I a層上面には、厚さ10cmでレンズ状に灰が堆積している。主軸方向は、N-56°-Wである。

#### 出土遺物(第30図)

〔土器〕 壺形(1)、細頸壺形(2)、甕形(3)土器等が出土した。第Ⅲ様式新段階-Ⅳ様式である。

(1)は復元口径18.4cmを測り、外反す

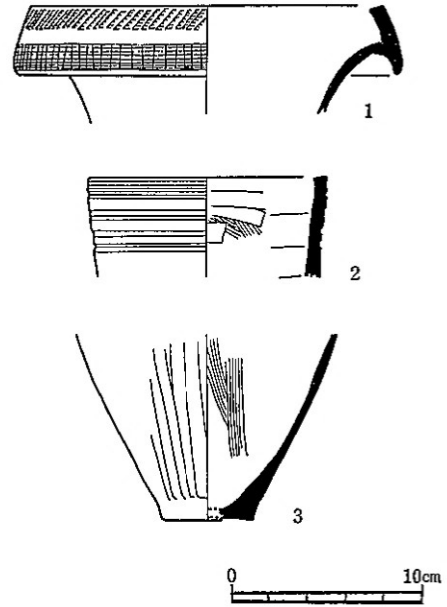
内面ハケメ調整を施す。2次的に火を受けている。

S K 3012 (第 289 図) J—2 区で検出された。S E 3003 の東側に位置する。南側は S D 3041 によって失なわれている。平面形は長楕円形を呈する。長径 1.7m、短径 0.9m、深さ 0.4m を測る。主軸方向は、N—82°—E である。

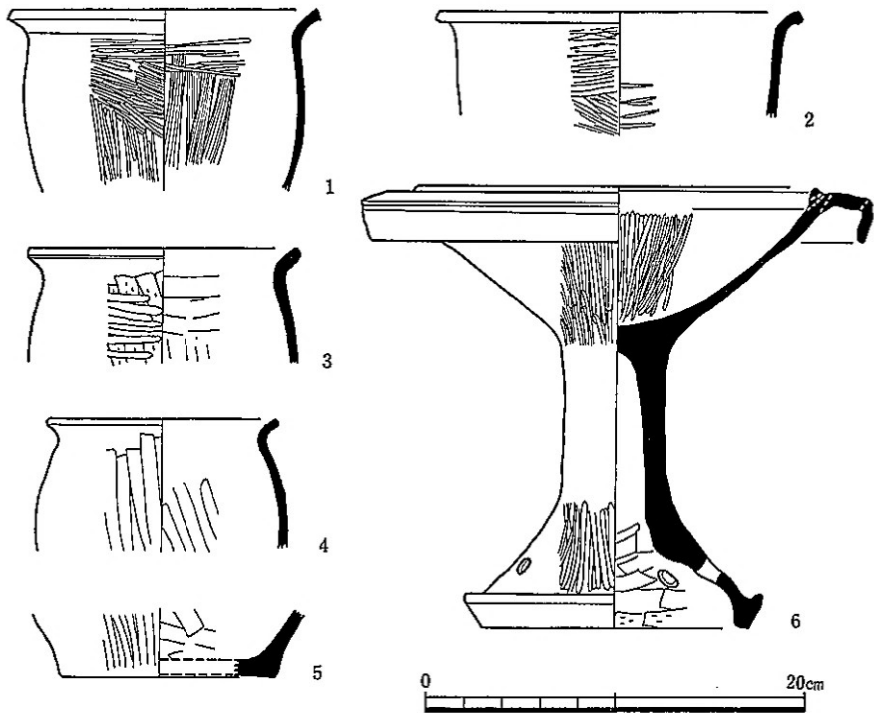
出土遺物 (第 31 図)

〔土器〕 甕形 (1・2・3・4・5)、高杯形 (6) 土器等が出土する。第Ⅲ様式である。

甕形土器 (1) は復元口径 16cm を測り、あまり胴の張らない、体部に外反する口縁部をもつ。内面はナデ調整の上を一部ヘラミガキ調整を施す。外面に煤が付着する。(2) は復元口径 19.0cm を測り、胴の張らない体部となだらかに外反する口縁部をもつ。生駒西麓型胎土である。(3) は復元口径 14.0cm を測り、丸く外反する口縁部をもつ。外面は削りの上をナデ、内



第 30 図 S K 3011 出土遺物実測図



第 31 図 S K 3012 出土遺物実測図

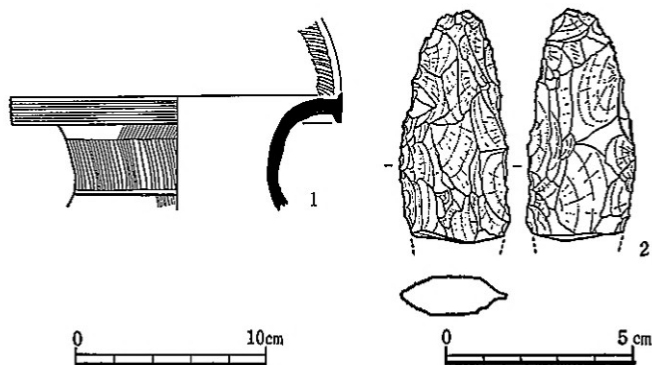
面はヘラナデ調整である。(4)は復元口径12.0cm、最大腹径13.3cmを測り、丸く外反する口縁部をもつ。内外面ヘラナデ調整である。外面の一部に煤が付着する。(5)は復元底径11.4cmを測り、内面はヘラナデ調整。

高杯形土器(6)は口径21.2cm、器高23.2cmを測り、水平口縁部をもち、透し穴は5個である。裾部内面はヘラケズリ調整である。外面はやや荒れている。

S K 3013 (第 289 図) K-2 区で検出された。S E 3005 と重複する。北側は S E 3005 によって削平されている。東側には S K 3014 が位置している。平面形は方形を呈する。1 辺 0.9m、深さ 0.2m を測る。

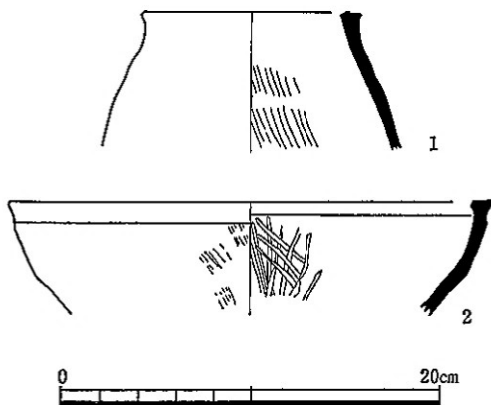
出土遺物 (第 32 図)

〔土器〕 壺形土器 (1) 等が出土した。第 IV 様式である。復元口径 17.4cm を測り、短い筒状の頸部に外反する口縁部をもち、端部は上下に拡張する。端部外面には凹線 4 条を施す。頸部外面と口縁部内面に、簾状文ではなく、木片原体によると考えられる施文を施す。外面はハケメ、内面はナデ調整である。



第 32 図 S K 3013 出土遺物実測図

〔石器〕 石槍 (2) が 1 点出土した。現存長 6.2cm、幅 2.8cm、厚さ 1.0cm を測る。下半部欠損。両面とも粗い剝離によって整形した後、部分的に両側辺にトリミングを加える。



第 33 図 S K 3014 出土遺物実測図

S K 3014 (第 289 図) K-2 区において検出された。S K 3012 の北側に位置する。平面形は円形を呈する。径 0.5m、深さ 0.2m を測る。

出土遺物 (第 33 図)

〔土器〕 無頸壺形 (1)、鉢形 (2) 土器等が出土した。各土器の様式は第 III-IV 様式である。

(1) は復元口径 11.6cm を測り、端部は面を成し、内外にやや肥厚する。外面はナデ調整、内面は荒いハケメ調

整である。生駒西麓型胎土である。(2)は復元口径25.2cmを測り、端部は面を成し、内外にやや肥厚する。外面はハケメの上をナデ調整。

**SK3015** (第289図) J-3区で検出された。SE3009周辺のピットと重複する。西側はSE3009によって失なわれている。平面形は隅丸長方形を呈する。長軸1.7m、短軸1.1m、深さ0.4mを測る。埋土は黒灰色粘土層である。主軸方向は、N-26°-Eである。

出土遺物(第34図)

〔土器〕 壺形(1)、甕形(2)、鉢形(3)土器が出土した。Ⅳ様式である。

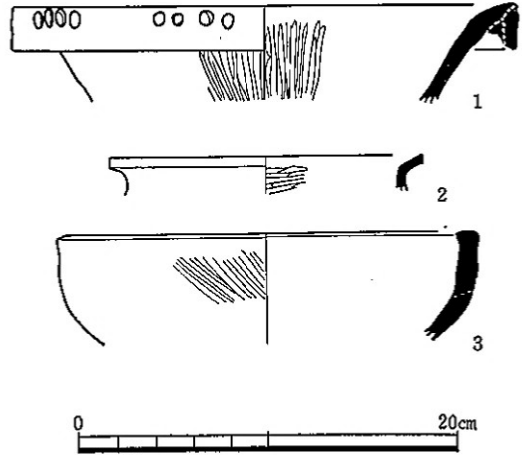
(1)は復元口径26.4cmを測り、外反する口縁部をもち、端部は下方に拡張する。その拡張のために粘土を2回付加する。口縁端部に4個1対の円形浮文を施す。生駒西麓型の胎土である。

(2)は復元口径16.6cmを測り、なだらかに外反する口縁部をもつ。(3)は復元口径21.0cmを測り、直口する口縁部をもつ。外面はハケメの上にヨコナデ調整を施す。

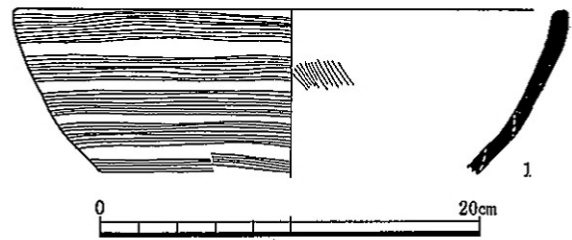
**SK3016** (第289図) J-4区で検出された。SE3009と重複する。東側はSE3009によって失なわれている。平面形は円形を呈する。径1.0m、深さ0.35mを測る。埋土は、黒灰色粘土層と灰層が互層状に堆積している。

出土遺物(第35図)

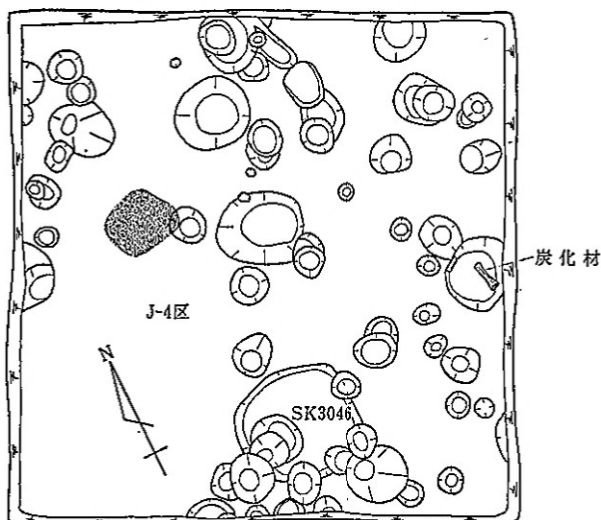
〔土器〕 鉢形土器(1)等が出土した。第Ⅲ様式古段階である。復元口径28.8cmを測り、碗状を呈す。体部外面を直線文で飾り、内面はハケメの上にナデ調整を施す。



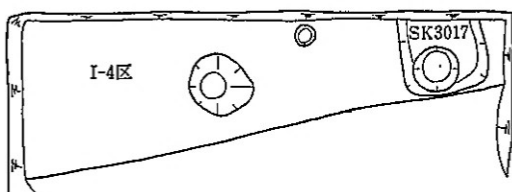
第34図 SK3015出土遺物実測図



第35図 SK3016出土遺物実測図



0 1 2m 焼土



第36図 I・J-4区IX d層出土遺構平面図  
—SK3017・SK3046—(1/40)



第37図 SK3017出土遺物実測図

SK3017 (第36図) I-4区で検出された。SD3041周辺のピット群と重複する。南側はSD3041によって削られている。平面形は長方形を呈する。長辺0.8m、短辺0.6m、深さ0.1mを測る。主軸方向は、N-13.5°-Eである。

出土遺物 (第37図)

〔土器〕 壺形土器(1)が出土した。時期は中期である。復元口径12.8cmを測り、外反する口縁部をもつ。頸部外面はハケメ調整である。生駒西麓型の胎土である。

SK3018 (第289図) J-4区で検出された。周辺のピット群と重複する。平面形は楕円形を呈する。長径1.8m、短径1.2m、深さ0.16mを測る。埋土は、灰色粘土と炭が互層に堆積している。主軸方向は、N-62°-Eである。

出土遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

SK3019 (第289図) E-8区、地山面で検出された。周辺のピット群と重複する。平面形は楕円形を呈する。長径1.20m、短径0.80m、深さ0.1mを測る。埋土中には炭化物が多く含まれる。主軸方向は、N-43°-Eである。

出土遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

S K 3020 (第 289 図) E-8、9 区、地山面で検出された。平面形は円形を呈する。径1.45 m、深さ0.26mを測る。埋土中には炭化物が多く含まれる。

出土遺物 (第38図)

〔土器〕 甕形土器 (1) 等が出土した。第Ⅲ様式である。復元口径16.5mを測り、丸く外反する口縁部をもつ。

S K 3021 (第 289 図) E-9 区、地山面で検出された。平面形は楕円形を呈する。長径1.10 m、短径0.51m、深さ0.26mを測る。埋土は、黒褐色粘土の1層である。主軸方向は、N-5°-Eである。

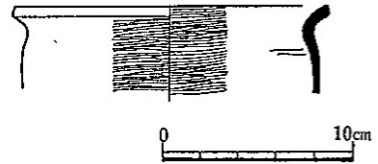
出土遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

S K 3022 (第 289 図) E-9 区、地山面で検出された。平面形は楕円形を呈する。長軸1.26 m、短軸0.94m、深さ0.24mを測る。埋土は暗灰色粘土である。底面にはほぼ密着して壺形土器 (第39図-1) が出土している。主軸方向は、N-20°-Wである。

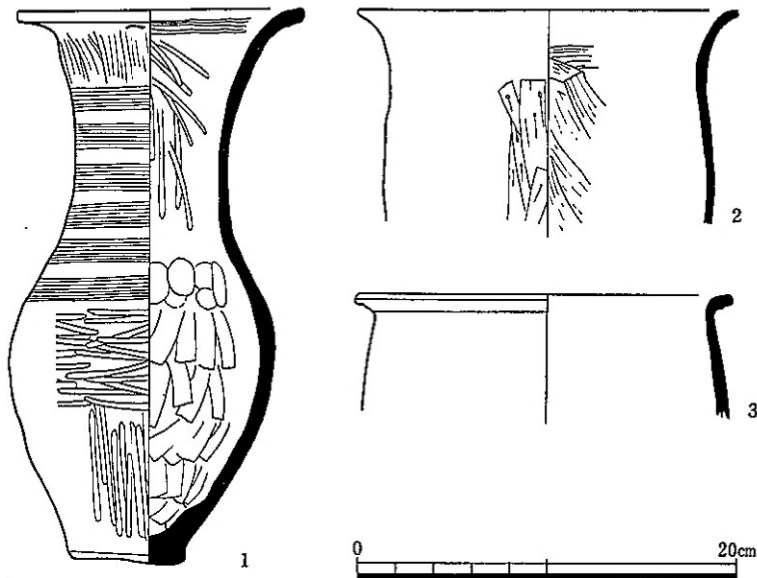
出土遺物 (第39図)

〔土器〕 壺形 (1)、甕形 (2、3) 土器等を出土した。第Ⅱ-Ⅲ様式古段階である。

(1) は復元口径14.9cm、器高29.5cm、最大腹径14.1cmを測る。胴のあまり張らない体部に筒状の頸部から外反する口縁部をもち、端部は丸い。頸部外面はハケメの上に直線文を施す。直線文は一気に施すものと2回に分けるもの



第38図 S K 3020出土遺物実測図

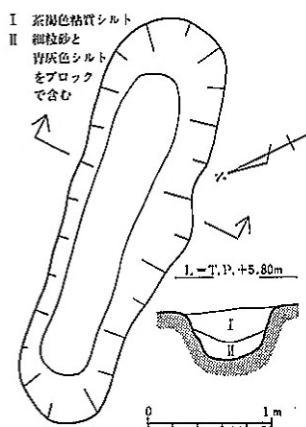


第39図 S K 3022出土遺物実測図

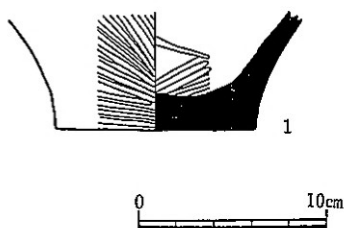
がある。口縁部内面は荒いハケメ調整、体部内面はヘラケズリで、一部ナデ調整である。口縁部外面には粘土を「へ」の字に貼りつけている。生駒西麓の胎土である。(2)は復元口径20cmを測り、なだらかに丸く外反する口縁部をもつ。外面はヘラケズリ調整、内面はハケメ調整を施す。(3)は復元口径19.0cmを測り、短く外反する口縁部をもつ。調整は剝離が著しく不明である。生駒西麓型の胎土である。

**SK3023** (第289図) E-11区、地山面で検出された。平面形は円形を呈する。径0.88m、深さ0.55mを測る。壁は2段で立ち上がる。

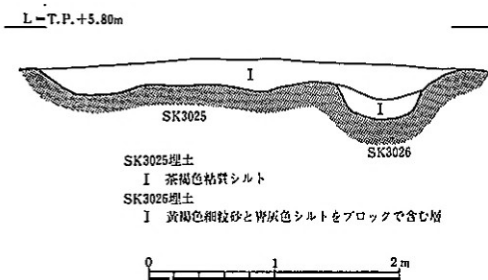
出土遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。



第40図 SK3024遺構平面図及び土層断面図(1/60)



第41図 SK3024出土遺物実測図



第42図 SK3025・SK3026土層断面図(1/60)

**SK3024** (第40図) E-13・14区、地山面で検出された。平面形は長楕円形を呈する。長径3.3m、短径1.1m、深さ0.4mを測る。埋土は、I層—茶褐色粘質シルト層、II層—茶褐色粘質シルト・細粒砂・地山の青灰色シルトのブロック状混合層の2層である。主軸方向は、N-41°-Wである。

出土遺物 (第41図)

〔土器〕 壺形土器(1)の底部が出土した。時期は中期である。底径10.6cmを測る。生駒西麓型の胎土である。

**SK3025** (第42図) F-14区、地山面で検出された。SK3026、SD3033と重複する。北側はSD3033によって削平されている。SK3026よりも新しい。平面形は楕円形を呈する。長径3.7m、短径2.8m、深さ0.2mを測る。埋土は茶褐色粘質シルトの1層である。主軸方向は、N-26°-Eである。

出土遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

**SK3026** (第42図) SK3025の底面で検出された。平面形は楕円形を呈する。長径1.20m、短径1.1m、深さ0.28mを測る。埋土は、黄褐色細粒砂と地山の青灰色シルトとのブロック状混合層である。主軸方向は、N-26°-Eである。

出土遺物（第43図）

〔土器〕 壺形土器（1）の底部と思われる。時期は中期である。底径 8.2cmを測り、調整は内面ナデ調整で、外面は不明である。

SK3027（第288図） E-17・18区、地山面で検出された。平面形は不整形を呈する。長軸 1.95m、短軸 1.2m、深さ 0.1mを測る。埋土は暗褐色粘土質シルトの1層である。主軸方向は、N-62°-Eである。

出土遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

SK3028（第137・288図） E-19地区で検出された。SD3020と重複する。平面形は不整形を呈する。長軸 3 m、短軸 2 m、深さ0.25mを測る。埋土は黒灰色粘土の1層である。主軸方向は、N-62°-Eである。

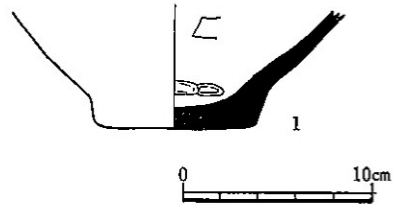
出土遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

SK3029（第288図） G-18区で検出された。南側はSD3033によって削平されている。平面形は隅丸長方形を呈する。長軸 1.6m、短軸1.2m、深さ0.2mを測る。埋土は黒灰色粘土の1層である。主軸方向は、N-23°-Wである。

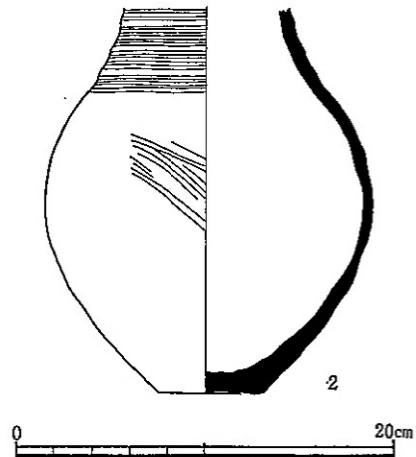
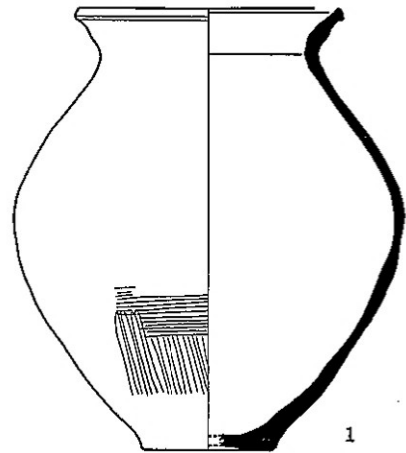
出土遺物（第44図）

〔土器〕 壺形土器（1・2）等が出土した。第Ⅲ様式である。

（1）は復元口径13.6cm、器高23.3cm、最大腹径20.6cmを測り、胴の張る体部に短く外反する口頸部をもつ。表面剝離が著しく、内外面調整不明だが、外面はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整が一部残存する。外面下半部に煤が付着する。（2）は底径 5.4cm、復元最大腹径17.2cmを測り、丸みのある胴長の体部で口縁部は欠損する。頸部から肩部外面は7条の直線文で飾り、体部上半部外面はヘラミガキ、内面はナデ



第43図 SK3026出土遺物実測図

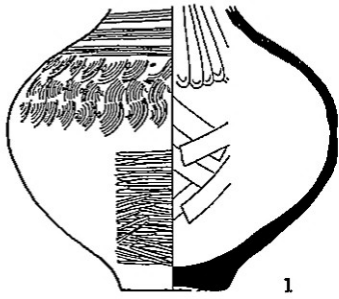


第44図 SK3029出土遺物実測図



調整である。体部下半部外面は表面が剝離し、調整不明である。胴部外面に一部煤が付着する。

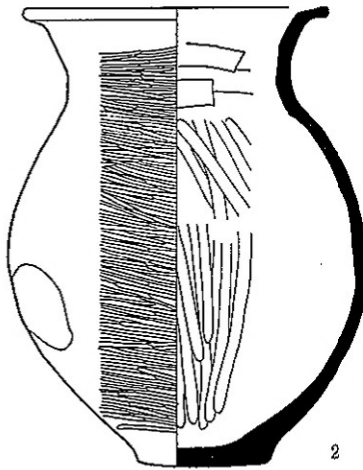
**SK3030** (第288図) G・H-18区で検出された。北側はSD3036によって削られている。平面形は楕円形を呈する。長径4m、短径3.5m、深さ0.2mを測る。主軸方向は、N-50°-Eである。



出土遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

**SK3031** (第139図) H-17区、地山面で検出された。東側をSD3021によって削平されている。平面形は円形を呈する。径1.1m、深さ0.23mを測る。埋土は暗灰色粘土の1層である。

出土遺物 実測可能な土器は出土しなかった。

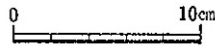


**SK3032** (第139図) H-17区、地山面で検出された。SD3021、3022と重複する。SD3022よりも新しい。東側はSD3021によって削平されている。平面形は楕円形を呈する。長径1.75m、短径1.15m、深さ0.45mを測る。埋土は暗灰色粘土の1層である。底面から約10cm浮いて、細頸壺形土器(第45図-1)、壺形土器(第45図-2)が出土している。主軸方向は、N-13°-Wである。

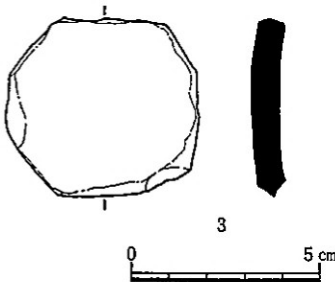
出土遺物 (第45・46図)

〔土器・土製品〕 細頸壺形(1)、壺形(2)土器等が出土した。第Ⅲ様式古段階である。

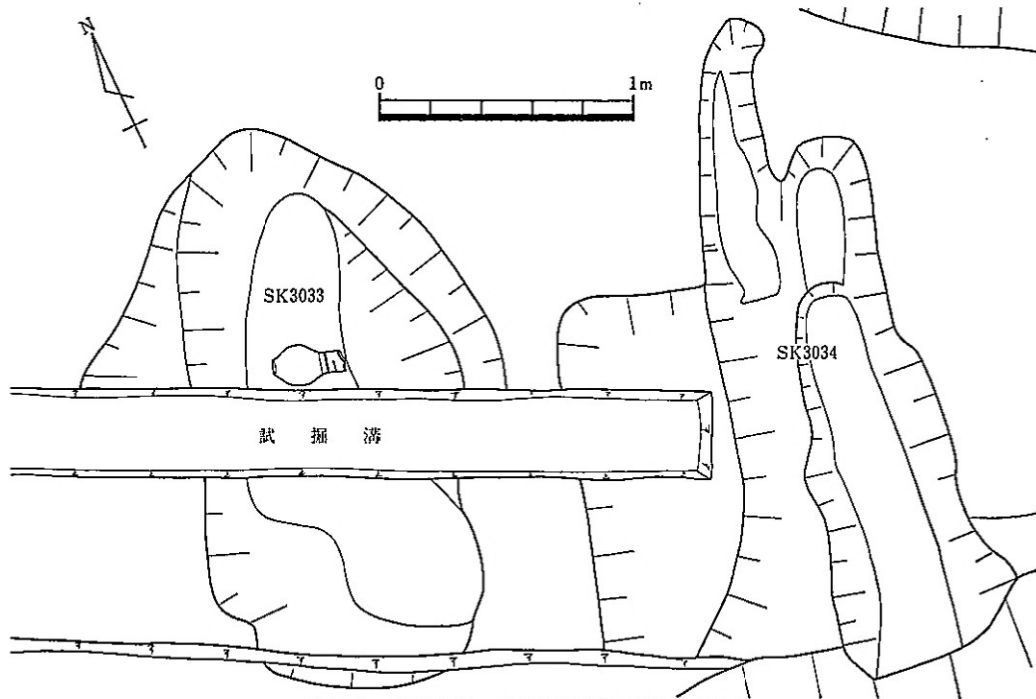
(1)は底径5.6cm、最大腹径17.4cmを測る。算盤玉状の体部をもち、肩部から腹部へ直線文と扇形文を3段に向きを変えて飾る。頸部内面は指ナデ、体部内面はヘラナデ調整である。(2)は口径15.9cm、現高24cm、最大腹径18.8cmを測り、やや胴の張る体部に、短い筒状の頸部に外反する口縁部をもつ。内面はナデ調整である。土製円盤(3)は土器片を利用して周縁を打ち欠き、ほぼ円形に整形したもので、径4.7×5.1cm、厚さ0.7cm、重量は28.7gである。



第45図 SK3032出土遺物実測図



第46図 SK3032出土遺物実測図



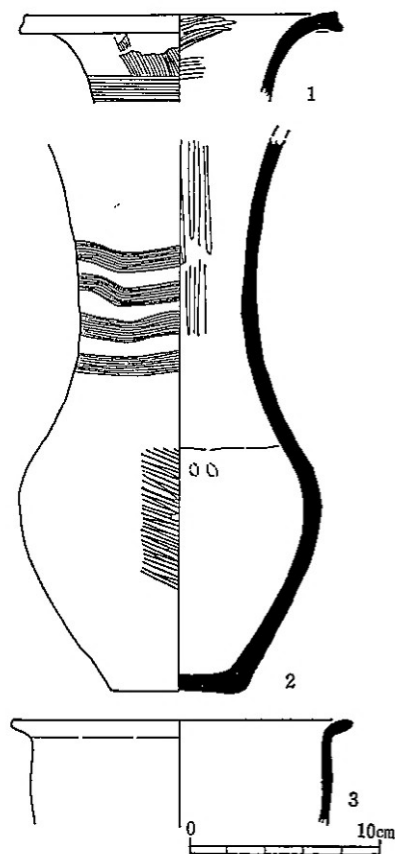
第47図 SK3033・SK3034遺構平面図(1/50)

**SK3033** (第47図) H-14区、地山面で検出された。平面形は不整形を呈する。長軸2.39m、短軸1.3m、深さ0.17mを測る。埋土は暗赤褐色粘土の一層である。底面にはほぼ密着して、ほぼ完形の壺形土器(第48図)が1点出土している。主軸方向は、N-3°-Eである。

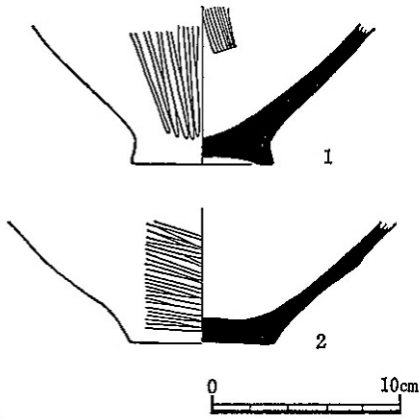
## 出土遺物(第48図)

〔土器〕 壺形(1・2)、甕形(3)土器等が出土した。第Ⅱ様式である。

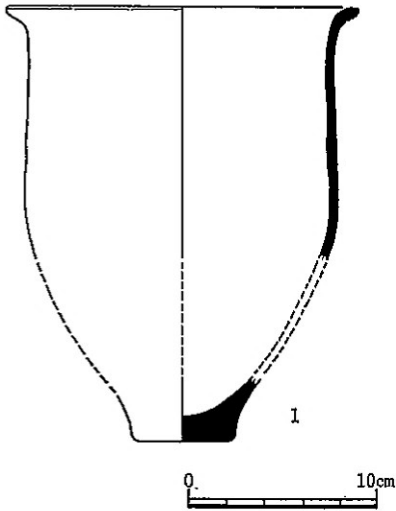
(1)は復元口径16.4cmを測り、外反する口縁部をもち、端部は粘土を付加し、下方へやや拡張する。外面はハケメ調整の上に直線文を飾る。生駒西麓型の胎土である。(2)は底径7.1cm、最大腹径16.0cmを測り、頸部外面を6条の直線文で飾る。(3)は復元口径17.8cmを測り、胴の張らない体部に丸く外反する口縁部をもつ。全体に剥離が激しく、調整は不明である。



第48図 SK3033出土遺物実測図



第49図 SK3034出土遺物実測図



第50図 SK3036出土遺物実測図

出土遺物 (第50図)

〔土器〕 甕形土器 (1) が出土した。第Ⅱ様式である。復元口径18.5cm、最大腹径16.4cmを測り、胴の張らない体部になだらかに外反する口縁部をもつ。2次的に火を受け、器壁が剝離し、調整等不明である。

SK3037 (第51図) H-11区、地山面で検出された。周辺のピット群と重複する。平面形は隅丸長方形を呈する。長軸 1.5m、短軸0.65m、深さ0.52mを測る。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は、Ⅰ層—暗灰色粘土、Ⅱ層—地山の青灰色シルトがブロック状に含まれる層の2層に分けられる。Ⅱ層上面には、厚さ2cmの炭、灰層が挟在している。この層をべ

SK3034 (第47図) H-4区、地山面で検出された。南側はSD3033によって削平されている。平面形は不整形を呈する。長軸2.56m、短軸1.46m、深さ0.15mを測る。埋土は茶褐色粘土の1層である。主軸方向はN-10°-Eである。

出土遺物 (第49図)

〔土器〕 (1・2)とも壺形土器の底部と思われる。時期は中期である。

(1)は底径7.4cmを測り、内面はハケメ調整である。内外とも2次的に火を受けている。(2)は底径7.4cmを測り、内面は剝離が著しく、調整不明である。2次的に火を受けている。

SK3035 (第288図) H-14区、地山面で検出された。東側をSD3028によって削平されている。更に南側の底面は、径0.5mのピットと重複している。新旧関係は明らかにできなかった。平面形は楕円形を呈する。長径2.5m、短径1.3m、深さ0.6mを測る。埋土は暗茶褐色粘土の1層である。主軸方向は、N-40°-Eである。

出土遺物 実測可能な土器は出土しなかった。

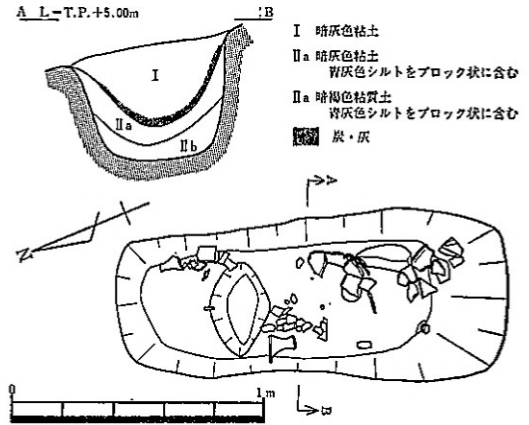
SK3036 (第168図) I-12区、SD3031の底面で検出された。平面形は隅丸長方形を呈する。長辺2.14m、短辺0.9m、深さ0.38mを測る。埋土は、Ⅰ層—暗灰色粘土、Ⅱ層—黒色粘土の2層に分けられる。厚さ0.3cmの植物遺体の層が挟在している。主軸方向は、N-85°-Wである。

ースに、2次的に火を受けた土器が多数出土している。しかし、底面、壁には火を受けた痕跡は認められなかった。主軸方向は、N-22°-Wである。

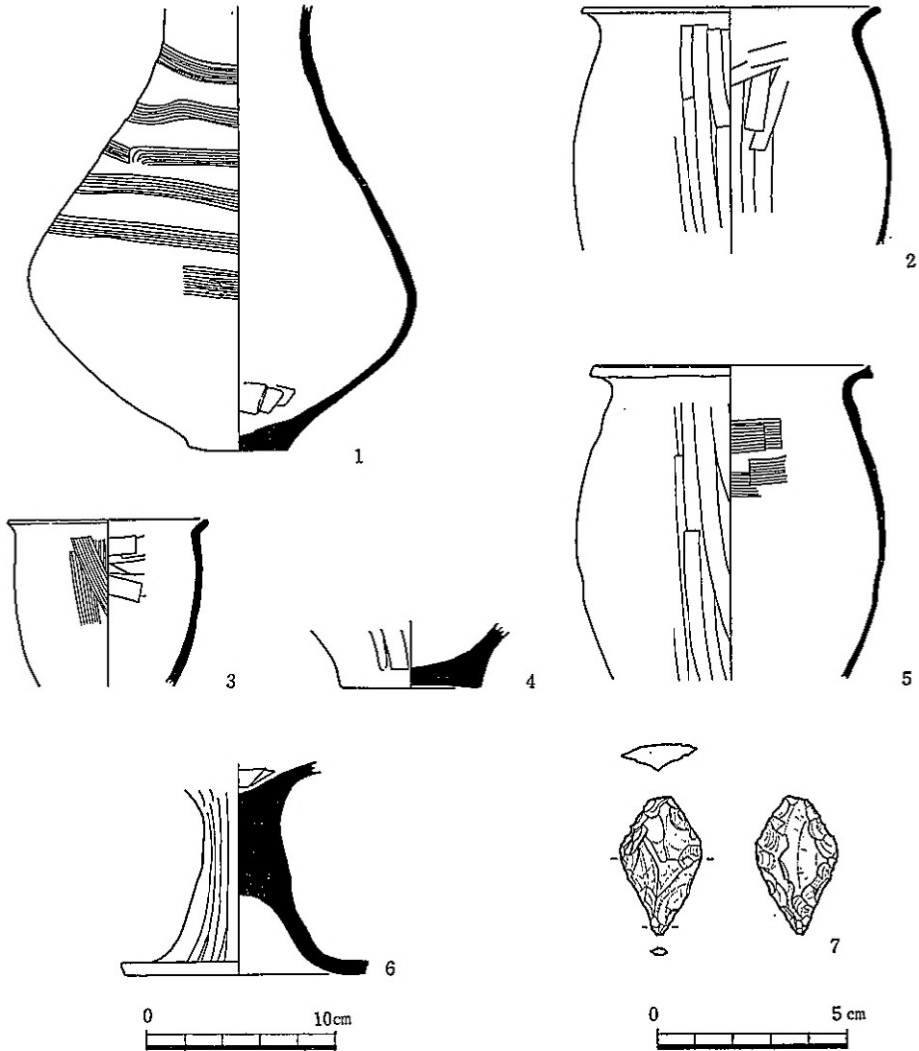
出土遺物 (第52図)

〔土器〕 壺形 (1)、甕形 (2・4・5)、小型甕形 (3)、高杯形 (6) 土器等が出土した。第Ⅱ-Ⅲ様式古段階である。

壺形土器 (1) 底径5.2cm、最大腹径20.4cmを測り、下脹れの体部をもち、体部との境



第51図 SK3037遺構平面図及び土層断面図 (1/50)



第52図 SK3037出土遺物実測図

が明確でない頸部をもつ。口縁部は、欠損する。外面上半部に8条の直線文を飾り、内面頸部はしぼり目が見える。和泉の池上遺跡から多く出土している器形である。

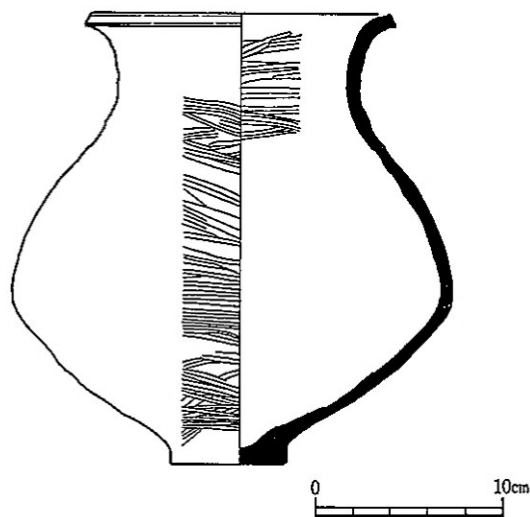
甕形土器 (2) は復元口径15.4cm、最大腹径16.8cmを測り、丸く外反する口縁部をもつ。内外面ヘラナデ調整である。(4)は底部片で、底径7.4cmを測る。(5)は復元口径14.4cm、最大腹径16.3cmを測り、外反する口縁部をもち、端部は面を成す。外面ヘラナデ、内面はハケメ調整である。外面は2次的に火を受け、剝離しており、煤が付着している。

小型甕形土器 (3) 復元口径10.4cmを測り、胴の張らない体部に短く外反する口縁部をもつ。内面はヘラナデ調整である。

高杯形土器 (6) 脚部片で、裾部径12.9cmを測り、中実である。

#### 〔石器〕

石錐 (7) は長さ3.6cm、幅2.2cm、厚さ0.6cm、錐長0.6cm、錐径0.5×0.4cmを測る。菱形の頭部の下端が突出して錐部をなす。頭部と錐部の境は明確でない。全体を剝離調整する。B面中央には大剝離面が残存する。



第53図 SK 3038出土遺物実測図

SK 3038 (第160図) I-11区、地山面上で検出された。SD 3029と重複する。SD 3029よりも新しい。平面形は、楕円形を呈する。長径2.05m、短径1.48m、深さ0.33mを測る。埋土は、暗灰色シルトの1層である。底面からは、ほぼ完形の壺形土器が1点出土している。主軸方向は、N-12°-Wである。

#### 出土遺物 (第53図)

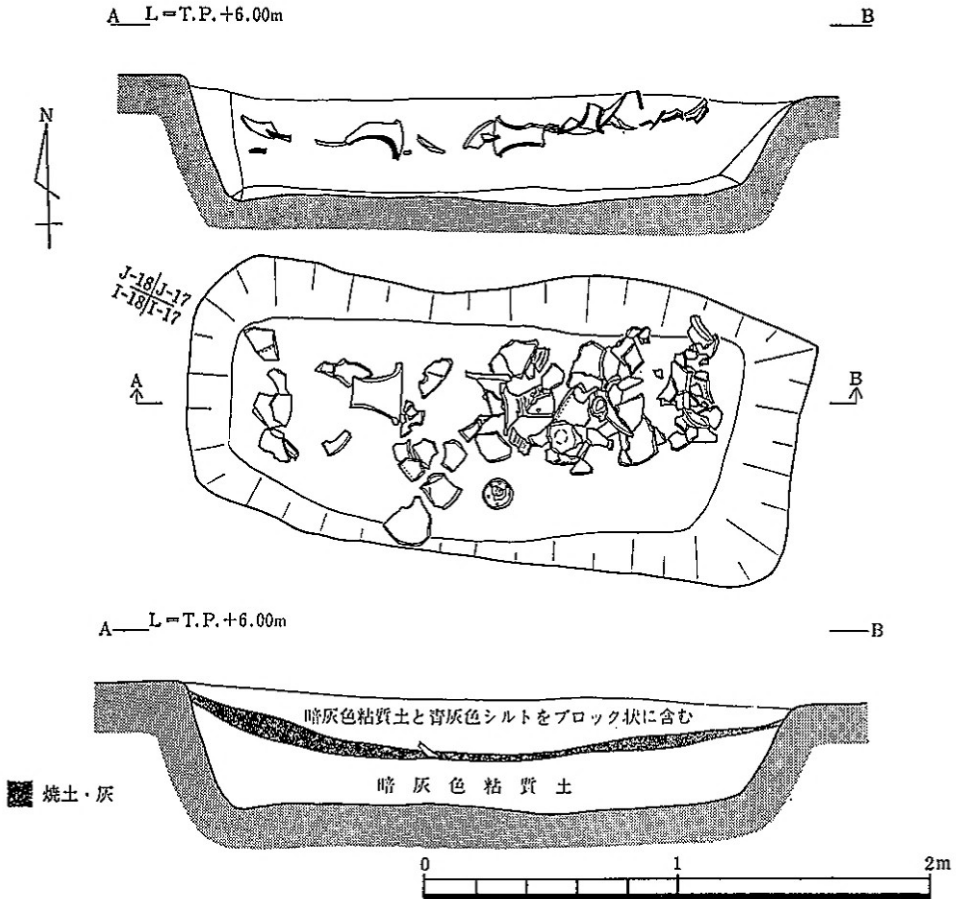
〔土器〕 壺形土器 (1) が出土した。第Ⅲ様式古段階である。復元口径15.6cm、器高23.9cm、最大腹径23.2cmを測り、やや扁平な体部に太く短い頸部から外反する口縁部をもつ。体部内面はナデ調整である。外面に煤が付着する。

SK 3040 (第54図) J-17区、地山面で検出された。上部は、NR 9001によって失なわれている。平面形は、隅丸長方形を呈する。長軸2.45m、短軸1m、深さ0.5mを測る。埋土は、Ⅰ層—暗灰色粘土に地山の青灰色シルトがブロック状にふくまれる層、Ⅱ層—暗灰色粘土の2層に大別できる。Ⅱ層上面には、厚さ5cmの炭化物、焼土の層が介在している。この層をベースとして、土器が一括で出土している。これらの土器は、2次的に火を受けている。しかし、底面、壁面には火を受けた痕跡は認められなかった。主軸方向は、N-84°-Wである。

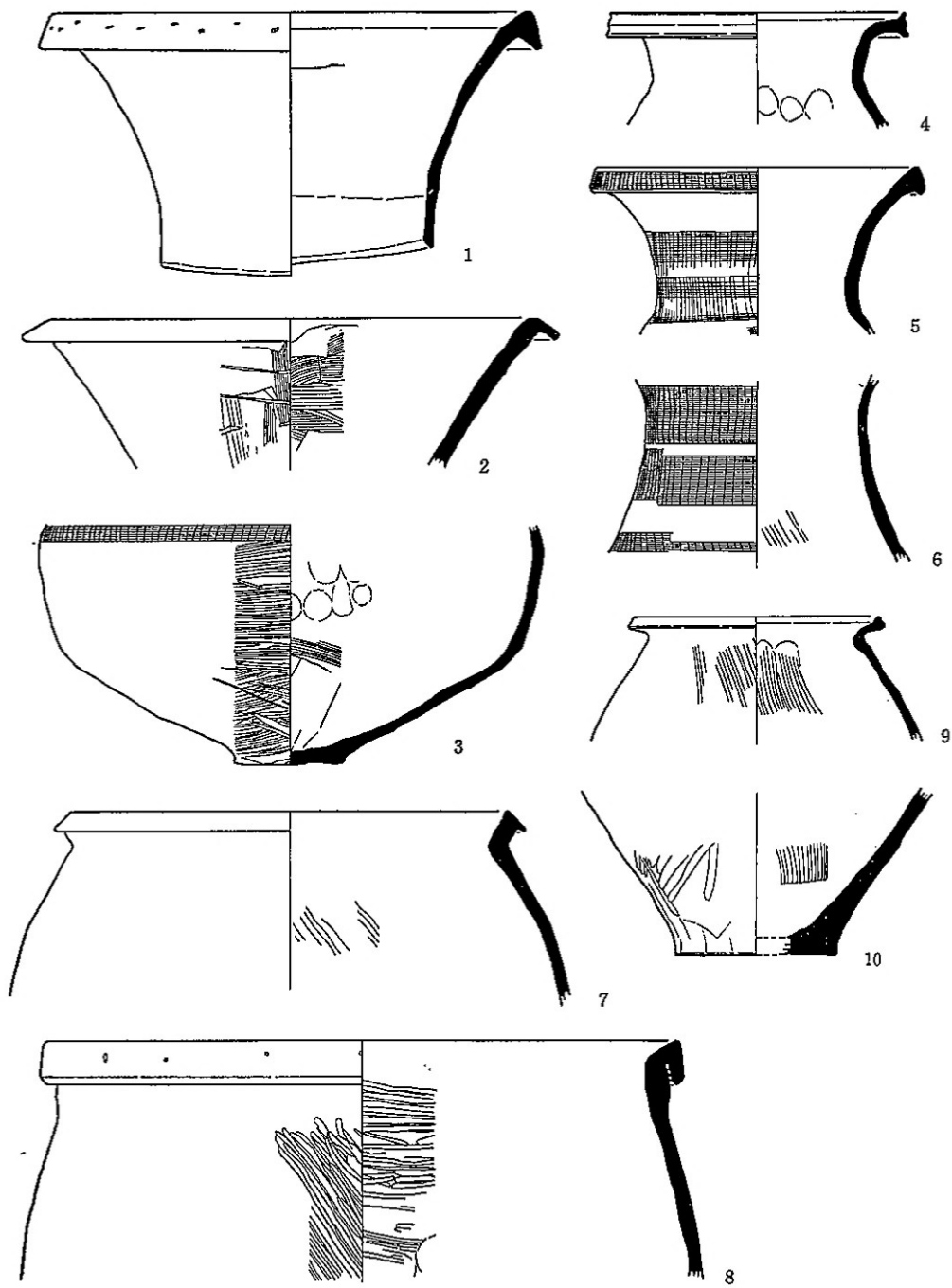
出土遺物 (第55・56・57図)

〔土器〕 (1~20) 壺形、甕形、高杯形、鉢形、器台形、無頸壺形、台付無頸壺形、水差形土器等が出土した。第Ⅲ様式新段階—Ⅳ様式である。特徴は、2次的に火を受けた土器が多いことと、器台形土器が多いことである。

壺形土器 (1・2・3・4・5・6) (1・3・6) は生駒西麓の胎土である。(1) は口径26.7cmを測り、短い頸部に外反する口縁部をもつ。端部は下方に拡張し刺突文を施す。頸部で切断し研磨した様子がある。内面はハケメ調整を施し、外面は不明である。2次的に火を受けている。(3) は腹、底部片で、復元最大腹径28.1cm、底径 6.2cmを測る。外面は簾状文で飾り、内面はハケメと指押え調整である。(6) は頸部片で、外面は簾状文で飾り、内面はハケメ調整である。(2) は復元口径27.3cmを測り、外に開く口頸部をもち、端部は外下方へ拡張する。内外面は、ハケメ調整である。(4) は復元口径16.4cmを測り、短い頸部に屈曲して外反する口縁部をもつ。形が特殊であるが壺形土器として扱い口縁端部は上下に拡張し凹線2条を飾る。肩部内面に指圧痕が残る。(5) は復元口径18.1cmを測り、短い頸部に外反する口縁部をもち端部は上下にやや拡張する。端部及び頸部外面に簾状文を施している。土器全体は2次的に火を受けも



第54図 SK3040遺構平面図及び土層断面図 (1/50)

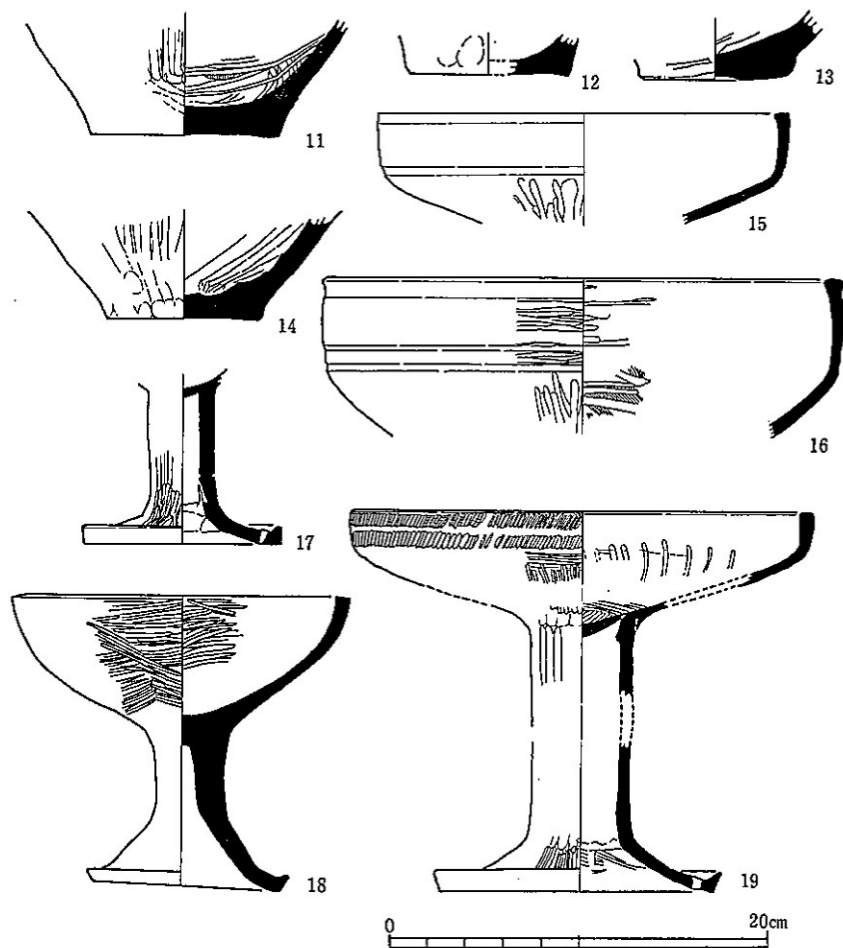


第55图 SK3040出土器物实测图

ろくなっている。

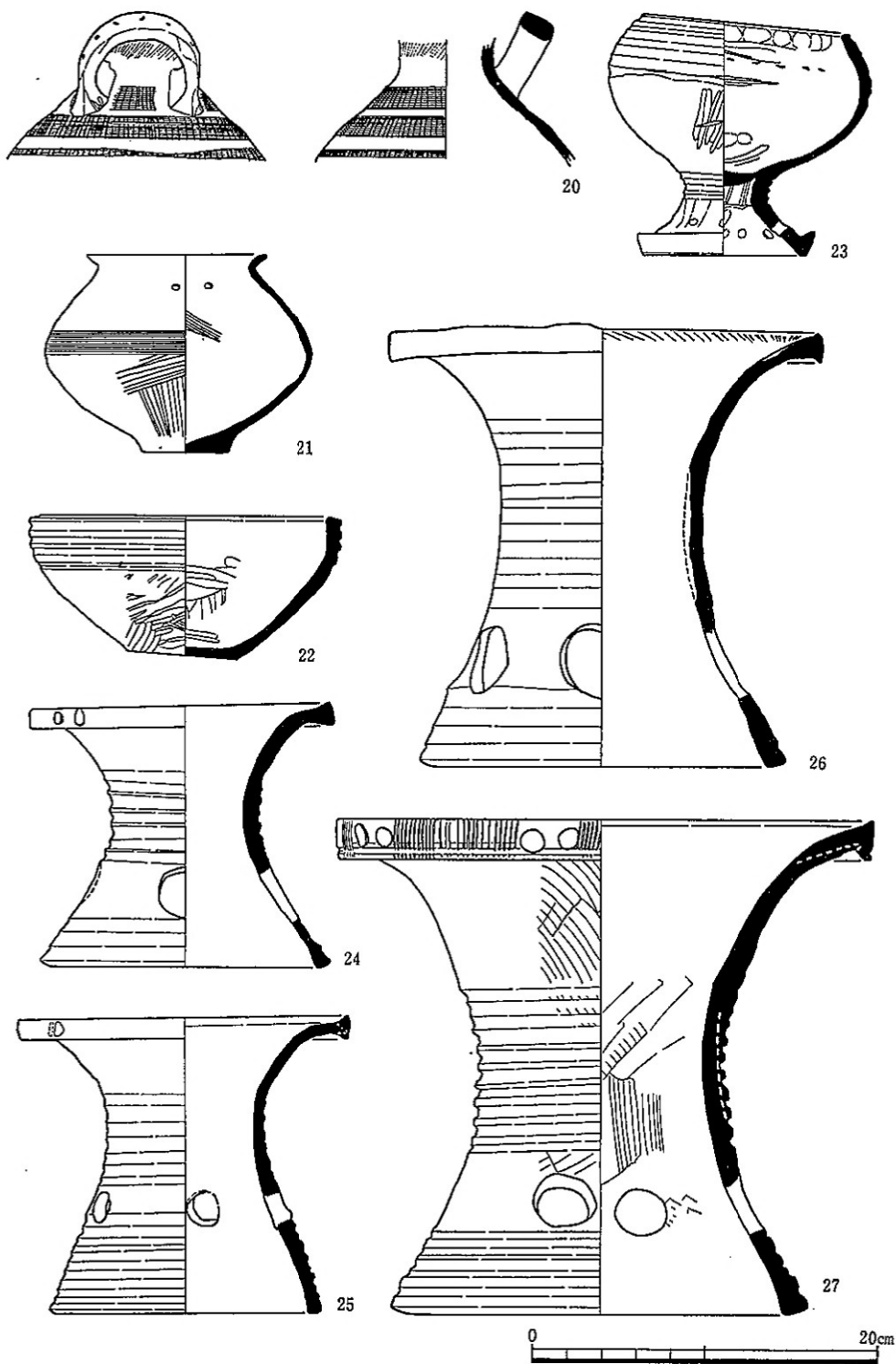
甕形土器 (7・8・9・10・11・12・13・14) (7)は復元口径24.4cmを測り、「く」の字に外反する口縁部をもち、端部は上下にやや拡張する。内外面はハケメ調整である。内外面に煤が付着する。特に口縁部内面周辺に著しい。(8)は復元口径35cmを測り、短く外反する口縁部で段状口縁部になる。端部外面に刺突文を施す。(9)は復元口径13.8cmを測り、外反する口縁部をもち、端部は上方につまみ上げる。内外面はハケメ調整である。(10・11・12・13・14)は、底部片である。(10)は復元底径9.2cmを測り、内面ハケメ調整である。内外面に煤が付着する。(12)は復元底径8.3cmを測り、(14)は8.2cmを測る。どちらも内面はハケメ調整である。

高杯形土器 (15・16・17・18・19) (15・16)は外に開く体部から屈曲して直口する口縁部をもち、端部は内外にやや肥厚する。口縁部外面に(15)は2条、(16)は3条の凹線文を施す。(15)は2次的に火を受ける。(16)の内面はハケメの上にヘラミガキ調整を施す。(17)は脚部片で、裾部径10.6cmを測る。透し穴は8ヶ所である。(18・19)は生駒西甕型胎土であ



第56図 S K3040出土遺物実測図





第57图 SK3040出土遗物实测图

る。(18)は口径18cm、器高15.5cmを測り、鉢形の杯部をもつ。(19)は復元口径24.5cmを測り、外に開く体部から屈曲して直口する口縁部をもつ。口縁部外面を2段の列点文で飾る。脚部の透し穴は4ヶ所である。体部内面には約1cmの間隔で暗文が描かれ、脚部内面はヘラケズリ調整である。2次的に火を受けている。

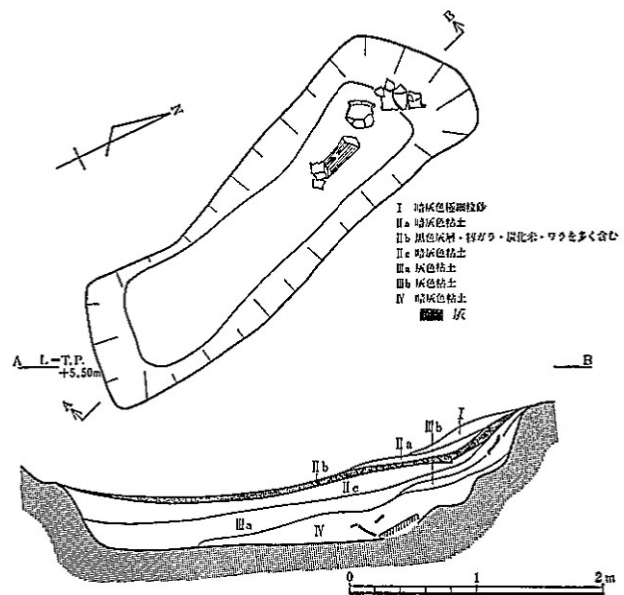
鉢形土器(22) 復元口径16.4cm、器高8.3cmを測り、外に開く体部から屈曲して直立する口縁部をもつ。口縁部外面に4条の凹線を施す。生駒西麓型の胎土である。

器台形土器(24・25・26・27) (24・25・26・27)とも口縁径が底径より大きく鼓形を呈し、腹部と脚部外面を凹線で飾る。(24)は復元口径17cm、底径15.7cmを測り、口縁端部は上下にやや拡張し、外面に円形浮文を貼る。透し穴は、5ヶ所である。内外面は、ヨコナデ調整である。(25)は口径19cm、底径15.7cm、器高17cmを測り、口縁部は上下に粘土を付加して拡張する。口縁端部に円形浮文が貼られる。2次的に火を受ける。(26)は復元口径24.5cm、口縁端部は下にやや拡張し、内面を列点文で飾る。透し穴は5ヶ所と推定される。2次的に火を受けている。内外面はヨコナデ調整である。(27)は復元口径31cm、底径21.8cm、器高28.6cmを測り、口縁端部は上下に拡張する。口縁端部外面に1条の沈線と、2個1対の円形浮文と、刻目を施す。体部外面は荒いハケメ調整、内面は中央がハケメ調整、上下はヘラケズリ調整である。透し穴は4ヶ所と推定される。

無頸壺形土器(21) 口径10.2cm、器高11.6cm、最大腹径15.3cmを測り、短く外反する口縁部をもつ。肩部に2個1対で2対の穿孔がある。外面は摩滅が著しいが、腹部に直線文を飾り、内面はハケメ調整である。生駒西麓型の胎土である。

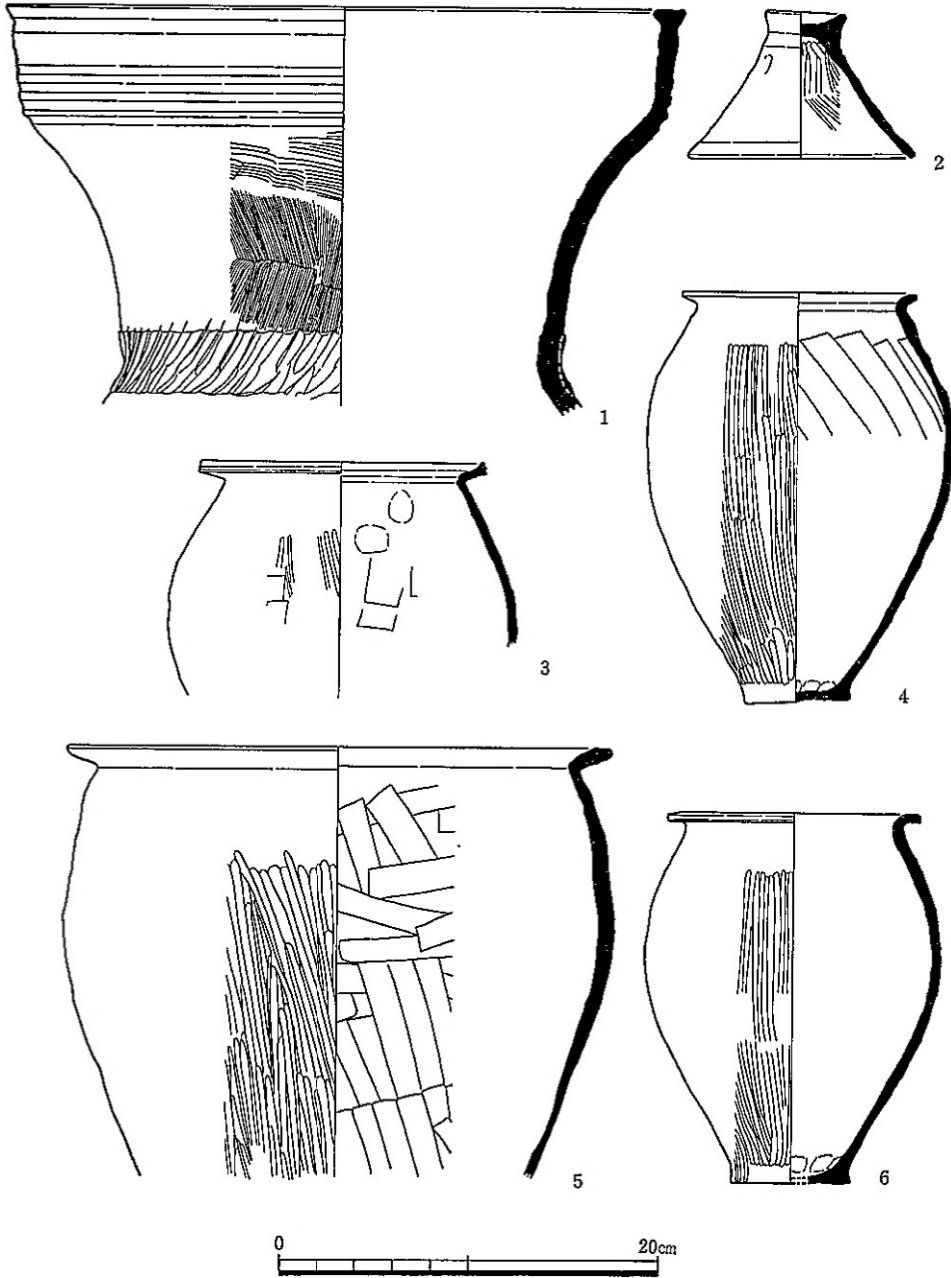
台付無頸壺形土器(23) 復元口径12cm、器高14cmを測り、丸味のある体部からやや内傾する口縁部をもち、外面は5条の凹線文で飾る。脚部と体部の境に沈線4条を施す。脚部の透し穴は11ヶ所で1ヶ所は貫通してしない。体部内外面はヘラミガキ調整で口縁部内面に指圧痕が残る。

水差形土器(20) 頸部を列点文、肩部から胴部を簾状文で飾る。簾状文を施した後、把手をつけている。把手上に8個の刺突文を施す。内面は指押えとハケメ調整である。



第58図 SK3041遺構平面図及び土層断面図(1/60)

S K 3041 (第58図) J-19区で検出された。S D3023、S D3036と重複する。S D3023の肩部でS D3023の埋土を掘り込んでいる。南側はS D3036によって削平されている。平面形は、隅丸長方形を呈する。長軸 3.7m、短軸 1 m、深さ 1 mを測る。埋土は黒灰色粘土と炭化玄米、ワラ灰の互層である。主軸方向は、N-20° -Wである。断面を見る限り、S D3023が埋没する途中で掘り込まれ、玄米や灰などが、北側からの流入であるのがわかる。



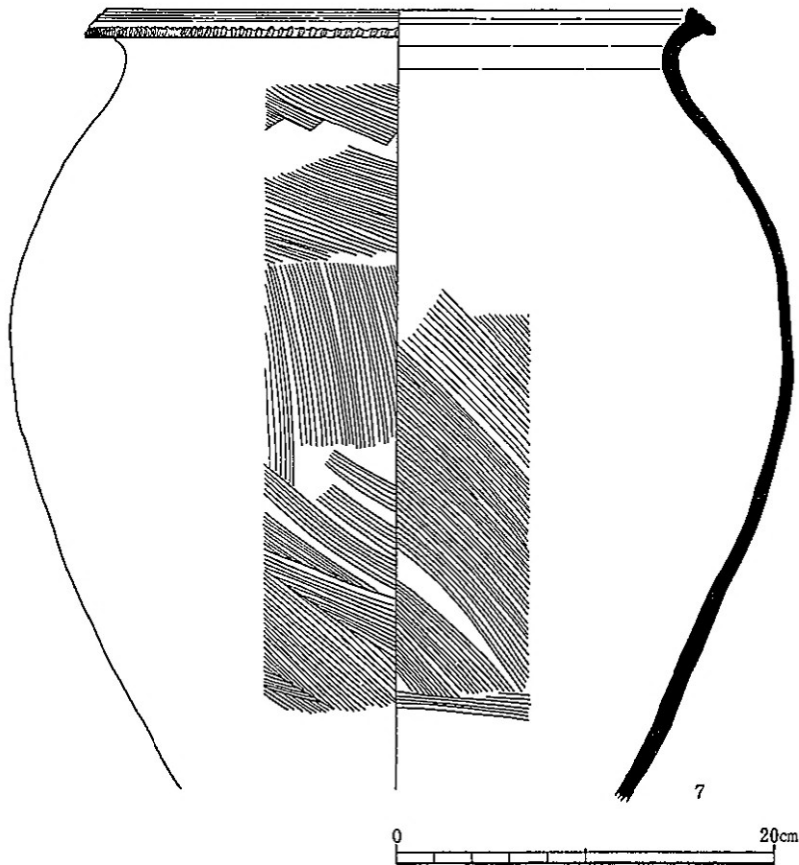
第59図 S K3041出土遺物実測図

## 出土遺物（第59・60・61図）

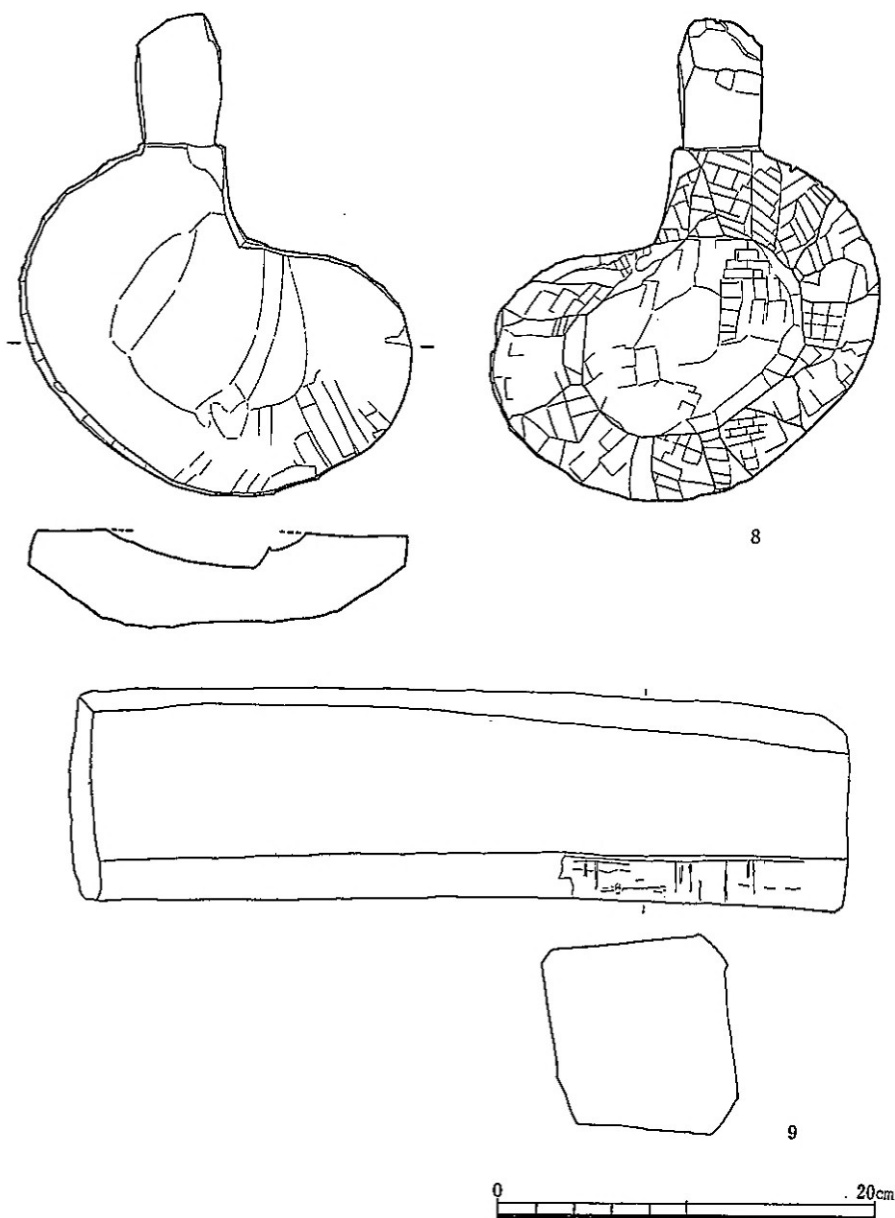
〔土器〕（1—7） 壺形、甕形、甕用蓋形土器が出土した。第Ⅲ様式新段階—Ⅳ様式である。

壺形土器（1） 口径35.2cmを測る大きなものである。短い筒状の頸部から屈曲して直立する口縁部をもち、端部は内外にやや拡張する。口縁部外面に5条の凹線文、頸部に刻み目凸帯を施し、調整は、外面がヘラミガキと細かいハケメで、内面は荒いハケメ調整である。内面は2次に火を受け、剝離が著しい。

甕形土器（3・4・5・6・7） （3）は復元口径15.1cm、最大腹径18.5cmを測り、胴の張る体部に「く」の字に外反する口縁部をもち、端部は上下にやや拡張し、2条の凹線を施す。外面下半はヘラケズリ、内面上半は指押え、下半はヘラケズリ調整である。外面に煤が若干付着する。（4）は口径12.5cm、器高21.6cm、最大腹径16.3cmを測り、胴上半部に短く外反する口縁部をもつ。内面はハケナデ調整である。内外面に煤が付着する。（5）は復元口径28.6cm、最大腹径29cmを測り、胴はあまり張らず、「く」の字に外反する口縁部をもつ。内面はヘラナデ、外面はヘラケズリの上をヘラミガキ調整である。外面に煤が付着する。（6）は復元口径13.4cm、器



第60図 S K3041出土遺物実測図



第61図 SK3041出土遺物実測図

高19.5cm、最大腹径15.7cmを測る。胴の張る体部に水平に屈曲する口縁部をもつ。内面は指押え調整で煤が付着している。(7)は口径31cm、最大腹径41.5cmを測り、胴の張る体部に丸く外反する口縁部をもち、端部は上下に拡張し3条の凹線と刻目で飾る。内外面とも荒いハケメ調整で、外面下部はハラケズリを施す。外面一部に煤が付着する。

蓋形土器 (2)は口径12.2cm、器高7.8cmを測り、中央の窪むつまみをもつ。口縁端部は若干窪み、外面は指押え、内面はハラナデ調整である。

〔木器〕 (8・9)

杓子状木製品の未製品(8) 平面形は、長軸20.1cm、短軸18.6cmの「L」字形を呈し、これに、幅4.6cm、長さ7cmに削り出された突起がつく。全体の長さは、25.5cmを測る。この突起は、中心より約1.8cmずれている。着柄軸製作途中と思われる。身は、まだ削り貫かれていない。側縁厚1.6~1.8cm、最大厚5cmを測る。断面形態は、扁平なかまぼこ形を呈する。

柱状木製品(9) 径約13.5cmの自然木を芯持ち状に木取りした角材である。4隅は樹皮をそのまま残しており、断面形は一辺約7cmの隅丸長方形である。両側面は、保存状態が悪く、詳細な観察はできなかった。現存長41.5cmである。

他に籠が3個体分出土したが状態が悪く実測できなかった。

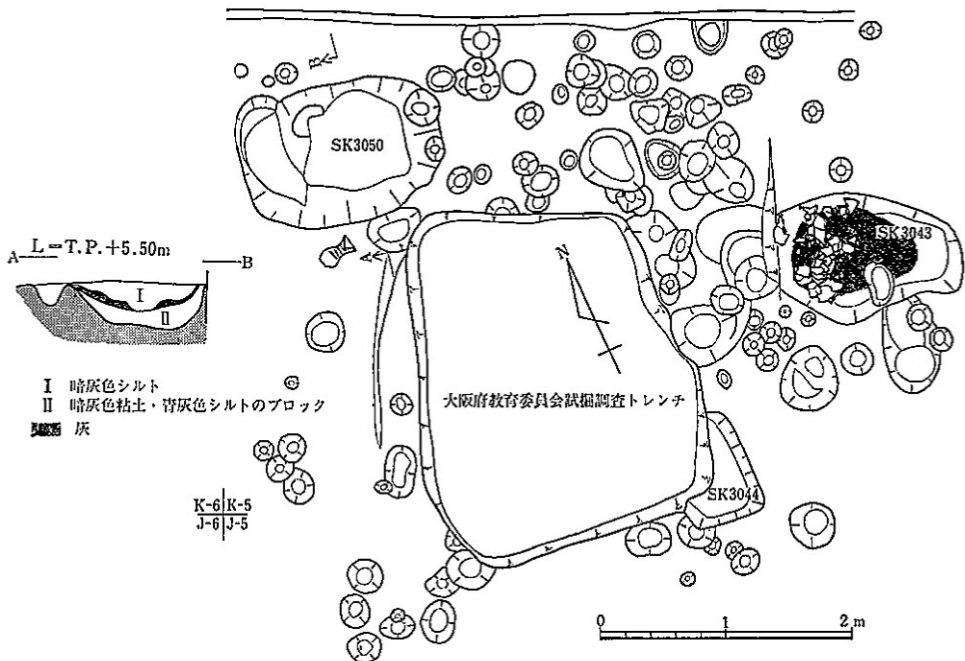
SK3042(第288図) K-15区で検出された。上部はNR9001によって削平されている。南側はSD3023によって削平されている。平面形は楕円形を呈する。長径0.75m、短径0.7m、深さ0.26mを測る。埋土は、暗褐色粘土の1層である。主軸方向はN-22°-Eである。

出土遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

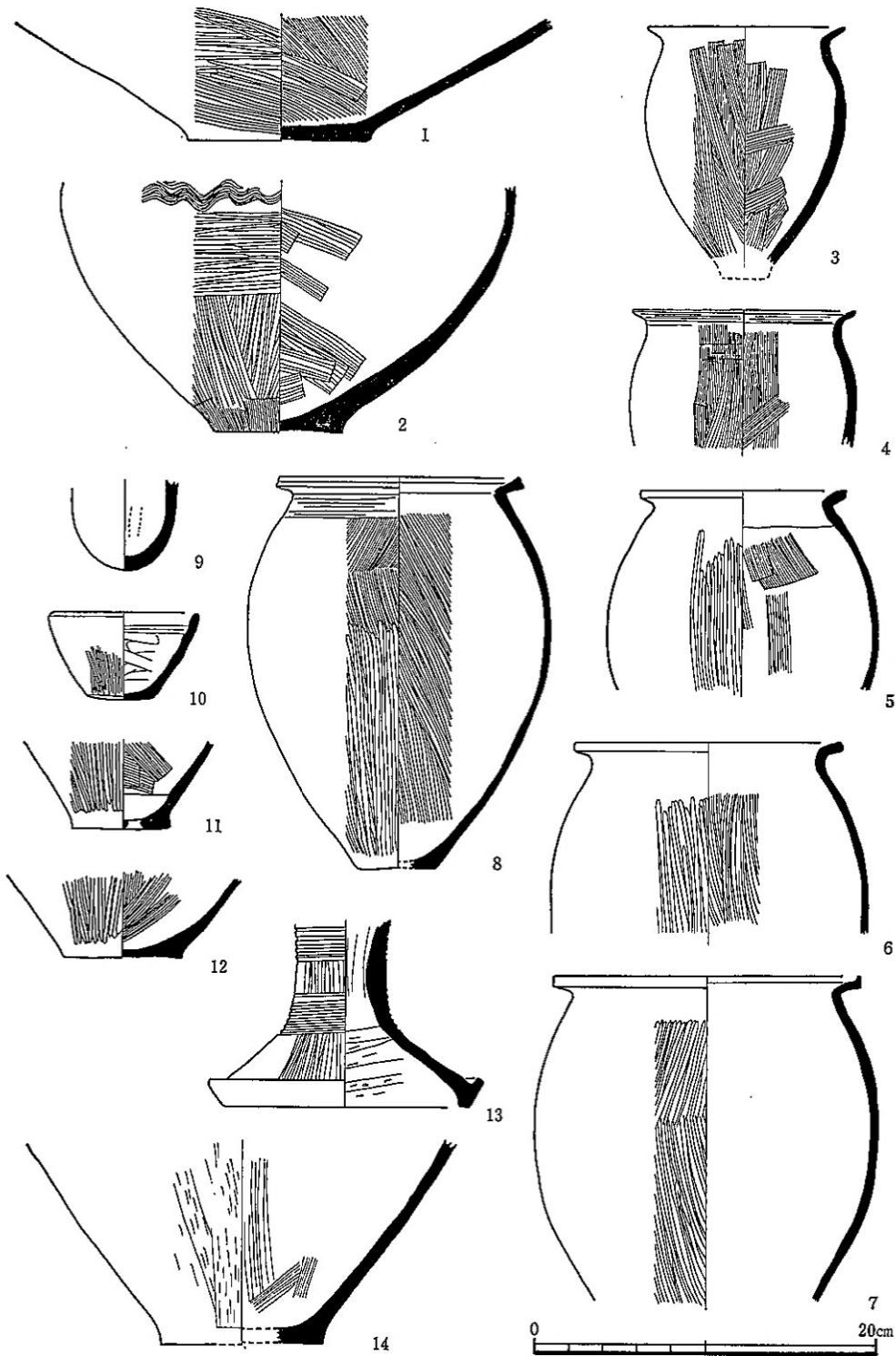
SK3043(第62図) K-5区、で検出された。周辺のピット群と重複する。平面形は、楕円形を呈する。長径1.44m、短径1.04m、深さ0.15mを測る。埋土中には、灰が多く含まれている。主軸方向は、N-64°-Eである。

出土遺物(第63・64図)

〔土器〕(1-15) 壺形、甕形、高杯形、鉢形、蛸壺形土器等が出土した。第Ⅲ-Ⅳ様式で、様式差のあるものが存在する。



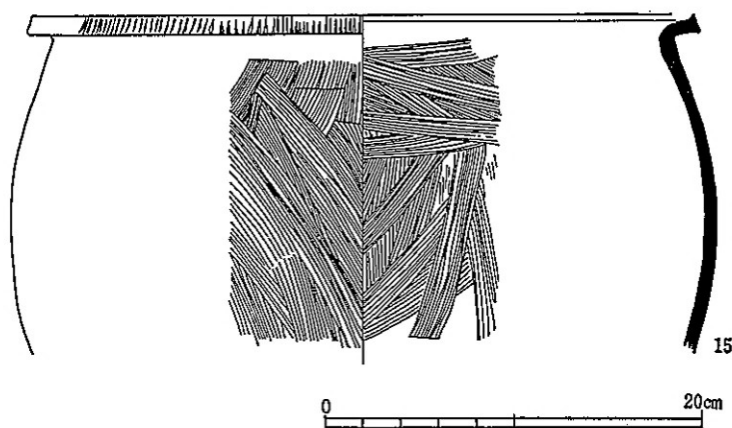
第62図 J・K-5区IX d層出土遺構平面図—SK3043・SK3044・SK3050—(1/50)



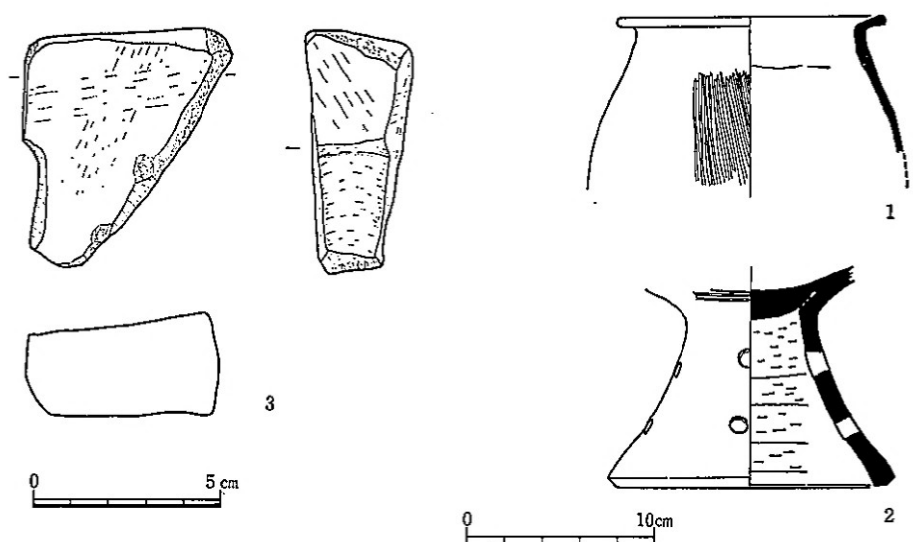
第63图 SK3043出土遺物実測図

壺形土器 (1・2) は胴部から底部にかけての破片である。(1) は底径10.7cmを測り、外に開く体部をもつ。内面はハケメ調整である。(2) は底径 7.4cm、最大腹径25.3cmを測り、腹部に波状文を施し、内面と底部外面はハケメ調整である。

甕形土器 (3・4・5・6・7・8・11・12・14・15) (3・4) はあまり腹部が張らず外反する口縁部をもつ。内外面はハケメ調整である。(3) は復元口径11.4cm、最大腹径11.6cm、(4) は復元口径12.9cm、最大腹径13.2cmを測る。(5・6) は丸く外反する口縁部をもつ。内面はハケメ調整である。(5) は復元口径12cm、最大腹径15.9cmを測る。(6) は復元口径15.4cm、最大腹径18.4cmを測る。(7) は生駒西麓型胎土である。復元口径17.8cm、最大腹径20cmを測り、胴の張る体部に「く」の字に外反する口縁部をもち、端部は上方に突出する。内面はナデ



第64図 SK3043出土遺物実測図



第65図 SK3045出土遺物実測図



調整である。(8)は口径14cm、器高22.7cm、最大腹径17.5cmを測り、胴長の体部に「く」の字に外反する口縁部をもち、端部は上下にやや肥厚し、端部外面はやや凹む。外面は上半部がハケメ、下半部がヘラミガキ調整、内面はハケメ調整である。(11・12・14)は底部片である。(11)は底径5.6cmを測り、底部に焼成後、両面から穿孔している。内面はハケメ調整で内外面に煤が付着する。(12)に底径6.9cmを測り、内面はハケメ調整で、外面に煤が付着する。(14)は復元底径9.4cmを測り、外面はヘラケズリ、内面はナデ調整である。(15)は復元口径35cm、最大腹径37.2cmを測る。大形である。水平気味に丸く屈曲する口縁部をもち、端部は上下にやや拡張し、刻目を施す。内外面はハケメ調整である。

高杯形土器(13) 復元脚部径14.1cmを測り、柱状の脚である。柱状部に2帯に分けて沈線を施す。内面は柱状部にシボリ目が見られ、裾部はヘラケズリ調整である。

小型鉢形土器(10) 口径8.2cm、器高5.1cmを測る。内外面はナデ調整である。

蛸壺形土器(9) 内外面ナデ調整である。現存高5.0cm、現存径6cm。

**SK3044**(第62図) K-5区、包含層(第Ⅱd層)上面で検出された。北西部分は試掘調査トレンチによって失なわれている。平面形は、隅丸長方形を呈する。長軸0.85m、短軸0.62m、深さ0.22mを測る。主軸方向は、N-4°-Eである。

出土遺物 実測可能な土器は出土しなかった。

**SK3045**(第289図) K-1区で検出された。平面形は、円形を呈する。径0.75m、深さ0.6mを測る。

出土遺物(第65図)

〔土器〕 甕形(1)、高杯形(2)土器等が出土した。第Ⅲ様式である。

甕形土器(1)は復元口径14cmを測り、水平近く外反する口縁部をもち、内面は指ナデ調整である。口縁部外面に煤が付着する。生駒西麓の胎土である。

高杯形土器(2)は復元裾部径14.2cmを測り、透し穴は上下2ヶ所1対で8対、焼成前に外から内へ施す。杯部内面はハケメ、脚部外面はナデ、内面はヘラケズリ調整である。

〔石器〕

砥石(3)は平面形態が三角形を呈する。もともと方形を呈した和泉砂岩が割れた後、4面を利用し、特に頂部付近は回転条痕が残っている。最大幅5.5cm、厚さ2.6cmを測る。

**SK3046**(第36図) J-4区、周辺のピット群と重複する。平面形は円形を呈する。径0.5m、深さ0.1mを測る。埋土は、黒色粘土である。

出土遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

**SK3047**(第289図) J-7区、試掘調査トレンチ内、地山面上で検出された。平面形は、円形を呈する。径0.48m、深さ0.27mを測る。埋土は、地山の青灰色シルトが黒灰粘土にブロック状に含まれる1層である。

出土遺物 実測可能な土器は出土しなかった。

**SK3048** (第66図) I-2区で検出された。平面形は、楕円形を呈する。長径1.35m、短径1m、深さ0.31mを測る。埋土中には、厚さ5cmの灰、炭層が挟在されている。主軸方向は、N-71°-Eである。

出土遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

**SK3049** (第29図) J-7・8区で検出された。SK3051と重複する。SK3051よりも新しい。平面形は楕円形を呈する。長径0.8m、短径0.65m、深さ0.11mを測る。埋土は暗茶褐色粘土の1層である。主軸方向は、N-87°-Wである。

出土遺物 (第67図)

〔石器〕 石鏃1点が出土した。現存長3.5cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm、重量2.1gをはかる。尖基無茎式で先端は欠損し、柳葉形を呈する。A面はわずかに大剝離を残し、剝離調整する。左側辺に一部階段状剝離が見られる。B面は中央部に大剝離面を残し、面側辺から剝離調整を施す。エッジは薄く鋭い。

**SK3050** (第62図) K-5区、第Ⅴb層で検出された。周辺のピット群と重複する。平面形は、楕円形を呈する。長径1.66m、短径1.13m、深さ0.39mを測る。埋土はI層-暗灰色シルト、II層-暗灰色粘土中に青灰色シルトをブロック状に含む層の2層に大別できる。II層上面には厚さ5cmの灰が堆積している。主軸方向はN-79°-Wである。

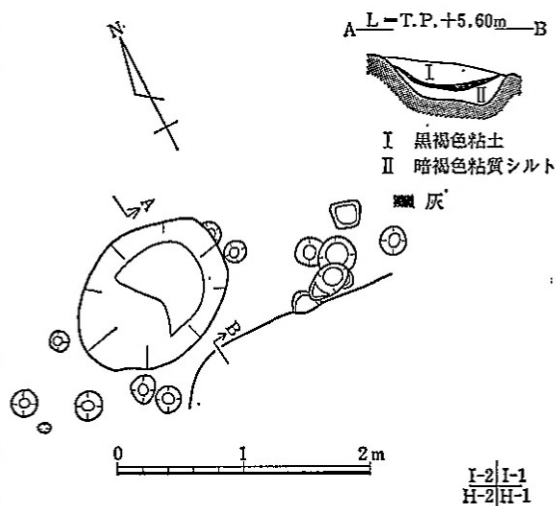
出土遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

**SK3051** (第289図) J-7・8区、第Ⅴd層で検出された。SK3049、NR3001と重複する。西側は、NR3001によって削平されている。平面形は、不整形を呈する。深さ0.06mを測る。埋土は、暗褐色粘土の1層である。

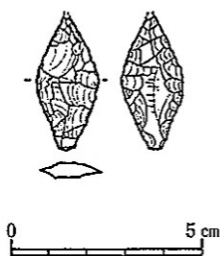
出土遺物 (第68図)

〔土器〕 甕形土器(1・2)が出土した。時期は中期である。

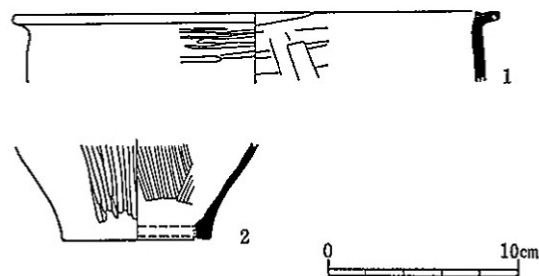
(1)は復元口径25.5cmを測り、短く外反する口縁部をもち、内面に突出部をもつ。内面はナ



第66図 SK3048遺構平面図及び土層断面図(1/50)



第67図 SK3049出土遺物実測図



第68図 SK3051出土遺物実測図

デ調整である。(2)は底部片で、復元底径7.8cmを測り、内面はハケメ調整である。

**SK3052** (第288図) I-12区、地山面で検出された。西側はSD3032によって削平されている。平面形は、隅丸長方形を呈する。長軸0.92m、短軸0.58m、深さ0.92mを測る。埋土は、暗褐色粘土の1層である。主軸方向は、N-26°-Eである。

出土遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

**SK3053** (第289図) J-3区で検出された。南側はSD3041によって削平されている。平面形は、楕円形である。長径0.80m、短径0.65m、深さ0.42mを測る。埋土中には、焼土、炭、灰がレンズ状に堆積している。

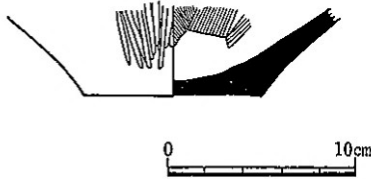
出土遺物 (第69図)

〔土器〕 壺形土器の底部が出土した。時期は中期である。底径9.5cmを測り、内面はハケメ調整である。

**SK3054** (第70図) K-4区で検出された。北側は、試掘トレンチによって失なわれている。平面形は、隅丸長方形である。現存部で長軸1.3m、短軸0.5m、深さ0.4mを測る。埋土は黒色粘土で、焼土、灰がレンズ状に堆積している。主軸方向はN-68°-Eである。

出土遺物 (第71図)

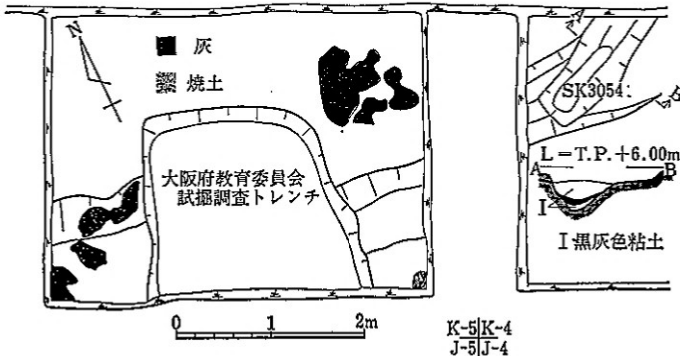
〔土器〕 高杯形土器(1)が出土した。時期は中期である。復元口径11.8cmを測り、碗状のものである。



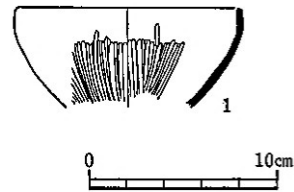
第69図 SK3053出土遺物実測図

**SK3055** (第95図) K-6区、第Ⅱd層で検出された。平面形は楕円形を呈する。北側は試掘トレンチによって失なわれている。現存部で長径0.55m、短径0.5m、深さ0.1mを測る。埋土は、暗灰色粘土の1層である。主軸方向は、N-26°-Eである。

出土遺物 実測可能な土器は出土しなかった。

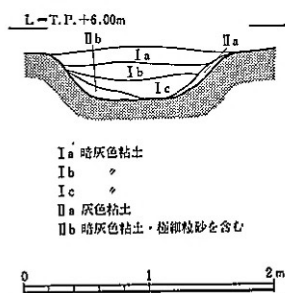


第70図 K-4・5区IX d層出土遺構平面図—SK3054—(1/10)

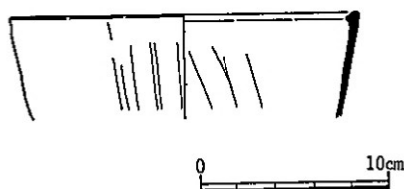


第71図 SK3054出土遺物実測図

**SK3056** (第72図) F-12区、地山面で検出された。平面形は、楕円形を呈する。北側は試掘トレンチによって失なわれている。長径1.3m、短径0.6m、深さ0.35mを測る。埋土は、暗褐色



第72図 SK3056土層断面図(1/40)



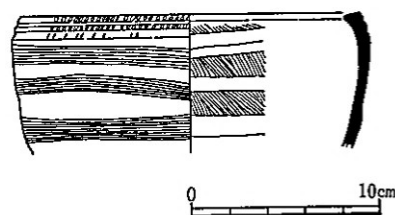
第73図 SK3056出土遺物実測図

色粘土である。主軸方向は、 $N-64^{\circ}-W$ である。

#### 出土遺物 (第73図)

〔土器〕 鉢形土器(1)と思われるものが出土した。直口する口縁部をもち、端部は内側に肥厚する。時期は不明である。復元口径18.5cm、現存高5.5cmを測る。

SK3060 (第289図) H-2区で検出された。南側を、NR3001によって失なわれている。平面形は楕円形を呈する。現存部では、長径0.8m、短径0.4mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトの1層である。主軸方向は、 $N-13^{\circ}-W$ である。



第74図 SK3060出土遺物実測図

#### 出土遺物 (第74図)

〔土器〕 細頸壺形土器が出土した。第Ⅲ様式古段階である。復元口径17.8cmを測り、やや内彎気味の直立する口縁部をもち、口縁端部外面は2条の凹線と3段の刻目を施す。頸部外面は9条の直線文を飾り、内面はハケメ調整の後、ナデ調整を施す。

小結 土坑は総数53基で、時期の明らかなのは25基で次の通りである。

第Ⅱ様式—SK3033・3036

第Ⅲ様式—SK3002・3008(古)・3009(古)・3012・3016(古)・3020・3022・3029  
3032(古)・3037(古)・3038(古)・3045・3060(古)

第Ⅲ～Ⅳ様式—SK3001・3010・3011・3014・3040・3041・3043

第Ⅳ様式—SK3013・3015

〔埋土〕 (1) 甃土、灰、炭化物を多く含むもの、(2) 焼土、灰、炭化物を含まず暗灰色粘土または暗茶褐色粘土を主体とするものにと大別できる。(1)に属するのはSK3001・3002・3009・3011・3016・3037・3040・3041・3043で第Ⅱ様式期の土坑の埋土中には焼土、灰、炭化物は含まれない。SK3040・3041を除くとこれらの土坑はピットの集中する地区に分布している。これとは、逆に(2)に属する土坑は、大半が調査区西側に集中しており、SK3022・3029・3030・3032・3033・3034・3038では、ほぼ完形に近い土器を伴っている。SK3041の埋土は主に北側からの人為的な堆積状況を示している。埋土中には、植物遺体、種子・穀殻、炭化米、獣骨片などが多く含まれ

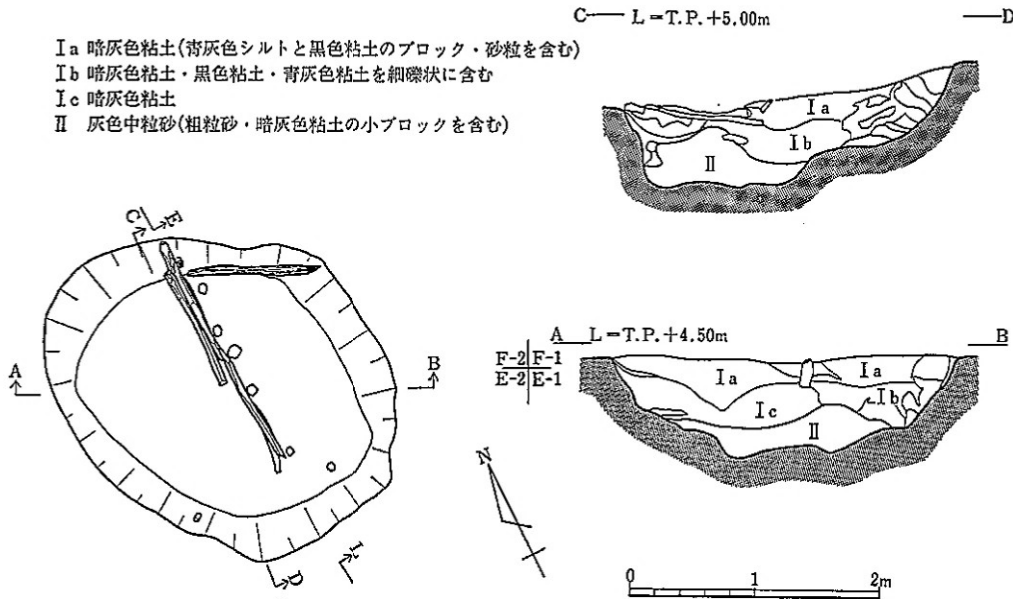
ており、「ごみ棄て場」のような役割を果たした時期があったと考えられる。このことは、ハエ、ゴミムシ科、エンマコガネ虫、エンマムシ科などの昆虫遺体が採集されたことから裏づけられよう。

〔遺物出土状況〕 大半が埋土中から細片で出土している。埋土に焼土、灰、炭化物を含む土坑では、この焼土、灰、炭化物の薄層に伴って出土した。SK3040からは、焼土、炭化物の薄層をベースとして、2次的に火を受けた土器が多数出土した。これらは、ほぼ完形に復元できるものが多かった。器種の構成をみると、器台形土器、水差形土器が加わっており、特に器台形土器は4点出土している。底面、壁には火を受けた痕跡は認められない。遺物の出土状態から原位置を保っているとは考えられない。これ等のことから、SK3040では、土坑の本来の機能が停止→暗灰色粘土層の堆積→焼土、灰、炭化物の堆積→何等かの祭祀行為に使用した土器の一括廃棄という変遷が考えられる。SK3037では完形に復元できたものはなかった。

### 3 井戸

この時期の井戸は9基検出された。遺構番号はSE3001、3002、3003、3008、3009、3010、3013、3015、3016である。うち6基(SE3003・3008・3009・3010・3013・3015)は、SD3041の北側で検出された。SE3002、3016はSD3041とNR3001の間に残された地区で検出され、SE3001はNR3001の南肩部で検出された。

**SE3001** (第75図) F-2区で検出され、上部をNR3001に削られている。地山面で検出され、平面形は楕円形、断面U字形を呈する。掘方の長径3.0m、短径2.4m、深さは一番高い南肩部から1mを測る。埋土は大きく3層に分かれる。下から径2~5cmの暗灰色粘土のブロックが



第75図 SE3001遺構平面図及び土層断面図(1/60)

入る灰色中粒砂層、青灰色シルト・黒色粘土・暗灰色粘土のブロック層、砂粒を多く含む青灰色シルト・黒色粘土・暗灰色粘土のブロック層である。

この井戸は亀井遺跡の弥生時代の井戸としては一番規模が大きい。更に、注目されるのは、井戸としてはやや特異な構造を有している。それは、井戸のほぼ中央部に南←→北方向に杭が7本打ち込まれており、更に同方向に横木が杭列の西側に5本添えられた状態で検出された。杭の間隔はやや不揃いだが約20cmを測る。杭はすべて先端を尖らし、うち4本には面取り加工を施してある。深く打ち込まれている杭は、底部より更に約40cmの深さに達する。上部はNR3001によって消失しており、全長は不明であるが現存長90cmを測る。5本の横木も面取り加工を行っていた。横木は井戸底部より約30cm上方に集中している。杭と横木をつないだ痕跡は認められないものの出土状況からは、本来つないでいた可能性も考えられる。

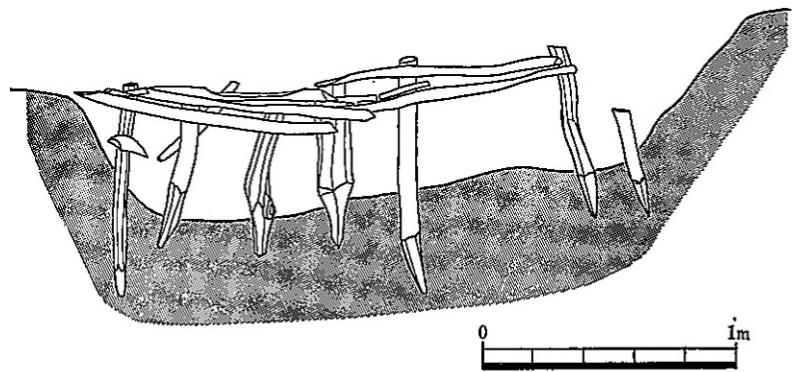
井戸からは土器細片が多かったが、注目すべき遺物も出土している。中央部杭列より西側の第Ⅱ層の底近くからは銅鐸形土製品（第78図—6）が出土している。そして、杭列より東側のⅡ層からは杓子未製品（第80図—10）が出土している。更に表面に黒漆を塗布した壺形土器も出土し注目される。

E—L—T.P.+5.50m

—L

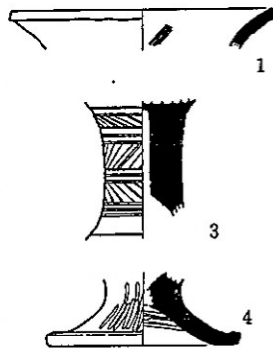
出土遺物（第77・78・79・80図）

〔土器・土製品〕  
（1～6） 壺形、甕形、高杯形土器、銅鐸形土製品等が出土した。第Ⅳ様式である。

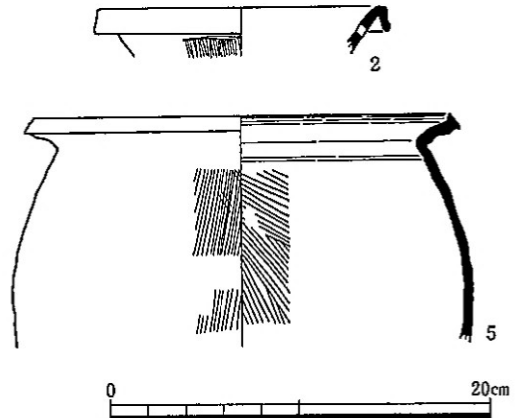


第76図 SE3001杭見通し図（1/30）

壺形土器（2）  
復元口径14.6cmを測り、外方に開く口縁部をもち、端部は下に拡張する。口縁部に穿孔を施し、外面黒漆塗りである。



甕形土器（1）  
復元口径13.9cmを測り、外反する口縁部をもち、端部は面をなす。外面に煤が付



第77図 SE3001出土遺物実測図

着する。生駒山西麓型胎土である。(5)は復元口径22cm、最大腹径24.2cmを測り、「く」の字に外反する口縁部をもち、端部は上下にやや拡張する。外面ハケメ調整。

高杯形土器 (3) 柱状の脚部には3条1帯の沈線が4帯描かれ、その間を綾杉状に沈線を施す。外面に煤が付着する。(4)は裾部径10.2cmを測る。内外面ともにヘラミガキが施されている。

銅鐸形土製品 (6) 現存長3.9cm、現存高4.3cmを測る裾端部片である。隅をつまんで鱗に似せている。外面にはヘラ描きの斜格子文が施されている。内面裾部にケズリ調整のあと2本の沈線を施し、内面凸帯を表わしている。

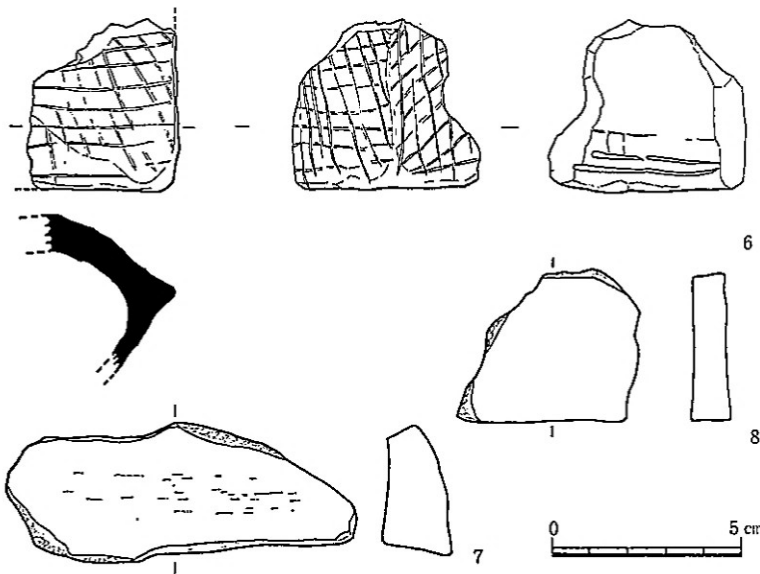
〔石器〕 砥石が2個出土している。

砥石 (7・8) (7)は小さめの自然石を利用した砥石。残存長9.4cm、幅3.5cm、厚さ1.9cmを測る。使用面は2面使用している。石質は和泉砂岩。(8)は方形を呈する小型の砥石の一部分と考えられる。残存長4.5cm、幅4cm、厚さ1cmを測る。全ての面を使用している。石質は和泉砂岩。

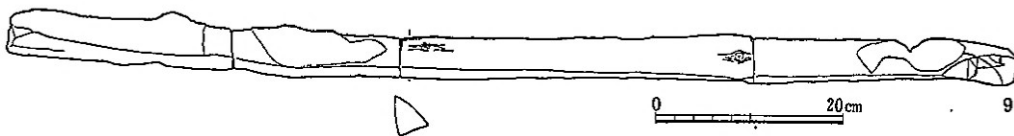
〔木器〕 (9~12)

杓子木製品 (10) 井戸第Ⅱ層から出土した。身は長さ2.5cm、最大幅7.4cmを測り、平面形は

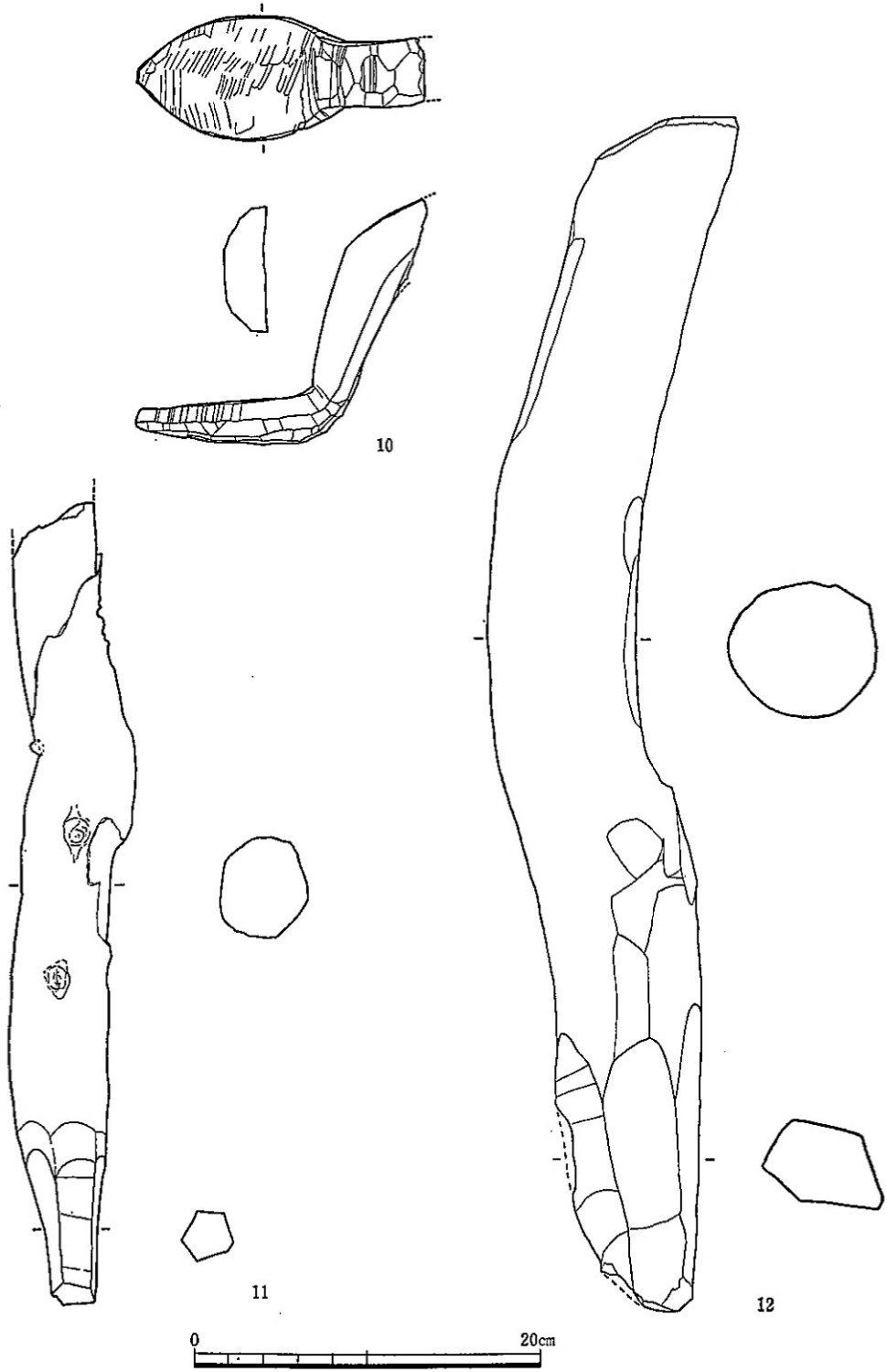
卵形を呈する。先端は削り取られており、幅0.7cmを測る。まだ削り貫かれていない。上面は平坦で、断面形はかまぼこ形を呈する。最大厚2.4cm、側縁幅1.0cmを測る。身と柄は、内側で120°、外側で116°開く。柄の内側は、つけ根から8.0cmの部分で更に外側へ57°開く。約10.5cmが残っている。厚さは、



第78図 SE3001出土遺物実測図



第79図 SE3001出土遺物実測図



第80図 SE 3001出土遺物実測図



つけ根部で2.4cm、最大厚3.9cmを測る。

横木(9) 長い自然木をみかん割りにして、表面は無加工のまま使用されており、樹皮が残っている。その断面は細長い三角形を呈し、最大幅約40cmを測る。全長107.3cmを測る。検出時は三つに折れていた。

杭(11) 現存長46cm、径5.36cmの自然木をそのまま使用しており、杭身は原木の枝を落とすだけの簡単な方法で作られている。樹皮も残っている。先端を6面削り、杭先をつくっている。杭先は10.4cmを測る。

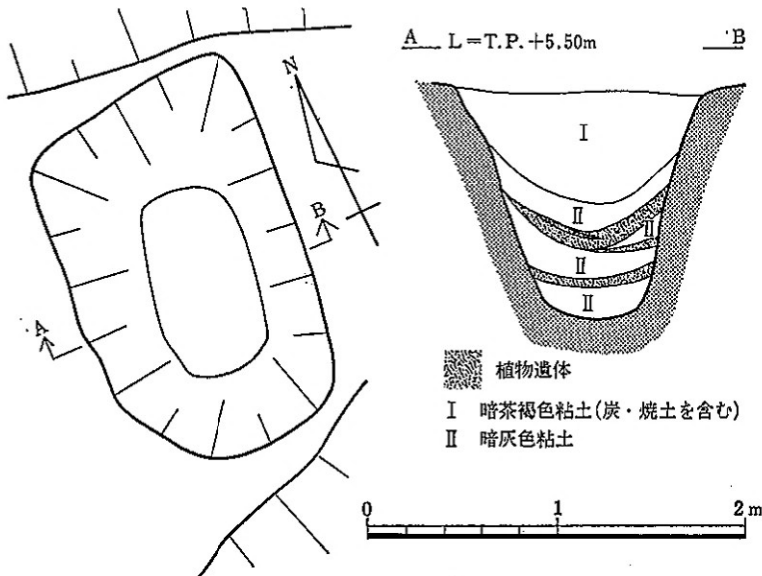
杭(12) 現存長69.5cm、直径4.3cmを測る。先端を6面削り、杭先をつくっており、9.0cmを測る。身は枝を落とし、部分的に削る程度の簡単な加工が施されているのみで、自然木をそのまま使用している。

S E 3002 (第81図) H-4区で検出され、南北に長い隅丸長方形で長軸1.95m、短軸1.20m、深さ1.3mを測る。断面形はU字形である。埋土は下から暗灰色粘土層、植物遺体層が交互に続き、最上層の暗茶褐色粘土層には、炭・灰が混る。

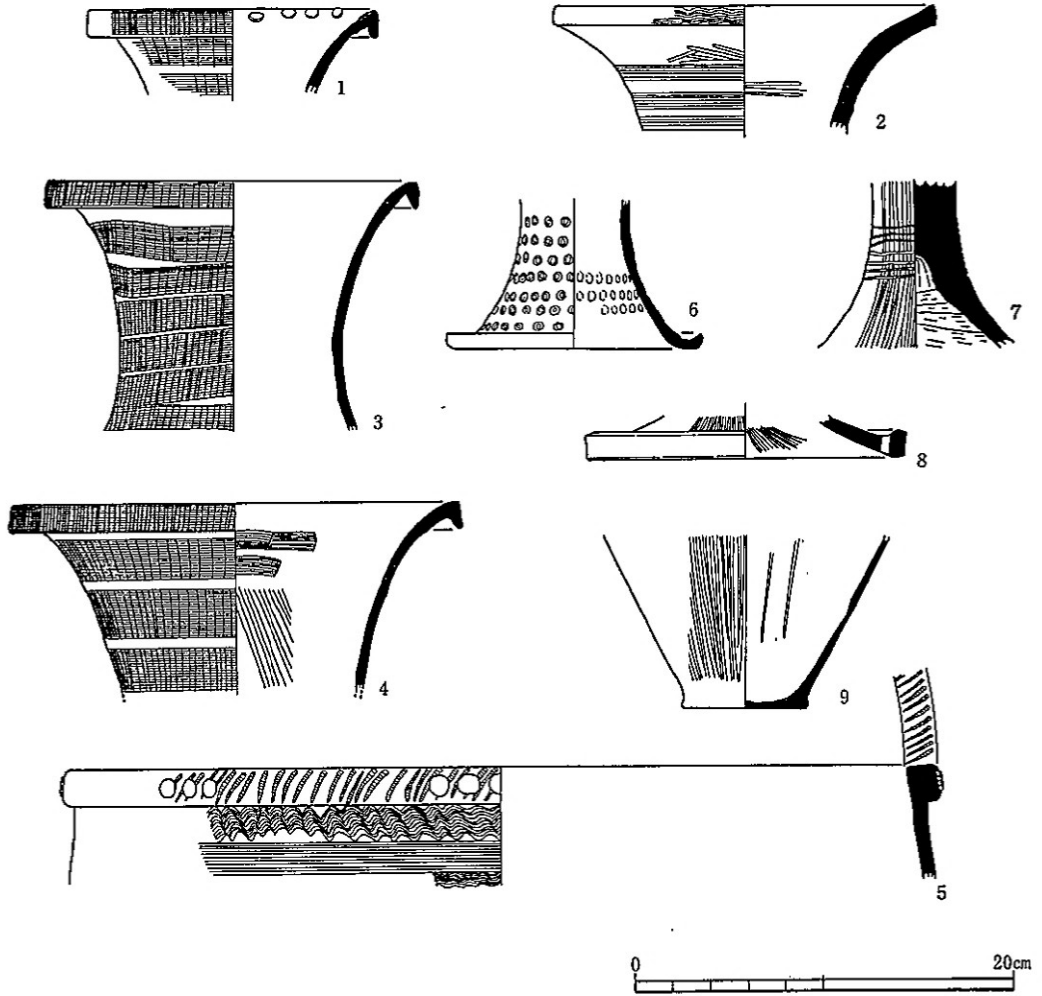
#### 出土遺物(第82・83図)

〔土器・土製品〕(1~10) 壺形、甕形、高杯形、鉢形、台付鉢形、蓋形土器、土製紡錘車等が出土した。第Ⅲ-Ⅳ様式である。

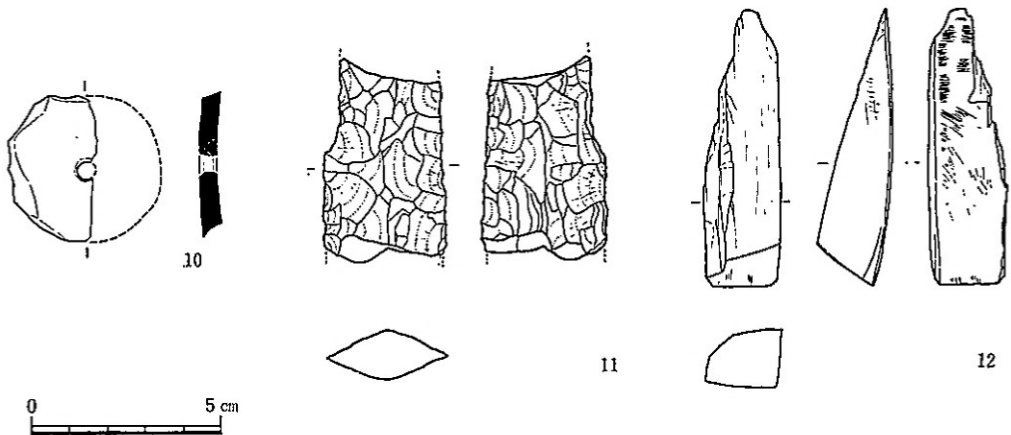
壺形土器(1・2・3・4) (1・2・3)は筒状の頸部に外反する口縁部をもち、端部は下方に拡張する。外面は籐状文を飾り、内面は(4)はハケメ調整で、(1)(3)がナデ調整である。(1)は口縁内面に円形浮文を施す。復元口径は(3)が19.4cm、(4)が23.6cm、(1)が15.0cmを測る。(2)は復元口径19.8cmを測り、筒状の頸部に外反する口縁部をもち、端部は面をなす。他の出土遺物に比べ若干時期は古い。波状文も直線文も6条の歯をもつ原体で施す。



第81図 S E 3002遺構平面図及び土層断面図(1/40)



第82図 SE 3002出土遺物実測図



第83図 SE 3002出土遺物実測図

鉢形土器(5) 復元口径45.4cmを測り、直口する段状口縁部をもつ。端部上面、外面を列点文で飾り、外面には3個1対の円形浮文を施す。体部外面に10~12条の波状文と13条の直線文を施す。

台付鉢形(6)、高杯形(7)土器はいずれも脚部だけである。(6)は復元裾部径13.5cmを測り、脚部外面に竹管文を施し、内面には煤が付着している。(7)は脚部に7条の沈線を施す。外面に煤が付着し、内面はヘラケズリ調整である。(9)は甕形土器の底部と思われる。復元底径6.6cmを測り、外面に煤が付着する。(6・7・9)ともに生駒西麓型の胎土である。

蓋形土器(8) 復元口径16.8cmを測り、口縁部直上に穿孔している。内面はハケメ調整である。

土製紡錘車(10) 径3.8cmを測り、1/2片である。土器片を転用し、周縁は打ち欠いている。現重量6.25gである。穿孔は内から外へあけられている。

#### 〔石器〕(11・12)

柱状片刃石斧(12) 片理面で剝離し、基部及び刃部の1部のみ残存している。残存長7.3cm、同幅2.1cm、同厚1.5cm。A面刃部には若干のタテ方向の、B面基部にはヨコ及び右下りナナメ方向の、刃先付近にはタテ方向の擦痕が、それぞれ認められる。石質は結晶片岩。

石槍(11) 現存長5.3cm、幅3.2cm、厚さ1.3cmを測る。中央部のみ残存。断面は菱形を呈する。両側辺から剝離を施し、中央に稜をつくる。右側辺はほぼ直線であるが、左側辺は剝離が揃わずジグザグを呈する。

**SE3003**(第289図) J-2区で検出され、南半部をSD3041に大きく削られ、平面円形で径0.7~0.8mの深さ0.8mを測る。埋土は黒色粘土である。

#### 出土遺物(第84図)

〔土器〕(1~3) 甕形土器等が出土した。第Ⅲ様式である。

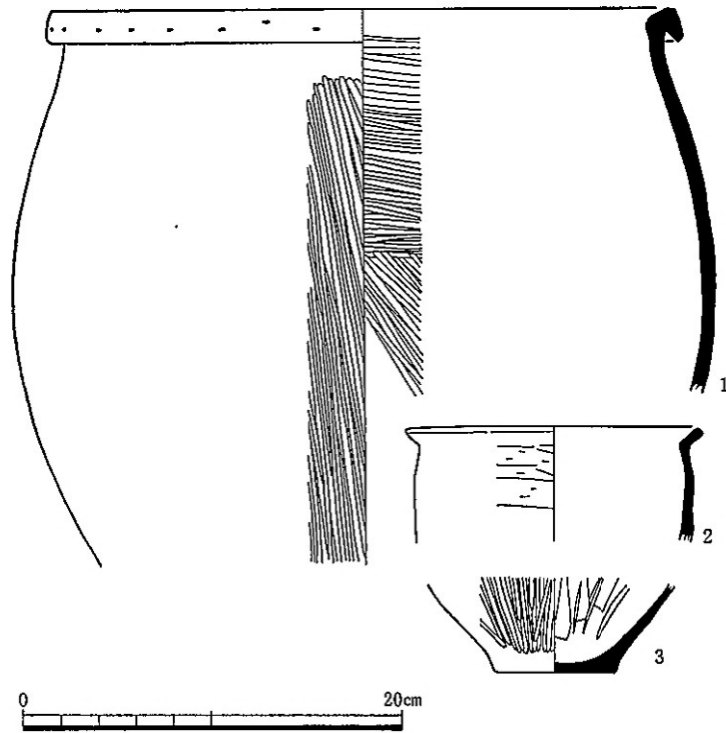
(1)は復元口径33.0cm、最大腹径37.2cmを測り、口縁部は短く外反し、下方に拡張する。端面に刺突文を有する。生駒西麓型の胎土である。(2)は復元口径15.2cmを測り、「く」の字に外反する口縁部をもつ。外面はヘラケズリ調整と思われる。(3)の内面はヘラナデ調整である。

**SE3008**(第289図) I、J-3区で検出された平面不整円形で径0.65~0.7m、深さは南半部をSD3041に大きく削られ、北側に残る肩部で1.25mを測る。埋土は黒色粘土である。

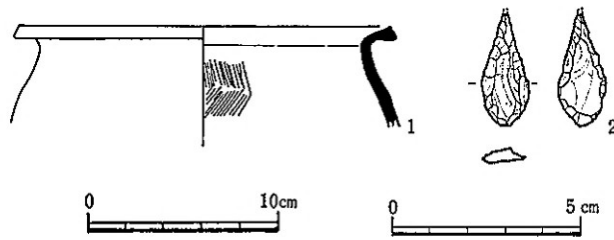
#### 出土遺物(第85図)

〔土器〕

(1) 甕形土器等を出土した。第Ⅲ様式である。甕形土器は復元口径19.6cmを測り、口縁部は外反し、端部はやや下方に肥厚する。内面はハケメ調整で生駒西麓型の胎土である。



第84図 SE3009出土遺物実測図



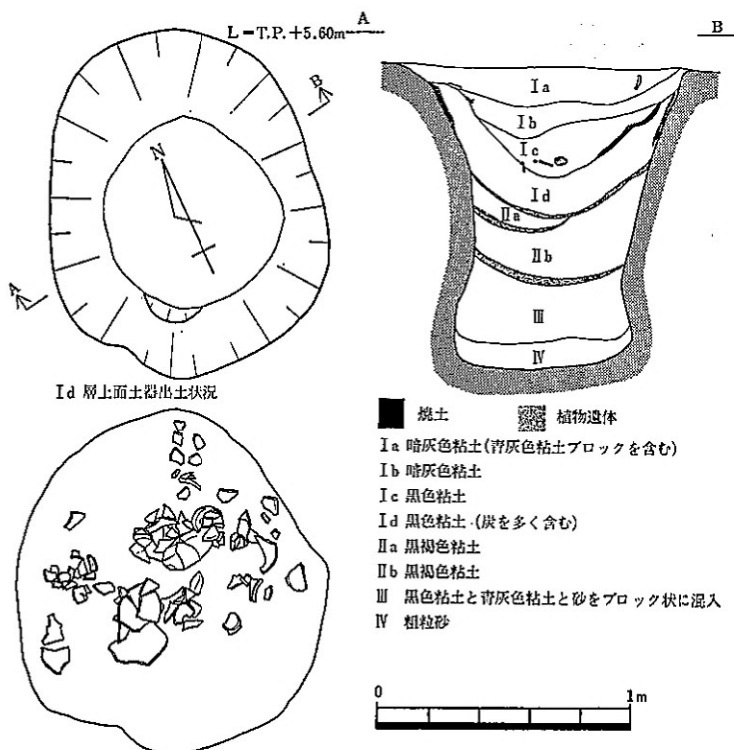
第85図 SE3008出土遺物実測図

〔石器〕

石鏃が出土した。石鏃（2）は現存長3.0cm、幅1.2cm、重量1.3gを測る。円基無茎式。先端欠損する。鏃身両側辺は、ほぼ直線的にのびる。両面とも中央に主要剥離面を残し、縁辺から細かい調整剥離を加える。

SE3009（第86図） J-3・4区でSK3015、SK3016を切って検出され、平面楕円形で掘方の長径1.38m、短径1.1m、深さ1.15mを測る。断面は底近くで袋状に広がる。

埋土は下から粗粒砂層、青灰色粘土・粗粒砂・黒色粘土のブロック層、灰色粘土の薄層、黒色粘土層（灰、植物遺体多い）、灰色粘土・黒色粘土・暗灰色粘土のブロック層である。



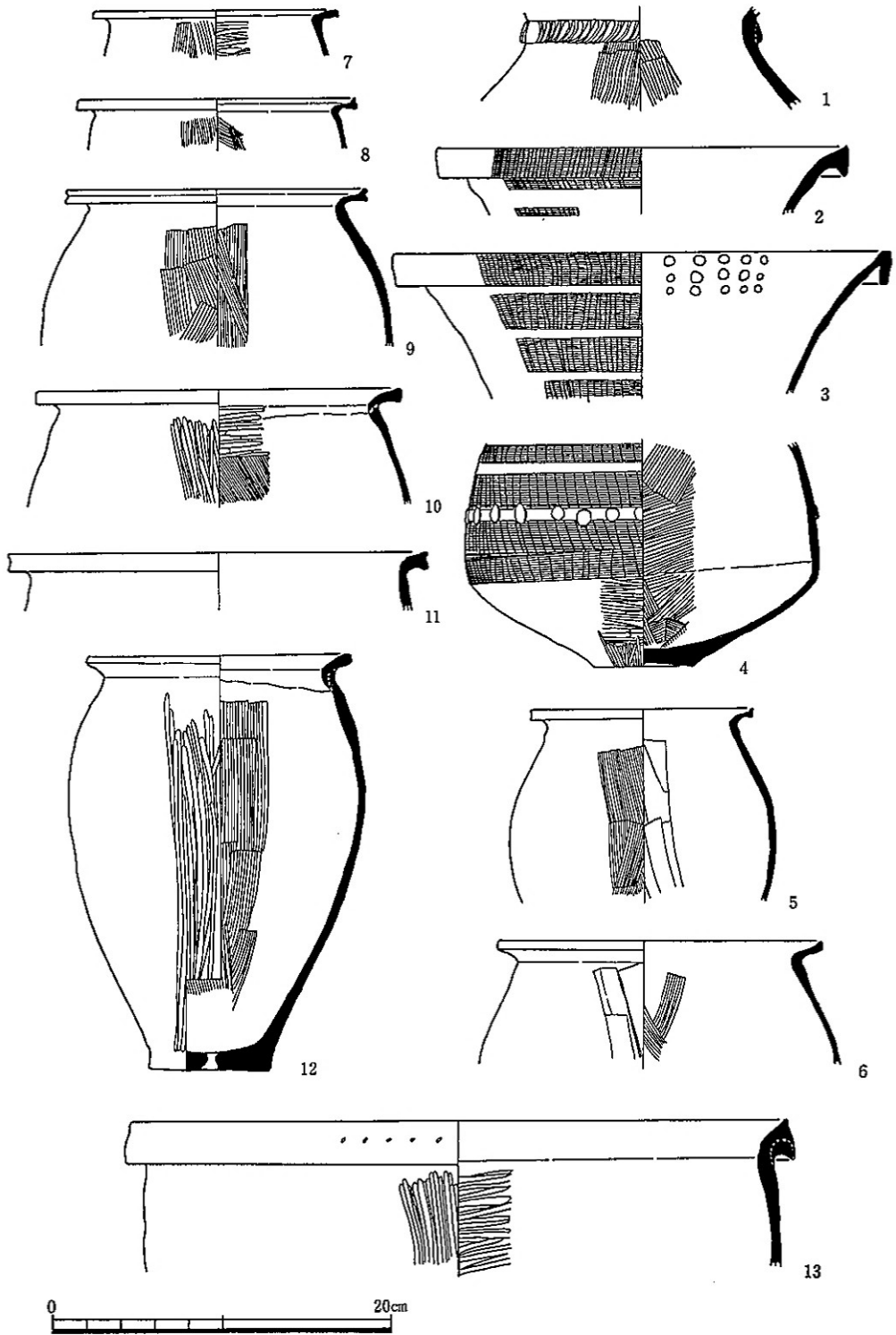
第86図 SE 3009遺構平面図及び土層断面図(1/50)

#### 出土遺物(第87・88図)

〔土器・土製品〕(1~19) 壺形、甕形、鉢形、把手付鉢形、小型鉢形土器、高杯形土器、土製紡錘車等が出土した。第Ⅲ様式新段階—Ⅳ様式である。

壺形土器(1・2・3・4) (1)は刻目凸帯をもつ頸部で内外面ハケメ調整を施されている。生駒西麓型の胎土。(2・3)は外反する口縁部をもち、端部は下に拡張し、外面を簾状文で飾る。胎土は生駒西麓型である。(2)は復元口径24cmを測る。(3)は復元口径29.2cmを測り、口縁部内面に円形浮文を3段並べる。(4)は最大腹径20.4cm、底径6cmを測る。胴、底部であるが同じような口縁がつくと思われる。内面はハケメ調整で、生駒西麓型の胎土である。

甕形土器(5・6・7・8・9・10・11・12・13) (5・8・9)は口縁端部が上方に突出している。(5)は復元口径13.2cm、最大腹径15.6cmを測り、外面ハケメ、内面ヘラナデ調整である。外面に煤が付着する。(8)は復元口径16.2cmを測り、内外面ハケメ調整である。外面に煤が付着する。(9)は復元口径17.8cmを測り、内外面ハケメ調整である。外面に煤が付着する。(7・10・11・12)は生駒西麓型胎土である。(7)は復元口径14.2cmを測り、外面はハケメ調整を施し、煤が付着する。(10)は復元口径21.2cmを測り、内面肩部にヘラミガキ、その下はハケメ調整である。(11)は復元口径24.6cmを測る。内外面はヨコナデである。(12)は口径15.4cm、器高24.7cm、最大腹径17.3cmを測り、外面ヘラミガキ、内面ハケメ調整を施す。底部に焼成後穿孔を施す。外面3/4は2次的に火を受け、赤褐色を呈する。(6)は復元口径19.0cmを測



第87図 SE 3009出土遺物実測図

り、内外面ハケメ調整である。外面は煤が付着する。(13)は復元口径38.8cmを測り、端部に粘土を付加し、上下に拡張する。端部に刺突文が施され、体部外面ヘラミガキ調整である。外面に煤が付着する。

把手付鉢形土器 (16・17・18) (16)は復元口径14.0cmを測り、口縁部外面は凹線2条で飾る。内外面ともにヘラミガキ調整が施されている。(17・18)は生駒西麓の胎土である。(17)は復元口径15.2cmを測り、口縁端部は面をなし、内外に刻目を施す。内外面ハケメ調整で、把手の接合はハケメ調整後行なわれている。2次的に火を受けている。(18)は復元口径16.0cmを測り、口縁端部は内部にやや肥厚し、内外面に刻目を施す。外面は列点文で飾り、内面はヘラミガキ調整である。把手は消失していた。

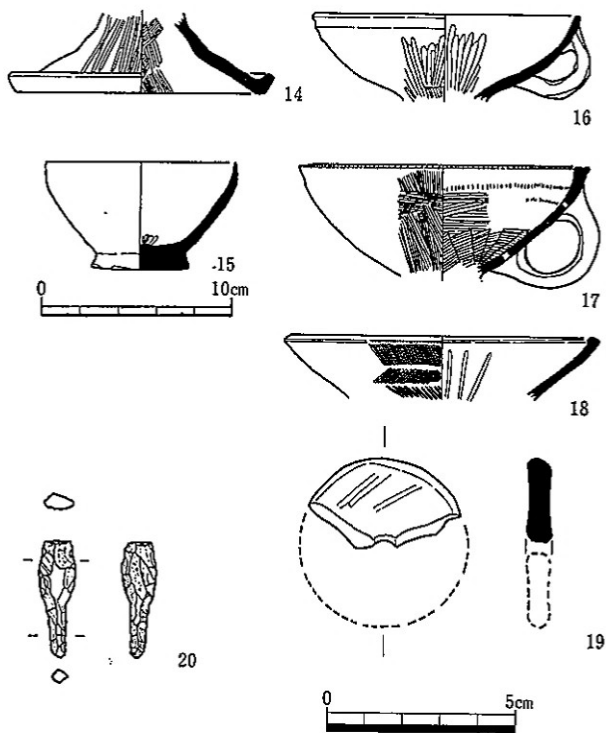
小型鉢形土器 (15) 復元口径10.0cm、器高 5.6cmを測り、外面ナデ調整、内面底部はヘラミガキ、体部はハケメの上をナデ調整である。仕上は雑である。

高杯形土器 (14) 脚部のみ残存していた。生駒西麓型の胎土で、内面はハケメ調整である。復元裾部径13cm、現存高4.5cmを測る。

土製紡錘車 (19) 1/4程度の破片で復元径 5.0cmを測り、焼成前に穿孔されているところから、初めから紡錘車用に作られたようである。両面は磨いている。

〔石器〕 (20) 石錐1点が出土している。現存長3.1cm、幅0.9cm、厚さ0.5cm、錘長1.3cm、錐径0.4×0.3cmを測る。楕円形の頭部に棒状の錐部がつく。頭部上半欠損。頭部両面とも大剝離面

を残して周辺を剝離調整する。錐部は両側辺から剝離を加え、稜線をつくる。錐部先端は摩滅し、丸い。



第88図 S E 3009出土遺物実測図

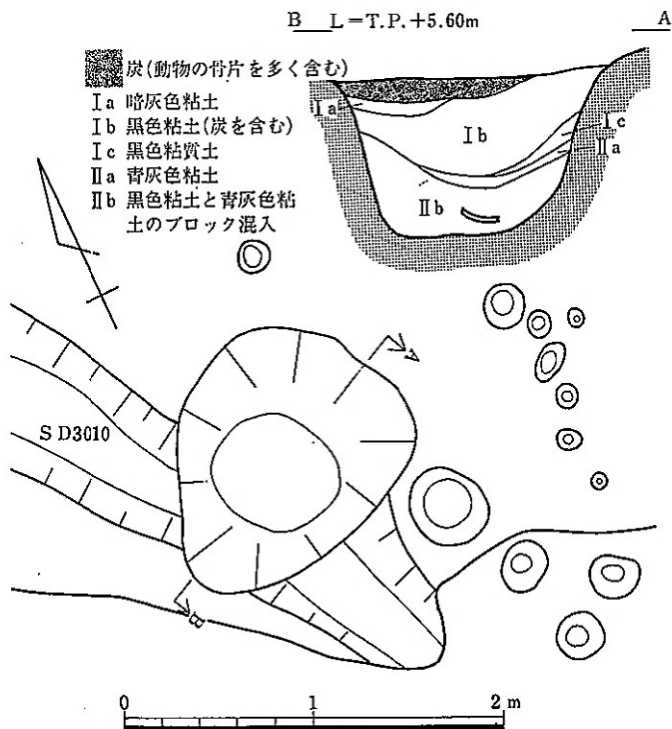
**SE3010** (第89図) Ⅰ-4区で検出され、SD3010を切っている。平面楕円形で長径1.5m、短径1.2m、深さ0.85mを測る。断面はU字形である。埋土は下から地山の青灰色粘土(シルト)を含むブロック粘土層、炭混り灰黒色粘土層、地山の青灰色粘土(シルト)・灰黒色粘土のブロック層、動物の骨を多く含む炭層、地山の青灰色粘土(シルト)と灰黒色粘土のブロック混合層である。

出土遺物(第90図)

〔土器〕(1~11) 壺形、甕形、高杯形、鉢形、台付鉢形土器等が出土した。第Ⅲ様式新段階-Ⅳ様式である。

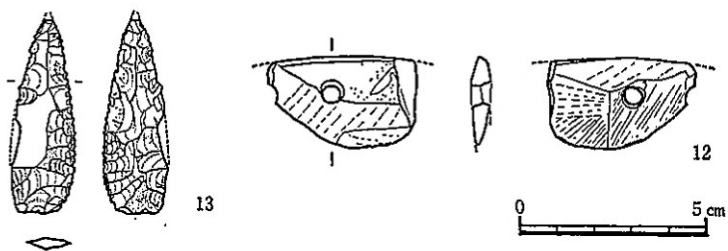
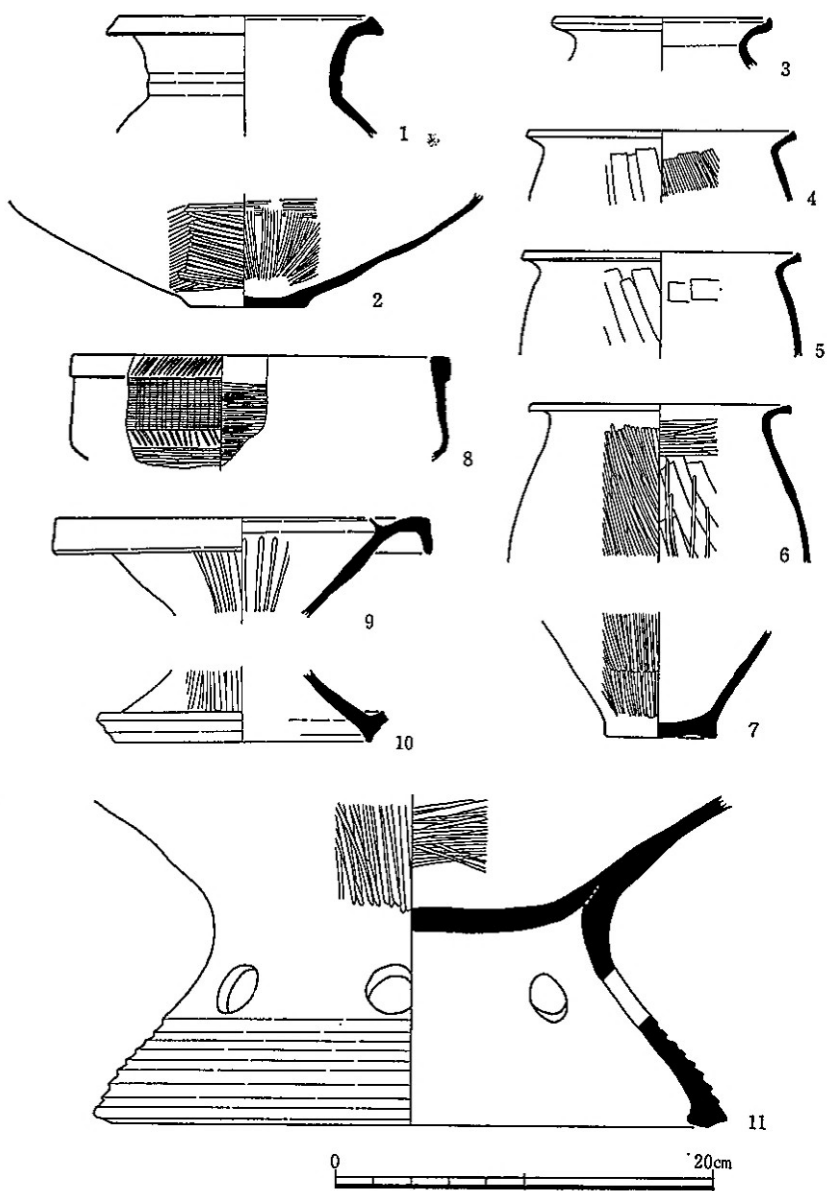
壺形土器(1・2) (1)は復元口径13.4cmを測り、短い筒状の頸部から外反する口縁部をもつ。端部は上下にやや拡張する。頸部に凹線状のものを施す。生駒西麓の胎土である。(2)は底部のみで、底径6.0cmを測る。外面はヘラミガキ、内面はハケメである。

甕形土器(3・4・5・6・7) (3)は復元口径11.0cmを測り、口縁部は外反し、端部を上方向につまむ。(4・5)は外反する口縁部をもつ。(4)は復元口径14.0cmを測り、外面はヘラナデ、内面はハケメ調整である。2次的に火を受けている。(5)は復元口径14.6cmを測り、内外面はヘラナデ調整である。(6)は生駒西麓型胎土である。復元口径13.6cmを測り、外反する口縁部をもつ。内面はナデの上をヘラミガキ調整している。外面に煤が付着する。(7)は底部片で底径5.9cmを測り、内面に煤と炭化物が付着する。



第89図 SE3010遺構平面図及び土層断面図(1/40)





第90图 SE3010出土遺物実測図

高杯形土器(9・10) (9)は復元口径19.6cmを測り、水平口縁部をもつ。2次的に火を受けている。(10)は復元裾部径13.7cmを測り、裾端部外面は凹線状を呈する。内面はナデ調整である。

鉢形土器(8) 復元口径19.9cmを測り、段状口縁部をもつ。口縁端部を列点文で飾り、体部に簾状文と列点文を施す。

台付鉢形土器(11) 脚部片で、裾部径32.5cmを測る。脚外面に凹線文8条を施す。透し穴は推定8ヶ所である。

〔石器〕(11・12)

石庖丁(11) 背部はゆるく彎曲し紐孔が2ヶ認められる。刃部は欠損して不明、背部は研磨されている。片面に、研磨痕が認められる。現存長4cm、幅2.4cm、厚さ0.5cmを測る。石質は頁岩。

石鏃(12) 1点が出土している。現存長5.0cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重量3.8gを測る。平基無茎式。先端欠損する。断面は薄い菱形を呈する。両面とも両側刃から剝離調整を施す。片側にのみ両面トリミングを加えるため、縁辺は鋸歯状を呈する。B面下方に自然礫面を残す。

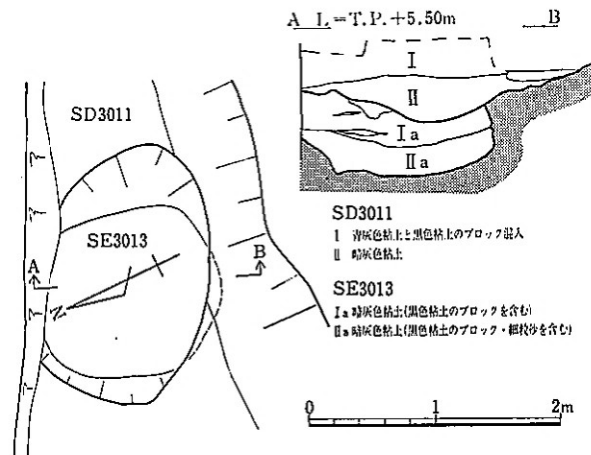
SE3013(第91図) K-5区で検出され、上部をSD3011に削られている。平面楕円形で、長径2.5m、短径1.9m以上、現存の深さ0.65mを測り断面U字形である。埋土は暗灰色粘土(灰黒色粘土のブロック混る)が主で、中層に植物遺体層を挟在し、上層は灰黒色粘土の小さいブロックが混る暗灰色粘土層である。

出土遺物(第92・93図)

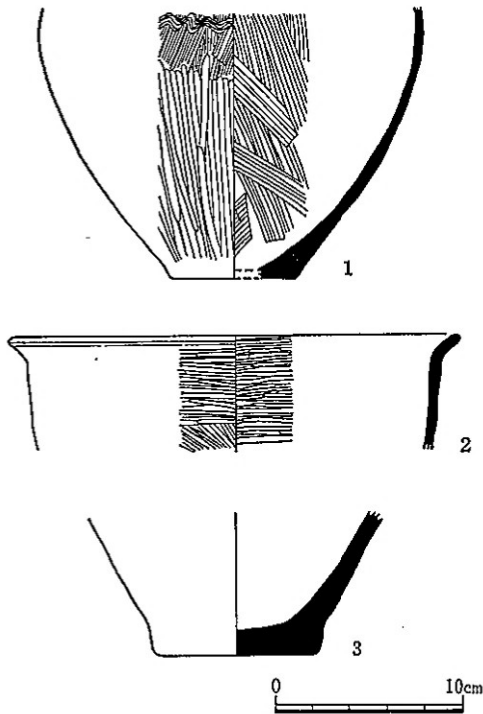
〔土器〕(1~3) 壺形、甕形土器等が出土した。時期は中期前半である。

壺形土器(1) 胴、底部片で、最大腹径20.4cm、復元底径6.6cmを測り、腹部外面にハケメ調整の上に4条の波状文を施す。

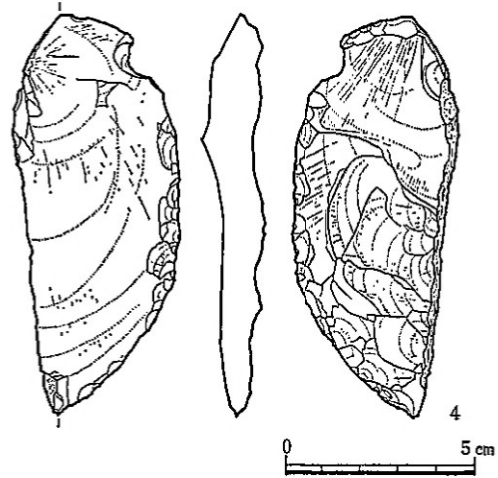
甕形土器(2・3) (2)は復元口径23.4cmを測り、なだらかに外反する口縁部をもつ。外面に煤が付着する。生駒西麓型の胎土である。(3)は底部片で、底径8.4cmを測り、内面に炭化物が付着する。



第91図 SE3013・SD3011遺構平面図及び土層断面図(1/50)



第92図 SE 3013出土遺物実測図

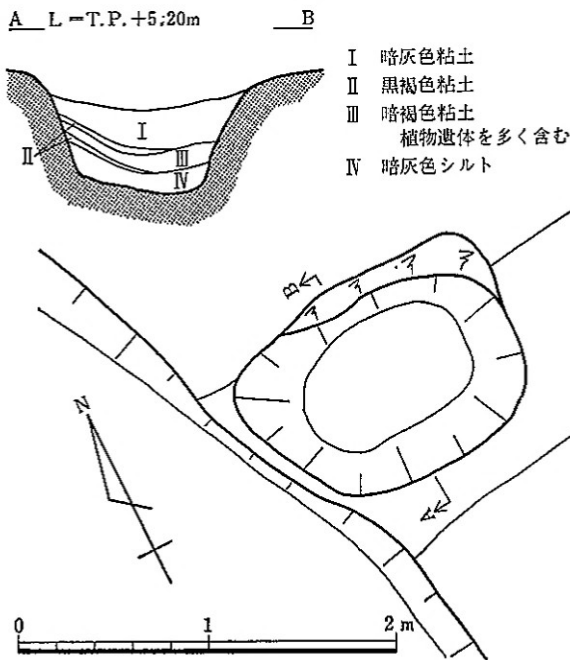


第93図 SE 3013出土遺物実測図

〔石器〕スクレイパー（4） 長さ10.7 cm、幅4.1cm、厚さ1.1cmを測る。縦長の扁平な剥片を利用する。A面は左上に打点のある大剝離面の右側辺に簡単な剝離を加え刃部をつくる。B面は上半に大剝離面を残し、下半は剝離調整を施し、左側辺にさらに細かい剝離を加えて刃部を形成する。背部に自然礫面を残す。

SE 3014（第94図） K-6区のSD 3010の底面で検出された。平面楕円形で長径1.45m、短径1.10m、深さ0.55mを測る。埋土はⅠ層—暗灰色粘土、Ⅱ層—黒褐色粘土、Ⅲ層—暗褐色粘土、Ⅳ層—暗灰色シルトの4層に大別できる。埋土中には、植物遺体が多く含まれ、Ⅲ層中には薄層で挟在している。遺物は土器の細片が少量出土したのみである。

出土遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。



第94図 SE 3014遺構平面図及び土層断面図（1/40）

**SE3015** (第95図) K-6区、連続壁ぎわで、全体の $\frac{1}{2}$ 程度が検出されるにとどまり、規模等は明らかではないが、推定径1mほどの円形であると思われる。

出土遺物 (第96図)

〔土器〕 (1~3) 高杯形、蛸壺形土器等が出土した。第Ⅲ様式である。

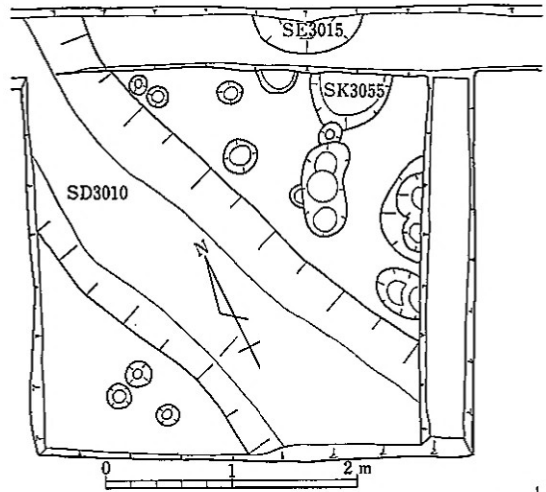
高杯形土器 (1・2) (1)は復元口径30.6cmを測り、水平口縁部をもつ。(2)は脚部片で、脚部径14.6cmを測る。端部に刻目を施す。生駒西麓型の胎土である。

蛸壺形土器 (3) 口径4.5cm、器高10.2cmを測り、外面へラミガキ調整で、丁寧な作りである。穿孔は2ヶ所である。

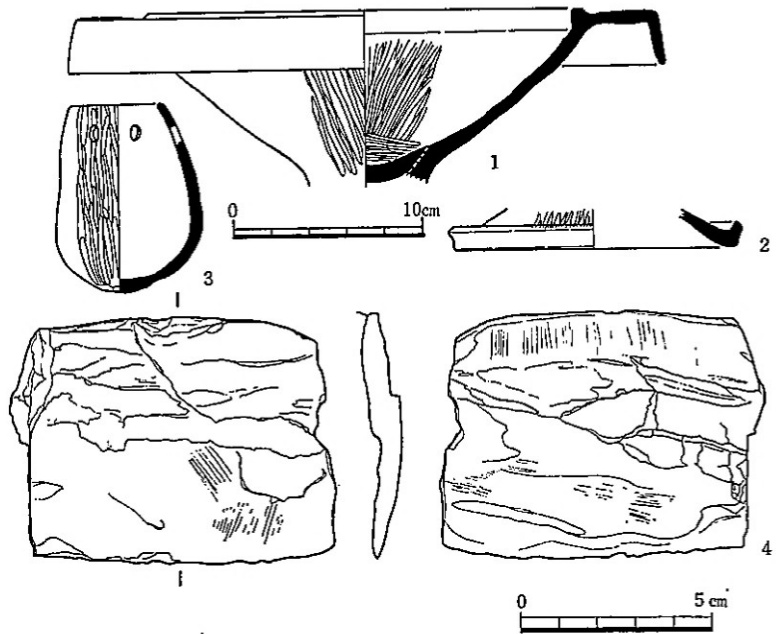
〔石器〕石庖丁 (4) わずかに外彎する刃部をもち、背部もわずかに彎曲する未製品である。A面幅の $\frac{1}{2}$ あたりまで研磨され、B面刃先より1.5cmあたりまで刃先に直交して研磨されている。現存長8.5cm。幅6.5cm、厚さ0.8cmを測る。

〔鉄器〕 図示できなかったが、表面がやや波形を呈する板状の鉄製品の一部と考えられる。残存長3.6×幅3.4、厚さ0.6cm、重さ19.2gを各々測った。全体に腐蝕が著しい。

**SE3016** (第97図) 1-7区で検出され、SD3009を切っている。平面楕円形で、長径0.9m、短径0.7m、深さ0.45mを測る。埋土は下から暗褐色粘土層、黒褐色粘土層、暗灰色粘土層の3層に分かれる。



第95図 K-6区IX d層出土遺構平面図—SE3015・SK3055・SD3010—( $\frac{1}{2}$ 縮)



第96図 SE3015出土遺物実測図

A L=T.P.+5.30m

B

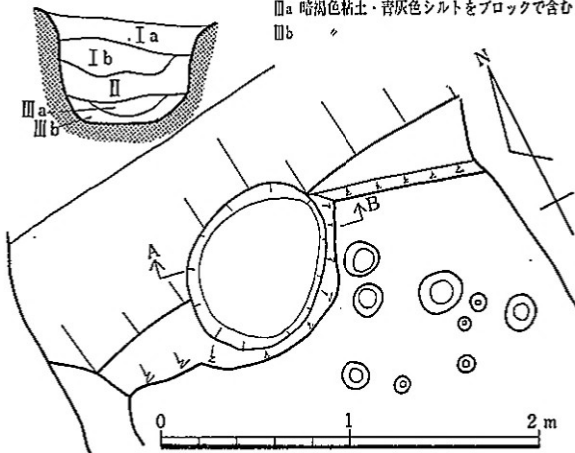
I a 暗灰色粘土

I b 〃 青灰色シルトをブロックで含む

II 黒褐色粘土

III a 暗褐色粘土・青灰色シルトをブロックで含む

III b 〃



第97図 SE3016遺構平面図及び土層断面図(1/40)

出土遺物(第98・99図)

〔土器〕 甗形土器(1・2)が出土した。第Ⅲ様式新段階—Ⅳ様式である。(1)は口径14.6cm、器高17.5cm、最大腹径13.6cmを測る。外面はヘラケズリのようなヘラナデの後、ヘラミガキ調整が施され、体部下端にはタタキ調整がわずかに残る。内面はヘラナデ及びユビナデ調整である。(2)は口径15.8cm、器高29.4cm、最大腹径20.0cmを測り、口縁部は外反し、端部は上方に突出する。外面ハケメ、内面ナデ調整を施す。外面体部上半部は煤が付着し、体部下半から底部にかけて2次的に火を受け、赤褐色に変色している。

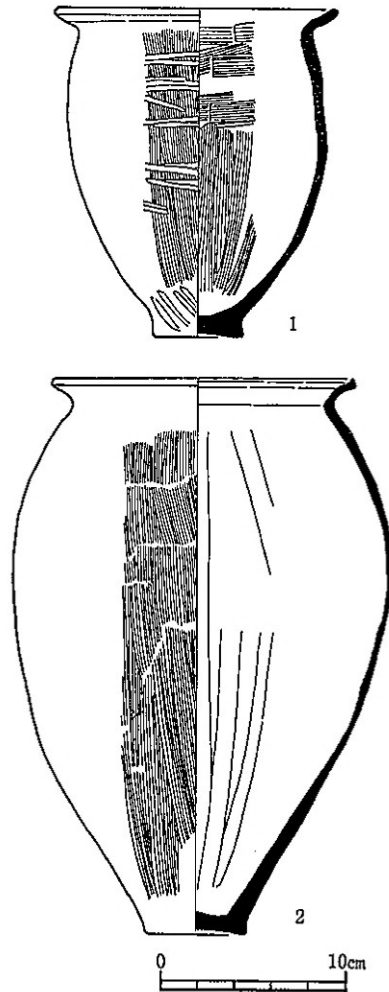
〔石器〕 石鏃(3)が出土した。長さ4.1cm、幅1.6cm、厚さ0.5cm、重量2.2gを測る。尖基無茎式。柳葉形を呈する。基部はわずかに突出する。両面とも全体に両側辺から剝離調整を施す。

小結 時期の明らかとなったものは8基で、次の通りである。

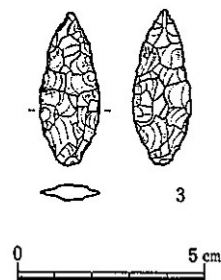
第Ⅲ様式—SE3003・3008・3015

第Ⅲ—Ⅳ様式—SE3002・3009・3010・3016

第Ⅳ様式—SE3001



第98図 SE3016出土遺物実測図



第99図 SE3016出土遺物実測図

〔埋土〕 基本的には黒色粘土または暗灰色粘土層で、更に（1）植物遺体の薄層を含むもの（S E 3002・3013・3014）（2）炭、灰層を含むもの（S E 3002・3009・3010）（3）人為的埋積土と考えられる青灰色シルト、黒色粘土の小ブロックを含むもの（S E 3001・3009・3010）に分けることができる。S E 3002・3004・3009・3010は堆積状況から、井戸本来の機能が停止した後、人為的に埋めてしまったか、或いは「廃棄の場」として利用されたと考えられる。S E 3010では埋土中からイノシシ、鳥類、スッポン、ナマズの骨片が採集されている。

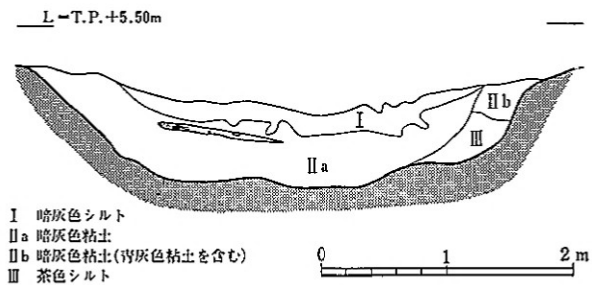
〔遺物出土状況〕 大半が埋土中から細片で出土している。S E 3002、3004、3009、3010では機能停止後の堆積土中から多く出土している。

#### 4 溝

調査区のほぼ全域に分布しており、総数29条が検出された。北東部の包含層中からも検出された。

S D 3001、S D 3002、S D 3003、いずれも調査区東南部、NR 3001の堆積土の砂層を除去した後、地山面で検出された。3条はほぼ平行して南北に走る。南側はNR 3001によって削平されており、北側へは調査区外へ延びるものと考えられる。

S D 3001（第100図） 全長 6.0 mを検出。底部幅2.1m、上部幅3.5 m、深さ 0.8mを測る。断面形は、逆台形を呈する。埋土は、I層—暗灰色シルト層、II層—暗灰色粘土層の2層に大別できる。



出土遺物（第101・102・103

第100図 S D 3001土層断面図（1/50）

図）

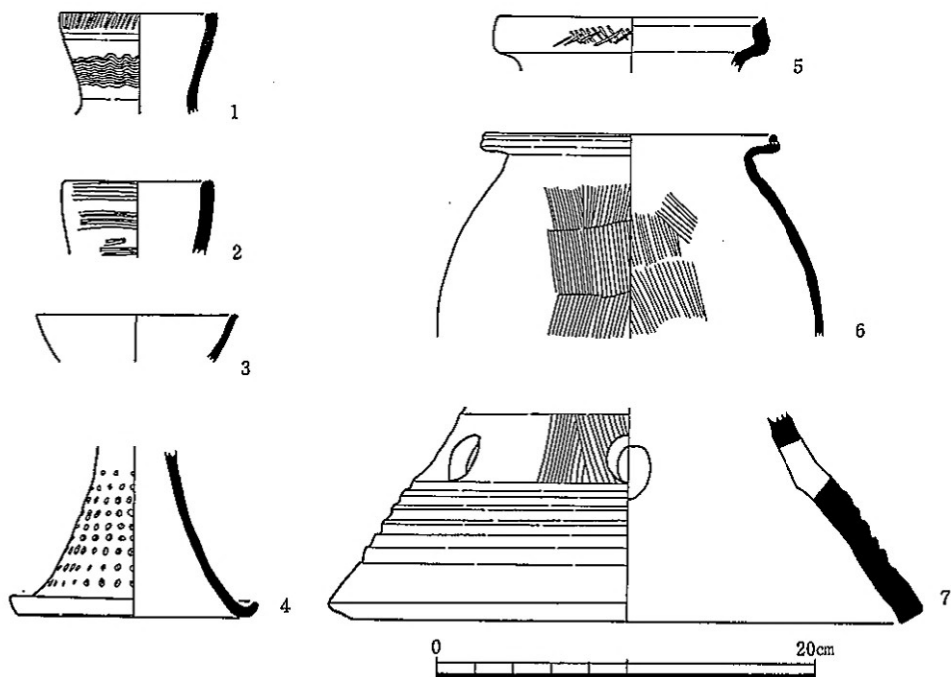
〔土器・土製品〕（1～8） 壺形、細頸壺形、甕形、鉢形、台付鉢形、器台形土器、土製円板等が出土した。第Ⅲ様式新段階—Ⅳ様式である。

壺形土器（5） 復元口径14cmを測り、外反する頸部から屈曲し上方に立ち上がる口縁部をもつ。口縁部外面に櫛で斜格子文状に刻む。外面に煤が付着している。

細頸壺形土器（1・2）（1）は復元口径 8.2cmを測り、直口する短い口縁部をもち、口縁部外面に凹線を施し、ヘラで刻目、頸部に波状文を施す。（2）は復元口径 7.8cmを測り、口頸部を直線文で飾る。

甕形土器（6） 復元口径15.2cmを測り、水平気味に外反する口縁部をもち、端部は上方につまみ上げる。内外面はハケメ調整で、外面に煤が付着する。

鉢形土器（3） 復元口径10.4cmを測る。内外面はヨコナデ調整で外面は一部ヘラミガキ調整を施す。



第101図 SD3001出土遺物実測図

台付鉢形土器（4） 脚部片で裾部径12.2cmを測り、外面に多数の竹管文を施す。生駒西麓型の胎土である。

器台形土器（7） 復元口径28.8cmを測り、外面にハケメ調整の上、凹線文を6条施す。

土製円板（8） 径6cmを測り、土器片を利用する。周縁は打ち欠いただけである。重量は36.7gである。

〔石器〕（9～13）

石庖丁（11） 内彎する刃部をもち、背部は彎曲する内彎刃形である片刃。刃部には右上がりの使用痕、刃先は一部剝離し、あとは磨滅している。背部は中央が背潰れ、肩は磨滅している。裏面端部には敲打痕が認められる。現存長8.9cm、幅3.85cm、厚さ0.8cmを測る。緑泥片岩製。

石鏃（9） 現存長5.9cm、幅1.8cm、厚さ0.5cm、重量4.9gを測る。尖基無茎式。先端欠損。柳葉形、断面はレンズ状を呈する。基部はわずかに突出する。両面とも両側辺から剝離調整を施す。エッジは鋭い。

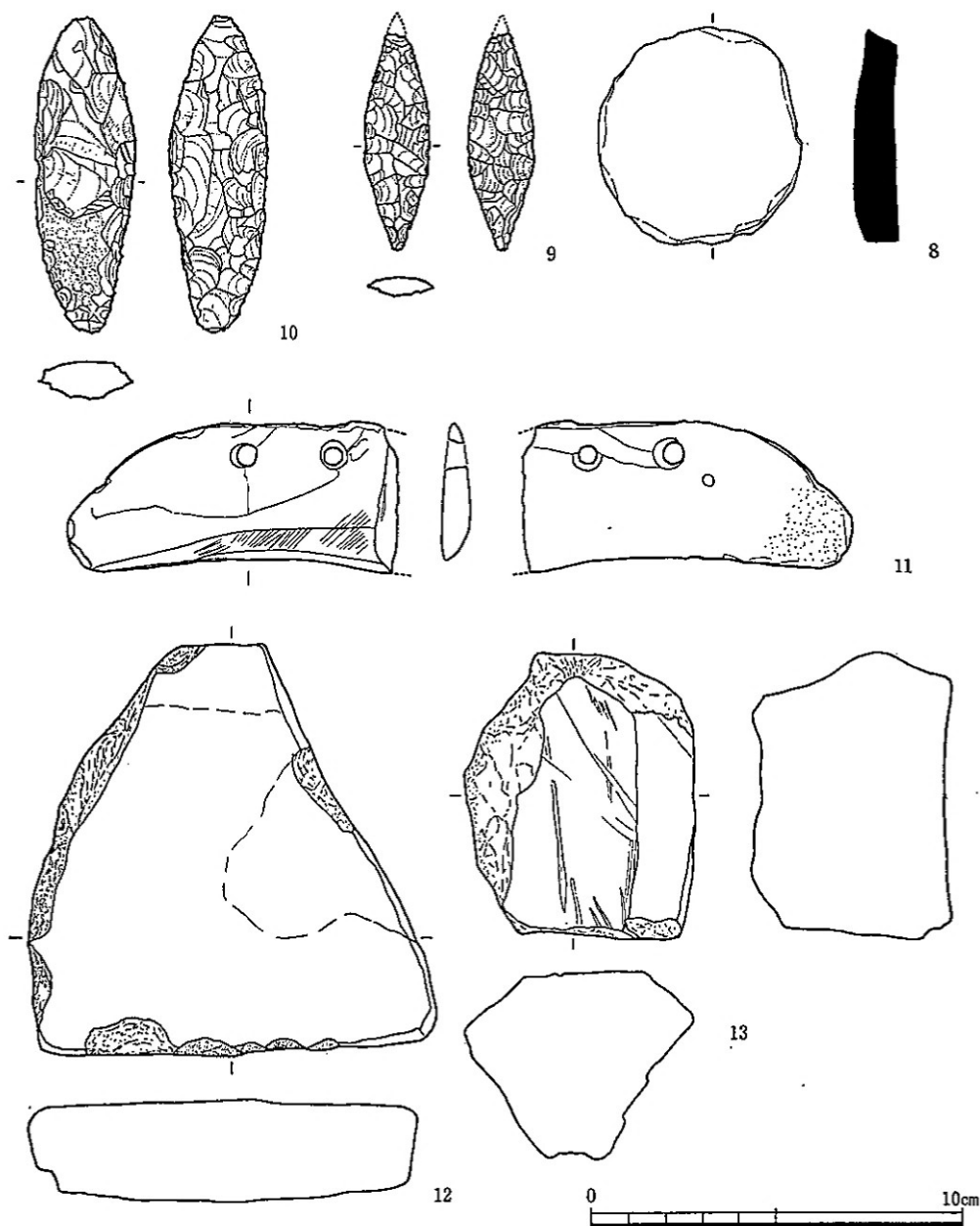
石槍（10） 長さ8.6cm、幅2.7cm、厚さ1.0cmを測る。柳葉形を呈する。A面は、下半に自然礫面、上半に大剝離面を残し周辺を剝離調整する。B面は全体を剝離調整する。両面とも部分的に階段状剝離を見る。

砥石（12・13）（12）は厚さ2.5cmの板状にした安山岩を扇形に打ち欠いて作られている。使用面は2面である。最大幅12cmを測る。（13）は長方形の自然礫の面を利用していると思われる。9cm×5.5cm、厚さ3cmを測る。

軽石 6×5.7×3cmを測る。加工痕は認められない。用途は不明である。図示していない。

〔木器〕 (14~16)

弓 (16) 弓弭頭から13.3cmが残っている。弓身は、面取りされており、断面形は、径 1.4~1.7cmの楕円形を呈する。弓弭頭から1.9cmの部分削り落とし、段を画して突起をつくりだしている。弓身には、2ヶ所に幅0.4cmの樹皮が巻かれている。段の部分で2.5cm、それより更に9.2cmの部分に1.0cmが残っている。

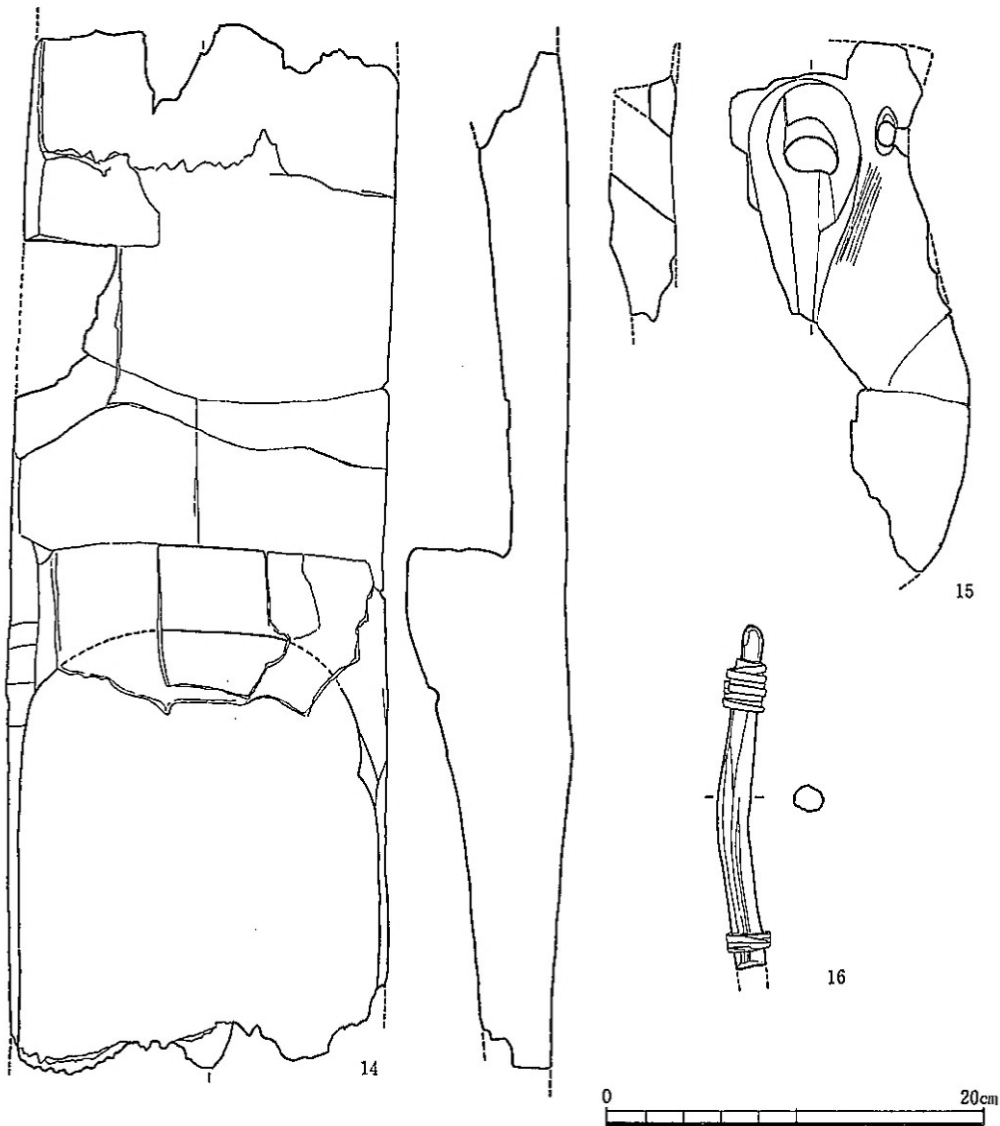


第102図 SD3001出土遺物実測図



広鋏 (15) 身の部分が約3分の2残っている。現存長28cm、頭部幅(復元推定値)約16.4cm、刃部最大幅(復元推定値)約16.4cmを測る。平面形は、着柄孔部分で若干くびれた後、卵形の刃部に至る。頭頂部より2.0cmの部分から細長い逆台形状の舟形突起がつくられている。最大厚3.6cm、現存長12.8cmを測る。舟形突起基底部から外側1cmの部分には、径1.2cmの穿孔があり柄を固定させる為のものと思われる。欠損部分にも穿孔されたと思われる。着柄孔は、径3.4cm、着柄角度は42°を測る。

梯子 (14) 現存長53.5cm、最大幅19.8cm、最大厚8.5cmを測る。足かけ部は、一段のみが残っている。足かけ部は、上面が平坦に削り出されており幅5.5cmを測る。前面を4.5cm平坦にした後、後面に対して18°の角度で削り込んで足かけ部をつくっている。

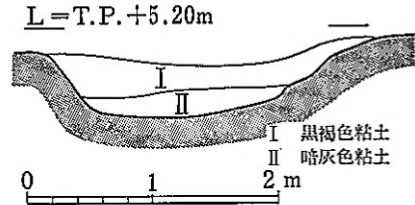


第103図 SD3001出土遺物実測図

SD3002 (第289図) 全長2.5mを検出した。底部幅1.2m、上部幅1.7m、深さ0.25mを測る。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

SD3003 (第104図) 全長 3.5mを検出した。底部幅1.2m、上部幅1.8m、深さ0.5mを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は、I層—暗褐色粘土層、II層—黒色粘土層に青灰色シルトをブロック状に含む層の2層に大別できる。



第104図 SD3003土層断面図(%)

出土遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

SD3004、SD3005、SD3006 H・I—1・2区で検出された。これら3条の新旧関係は明らかにできなかった。SD3004・3005は、ほぼ同じ東西方向に走る。SD3005は、NR3001によって削平されている。SD3004の東側は、調査区外へ更に延びる。SD3006は、北側をNR3001によって失われている。

SD3004 (第105図) 全長 5.5mを検出した。上部はSD3041によって削平されている。断面形は逆凸字状を呈する2段掘りである。底部幅は下段で0.4m、上段で1.0m、上部幅2.2m、深さは下段が0.1m、全体では地山面から0.6mを測る。埋土は、I層—暗茶褐色シルト、II層—暗灰色粘質シルト、III層—青灰色シルトと黒色粘土のブロック状混入層、の3層に大別できる。I層には、植物遺体、炭化物、灰が多く含まれる。I層からは一括で多数の土器が出土している。

出土遺物 (第106・107・108・109図)

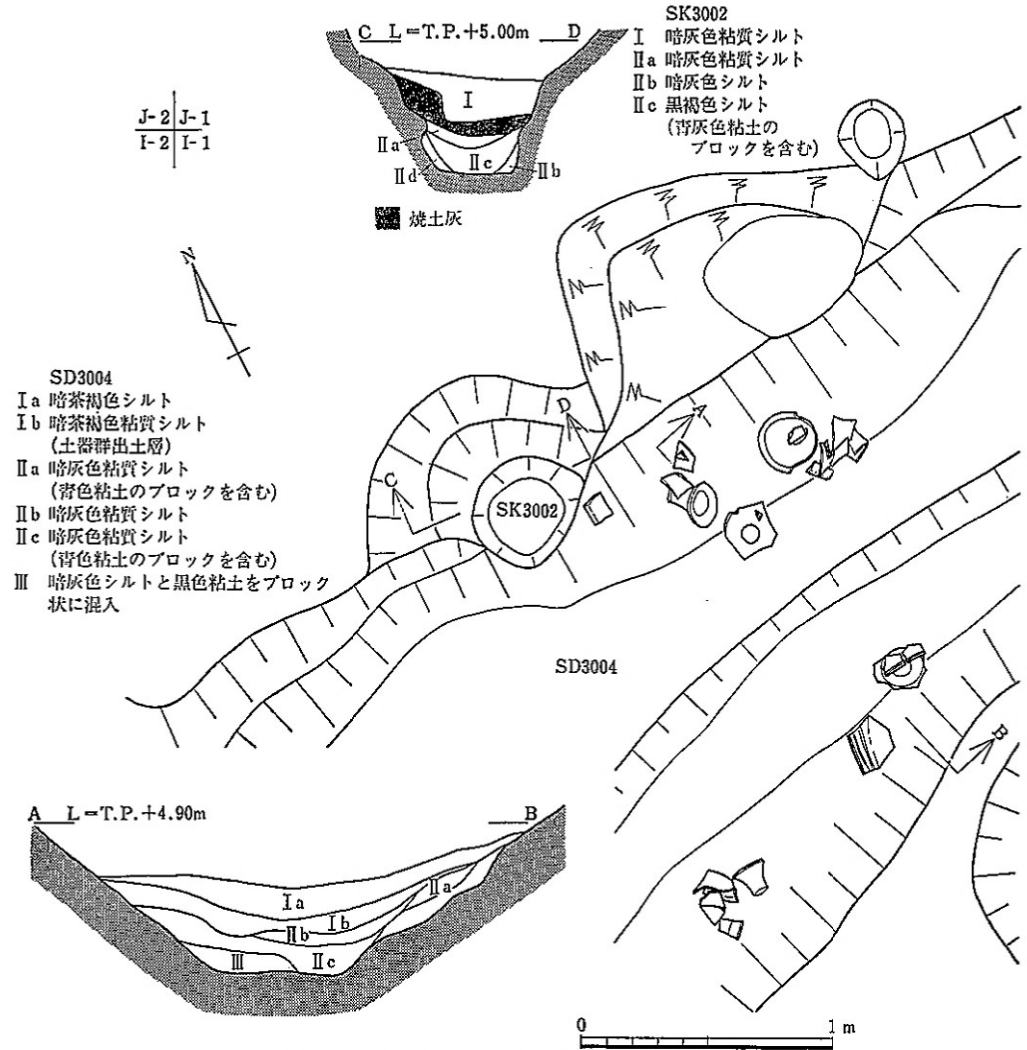
〔土器〕(1~37) 壺形、細頸壺形、無頸壺形、甕形、高杯形、鉢形、甕用蓋形土器等が出土した。第Ⅲ様式古段階である。

壺形土器(1・2・3・4・5・18・19・23・24) (1・4)は筒状の頸部から斜めに広がり外反する口縁部をもつ。端部は上下にやや肥厚する。(1)は復元口径18.6cmを測り、端部に刻目を施す。内外面ナデ調整である。(4)は復元口径27.2cmを測り、端部に4条の波状文を飾る。頸部は内外面ハケメ調整である。内部頸部から肩部にかけてナデ調整である。(2)は口径19.9cmを測り、短い筒状の頸部に外反する口縁部をもち、端部は上下にやや拡張する。内外面とも剝離等のため調整不明である。(3)は口径12.9cmを測り短く外反する口縁部をもつ。外面はハケメ、内面はヘラナデ調整である。(5)は胴、底部片である。最大腹径26.9cm、底径7.4cmを測る。内面はハケメ調整である。(18・19・23・24)は底部片で底部からの立ち上がりから判断して一応壺のものとした。(18)は底径4.7cmを測り、ハケメ調整である。(19)は底径6.3cm、内面ヘラナデ調整である。(23)は底径6.5cmを測り、生駒西麓型の胎土で胴下部に穿孔かと思われる孔がある。内面はナデ調整の上にヘラミガキ調整を施す。(24)は底径6.7cmである。

細頸壺形土器 (22) 口径 5.1cm、最大腹径14.8cmを測る。図は、それぞれは接合しない同一個体のものと思われる。3つの部分をつないで復元した。外面は口縁部から脚部にかけて6～8条の直線文で飾る。内面はヘラナデ調整である。

無頸壺形土器 (6) 復元口径15.5cmを測り、口縁端部は面をなす。口縁部外面は板切れの小口部分を用いてなでた後、中央をみがくことによって櫛描き直線文を2帯施したように見せている。

甕形土器 (7・8・9・10・11・12・13・14・15・16・20・21) (7・9・13) は胴の張らない体部から丸く外反する口縁部をもち、端部は面をなす。(7)は復元口径18.9cmを測り、外面はナデ、内面はハケメ調整を施す。外面に煤が付着する。(9)は復元口径30.5cmを測り、内面ヘラナデの上にヘラミガキ調整を施す。(13)は復元口径14.6cmを測り外面に煤が付着している。(8・12)は外反する口縁部をもち、口縁端部を上方につまみ上げている。(8)は復元口



第105図 SD3004遺構平面図及び土層断面図(1/50)

径19.9cmを測り、内外面ハケメ調整のあとナデ調整を施す。(12)は復元口径12.2cmを測り、口縁端部に刻目を施す。外面はハケメ、内面はナデ調整である。外面に厚く煤が付着する。(10・15・16)は「く」の字に外反する口縁部をもつ。(10)は復元口径13.1cmを測り、内面はナデ調整を施し、外面は煤が付着して調整不明である。(15)は復元口径16.0cm、最大腹径17.8cmを測る。外面に煤が付着している。(16)は口径12.1cm、器高20.0cm、最大腹径13.3cmを測る。外面はヘラナデ、内面はナデ調整である。外面全体に煤が付着している。(11)は口径19.9cm、器高19.2cmを測り、底部から外に開く体部でなだらかに外反する口縁部をもつ。口縁部は指でつまんで成形している。(14)は復元口径14.4cm、最大腹径16.6cmを測り、胴の張る体部になだらかに外反する口縁部をもつ。内外面ともヘラナデ調整であるが外面はヘラ削りとも思われるほど強くナデている。口縁部内面と体部外面に煤が付着している。(20・21)は底部片で、(20)は底径6cm、(21)は6.1cmを測る。(20)は内外面ナデ調整、(21)は外面をナデ、内面をハケメ調整の上にヘラミガキ調整を施す。(20・21)とも生駒西葎型の胎土である。

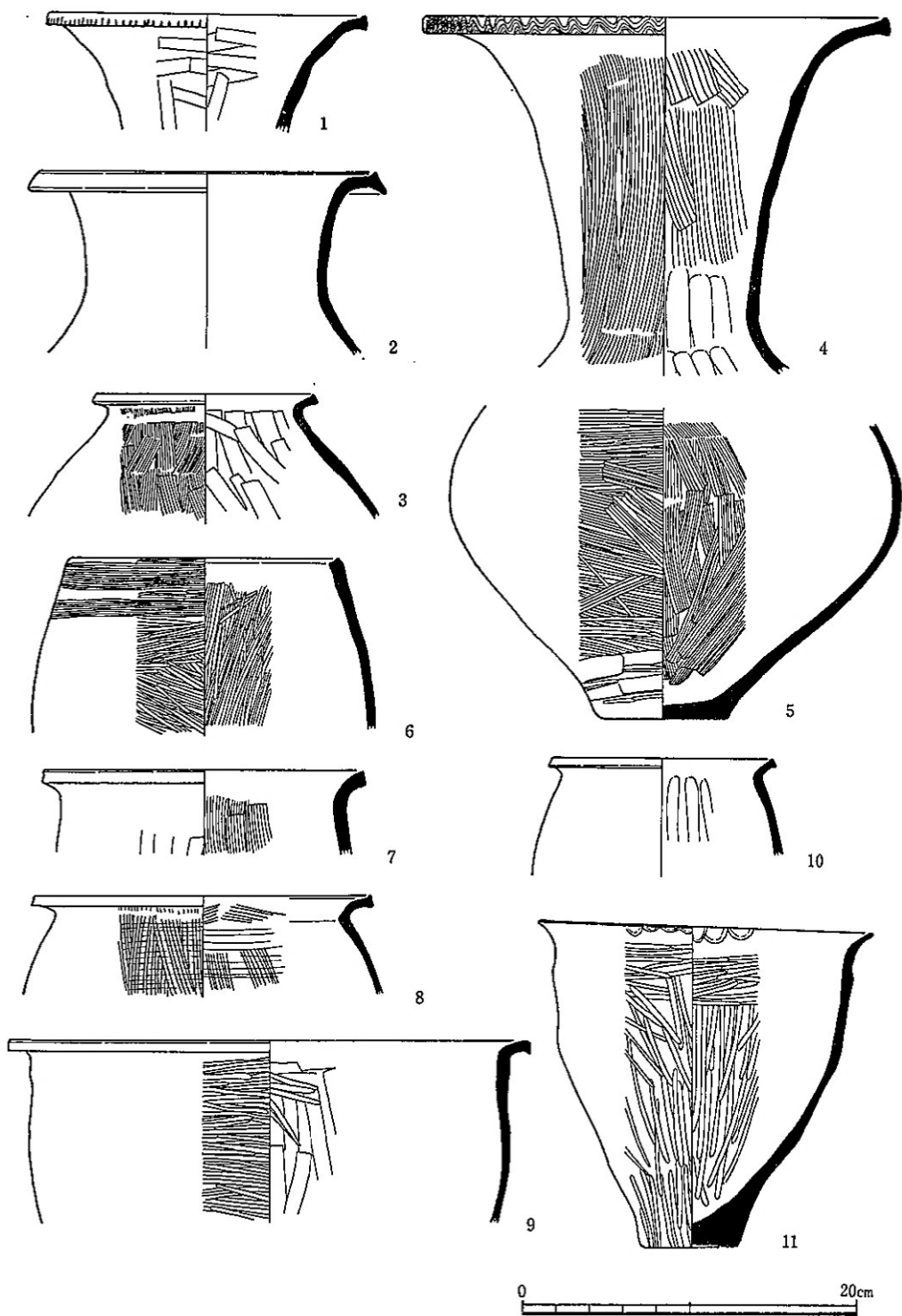
高杯形土器(25・26・27・28・29) (25・26・27・29)は脚部片である。(25)は生駒西葎の胎土である。外面は2次的に火を受けたと思われ、炭化物も付着している。(26)は裾部径12.8cmを測り、内面はナデ調整である。2次的に火を受けている。(27)は裾部径12.4cmを測り、内面にしぼり目がみられる。円板充填である。(29)は裾部径17.2cmを測り、脚上半は中実で内面はハケメとナデ調整である。2次的に火を受けている。(28)は復元口径22.6cmを測り、水平口縁部をもち、脚部は中実である。体部外面は2次的に火を受け、口縁部内外面は煤が付着している。

鉢形土器(30・31・32・33・34・35・36・37) (30・33)は外に開く底部から屈曲して直口する肩部をもち、短く外反する口縁部で端部は下に拡張する。(30)は復元口径23.6cmを測り、口縁端部を列点文で飾り、体部を11条の直線文で飾る。(33)は復元口径31.6cmを測り、口縁端部を8条の波状文で飾り、体部を簾状文、直線文、波状文で飾るが、波状文はヘラミガキによってほとんど消されている。(31・35)は外に開く体部から屈曲し短く内彎する口縁部をもつ。端部は内外に肥厚する。端部に刻目を施す。(35)は刻目に赤色顔料が塗られている。(31)は復元口径24.4cmを測る。(35)は口径20.5cm、器高8.3cmを測り、内面は丁寧なナデ調整である。

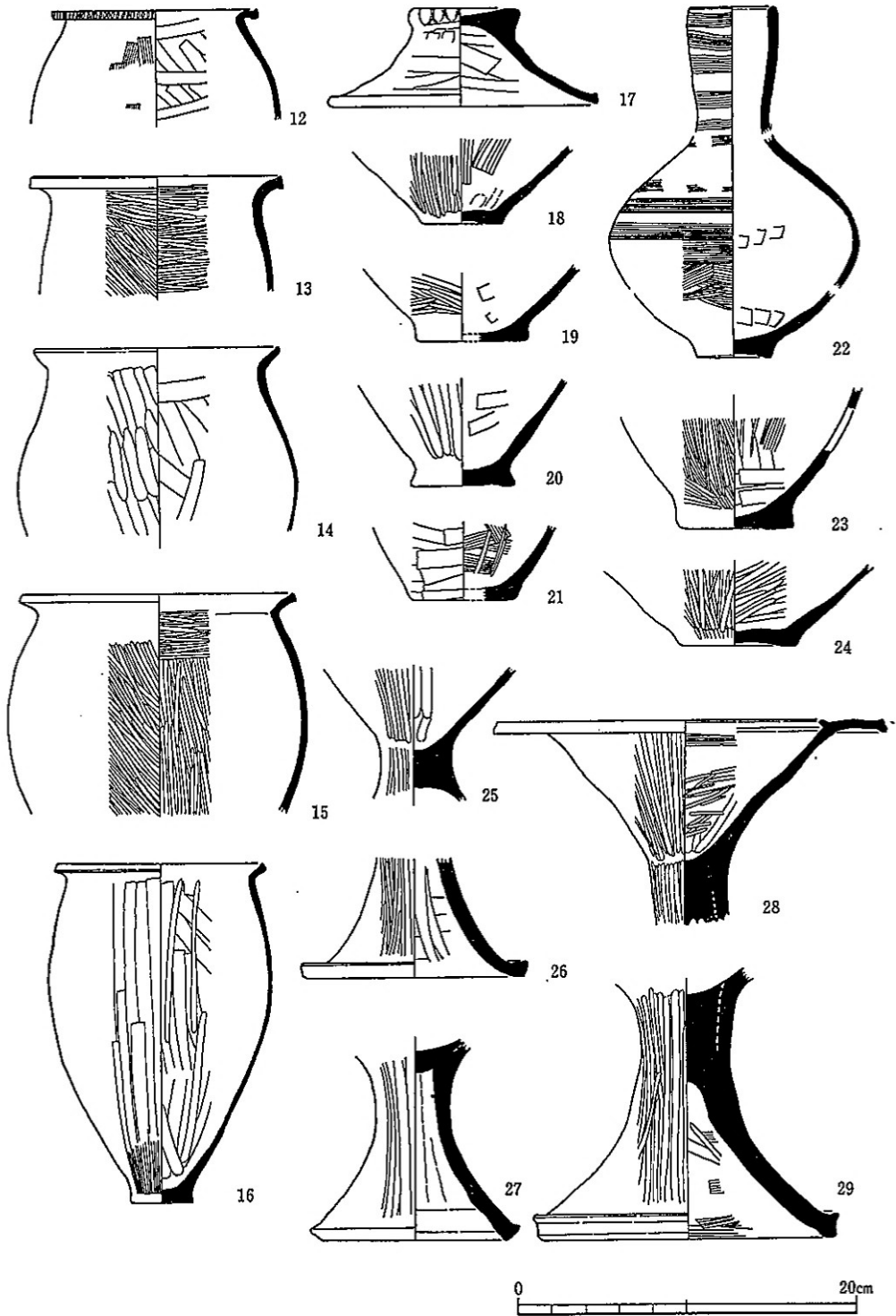
(34)は復元口径18.8cmを測り、外に開く体部から稜をなし直口する口頸部をもち、端部は外に突出する。口頸部外面を簾状文で飾る。円板充填である。(36)は復元口径21.6cm、最大腹径24.4cmを測り、外に開く底部から屈曲して内傾する肩部に短く外へ折れ曲がる口縁部をもつ。端部に刻目を施す。外面に6条の波状文と直線文を施す。内面はナデ調整である。(37)は復元口径11.2cmを測る直口の鉢である。

甕形蓋形土器(17)復元口径15.5cm、器高5.8cmを測り、やや中凹みのつまみをもつ。内外面はナデ調整であり、口縁部は内外面に煤が付着している。

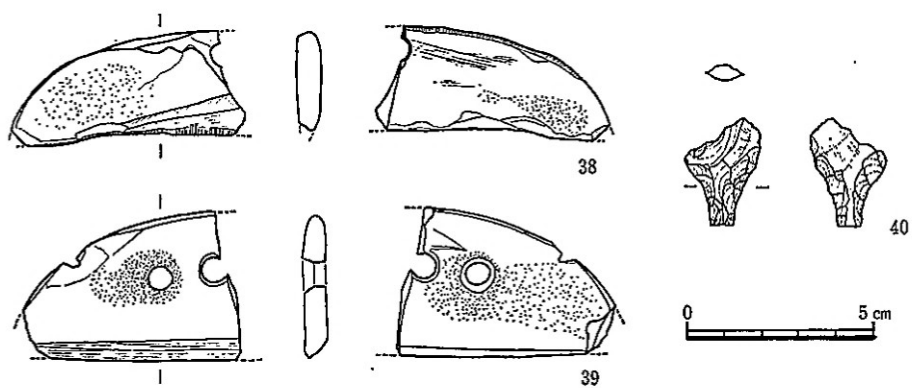
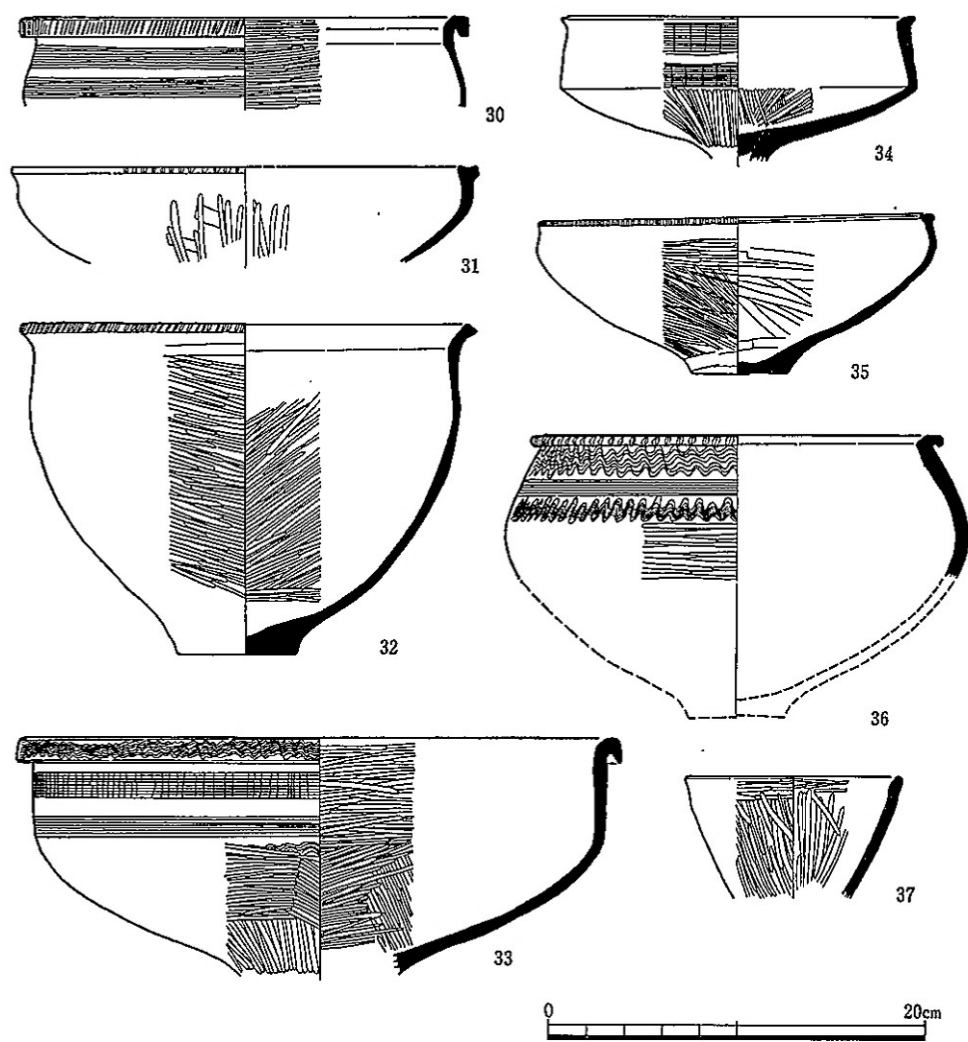
〔石器〕(38~40)



第106图 SD3004出土遗物实测图



第107図 SD3004出土遺物実測図

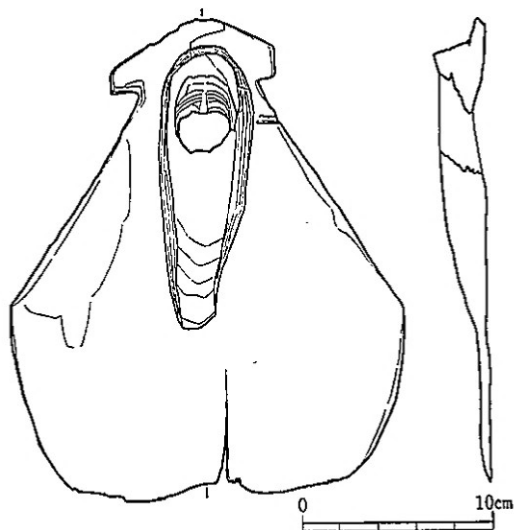


第108图 SD3004出土器物实测图

石庖丁(38、39) (38)は直線の刃部をもち背部は彎曲する、直線刃半月形である。刃部には刃先と平行する研磨痕がみられる。両面とも紐孔周囲には敲打痕がみられ、これは紐孔穿孔の際のものと思われる。裏面刃部にもせまい刃稜がみられる。現存長5.65cm、幅3.95cm、厚さ0.65cmを測る。(39)はやや内彎ぎみの片刃の刃部をもち背部は彎曲する。刃部、背部ともに刃潰れがみられる。両面ともに敲打痕が認められる。現存長6.2cm、幅2.8cm、厚さ0.7cmを測る。石質は(38)・(39)とも緑泥緑簾片岩。

石錐(40) 錐部下半欠損する。現存長2.8cm、幅1.9cm、厚さ0.4cm、錐部現存長0.5cm、錐部径0.7cm×0.2cm。扁平な不整形の頭部に棒状の錐部をもつ。両面とも両側辺から剝離を施し錐部をつくり出す。頭部片面は大剝離面をとどめる。

〔木器〕 広楯(41) 身の部分がほぼ完形で残っている。長さ24.6cm、刃部長10.5cm、刃部最大幅20.6cm、刃縁部幅14.6cm、刃部厚0.1~0.5cmを測る。頭部には着柄床部分に両側から1.5cmで「く」の字状に切り込みを入れており頭頂部は三角形を呈する。頭部は、この切り込み部から刃部最大幅部までまっすぐ広がる。頭頂部から1.4cmの位置に、細長い逆台形状の舟形突起がつくられている。最大厚2.4cm、長さ15cmを測る。着柄孔は、径2.4cm、着柄角度は70°を測る。着柄部分の前面には、浅いへこみが見られる。

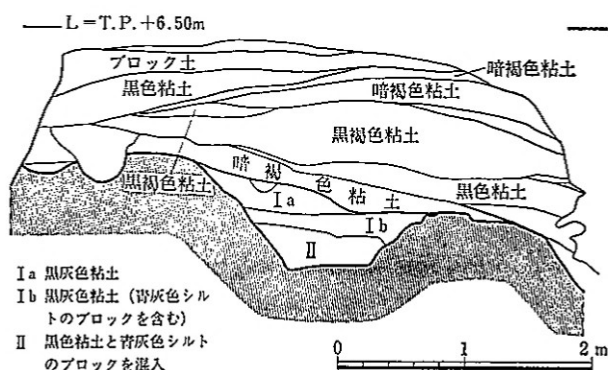


第109図 SD3004出土遺物実測図

〔その他の遺物〕 籠が出土した(図版15)。口縁が1辺約15cmの隅丸方形、断面が逆台形を呈する。保存処理の為、現場でただちにウレタンフォームに包んだ。

SD3005(第110図) 全長6.5mを検出した。断面形は、逆凸字状を呈する2段掘りである。底部幅は下段で0.6m、上段で0.9m、上部幅1.8m、深さは下段で0.2m、全体で地山面から0.6mを測る。埋土は、黒灰色粘土である。

出土遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

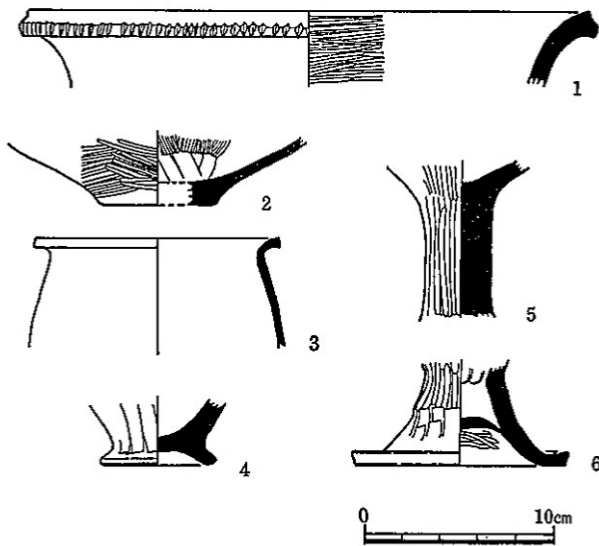


第110図 SD3005土層断面図(1/20)

SD3006(第289図) 全長2.0mを検出した。ほぼ南北方向に走る。断面形はU字形を呈する。上部幅0.4m、底部幅0.25m、深さ0.2mを測る。埋土は黒灰色粘質シルトの1層である。



出土遺物（第111図）



第111図 SD3006出土遺物実測図

〔土器〕 壺形（1、2）、甕形（3、4）、高杯形（5、6）土器等が出土した。時期は第Ⅲ様式である。

壺形土器（1、2）（1）は復元口径29.4cmを測り、口縁端部は下方に拡張し、刻目を施す。生駒西麓型胎土である。（2）は復元底径5.8cmを測り、内面はハケメとナデ調整である。

甕形土器（3、4）（3）は復元口径12.8cmを測り、外反する口縁部をもち、端部は面をなす。

内外面とも2次的に火を受け、調整不明である。生駒西麓型胎土である。（4）は底部片で底径5.4cmを測り、外面はナデ調整である。

高杯形土器（5、6）（5、6）はともに脚部片である。（5）は中実である。（6）は復元裾部径11cmを測り、粘土板を貼りつけ中実のように見せている。生駒西麓の胎土である。

SD3007（第289図） H-3区で検出された。SK3004、SD3041と重複する。南側はSK3004によって、北側はSD3041によって削平されている。全長1.2mを検出した。底部幅0.38m、上部幅0.85m、深さ0.32mを測る。断面形はU字形を呈する。埋土は暗褐色粘土の一層である。

出土遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

SD3009（第289図） I-8・9区、地山面で検出された。SE3016、SD3041、NR3001と重複する。東側はSD3041、西側はNR3001によって削平されている。東肩部は、SE3016が掘り込まれている。全長3.5mを検出した。断面形はU字形を呈する。底部幅1.8m、上部幅3.0m、深さは地山面から0.6mを測る。埋土は暗灰色粘土である。

出土遺物（第112・113図）

〔土器〕（1～4） 壺形、甕形土器等が出土した。第Ⅱ-Ⅲ様式古段階である。

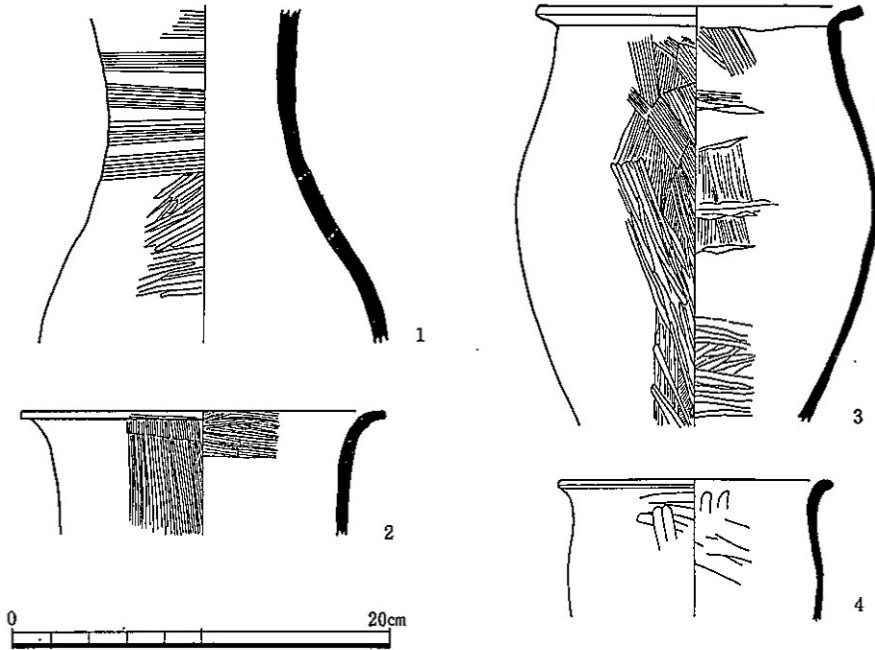
壺形土器（1） 頸部から肩部にかけての破片である。頸部外面に直線文を施す。内面は剝離が著しく調整は不明である。生駒西麓型の胎土である。

甕形土器（2・3・4）（2）は復元口径19.1cmを測り、胴の張らない体部になだらかに外反する口縁部をもつ。内外面ハケメ調整である。内外面とも全面に煤が付着する。いわゆる「大和型」といわれるものである。（3）は復元口径16.8cm、最大腹径19cmを測り、「く」の字に外

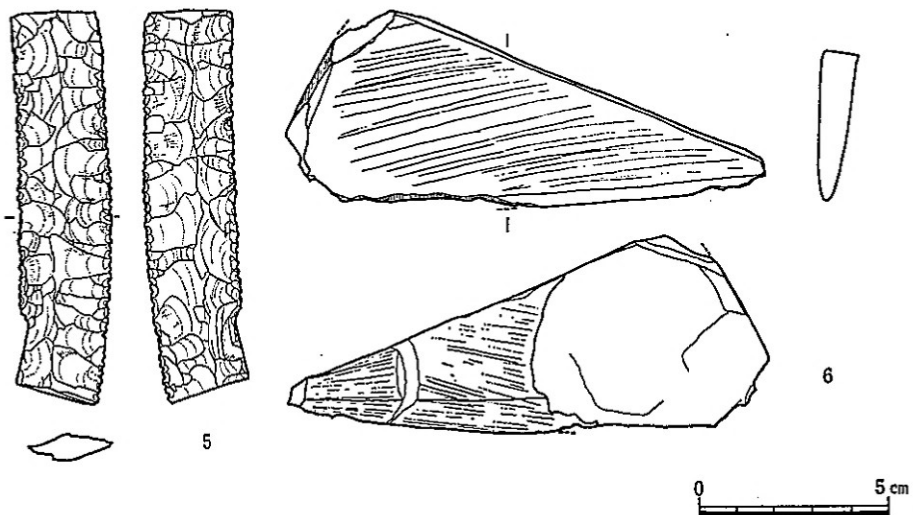
反する口縁部をもつ。内外面はハケメの上をヘラミガキ調整を施す。外面に煤が付着する。(4)は復元口径14.6cmを測り、胴の張らない体部からなだらかに外反する口縁部をもつ。内外面はナデ調整である。2次的に火を受け、外面に煤が付着している。生駒西麓の胎土である。

〔石器〕(5・6)

石庖丁(6) 2次加工がなされているが、わずかに外彎する刃部をもつ大型である。両刃で



第112図 SD3009出土遺物実測図



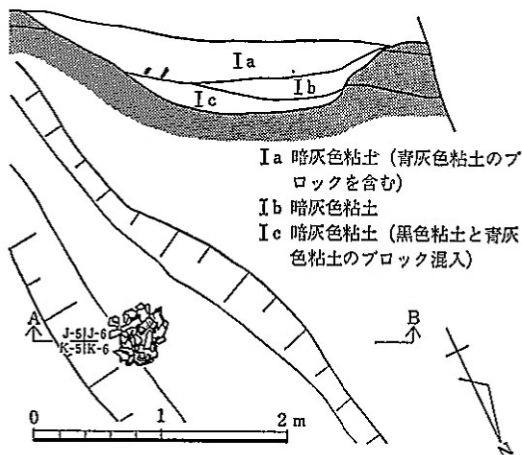
第113図 SD3009出土遺物実測図

刃先は刃潰れがみられる。両面ともに刃先にほぼ平行して研磨痕がみられ、肩部も研磨されている。大型石庖丁を斜に切断しており、三角形を呈する。2次的な用途は明確でない。現存長12.7cm、幅5.1cm、厚さ0.8cmを測る石質は緑泥石石墨片岩。

刃器(5) 上半部欠損。現存長10.4cm、幅2.3cm、厚さ0.7cmをはかる。両側辺がゆるやかに彎曲する。内彎する側辺下端に抉りを入れる。両面とも両側辺から剝離調整した後、さらに両側辺に細かい剝離を施し、鋸歯状を呈する。刃部は鋭い。

A L=T.P.+6.00m

B



Ia 暗灰色粘土(青灰色粘土のブロックを含む)  
Ib 暗灰色粘土  
Ic 暗灰色粘土(黒色粘土と青灰色粘土のブロック混入)

SD3010 (第114図) J-5・K-6

区 第Ⅱd層で検出された。SE3011、SD3041、SD3011と重複する。南側はSD3041によって失われ、北側は調査区外へ更に延びると考えられる。K-6区でSD3011と直交する。SD3011よりも新しい。南側でSE3011が掘り込まれている。断面形は、U字形を呈する。底部幅0.6m、上部幅1.2m、深さ0.6mを測る。埋土は暗灰色粘土である。

出土遺物(第115・116図)

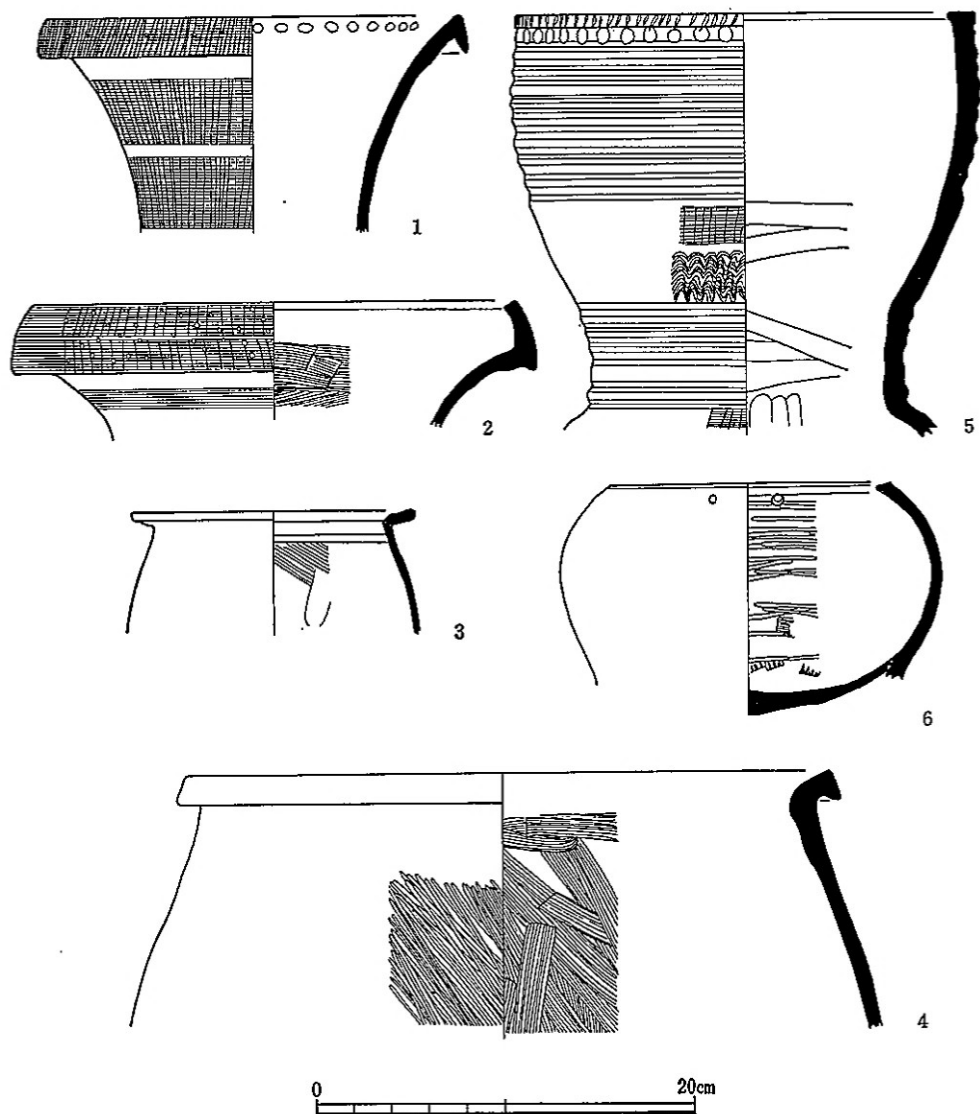
第114図 SD3010土器出土状況及び土層断面図(1/60) [土器](1~6) 壺形、甕形、細頸壺形、台付無頸壺形土器等が出土した。第Ⅲ様式新段階-Ⅳ様式である。

壺形土器(1・2) (1・2)ともに生駒西麓型の胎土である。(1)は復元口径21.7cmを測り、外反する口縁部をもち端部は下方へ拡張する。端部外面に22条の簾状文と刺突文、口縁部内面に円形浮文、頸部外面に36条の簾状文を飾る。内面はナゲ調整である。(2)は復元口径25.4cmを測り、口縁部は上方に拡張する。端部外面は17条と15条の2帯の簾状文を飾り、その上に刺突文を施し、頸部外面に15条の直線文を施す。内面はハケメ調整である。

細頸壺形土器(5) 復元口径24.1cmを測り、筒状の短い頸部に内彎気味に直立する口縁部をもち、端部は内外に肥厚し面をなす。端部外面に刻目を施し、口縁部外面には円形浮文と9条の凹線文を飾り頸部にも6条の凹線文を飾る。

台付無頸壺形土器(6) 復元口径14.8cmを測り、内彎する口縁部をもち、端部は面をなす。口縁部に穿孔が2ヶ所1対で2対ある。外面は2次に火を受け剝離が著しい。内面はヘラミガキ調整だが部分的にハケメ調整が残る。

甕形土器(3・4) (3・4)とも生駒西麓の胎土である。(3)は復元口径15cm、「く」の字に外反する口縁部をもち。外面ナゲ調整、内面はハケメ調整である。外面は煤が付着する。(4)は復元口径34cmを測り、短く外反する口縁をもち端部はやや下方に拡張する。内面はハケメ調整である。

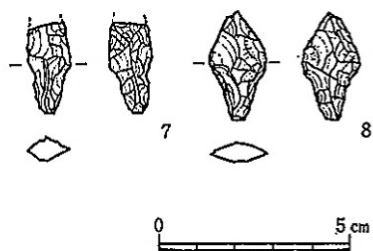


第115図 SD3010出土遺物実測図

〔石器〕（7・8）

石鏃（8） 凸基有茎式。長さ2.9cm、幅1.5cm、厚さ0.5cm、重量1.6gをはかる。逆刺は丸みをもち、抉りは浅い。両面とも全体を剝離調整するが、剝離面は不揃いである。

石錐（7） 頭部は上半分欠損。現存長 2.4cm、幅1.2cm、厚さ 0.7cm、錐長 1.0cm、錐径 0.7×0.4cmを測る。楕円形の頭部。両側辺を抉って錐部をつくり出す。両面とも、全体に剝離を施す。



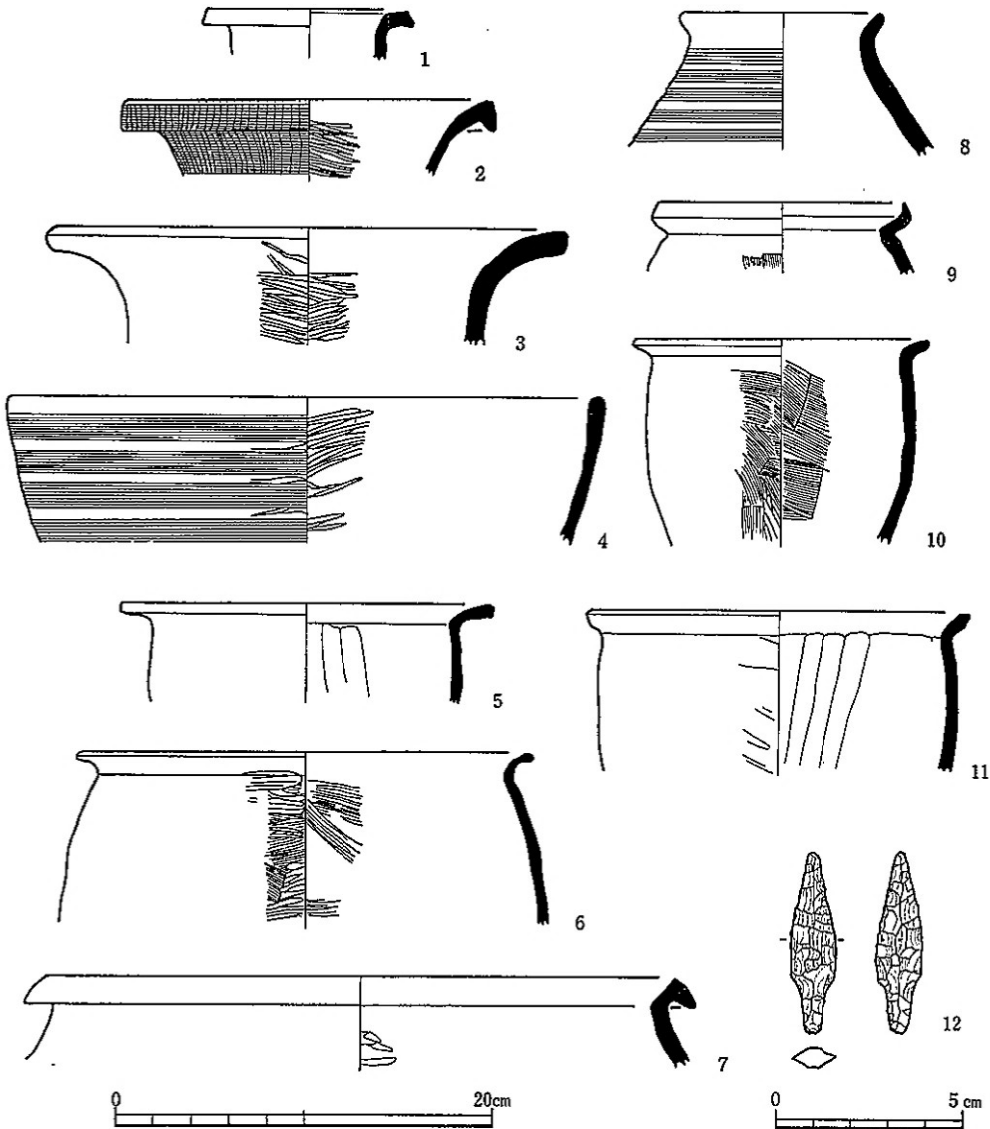
第116図 SD3010出土遺物実測図

SD3011 (第91図) K-4・5・6区、地山面で検出された。SD3010、SD3041、SE3013と重複する。東側は試掘調査トレンチによって、西側はSD3041によって失なわれている。SE3013の上部を削平している。全長12.5mを検出した。断面形はU字形である。底部幅2.6m、上部幅1.6m、深さ0.3mを測る。埋土はⅠ層—地山の青灰色粘土(シルト)が黑色粘土にブロックで混入する層、Ⅱ層—暗灰色粘土層の2層である。

出土遺物 (第117図)

〔土器〕 (1~11) 壺形、無頸壺形、甕形、鉢形土器等を出土する。第Ⅲ様式である。

壺形土器 (1・2・3) (1)は復元口径10.6cmを測り、短い筒状の頸部から水平に屈曲す



第117図 SD3011出土遺物実測図

る口縁部をもち、端部は上下にやや拡張する。内面はナデ調整である。(2)は復元口径19cmを測り、外反する口縁部をもち、端部は下方へ拡張する。口縁部外面と頸部外面に簾状文を施す。(3)は復元口径26.6cmを測り、外反する口縁部をもつ。生駒西麓型の胎土である。

無頸壺形土器(8) 復元口径10.5cmを測り、短く外反する口縁部をもつ。体部外面に5条の直線文を施す。生駒西麓型の胎土である。

甕形土器(5・6・7・9・10・11) (5)は復元口径19.6cmを測り、水平近くに外反する口縁部をもつ。外面へラミガキ、内面はヘラケズリ調整である。(6・7・11)は生駒西麓型胎土である。(6)は復元口径23.6cmを測り、丸く外反する口縁部をもつ。外面はハケメの上へラミガキ調整、内面はハケメ調整である。(7)は復元口径33.2cmを測り、短く外反する口縁部をもち端部に粘土を1回貼りつけ下方に拡張する。(11)は復元口径19.8cmを測り、短く外反する口縁部をもつ。外面は丁寧なヘラミガキ、内面は指押えナデ調整である。(9)は復元口径13cmを測り、「く」の字に外反する口縁部をもち、端部の上方に粘土を貼りつけ、突出させる。外面はハケメ調整である。(10)は復元口径15.4cmを測り、丸く外反する口縁部をもつ。内外面はハケメ調整であるが、外面下半部はその上にヘラミガキ調整を施す。外面に煤が付着する。

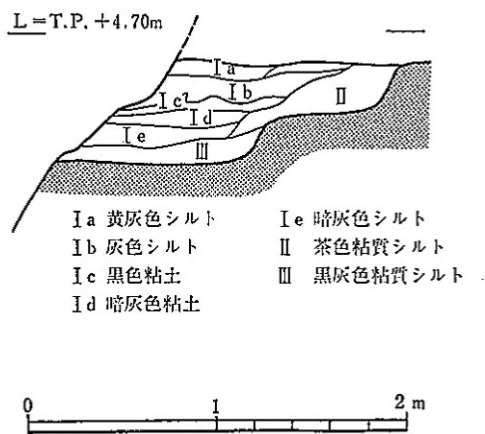
鉢形土器(4) 復元口径31cmを測り、直立する口縁部をもつ。外面を10~11条の直線文を飾り、直線文と直線文との間にヘラミガキ調整を施す。生駒西麓型の胎土である。

〔石器〕石鏃(12) 長さ4.8cm、幅1.2cm、厚さ0.5cm、重量0.9gを測る。凸基有茎式。断面はレンズ状を呈する。逆刺はなだらかである。逆刺から外彎してのび、わずかにすぼまって先端に至る。先端は丸みをもつ。両面とも両側辺から剝離調整し鏃身先端部と基部に稜線をなす。

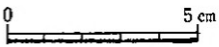
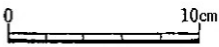
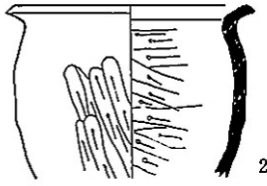
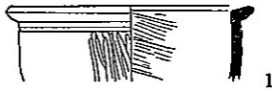
SD3012(第118図) K-8・9区、NR3001、SD3041の堆積土を除去した後、地山面で検出された。西側は、NR3041によって削平されている。北側は、調査区外へ更に延びるものと考えられる。全長6.0mを検出した。現存部より断面形は、逆凸字形を呈する2段掘りと考えられる。埋土はⅠ層—黒色粘土・青灰色シルトがブロック状に混入する層 Ⅱ層—茶褐色粘質シルト Ⅲ層—黒灰色粘質シルトに茶褐色粘質シルトの混入する層の3層に大別できる。

#### 出土遺物(第119図)

〔土器〕甕形土器(1・2)等が出土した。時期は中期である。(1)は復元口径12.5cm。短く水平気味に外反する口縁部をもつ。口縁部直下に沈線を施し、外面はヘラミガキ調整で、内面



第118図 SD3012土層断面図(1/40)



第119図 SD3012出土遺物  
実測図

はハケメ調整である。前期の要素であるヘラミガキ沈線が入る。

(2)は復元口径13.3cm、最大腹径12cmを測り、外反する口縁部をもつ。内外面はヘラケズリ調整である。

〔石器〕石鏃(13) 長さ4.8cm、幅1.2cm、厚さ0.5m、重量2.9gをはかる。凸基有茎式。断面はレンズ状を呈する。逆刺はなだらかである。逆刺から外彎してのび、わずかにすばまって先端に至る。先端は丸みをもつ。両面とも両側辺から剝離調整し、鏃身先端部と茎部は稜線をなす。

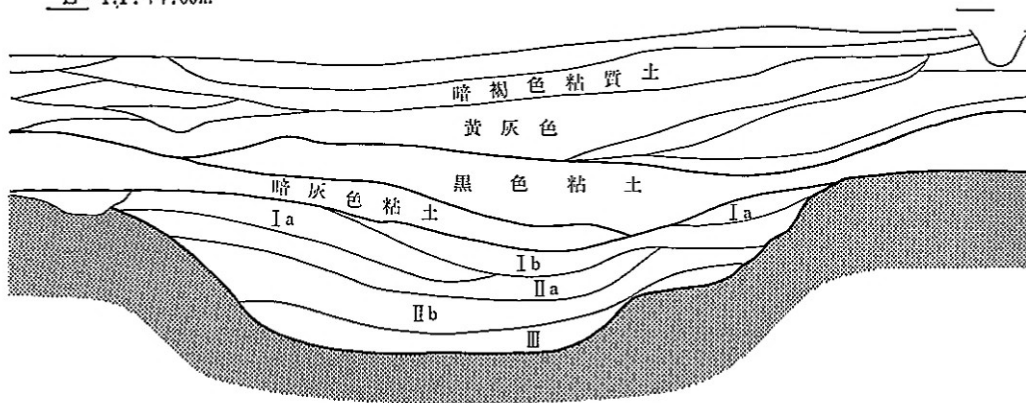
SD3013(第120・121図) E・F-9・10区、地山面で検出された。SD3033周辺のピット群と重複する。北側はSD3033によって失なわれている。南側へは調査区外へ更に延びるものと考えられる。全長6.5mを検出した。断面形は、逆凸字形を呈する。底部幅は上段で2.3m、下段で0.8m、深さは下段で0.4m、全体で0.7mを測る。埋土はⅠ層-黒褐色粘土層 Ⅱ層-黒色粘土層、Ⅲ層-暗灰色粘土層の3層に大別できる。

出土遺物(第122・123・124・125図)

〔土器〕(1~26) 壺形、甕形、高杯形、鉢形、細頸壺形、壺用蓋形土器等が出土した。第Ⅲ様式古段階である。

壺形土器(4・5・7・8・9・10・11・12・13・14) (4・5・9・12)は生駒西麓型胎土である。(4・12)は筒状の頸部に外反する口縁部をもち、端部は上下に拡張する。(4)は復元口径17.6cmを測り、口縁端部に2帯の簾状文、頸部に直線文と簾状文を施す。頸部内面は指

L=T.P.+7.00m

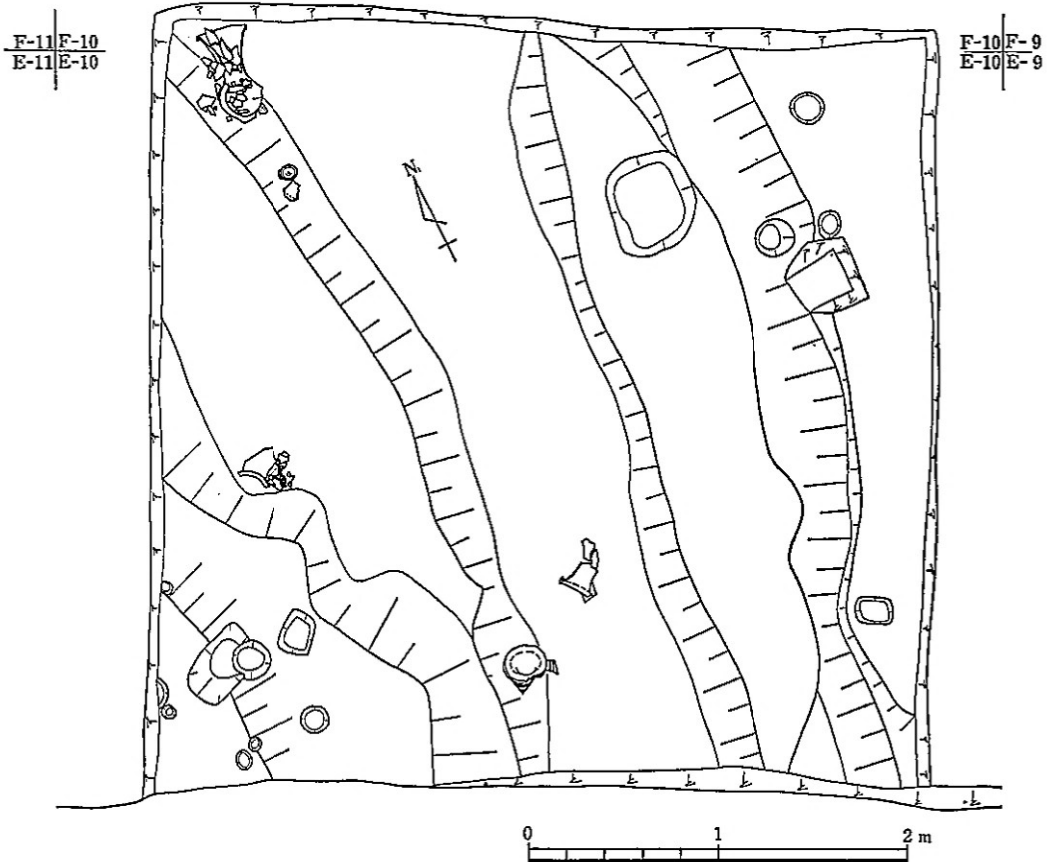


I a 黒褐色粘土・灰白色シルトの小ブロックを含む  
I b 黒褐色粘土  
II a 黒色粘土  
II b 黒色粘質土  
III 暗灰色粘土



第120図 SD3013土層断面図(1/40)

押え調整である。全体に磨滅が著しい。(12)は復元口径27.4cmを測り、口縁端部に3段に扇形文、頸部に直線文を施す。頸部内面はハケメ調整である。(5)は復元口径11.2cmを測り、短く細い筒状の頸部からやや外開きの口縁部をもち、端部は上下に拡張する。端部と頸部外面には11条の簾状文を施す。(9)は口径26.2cm、器高47.7cm、最大腹径22.3cmを測り、球形の腹部に筒状の頸部から外反する口縁部をもち、端部は下方にやや拡張する。端部に7条の簾状文と刻目を施し、外面の頸部から腹部にかけて、10条の直線文と簾状文を施す。直線文は4回とめて描いている。内面は荒いハケメ調整である。(7)は復元口径15.5cmを測り、外反する口縁部をもち、端部は上方に拡張する。端部外面に列点文を施し、頸部外面に9条の直線文を施す。端部内面はハケメ、頸部内面はヨコナデ調整である。(8)は復元口径10.2cmを測り、短く細い筒状の頸部に外反する口縁部をもち、端部は下方に拡張する。端部外面は簾状文、頸部外面に直線文を施す。(10)は口径26.8cm、器高48cm、最大腹径23cmを測る。やや長めの球形の体部に筒状の頸部をもち、外反する口縁部で上下にやや拡張する。端部外面は波状文で飾り頸部から胴部にかけてハケメ調整の上に直線文を施す。頸部内面はナデ、体部内面はハケメ調整である。(11)は復元口径29.7cmを測り、外反する口縁部をもち、端部は上下にやや拡張する。口縁内面は扇形文2段を飾り、端部外面は波状文で飾る。(13)は復元口径21.8cmを測り、外に開く短い筒状の頸部に



第121図 SD 3013遺構平面図 (1/40)



外反する口縁部をもち、端部は上下にやや拡張する。端部外面に波状文、肩部外面はハケナデ調整の上に8~9条の直線文を施す。内面は指押え調整である。(14)は復元口径20.1cmを測り、丸く外反する口頸部をもち端部は上下にやや拡張する。端部に刻目を施す。内外面ハケメ調整であるが、口縁部内面から外面に至っては剝離が著しい。

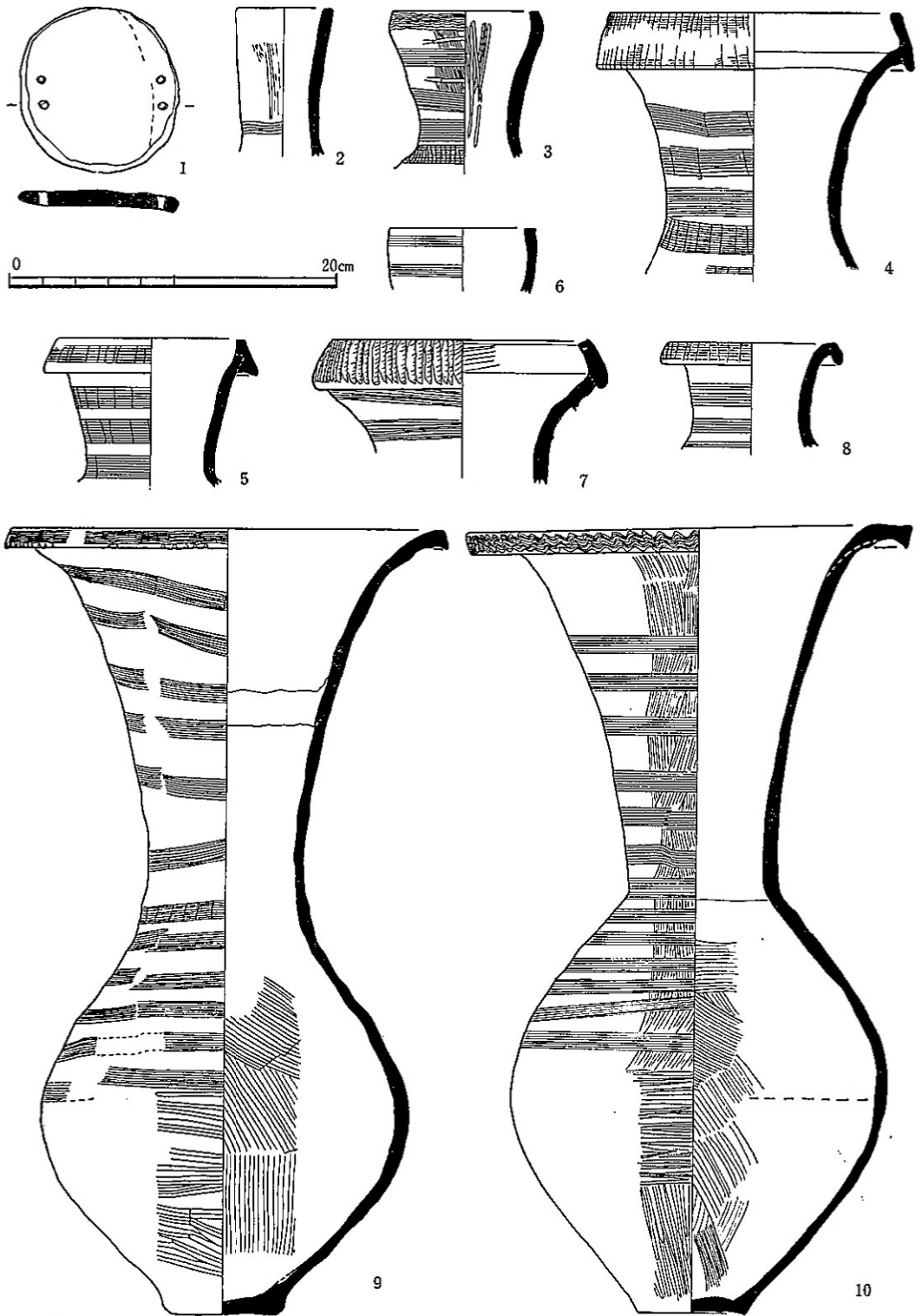
細頸壺形土器(2・3・6) (2)は復元口径5.7cmを測る。頸部に5条の直線文を一帯施す。内面は縦方向のナデ調整である。(3)は復元口径8.8cmを測り細く短い筒状の頸部に内彎気味の口縁部をもち。口縁部外面は波状文、頸部外面はハケメの上をヘラミガキ調整しその上を直線文、肩部外面は簾状文を施す。生駒西麓型胎土である。(6)は復元口径8.9cmを測り、内彎気味の直口の口縁部をもち、外面を直線文で飾る。

甕形土器(15・16・17・18・19・20・26) (15)は口径13.6cm、器高21.4cm、最大腹径14.7cmを測り、胴長の体部に「く」の字に外反する口縁部をもち、端部は上下にやや肥厚し面をなす。内面はハケメ調整である。(16)は口径13.4cm、器高21.2cm、最大腹径15cmを測り、胴長の体部に丸く外反する口縁部をもち。外面はハケメの上からナデ調整、内面は口縁部がハケメの上からナデ調整、体部がヘラナデ調整である。外面全体に煤が付着している。(17)は口径14.7cm、器高27.3cm、最大腹径17.4cmを測り、胴長の体部に丸く外反する口縁部をもち端部は上方につまむ。底部に径1.1cmの穿孔を施す。内外面ハケメ調整で外面全体に煤が付着する。(18)は復元口径16.2cmを測り、丸く外反する口縁部をもち、端部はやや上に肥厚する。内外面はハケメ調整し、外面に煤が付着する。(19・20・26)は生駒西麓型胎土である。(19)は復元口径25.2cmを測り、短く外反する口縁部をもち端部は肥厚する。外面はハケメ調整、内面はハケメの上をヘラミガキ調整を施す。(20)は口径26.3cm、器高41.4cm、最大腹径30.3cmを測り、胴長の体部に「く」の字に外反する口縁部をもち。外面はヘラミガキ調整で下半部は剝離が著しい。内面はハケメ調整で下半部に煤が付着する。(26)は底部片で、底径7.7cmを測り内外から穿孔しているが貫通していない。

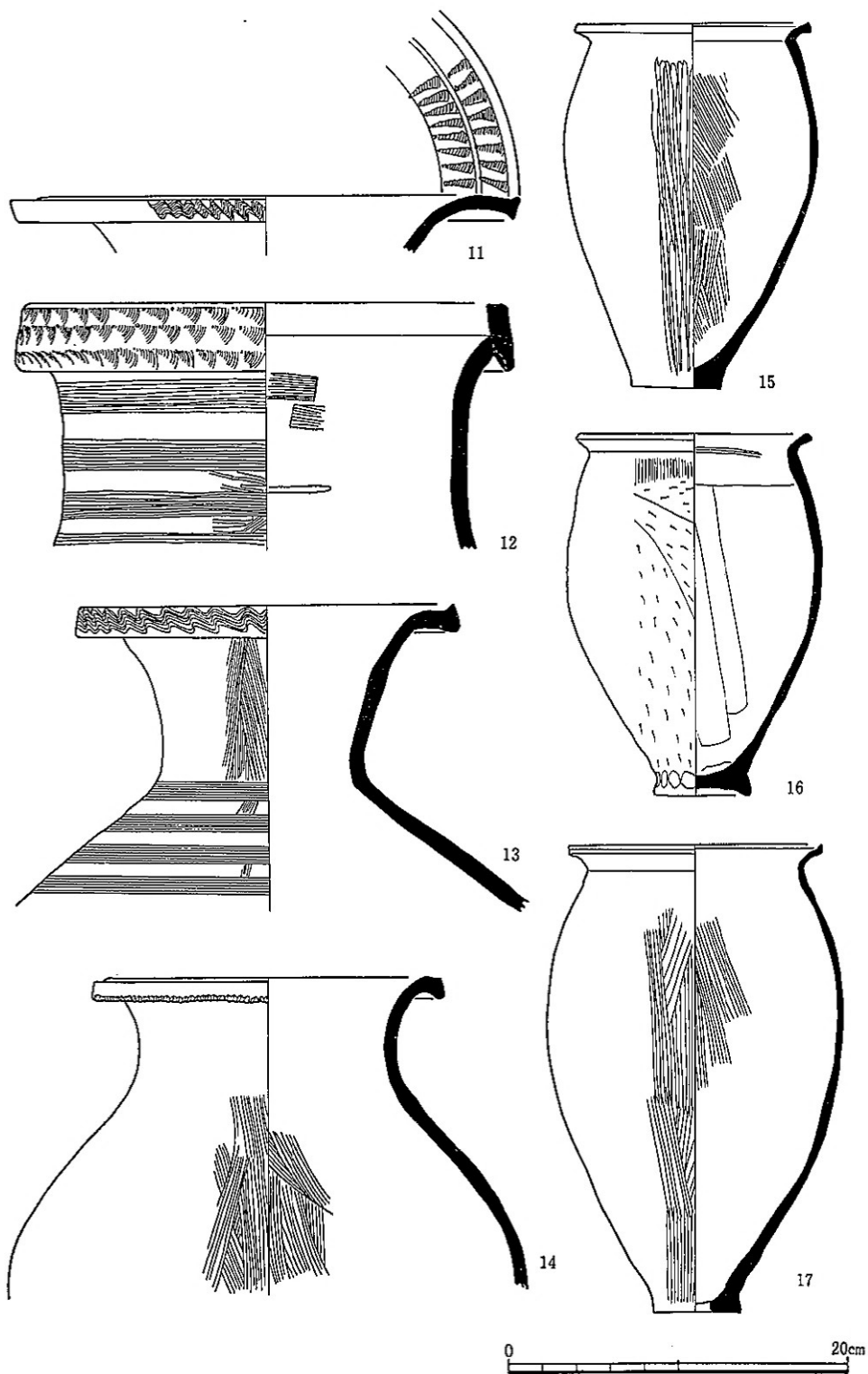
高杯形土器(23・24・25) (23)は復元口径14.7cmを測り、体部から屈曲して直口する口縁部をもち。内面はヘラナデ調整である。(24・25)は脚部片で(24)は復元裾部径14.1cmを測り、外面はハケメ調整で、端部内外面に煤が付着する。(25)は裾部径15cmを測り、脚部内面にしぼり目が見られ、端部内外面に煤が付着する。

鉢形土器(21・22) (21)は復元口径26.4cmを測り、扁平な体部に水平に短く折れ曲がる口縁部をもち、端部は上下にやや肥厚する。体部外面を直線文で飾る。(22)は復元口径33cmを測り、体部から屈曲して直口する口縁部をもち、端部は外方に肥厚し、刻目を施す。外面はハケメ調整、内面はヨコナデ調整である。

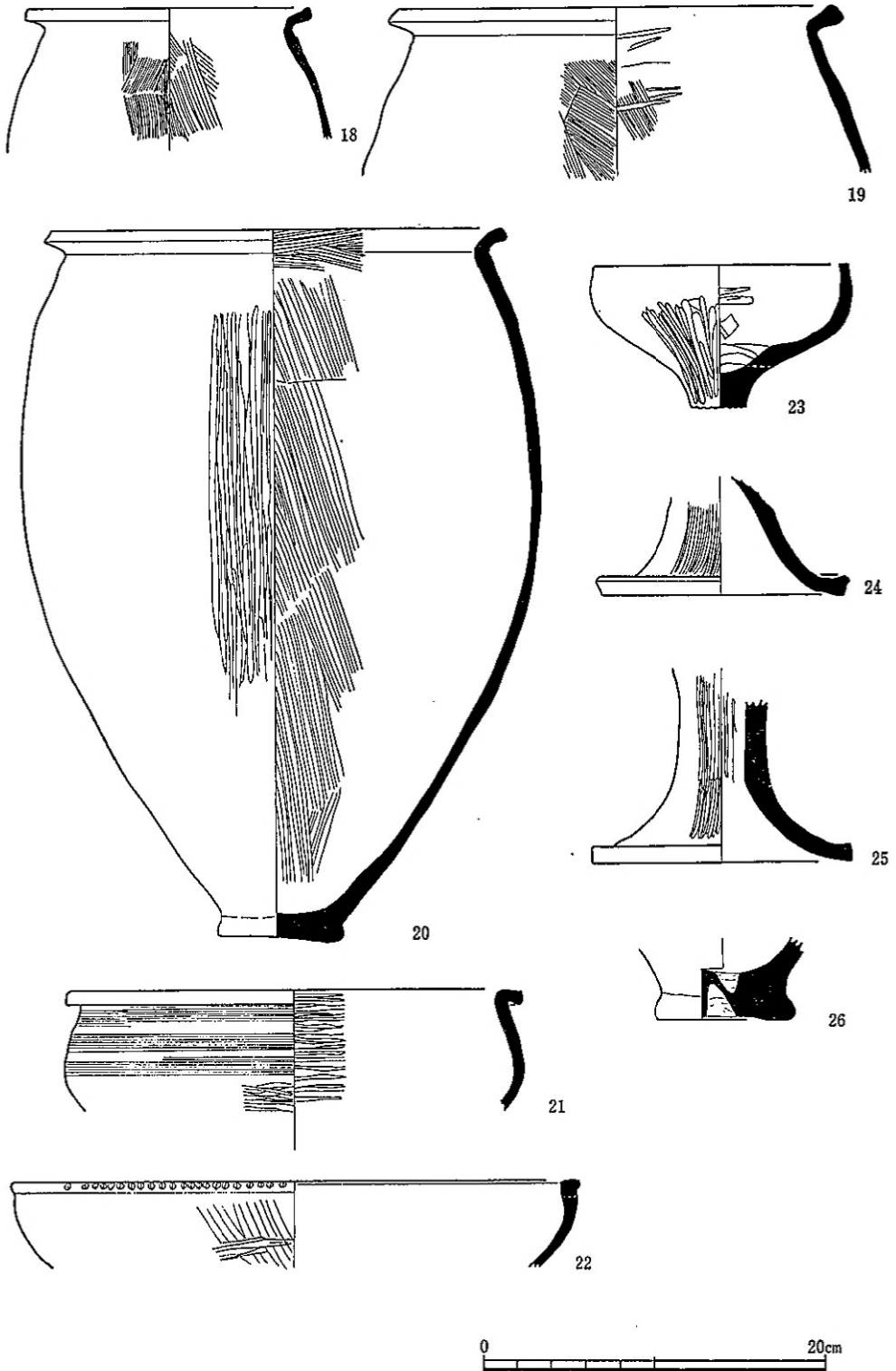
壺用蓋形土器(1) 径9.5cmを測る扁平なものである。2ヶ所1対の紐孔が対称に2対施されている。全体にナデ調整で周縁は欠けている。



第122図 SD3013出土遺物実測図



第123图 SD3013出土物実測図



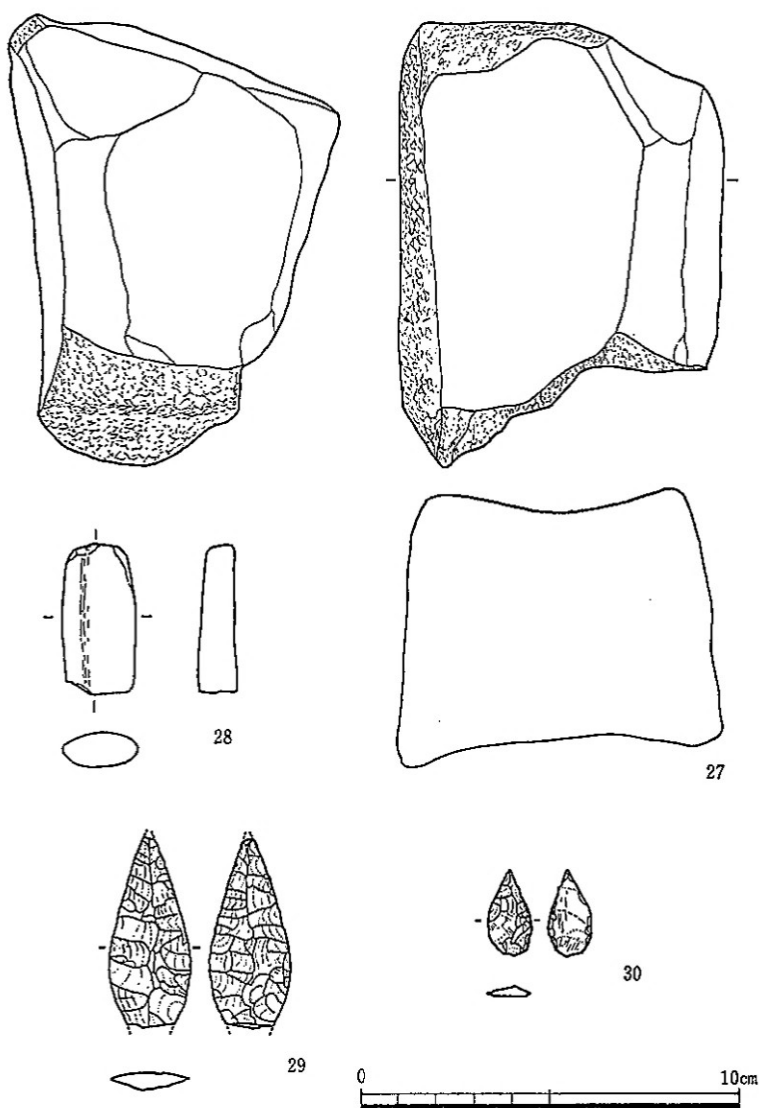
第124図 SD3019出土遺物実測図

〔石器〕 (27~30)

石鏃と砥石が出土した。

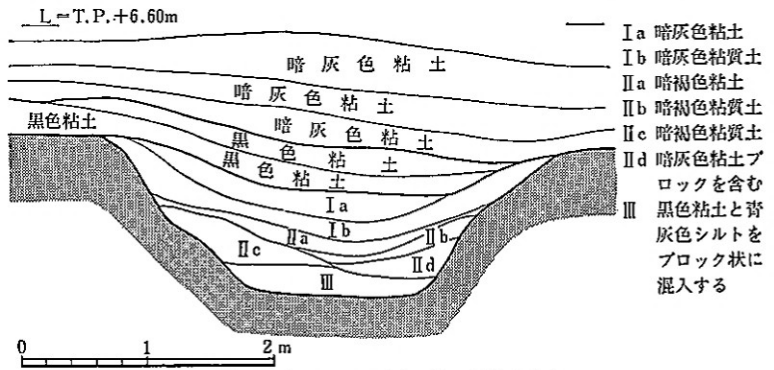
石鏃 (29・30) (29) は現存長5.0cm、幅2.1cm、厚さ0.5cm、重量5.0gを測る。尖基無茎式。先端と基部を欠損する。柳葉形、断面は薄いレンズ状を呈する。両面とも両側辺から剝離調整し、ほぼ中央に稜をなす。(30) 長さ2.2cm、幅1.2cm、厚さ0.2cm、重量0.7gを測る。円基無茎式。A面は左寄りに、B面は中央に大剝離面を残し、周辺に細かい剝離調整を施す。

砥石 (27・28) (27) は長方形を呈する大型の砥石で、その半分を欠いている。断面は方形を呈する。使用面は長短の幅を交じえて6面を有し、いずれも中央部が少し窪んでいる。残存長11.6cm、幅8.5cm、厚さは6~8.6cmを測った。石質は和泉砂岩である。(28) は小型の長方形を呈する砥石である。全長4cm、幅1.9cm、厚さ1cmを測る。断面は楕円形を呈する。使用面は表裏2面を使用している。石質は和泉砂岩である。



第125図 SD9018出土遺物実測図

SD3014 (第126図)  
E・F-10・11区、地  
山面で検出された。S  
D3033と重複する。北  
側はSD3033によって  
失なわれている。断面  
形は逆台形を呈する。  
底部幅 1.0m、上部幅



第126図 SD3014土層断面図(1/4)

2.3m、深さ1.4mを測る。埋土は、Ⅰ層—暗灰色粘土 Ⅱ層—暗褐色粘土 Ⅲ層—黒色・青灰色シルトをブロック状に混入する層の3層に大別できる。

出土遺物 (第127・128・129図)

〔土器・土製品〕 (1~35) 壺形、細頸壺形、無頸壺形、甕形、鉢形、小型鉢形、甕用蓋形土器、土製円板等が出土した。第Ⅱ—Ⅲ様式古段階である。

壺形土器 (1・2・3・4・5・6・7・10・14) (1)は復元口径12.1cmを測り、丸く外反する口頸部をもち、端部は上下にやや拡張する。外面はハケメ、内面はヘラナデ調整である。(2)は復元口径12cmを測り、短い筒状の頸部に短く外反する口縁部をもち、端部は上下に拡張し、端部外面には簾状文、頸部外面はハケメ調整の後に直線文を施す。(3)は復元口径15.4cmを測り、外反する口縁部をもち、端部を上下にやや拡張し波状文を飾る。外面はハケメ調整である。(4)は復元口径18.3cmを測り、短い筒状の頸部に外反する口縁部をもつ。(5)は復元口径20.5cmを測り、外反する口縁部である。外面はハケメ調整の上に5条の直線文を飾る。2次的に火を受けたのか一部赤色を帯び、表面剝離が著しい。(6)は復元口径11.6cmを測り、丸く外反する口頸部をもつ。内面はヘラナデ調整である。(7・10)は筒状の頸部に大きく開く口縁部をもつ。(7)は復元口径22.5cmを測り、口縁端部を上下にやや拡張する。頸部外面はハケメの上に直線文を施し、直線文間に一部ヘラミガキ調整を施す。(10)は復元口径34.8cmを測り、口縁端部は刻目を施す。内面はヘラミガキ調整である。(14)は底部片である。底径6cmを測り、胴下半に焼成後、1ヶ所穿孔する。(2・3・4・7・10)は生駒西麓型の胎土である。

細頸壺形土器 (9) 復元口径 8.2cmを測り、直口の口縁部をもつ。端部は外方へ肥厚する。頸部外面に直線文を施す。

無頸壺形土器 (29) 復元口径13.5cmを測り、内傾する口縁部をもつ。口縁部に6条の波状文、体部に直線文を施す。

甕形土器 (8・11・12・13・15・16・17・18・19・20・21・22・23・24) (8・20)は丸く外反する口縁部をもち、端部は下方に折れ込み、刻目を施す。いわゆる「大和型」といわれるものと思われる。(8)は復元口径15cmを測り、外面と口縁部内面はハケメ、体部内面はヘラナデ調整である。外面に煤が付着する。(20)は復元口径19.9cm、最大復径19.5cmを測る。内外面は

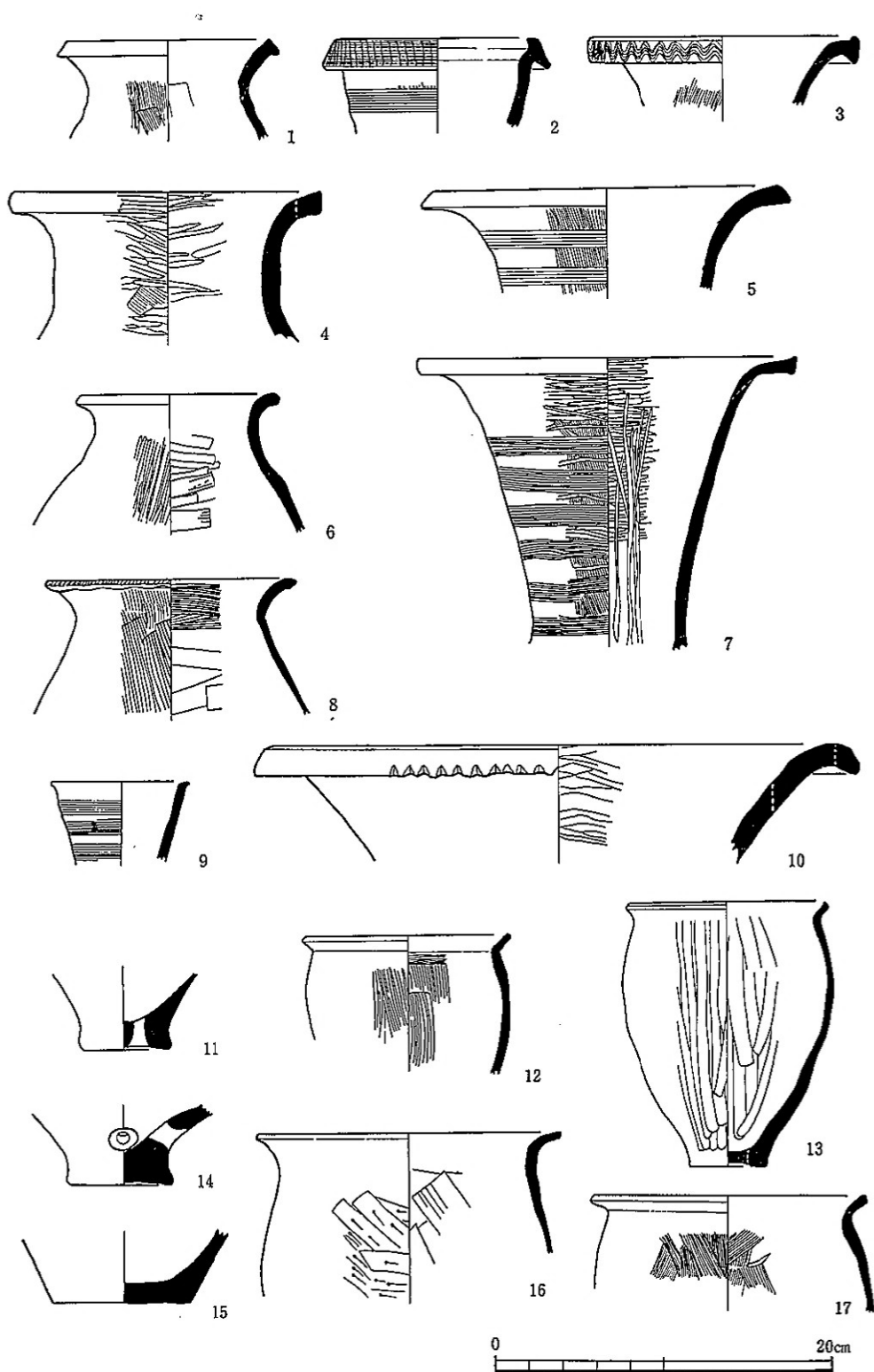
ハケメ調整で、外面に煤が付着する。(12・13)はやや小型で「く」の字に外反する口縁部をもつ。(12)は復元口径12cm、最大腹径12.1cmを測る。内外面ハケメ調整で、外面に煤が付着する。(13)は口径11.6cm、器高15.7cm、最大腹径12.4cmを測る。外面はヘラケズリの後、ナデ調整と思われる、内面はヘラナデ調整である。外面に煤が付着する。(16・19・23)は胴の張らない体部から、なだらかに外反する口縁部をもつ。(16)は復元口径17.8cmを測り、外面はヘラケズリ、内面はハケメ調整である。(19)は復元口径19cm、最大腹径17.6cmを測る。外面はハケメかヘラナデ調整、内面はハケメ調整である。外面に煤が付着する。(23)は復元口径29.9cmを測り、外面はハケメの上をヘラミガキ調整、内面にハケメ調整を施す。(17)は復元口径16.1cmを測り、丸く外反する口縁部をもつ。内外面はハケメ調整で、外面は煤が付着する。(18)は復元口径18.8cm、最大腹径20cmを測り、「く」の字に外反する口縁をもつ。外面はヘラケズリ、内面はハケメ調整である。(21・24)は生駒西麓型胎土である。(21)は復元口径21.8cm、器高22.4cm、最大腹径20cmを測り、あまり胴の張らない体部から、なだらかに外反する口縁部をもつ。内面はヘラケズリの上をヘラミガキ調整、外面はヘラミガキ調整であるが下半部は磨滅著しく、煤が一部に付着する。(24)は復元口径44.8cmを測り、丸く外反する口縁部をもち、端部は上下に肥厚する。内外面ヘラミガキ調整だが、頸部外面にハケメ調整を残す。(22)は復元口径15.5cmを測り、外反する口縁部をもつ。外面は2次的に火を受けたため表面剝離が著しく調整不明で、内面はヘラナデ調整である。(11・15)は底部片である。(11)は底径5.1cmを測り、底部を穿孔している。2次的に火を受けたのか、剝離が著しい。(15)は底径8.1cmを測り、外面にハケメ調整を施す。

鉢形土器(28・30・31・32・33・34) (28)は復元口径13cmを測り、丸みのある体部から、短く外反する口縁部をもつ。体部外面に簾状文と直線文を飾る。(30)は復元口径21.2cmを測る直口の碗状のものである。口縁部外面に列点文を施す。外面はヘラミガキ調整であるが、全体に剝離が著しい。(31・33)は生駒西麓の胎土である。(31)は復元口径26.4cmを測り、短く外反する口縁部をもつ。口縁端部に刻目を施す。内面はハケメの上をヘラミガキ調整である。(33)は復元口径30.3cmを測り、短く「く」の字に外反する口縁部で端部は上下に肥厚する。端部外面に簾状文、体部外面には直線文を施し、口縁部直下の直線文の上に扇形文を飾る。内面はヘラミガキ調整である。(32)は復元口径31cmを測り、外開きの体部からなだらかに外反する口縁部をもつ。内面はハケメ調整である。(34)は復元口径34.4cmを測り、丸く折れ曲がる口縁部をもつ。端部は2段の刻目を施し、体部外面にはハケメ調整の上を直線文と連続扇形波状文を施す。内面は口縁部はハケメ、体部はヘラミガキ調整である。

小型鉢形土器(27) 口径8.3cm、器高5.7cmを測り、口縁部はほんの少し外反する。外面ヘラケズリ調整、内面はナデ調整である。

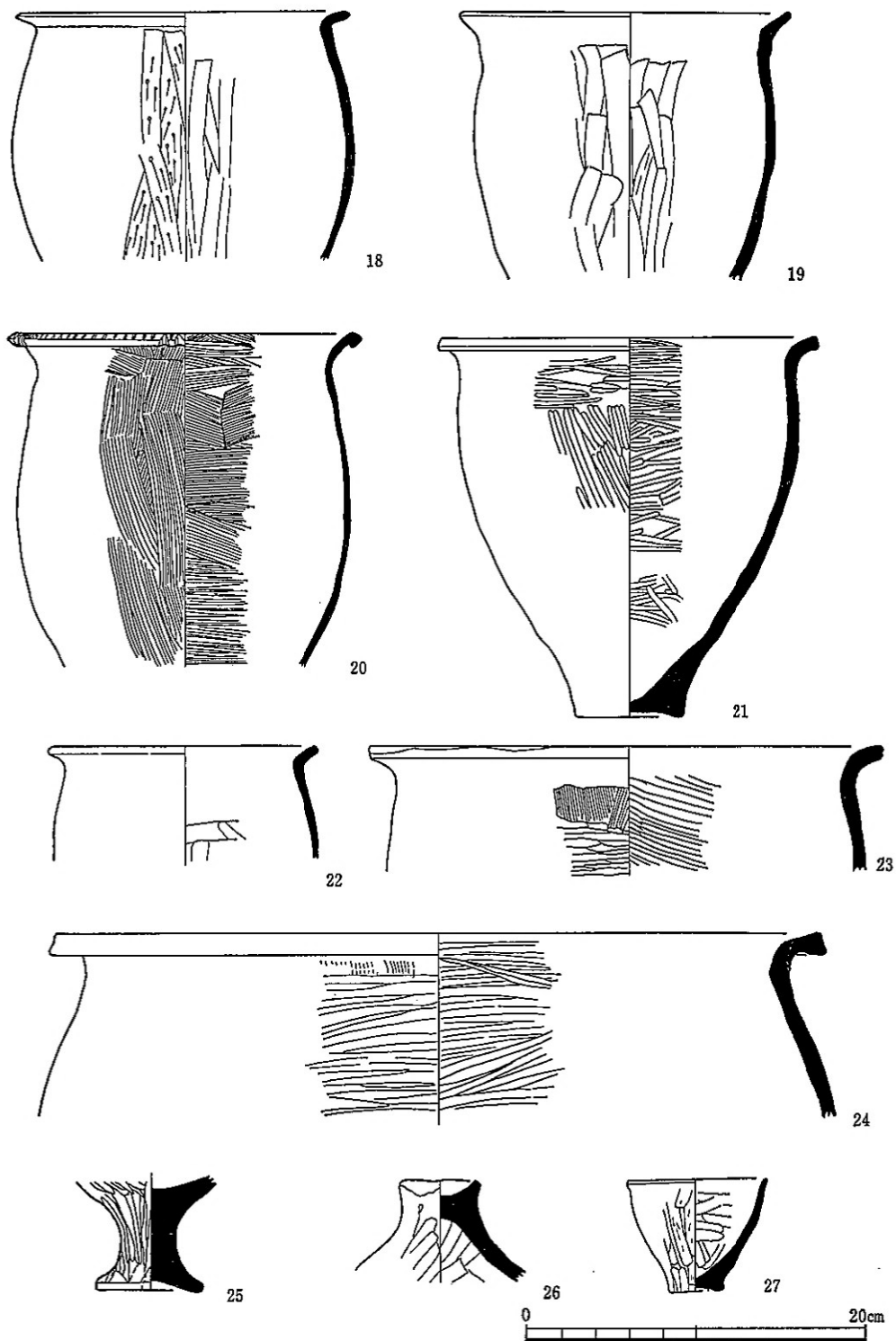
甕用蓋形土器(26) 中凹みのつまみをもつ。全体に雑なヘラナデ調整である。

高杯形土器(25) 脚部片で裾部径6.1cmを測る。

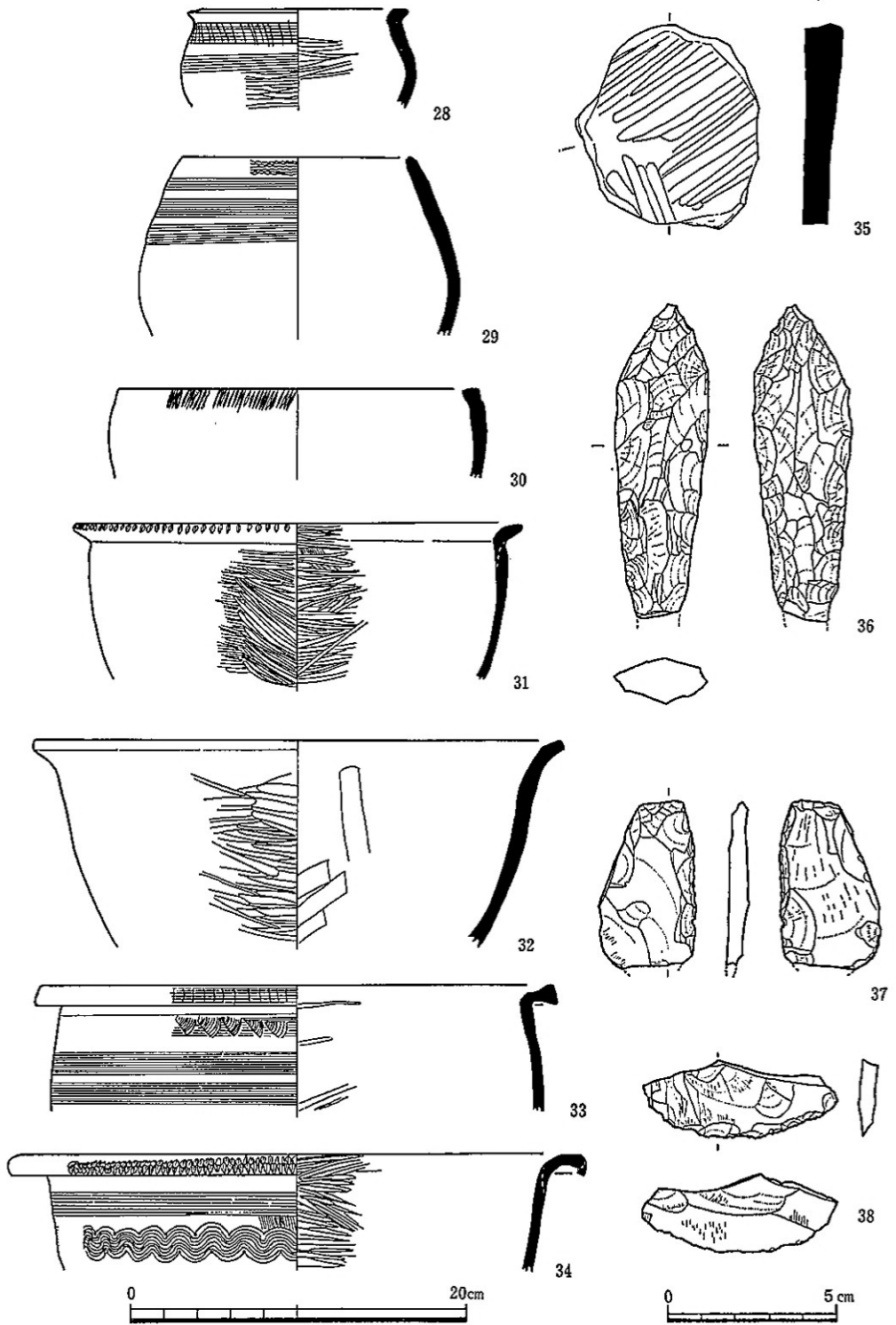


第127図 SD3014出土遺物実測図





第128图 SD3014出土遺物実測図



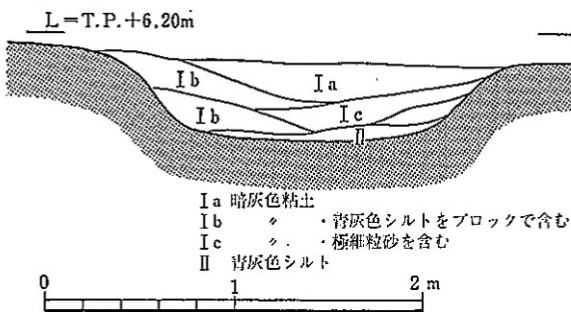
第129図 SD3014出土遺物実測図

土製円板 (35) 最大径5.9cmを測り、土器片を再利用し、周縁は打ち欠いているだけである。重量は37.85gである。

〔石器〕 (36~38)

石槍 (36) 長さ9.1cm、幅2.7cm、厚さ1.4cmを測る。基部に向って幅がすぼまる。中軸線に対してやや斜めの基端をもつ。基端に自然礫面を残し、両面全体に剝離調整を施す。剝離面は不揃いである。

スクレイパー (37・38) (37) は不揃いの長方形を呈し、1辺のうち3分の1程を残して周辺すべてに刃部をつくり出す。刃部の1辺は欠損。現存長4.9cm、幅2.9cm、厚さ0.6cmを測る。両面とも大剝離面を残し周辺のみを剝離調整を施し、刃部を形成する。刃部の半分はすりつぶされている。(38) は長さ5.9cm、幅2.3cm、厚さ0.5cmを測る。横長の剝片の側面面に剝離を加えて、刃部を形成する。



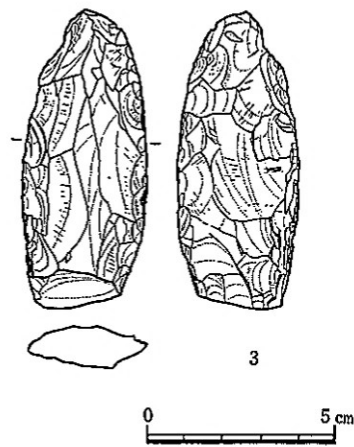
第130図 SD3015土層断面図 (1/40)

SD3015 (第130図) E・F-13区、地山面で検出された。SD3033と重複する。北側はSD3033によって、南側は試掘調査トレンチによって失われている。全長7.0mを検出した。断面形は、逆台形を呈する。底部幅1.2m、上部幅1.9m、深さ0.3mを測る。埋土はI層一暗灰色粘土 II層一青灰色シルトの2層に大別できる。

出土遺物 (第131図)

〔石器〕 石槍 長さ7.9cm、幅3.2cm、厚さ1.1cmを測る。楕円形を呈する。両面とも粗く整形した後、周縁部に剝離調整を加える。

SD3016 (第132図) E-15区、地山面で検出された。南北に走る溝である。南側へは調査区外へ更に延びるものと考えられる。全長5mを検出した。断面形は、U字形を呈する。底部幅0.5m、上部幅1.4m、深さ0.3mを測る。埋土は、暗茶褐色粘土の1層である。底面から、ほぼ完形の甕が1点出土している。



第131図 SD3015出土遺物実測図

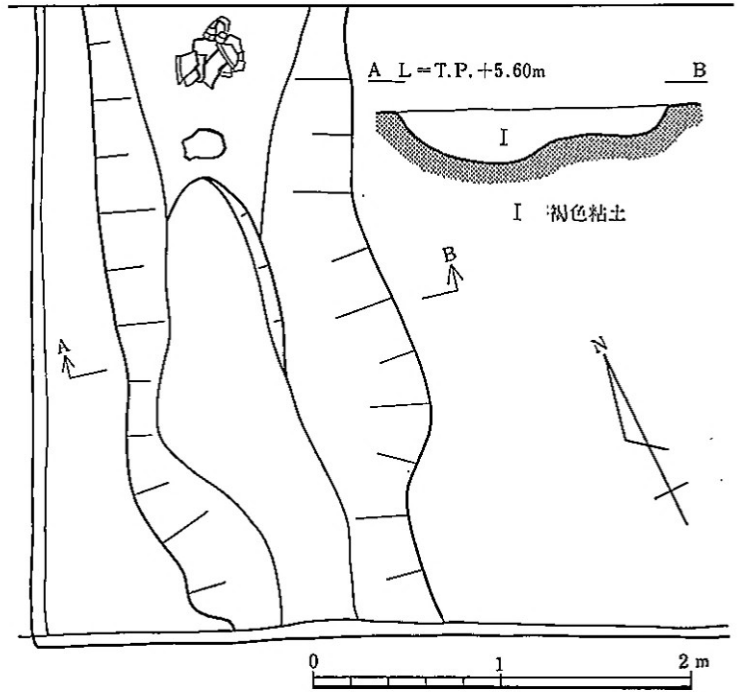
出土遺物 (第133図)

〔土器〕 甕形 (1・2・3)、鉢形 (4) 土器等が出土した。第II-III様式古段階である。

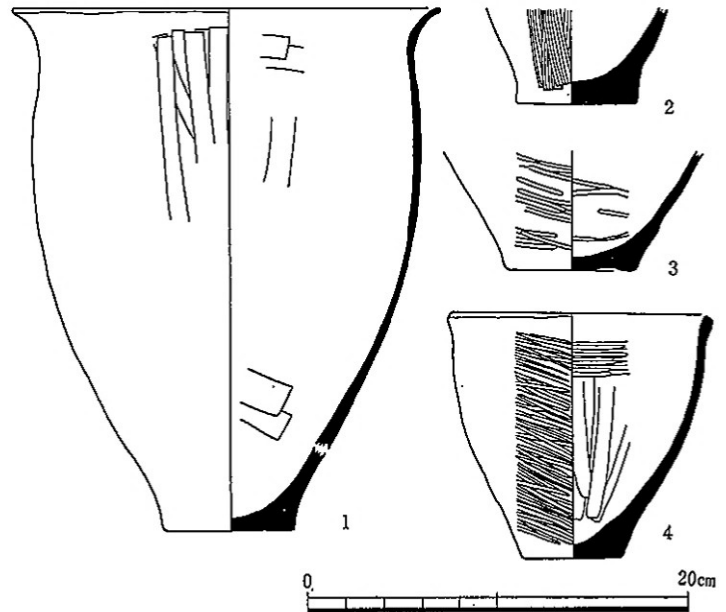
甕形土器 (1・2・3) (1) は復元口径22.6cm、器高27.5cmを測り、最大腹径20.5cm、胴の張らない体部になだらかに外反する口縁部をもつ。内外面ヘラ状のナデ調整と思われる。生駒

西麓の胎土である。(2・3)は底部片である。(2)は底径6.3cmを測り、外面はハケメ調整である。生駒西麓の胎土である。(3)は底径6.8cmを測る。内外面ヘラミガキ調整である。

鉢形土器(4)は口径13.3cm、器高13cmを測り、外開きの体部から外反気味の直口の口縁部をもつ。口縁端部は面をなす。体部内面下半部はヘラ状のナデ調整である。その他体部外面及び内面上半分はヘラミガキ調整である。生駒西麓型の胎土である。

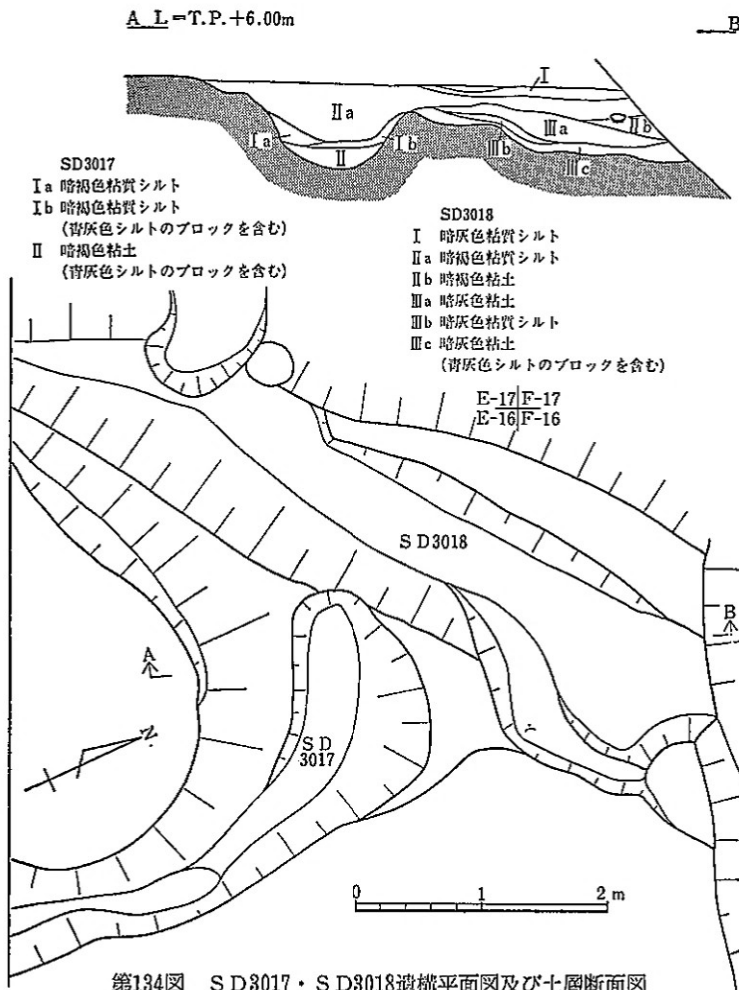


第132図 SD3016遺構平面図及び土層断面図(1/40)



第133図 SD3016出土遺物実測図

SD3017(第134図) E・F-16区、地山面で検出された。SD3018と重複する。東側はSD3018によって削平されている。南側へは調査区外へ更に延びるものと考えられる。全長3.8mを検出された。断面形は、U字形を呈する。底部幅0.3m、上部幅0.6m、深さ0.2mを測る。S



第134図 SD3017・SD3018遺構平面図及び土層断面図

D3008と重複する部分は、深さ0.4mを測る。埋土は、I層—暗灰色シルト II層—青灰色シルトのブロック層を含む層の2層に分けられる。

出土遺物 (第135図)  
 [土器] 甕形土器 (1・2)等が出土した。時期は中期である。

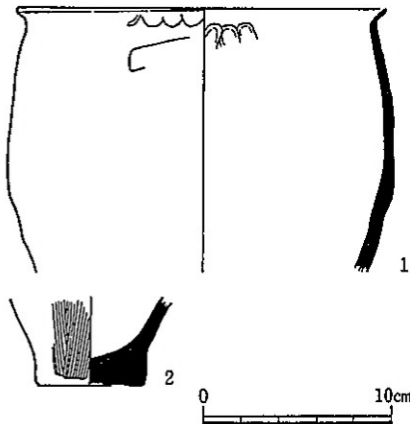
(1)は復元口径19.4cm、最大腹径20.5cmを測り、指押えで口縁部をつくる。内外面は磨滅が著しく調整が不明である。(2)は底径5.8cmを測り、外面はハケメ調整である。

SD3018 (第134図)  
 E・F—16・17区、地

山面で検出された。SD3017、SD3034、SD3033と重複する。南西側はSD3034によって、北側はSD3033によって削平されている。全長6mを検出した。断面形はU字形を呈する。底部幅0.6m、上部幅1.5m、深さ0.6mを測る。埋土は、I層—暗灰色粘質シルト、II層—暗褐色粘質シルト、III層—暗灰色粘土の3層に大別できる。

出土遺物 (第136図)

[土器] 壺形土器が出土した。時期は中期である。底径6.2cmを測り、外面はハケメの上をヘラミガキ調整、内面はヘラナデ調整である。



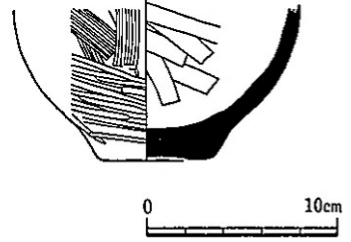
第135図 SD3017出土遺物実測図

SD3019 (第288図) E—17・18区、地山面で検出された。西側はSD3034によって失われている。全長4.5mを検出した。断面形は、U字形を呈する。底部幅0.5m、上部幅1.1m、深

さ0.5mを測る。埋土は、暗褐色粘土である。

出土遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

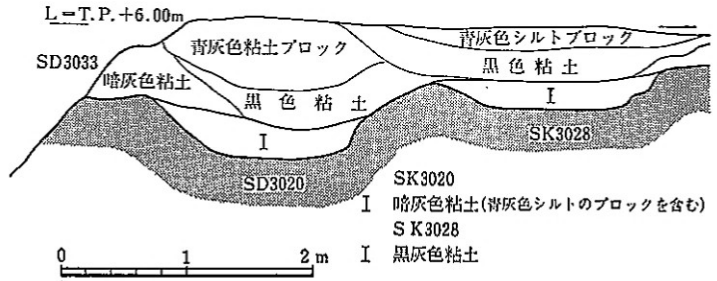
SD3020 (第137図) E・F-18・19、地山面で検出された。北側はSD3033によって失なわれている。南側へは調査区外へ更に延びるものと考えられる。全長7.5mを検出した。底部幅0.9m、上部幅1.6m、深さ0.35mを測る。断面形は、逆台形を呈する。埋土は、暗灰色粘土に、地山の青灰色シルトをブロック状に含む層である。



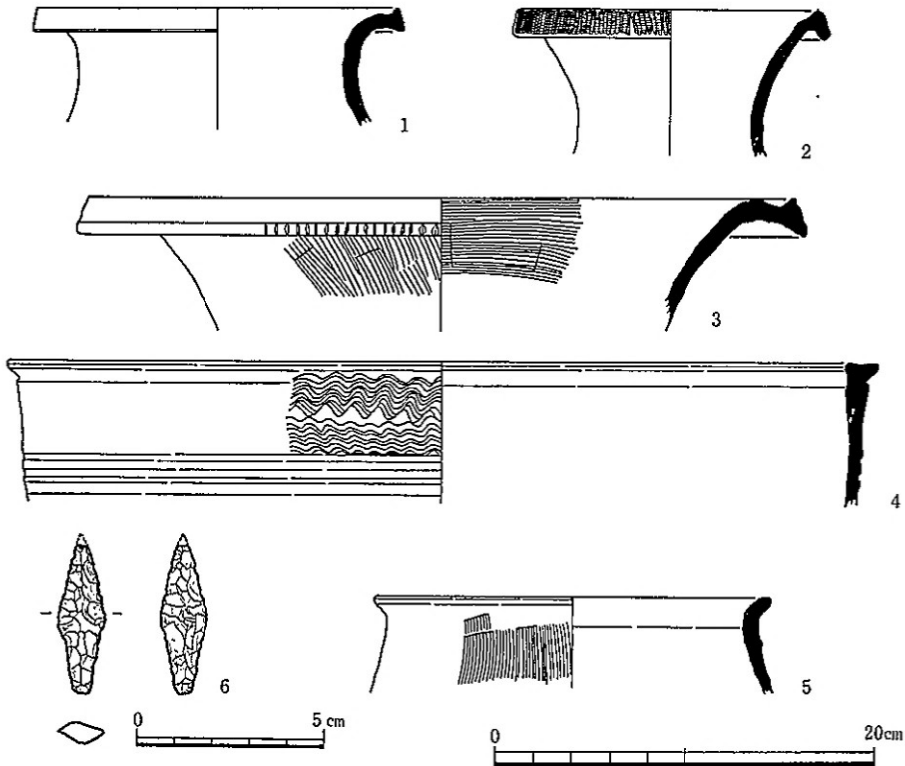
第136図 SD3018出土遺物実測図

出土遺物 (第138図)  
〔土器〕 (1~5) 壺形、  
甕形、鉢形土器等が出土した。第Ⅲ様式である。

壺形土器 (1・2・3)  
(1) は復元口径19cmを測り、短い頸部に外反する口縁



第137図 SD3020・SK3028土層断面図 (1/20)



第138図 SD3020出土遺物実測図

部をもち、端部は上下にやや拡張する。(2)は復元口径16cmを測り、短い筒状の頸部に外反する口縁部をもち、端部は下方に拡張する。端部外面に列点文を飾る。外面はナデ、内面はヘラナデ調整である。生駒西麓型胎土である。(3)は復元口径34.4cmを測り、大きく開く口縁部をもち、端部は上下にやや拡張する。端部に刻目を施す。内外面はハケメ調整である。

甕形土器(5) 復元口径20.8cmを測り、短く丸く外反する口縁部をもち、外面はハケメ調整、内面はヘラナデ調整である。外面に煤が付着する。

鉢形土器(4) 復元口径46cmを測り直口の口縁部をもち、端部は内外へ肥厚する。外面を波状文と凹線文で飾る。内面は指押えの上をナデ調整である。

#### 〔石器〕

石鏃(6) 現存長3.9cm、幅1.2cm、厚さ0.6cmを各々はかる。凸基有茎式、先端欠損する。茎部のえぐりは浅い。両面とも全体を両側辺から剝離調整する。

SD3021(第139図) H-17区、第Ⅱd層で検出された。SK3031・SK3032・SD3033・SD3036と重複する。南側はSD3033によって、北側はSD3036によって失われている。東側でSK3032を、西側でSK3031を削平している。全長5.5mを検出した。断面形は、逆凸字形を呈する。底部幅は、下段で0.3m、上段で0.8m、上部幅2.2mを測る。深さは、下段で0.2m、全体で0.75mを測る。埋土は、Ⅰ層—黒灰色粘質シルト Ⅱ層—暗灰色粘質シルト Ⅲ層—暗黄褐色粘質シルトの3層に大別できる。Ⅲ層上面には、厚さ2cmの青色粘土層が堆積しており、この層をベースとして、土器が一括で出土している。

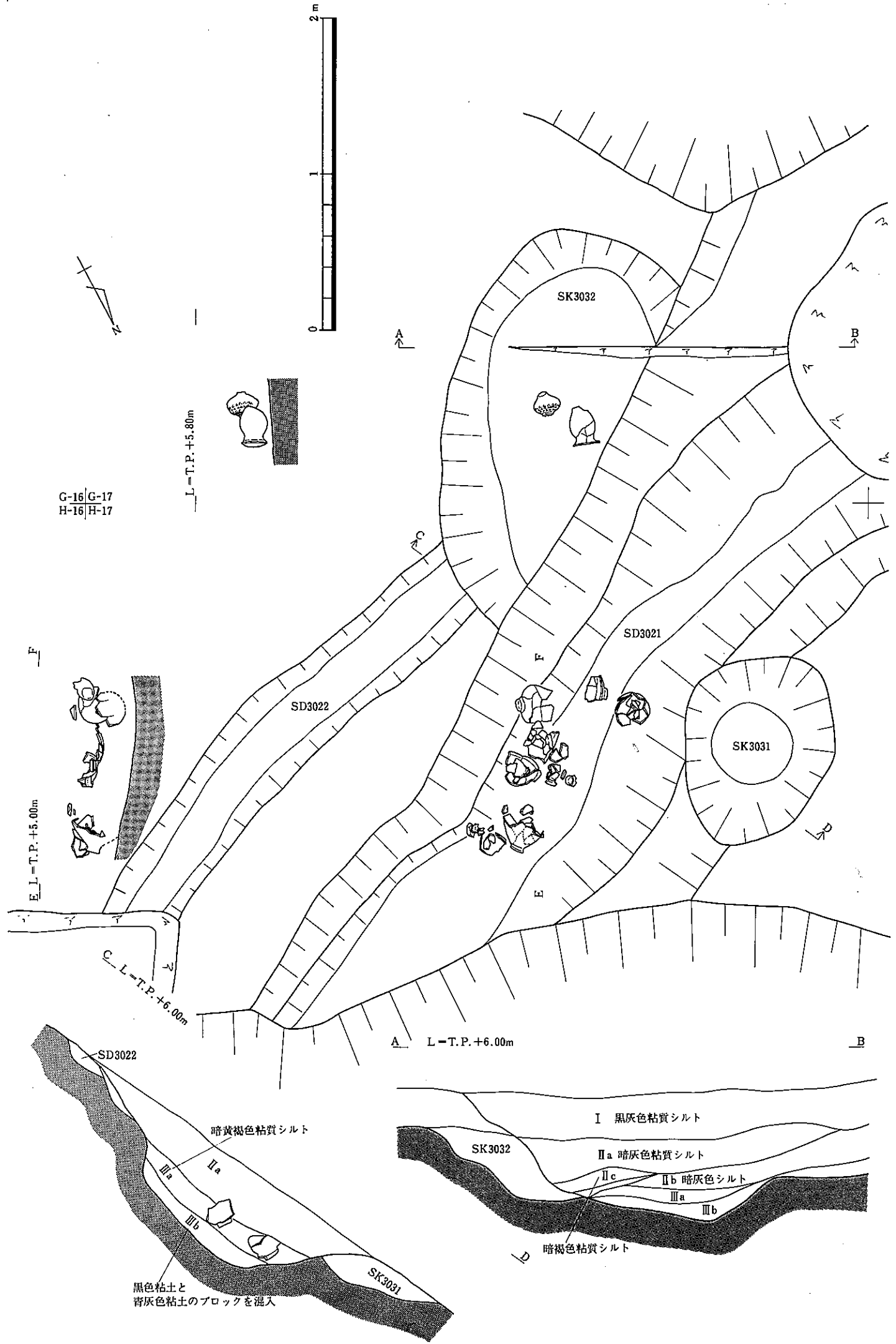
#### 出土遺物(第140・141・142図)

〔土器・土製品〕(1~15) 壺形、甕形、高杯形、鉢形土器、紡錘車、円盤が出土した。第Ⅲ様式である。

壺形土器(1・2) (1)は、復元口径12.2cmを測り、短い頸部から屈曲し外反する口縁部をもち、端部は上下にやや拡張する。端部外面に凹線文を施す。(2)は復元口径13.4cm、最大腹径18.3cmを測り、短く外反する口頸部をもち、体部内外面はハケメ調整である。全体に表面剝離が著しい。

甕形土器(3・4・5・10) (3)は口径13.9cm、器高17.4cm、最大腹径13.8cmを測るやや小型の甕で、口縁部は短く外反する。外面はヘラ削り調整、内面はハケメ調整である。(4)は復元口径19cm、最大腹径19.8cmを測り、丸く外反する口縁部をもち、内外面はハケメ調整で、外面に煤が付着する。(5)は口径15.1cm、器高27.2cm、最大腹径21.5cmを測り、胴部中央が張る体部に外反する口縁部をもち、端部は上下に肥厚する。内外面はハケメ調整で、外面下半はその上をヘラミガキ調整を施す。外面下半部に煤が付着する。(10)は底径7.4cmを測る胴底部片である。内外面はナデ調整である。2次的に火を受けたと思われる。

高杯形土器(11・12) (11)は復元口径24.8cmを測り、外に開く体部から屈曲して直口する口縁部をもち、端部は内外にやや肥厚する。口縁部外面に列点文を施す。(12)は円板充填法の



G-16|G-17  
H-16|H-17

L-T.P.+5.80m

E.L-T.P.+5.00m

C.L-T.P.+6.00m

A L-T.P.+6.00m

暗黄褐色粘質シルト

黒色粘土と  
青灰色粘土のブロックを混入

I 黒灰色粘質シルト

IIa 暗灰色粘質シルト

IIc 暗灰色シルト

IIb 暗灰色シルト

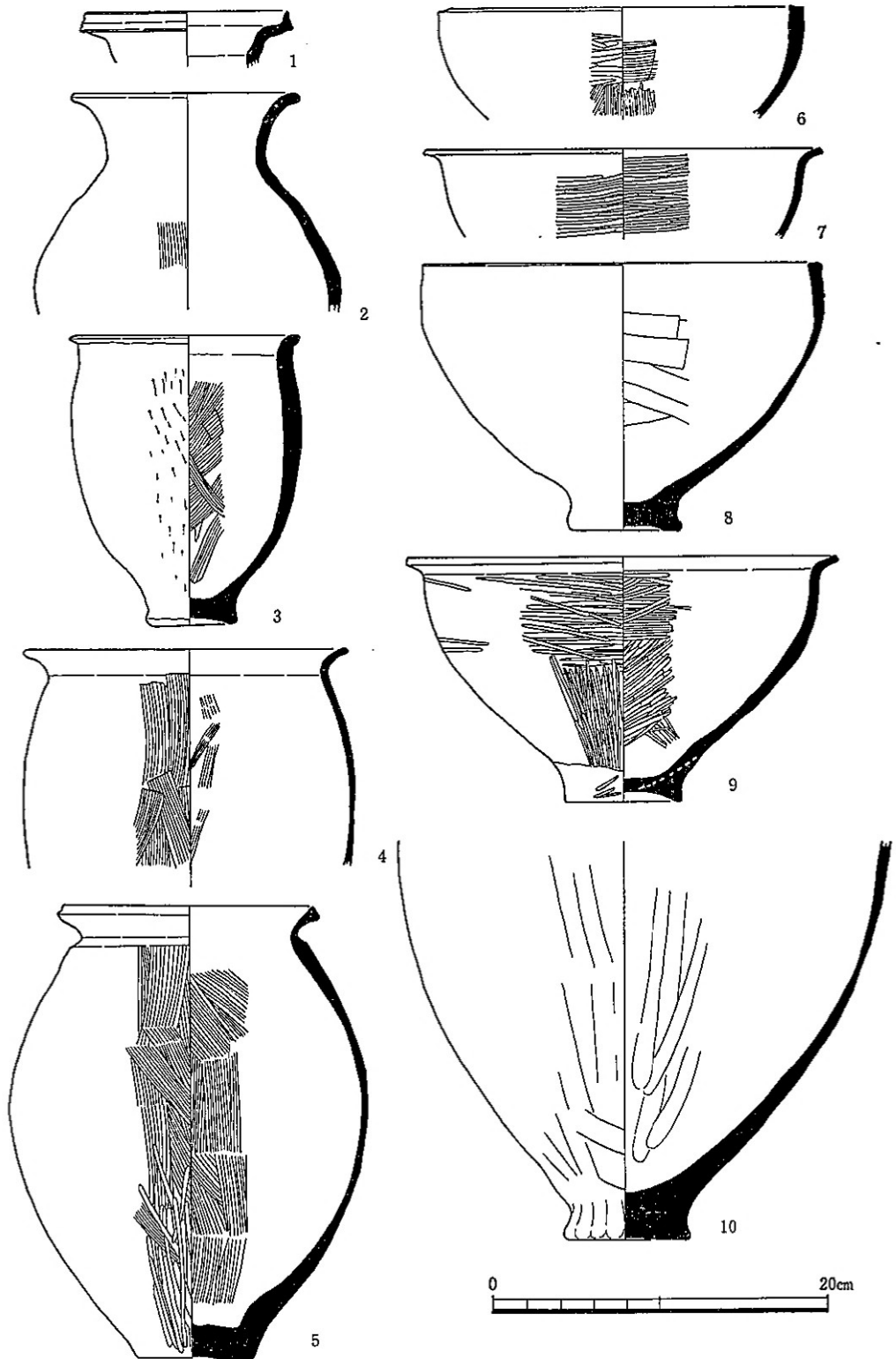
IIIa

IIIb

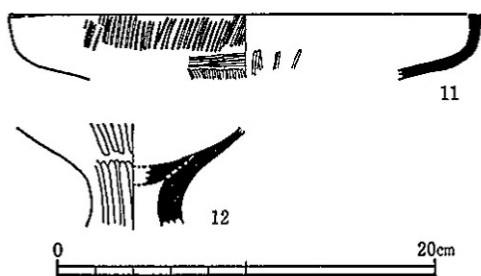
暗褐色粘質シルト

第189図 H-17区出土遺構平面図及び土層断面図





第140図 SD3021出土遺物実測図



第141図 SD3021出土遺物実測図

脚である。外面は2次的に火を受けたのか表面剝離が著しく、調整は不明である。

鉢形土器(6・7・8・9) (6・8)は直口の椀状の形態を呈し、口縁端部は面をなす。(6)は復元口径21.8cmを測り、外面は上半部がヘラミガキ、下半部はハケメ調整、内面は上半部がハケメ、下半部がヘラミガキ調整である。(8)は口径23.7cm、器高16cmを測り、内面はヘラ状のナデ調整である。外面は2次的に火を受け、表面剝離が著しく、調整は不明である。(7・9)

はカーブを描いて立ち上る体部から外反する口縁部をもつ。(7)は復元口径23.4cmを測る。(9)は口径25.6cm、器高14.8cmを測る。

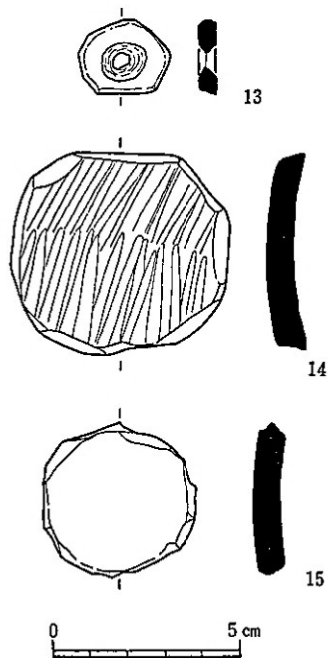
紡錘車(13) 形態から見て一応紡錘車としたが、あまりに小さいため問題がある。径は2×2.4cm、厚さ0.5cm、重量は3g。中心の孔は打ち欠きによって穿孔しており、孔は0.3×0.4cmのいびつな形をしている。周縁は打ち欠いただけらしいが、著しく磨滅しているため詳細は不明である。

円盤(14・15) いずれも周縁を打ち欠いただけのもので、(14)は直径5.4cm、厚さ0.7cm、重量は36.7g、(15)は直径4.1cm、厚さ0.8cm、重量は26.4gをはかる。

SD3022(第139図) H-17区、地山面で検出された。SK3033と重複する。北側へは更に延びると思われるが検出されなかった。南側をSK3033によって失なわれている。全長3.5mを検出した。断面形はU字形を呈する。底部幅0.2m、上部幅0.4m、深さ0.2mを測る。埋土は暗褐色シルトの一層である。

出土遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

SD3023(第143図) J・K-14~18区で検出された。J・K-14~16区では上部をNR9001によって削平されている。SD3037、SK3041、SD3036と重複する。K-15区でSD3037によって失なわれており、J-18区ではSK3041が掘り込まれている。西側はSD3036によって失なわれている。全長28mを検出した。断面形は、逆台形を呈する。底部幅1.6m、上部幅4.2



第142図 SD3021出土遺物実測図

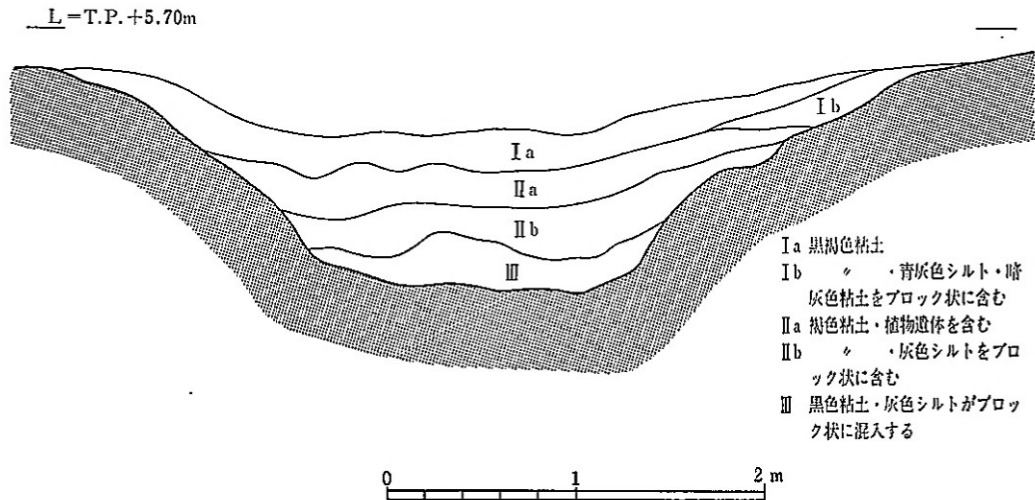
m、深さ 1.7mを測る。埋土はⅠ層—黒褐色粘土、Ⅱ層—褐色粘土、Ⅲ層—黒色粘土・灰色シルトがブロック状に混入する層の3層に大別できる。

出土遺物（第144・145・146・147・148・149・150・151図）

〔土器・土製品〕（1～53） 壺形、甕形、高杯形、鉢形、小型鉢形、細頸壺形、無頸壺形、水差形、壺用蓋形土器、土製円板が出土した。第Ⅲ様式新段階—Ⅳ様式である。

壺形土器（1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・13・14・15・16・17・18・48）

（3・4・5・6・8・16・48）は生駒西麓型胎土である。（3）は口径23.6cmを測り、筒状の頸部に大きく開く口縁部をもち、端部は下にやや拡張する。端部外面に7条の波状文と刻目を施し、頸部に9条の直線文を4回止めて施す。口縁部内面はハケナデで何回か止めて調整している。頸部内面は指ナデ、ヘラナデ調整である。（4）は（3）のような口頸部をもつ壺の体部であると思われる。底径 6.2cm、最大腹径18.9cmを測り、底部を焼成後穿孔する。頸部外面はハケメ調整の上に直線文を描き、肩部に9条の簾状文を飾るが、その上にハケメ調整を施している。体部上半の外面に9条の直線文を施す。内面はハケメ調整である。（5・6・8・16）は外開きの頸部から外反する口縁部をもち、端部は下に拡張する。（5）は復元口径17.6cmを測り、端部、頸部外面を簾状文で飾る。（6）は21.5cmを測り、端部、頸部外面を簾状文で飾る。（8）は復元口径19cmを測り、端部、頸部外面を簾状文で飾る。（16）は復元口径27.9cmを測り、口縁端部外面を細いヘラミガキ調整をした後、刺突文を施す。内外面はナデ調整である。（48）は復元口径11.9cmを測り、口縁端部に刻目を施す。（7）は復元口径18cmを測り、外反する口縁部をもち、端部は下に拡張する。端部、頸部外面に簾状文で飾る。内面に一部ハケメ調整が残る。（9）は復元口径12.7cmを測り短い筒状の頸部に外反する口縁部をもち、端部は上下にやや拡張する。外面はヘラミガキ調整、内面は磨滅のため調整不明である。（10・15）は短い筒状の頸部に外反す



第143図 SD 3023 土層断面図

る口縁部をもち、端部は上下にやや拡張する。(10)は復元口径16.5cmを測り、口縁部外面と内面はヨコナデ調整である。(15)は復元口径21cmを測り、口縁部外面は2条の凹線文で飾り、頸部内外面はハケメ調整である。(11)は最大復径20.4cmを測り、頸部から胴部にかけてハケ状のナデ調整の上を4条の雑な波状文を施す。内面はナデ調整である。腹部外面に一部煤が付着している。(13・14)は短い筒状の頸部に外反する口縁部をもち、端部は上下に拡張する。端部外面は凹線文で飾り、口縁部内面に列点文を施す。復元口径は(13)は18.8cm、(14)は21.2cmを測る。(13)は頸部にくしがき沈線を施す。(17・18)は短い直口の口縁部をもつ。(17)は復元口径9.1cmを測り、口縁端部は内方へ肥厚する。口縁部に凹線文を施し、中央には波状文を施す。肩部に直線文と波状文を飾る。(18)は口径7.6cm、最大腹径16.9cmを測り、口縁部に8条の簾状文と直線文、体部に8条の直線文を飾る。体部内面は指押えとハケメ調整である。(1・2)は短く外に開く頸部から内彎する口縁部をもつ。端部は内方へ肥厚する。どちらも頸部外面に簾状文、口縁部外面は列点文の上に円形浮文を貼りつける。内面は円形浮文の押えつけで、ややその形に突出する。胎土は生駒西麓型である。復元口径は(1)は17.6cm、(2)は20.1cmを測る。

細頸壺形土器(19) 復元口径7.2cm、器高21.8cm、最大腹径15.7cmを測る。口縁部外面に9条の直線文、肩部に扇形文、腹部に9条の直線文と波状文を施す。外面底部近くは指ナデ、又はハケ状のナデ調整である。内面はナデ調整である。

無頸壺形土器(20) 復元口径15cm、最大腹径26.4cmを測り、胴の張る体部に段状口縁部をもつ。口縁端部外面に刻目、体部上半部に簾状文を施し、内面はナデ調整である。胎土は生駒西麓型である。

甕形土器(21・22・23・24・25・26・27・28・29・30・31・33・34・39・40) (21・26・27・28・29・30・31・33)は生駒西麓の胎土である。(21・31)はやや丸みのある体部に、短く丸く外反する口縁部をもつ。(21)は復元口径13.4cmを測り、内面は指押えである。外面に煤が付着する。(31)は口径14.8cm、器高21.5cm、最大腹径17.7cmを測り、内面は指ナデ調整である。外面全体に煤が付着する。(26・28・29)は「く」の字に外反する口縁部をもつ。(26)は復元口径14.4cmを測る。外面は煤が付着する。(28)は復元口径16.2cmを測り、内面はハケメ調整である。外面に煤が付着する。(29)は復元口径16.3cmを測り、内面はナデ調整である。(27)は復元口径13cmを測り、丸く外反する口縁部をもつ。内面はナデ調整である。外面に煤が付着する。(30)は復元口径17.5cmを測り、水平に屈曲する口縁部をもつ。外面はハケメ調整である。(33)は復元口径28.8cmを測り、口縁部は丸く外反し端部は面をなす。内面はナデ調整と思われ、端部外面に煤が付着する。(22)は復元口径14.6cmを測り、丸く外反する口縁部をもち、端部は上方につまむ。外面はナデ、内面はハケメ調整である。外面は煤が付着する。(23)は復元口径13.6cmを測り、丸く外反する口縁部をもつ。2次的に火を受けて、調整等不明である。肩部から口縁部外面に煤が付着する。(24・34)は「く」の字に外反する口縁部をもち、端部は上方

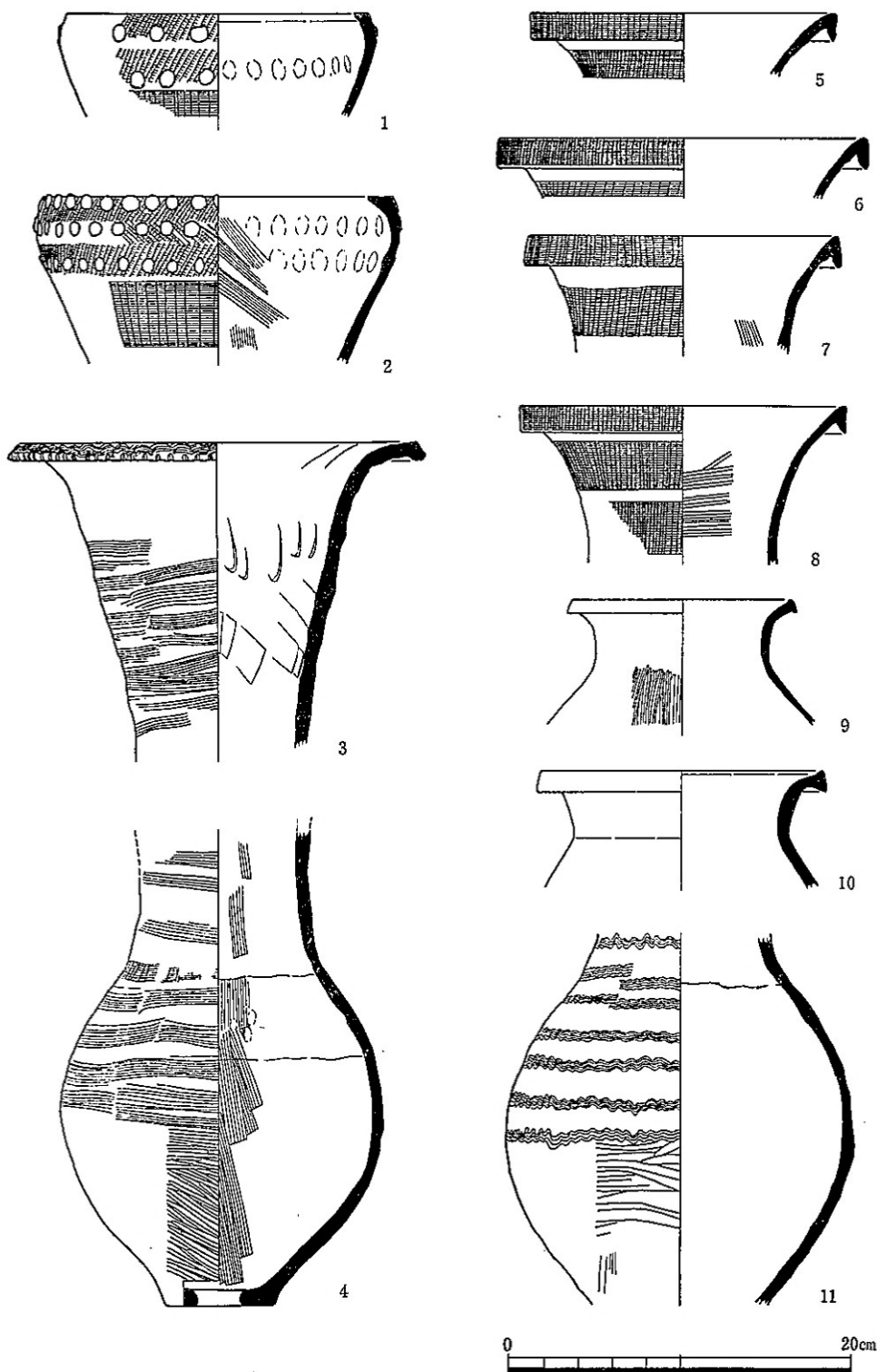
に拡張する。(24)は復元口径13cmを測り、端部外面に浅い凹線状のものが見られる。内面はハケメ調整で、外面は煤が付着する。(34)は復元口径27.6cmを測り、外面はヘラケズリ調整で、煤が一部付着する。内面は表面が剝離して調整不明である。(25)は復元口径14.8cmを測り、「く」の字に外反する口縁部をもち、端部は上方につまむ。内外面はハケメ調整である。(39・40)は底部片で、(39)は底径6.8cmを測り、内面は不定方向のナデ調整である。(40)は底径7.6cmを測り、外面はハケメ、内面はナデ調整である。

高杯形土器(43・44・45・46・47・50・51・52) (43)は水平口縁部の破片。口縁部内面にはヘラミガキ暗文で斜格子文を施す。生駒西麓型胎土である。(44)は復元口径21.8cmを測り、水平口縁部をもち、口縁部内面に煤が付着する。2次的に火を受けている。(45)は脚部片で復元裾部径12.8cmを測り、透し穴は2孔1対で4対施す。脚部外面に8条の沈線を施す。裾部内面はハケメ調整である。外面は剝離著しく調整不明である。(46・47・50)は外に開く体部から稜をもち、直口する口縁部をもち、口縁部外面に凹線文を飾る。(46)は復元口径14.8cmを測り、内面はナデ調整である。(47)は復元口径20.4cmを測り、内面はナデ調整である。(50)は復元口径23cmを測り、口縁端部は内外にやや拡張する。(51)は復元口径21.4cmを測り、口縁部外面は列点文を2段に重ねて飾る。内面に暗文状のヘラミガキを施す。(52)は復元口径23.3cmを測り、口縁部はやや内傾する。口縁部外面に列点文を2段に施す。

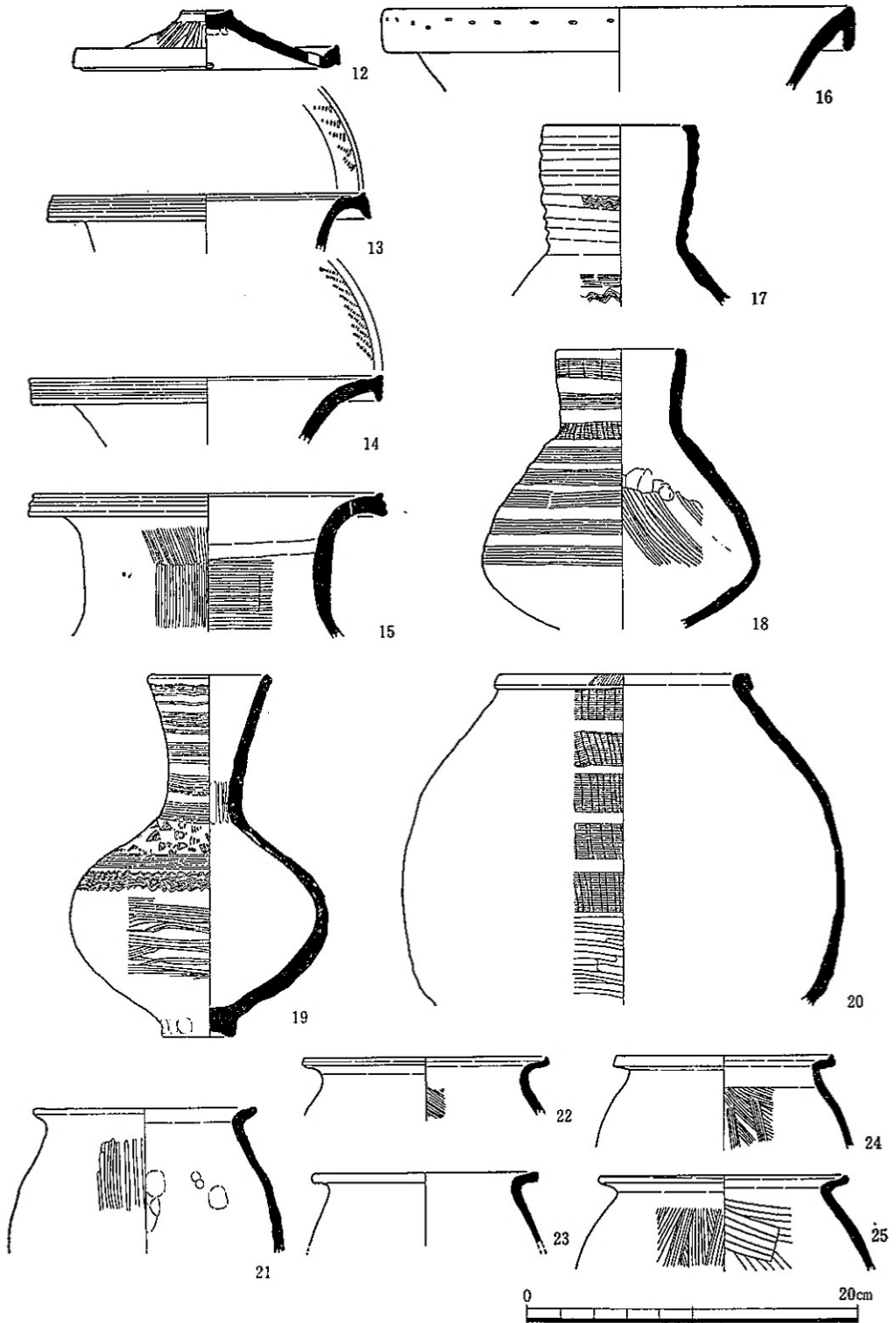
鉢形土器(32・35・36・37・38・53) (32)は口径14.9cm、器高10cmを測り、椀状の体部に高台がつく。高台には小さな穿孔を施し、貫通するものと、そうでないものがある。(35・36・38・53)は生駒西麓型胎土である。(35)は口径18.1cm、器高8.8cm、最大腹径20cmを測り、外に開く体部から内へ屈曲して、やや内傾する口縁部をもち、段状口縁部である。口縁部外面に列点文を施し、頸部外面は簾状文で飾る。(36)は復元口径20.2cmを測り、外に広がる体部に屈曲して直口する口頸部をもち、段状口縁部である。口縁端部に列点文、頸部外面は簾状文を施す。頸部内面はハケメ調整である。(38)は復元口径32cmを測り、外に広がる体部から稜をもち直口する段状口縁の口縁部をもち、口縁外面には簾状文を施し、さらにその上に刺突文を施す。頸部外面は簾状文の上に3本1対の棒状浮文を施す。台付と思われる。(53)は口径29cmを測り、椀状を呈す。口縁端部に刻み目、口縁部外面に列点文を施す。内面はハケメ調整である。(37)は復元口径25.5cmを測り、椀状を呈し、口縁端部は内外にやや拡張する。内外面はハケメ調整である。

小型鉢形土器(49) 口径9.3cm、器高9.3cmを測り、内外面はナデ調整である。

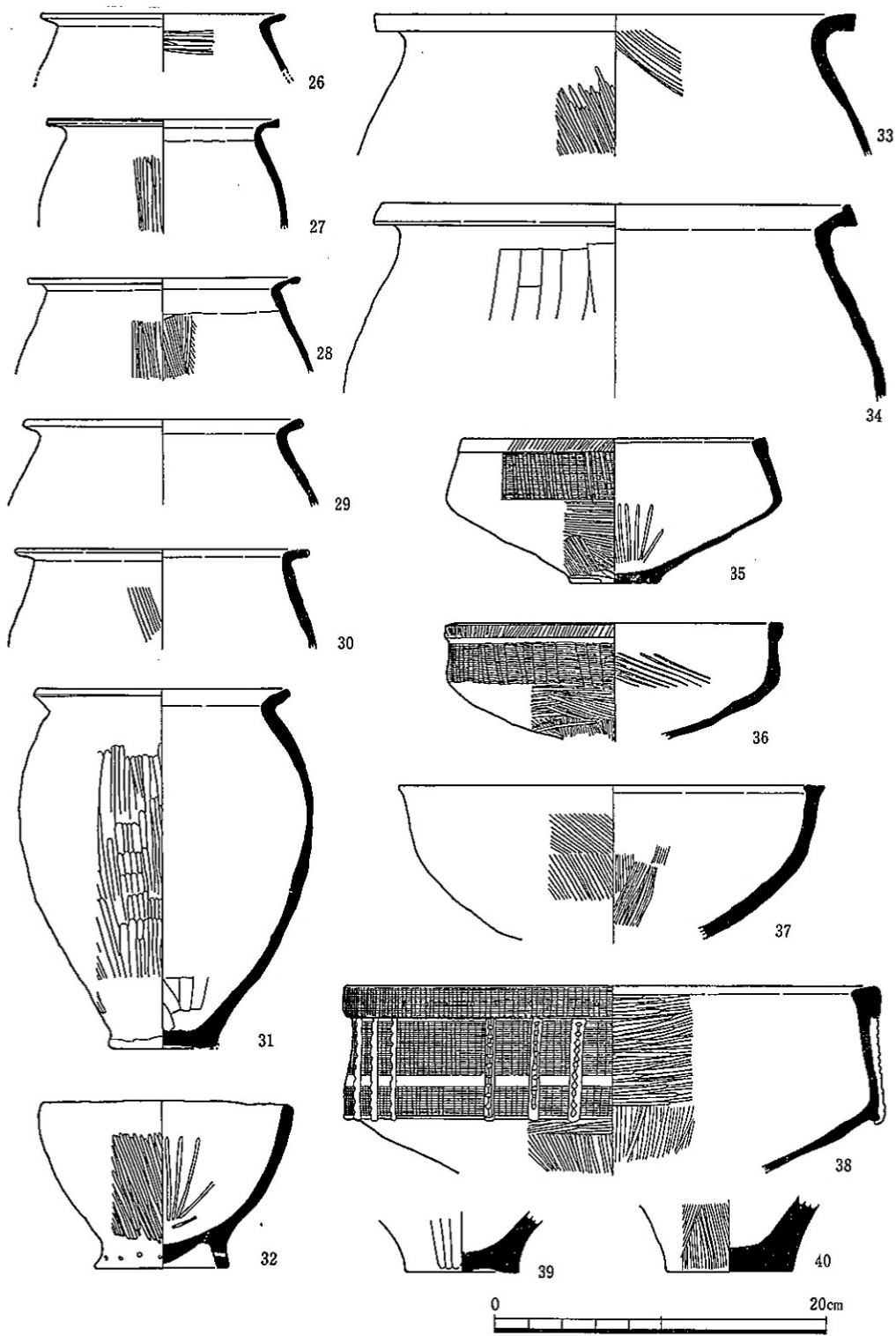
水差形土器(41・42) 算盤玉形の体部に、一方が凹む口縁部と、凹みに対応してその下に横位の水平把手をもち、(41)は体部下半が欠損している。口径8cm、最大腹径19.4cmを測り、口縁部外面は波状文、頸部から腹部にかけては直線文、腹部に波状文を施す。この波状文は直線文から変わっている。内面はハケメ調整である。(42)は口径9.4cm、最大腹径18.2cmを測り、外面はヘラミガキ調整と思われ、煤が付着する。内面は荒いハケメ調整である。



第144图 SD3023出土器物实测图

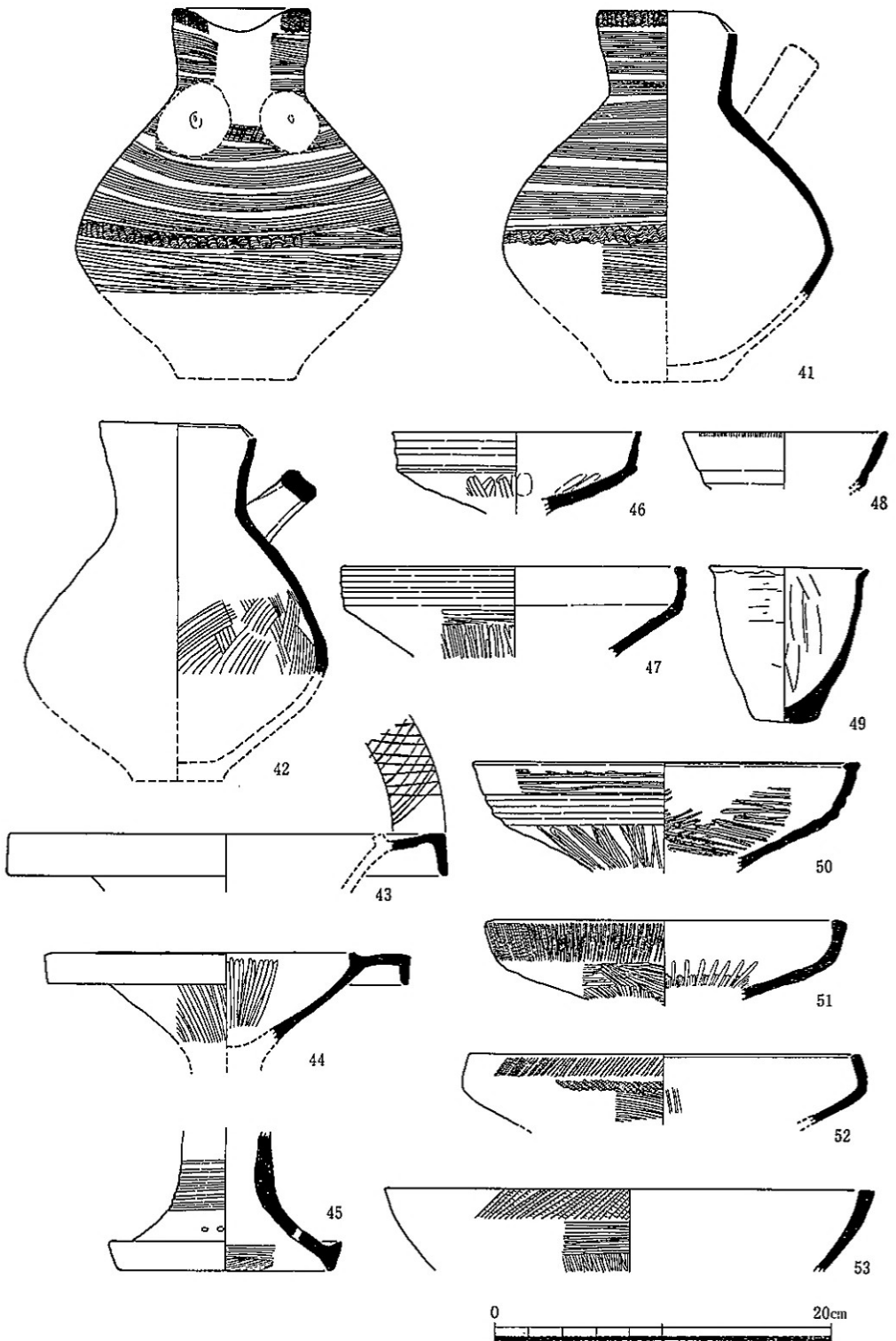


第145図 SD3023出土遺物実測図



第146图 SD3023出土器物实测图





第147図 SD3023出土遺物実測図

壺用蓋形土器 (12) 復元口径16.2cm、器高 3.5cmを測り、紐孔が1ヶ所残存する。外面はヘラミガキ、内面はナデ調整でつまみ、内面と口縁部内面に煤が付着する。生駒西壺型の胎土である。

土製円板 (54) 土器片を利用し、周縁を打ち欠いて円形に整えている。土器片は外面ヘラミガキ調整が行われていたようである。直径が約6.8cm、厚さ1.2cmを測る。

〔石器〕 (55・56)

扁平両刃石斧 (56) 片理面で剝離し、基部及び刃部の一部のみ残存している。残存長6.2cm、同幅1.7cm、厚さ0.8cmを測る。A面の全面には右下り斜め方向の、B面基部には縦及び左下り斜め方向の、刃部には右下り斜め方向の擦痕が、それぞれ認められる。刃部は右下りである。柱状片刃石斧、あるいは扁平片刃石斧からの転用品と考えられる。石質は泥岩である。

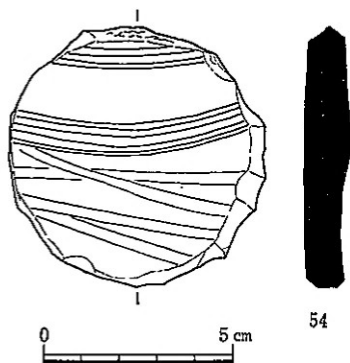
石剣 (55) 平型銅剣を模造して作ったと思われる打製の石剣である。先端部を欠損するが、現存長9.6cm、幅1.9cm、厚さ0.6cmを測る。棘状突起の部分で最大厚を測り、先端に向かって薄くなる。両面全体を丁寧に剝離調整する。

軽石 図示はしなかったが、丸い小さな軽石である。3.1×3.×2 cmを測った。

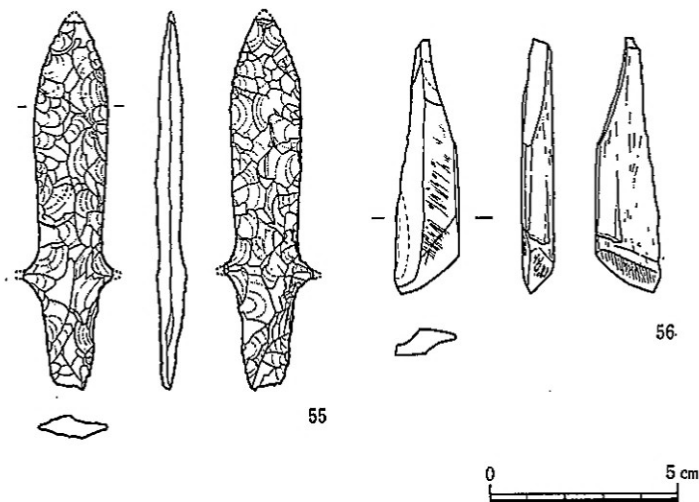
〔木器〕

弓 (57・58) (57) は第Ⅱ a層から出土した。弓弭頭より65.5cmが残っている。弓身には加工痕が見られず、樹枝をそのまま弓身とした簡単なつくりである。断面形は径 2.1cmの円形を呈する。弓弭頭から 1.7cmの部分の2面を削り落とし、段を画し、厚さ0.8cm、幅1.8cmの扁平な突起をつくり出している。

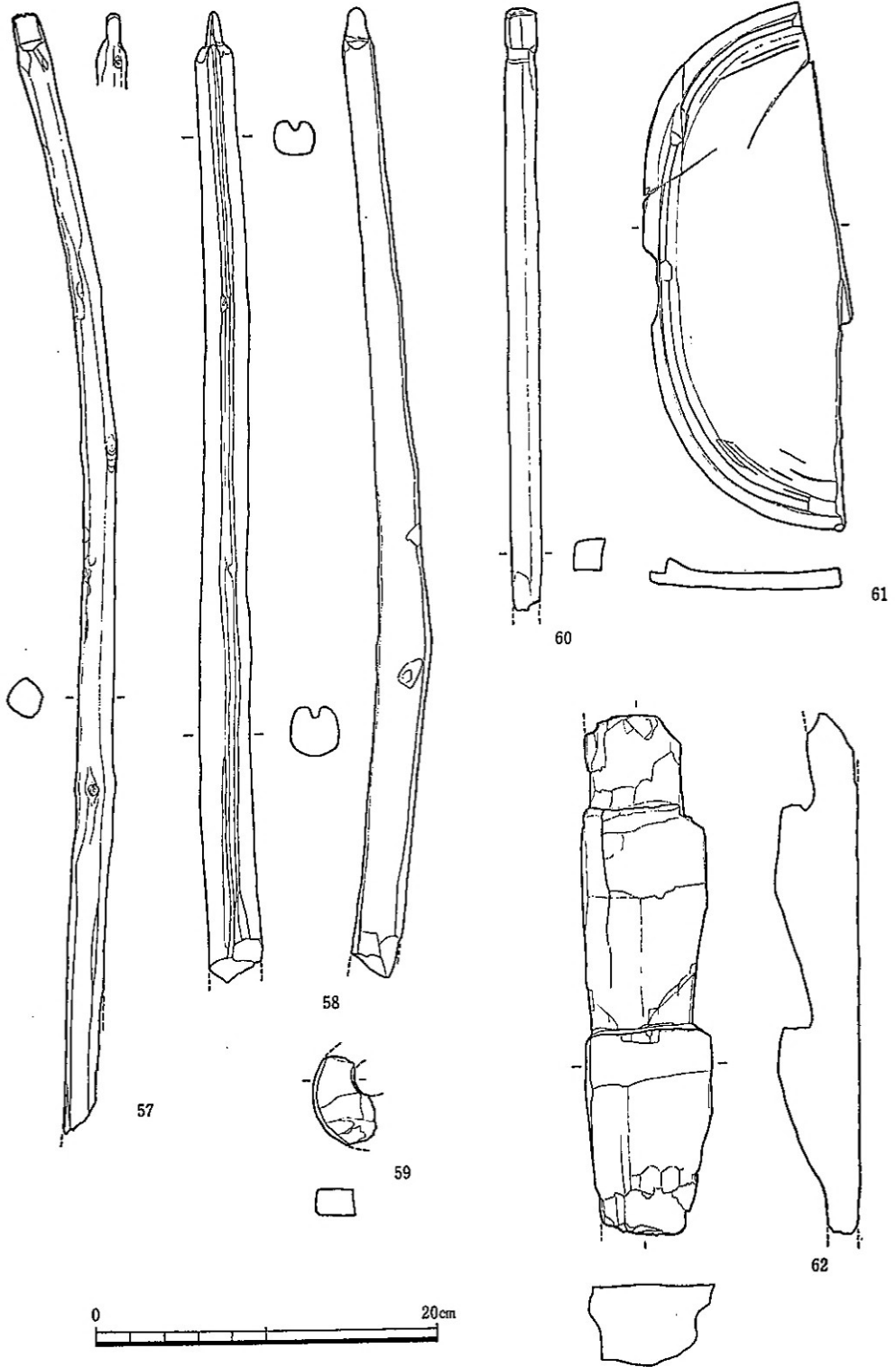
(58) は第Ⅱ b層から出土した。弓弭頭より56.8cmが残っている。弓身には加工痕が見られず、樹枝をそのまま弓身とした簡単なつくりである。弓弭頭より 2.3cmの部分の2面を削り落とし、段を画し、厚さ1cm、幅 1.5cmの扁平な突起をつくり出している。弓身の最大径は2.9cmで、弓弭付近になる程細くなり、径 2.4cmを測る。弓身の内側



第148図 SD3023出土遺物実測図



第149図 SD3023出土遺物実測図

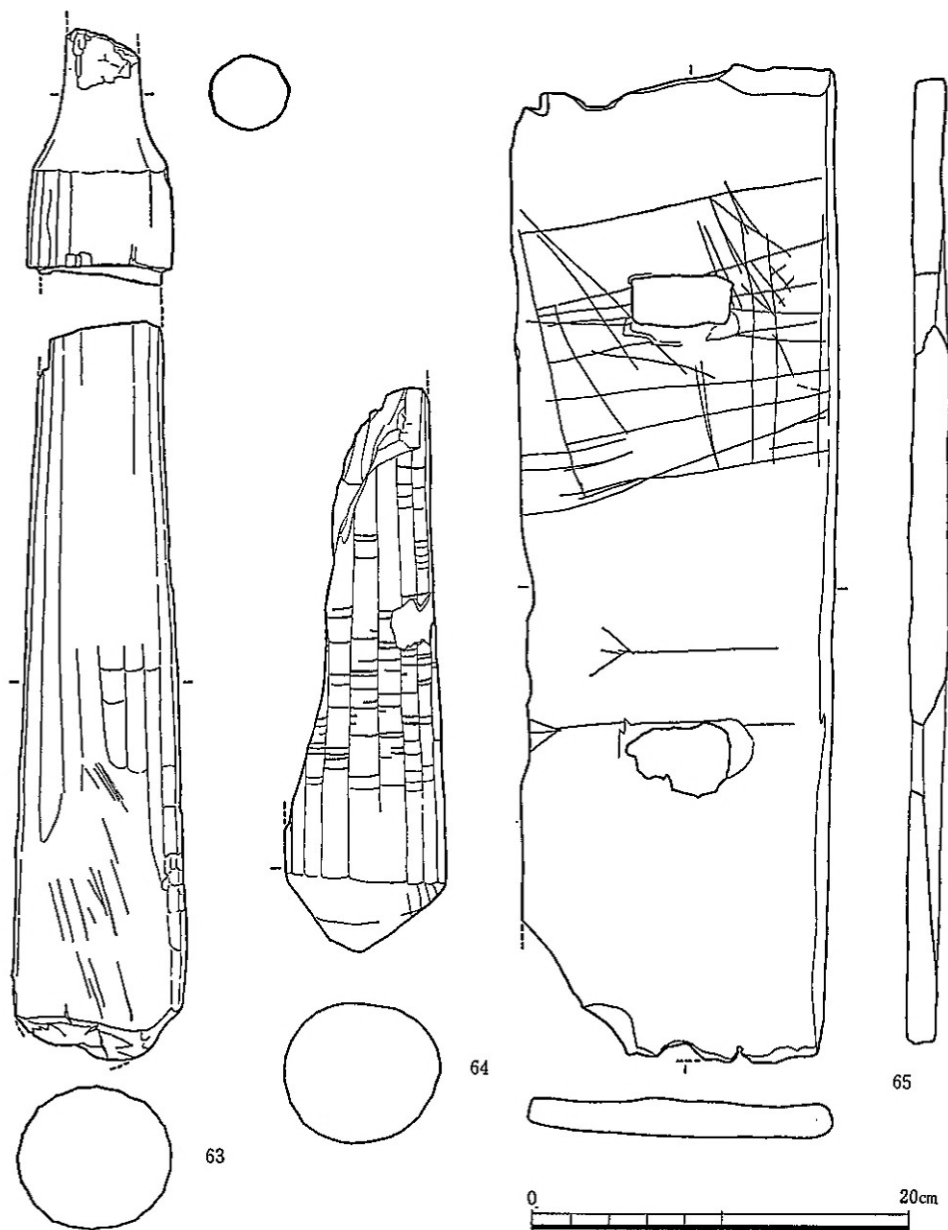


第150図 SD3023出土遺物実測図

には、幅 0.8cm、深さ0.4~0.6cmの「凹」字形の樋が掘られている。樋は、段の部分から欠損部まで及んでいる。

織具 (60) 現存長35.2cmを測り、一辺約 1.8cmの正方形に近い断面形を有する材の端近くに挟り込みを入れた木製品で、織機の部分と考えられる。

朱塗り有孔円板 (59) 第Ⅱ層から出土した。推定復元径約6.7cm、厚さ1.6cmの円板の約3分の1が残っている。中心より約0.9cmずれて、推定復元径約1.05cmの円形の穴があけられている。現存部では、4面に朱が塗られている。



第151図 SD3023出土遺物実測図

盤状木製品 (61) 第Ⅱ層から出土した。約2分の1が残っており、現存長31cmである。長径28.6cm、短径(推定復原)約20cm、深さ0.9cmに刳り貫かれている。これによって、高さ0.8cm、上縁部幅0.35cmの外堤が刳り出されている。更に、この外堤の外側には、幅10cm、厚さ0.6cmの縁がめぐる。

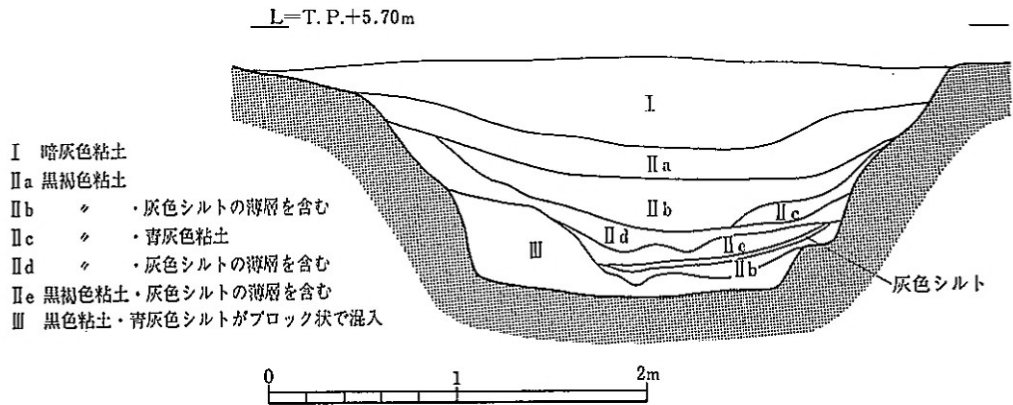
梯子 (62) 第Ⅱ層から出土した。現存長30.5cm、最大幅7.6cm、最大厚4.9cmを測る。足かけ部分が2段残っている。足かけ部は、上面を平坦に、1.7cm刳り出している。段と段の間隔は、約13cmを測る。上段は、前面を約5.3cm平坦にした後、後面に対して15°に刳り込んでいる。下段は、前面を約2.8cm平坦にした後、後面に対して22°に刳り込んでいる。全体に小型である。

杵 (63・64) 最下の堆積土である砂層上から出土した。(63)は、接合しない部分もあるが握りの一部と一方の先端が現存する。現存長約53cm、先端部の直径9.1cmで、搦面は半球形を呈する。くびれ部から5cmほど先端寄りを一段刳り込んでやや細くする。握り部の直径は3.9cmある。表面はていねいに削っており、断面形はきれいな円形を呈する。(64)は、現存長29.9cm、先端部の直径は8.6cmあり、搦面は円錐形を呈する。断面形はわずかに長円形で、握り部に向かって細くなっている。表面はていねいに削っており、工具痕が明瞭に認められる。

こしかけ (65) 長さ52.6cm、幅17.4cm、厚さ約2cmの長方形を呈するこしかけの天板で、脚部は欠失する。約5×3cmの長方形の脚挿入孔が2カ所ある。腐蝕しているが、断面で見るとやや外にひらいた形で脚を取り付けていたことがわかる。工具痕等は不明である。

SD3028 (第152図) H-13・14区、地山面で検出された。SD3032、SK3035と重複する。東側はSD3032によって、東側はSK3035によって削平されている。全長7mを検出した。断面形は逆台形を呈する。底部幅1.8m、上部幅2.2m、深さ1.56mを測る。埋土は、Ⅰ層—暗灰色粘土、Ⅱ層—黒褐色粘土、Ⅲ層—黒色粘土・青灰色シルトがブロック状に混入する層の3層に大別できる。Ⅲ層中には厚さ2cmの植物遺体層が狭在している。Ⅱ層中から、壺形土器(第154図4)、壺形土器(第155図20)、台付鉢形土器(第157図30)が一括で出土している。

出土遺物 (第154・155・156・157・158・159・160図)

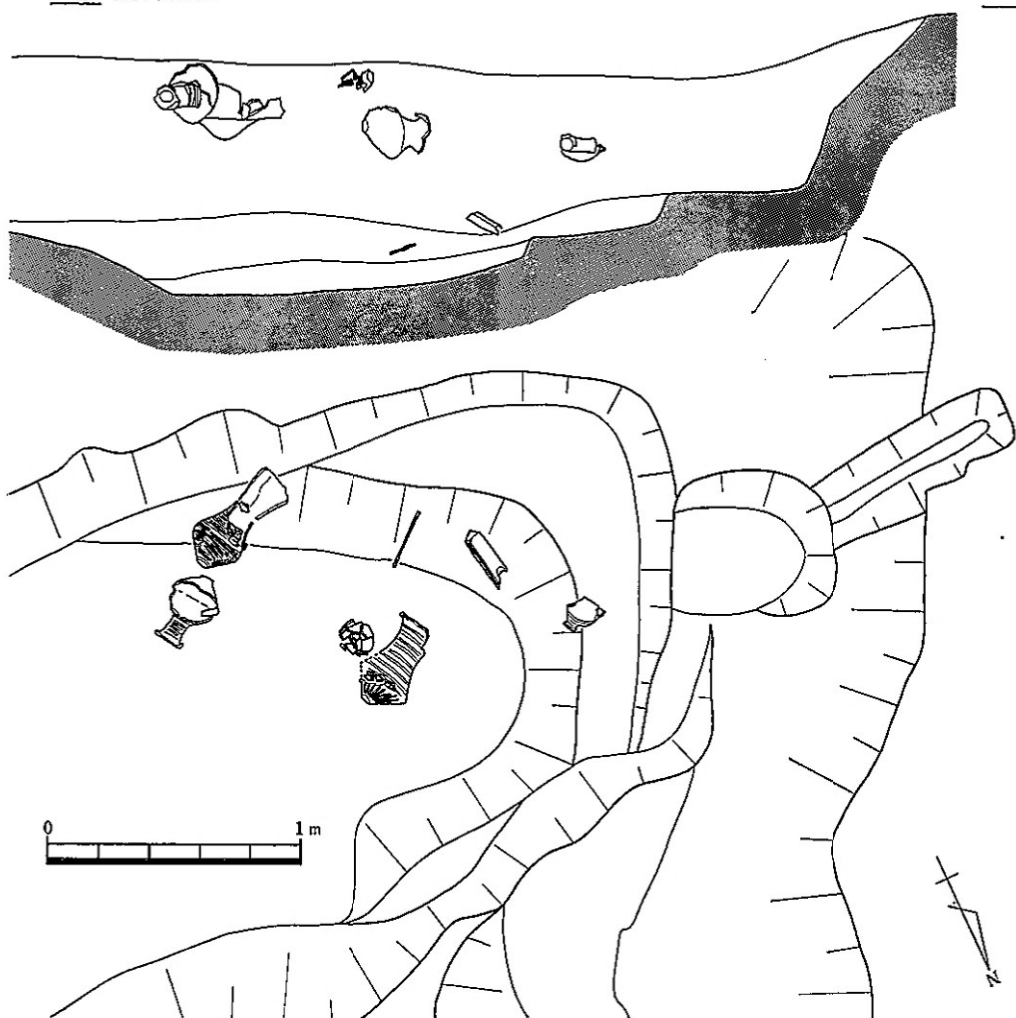


第152図 SD3028土層断面図(1/40)

〔土器〕（1～47） 壺形、小型壺形、甕形、高杯形、鉢形、甕用蓋形、蛤壺形土器等が出土した。第Ⅲ様式である。

壺形土器（1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・14・15・16・17・20・26・27・33・43）（1・3）は頸部が筒状で口縁部は大きく開く。口縁端部は上下にやや拡張する。（1）は復元口径20.6cmを測り、端部外面は波状文、内面には扇形文、頸部外面は直線文が施され、全体に磨滅が著しい。（3）は復元口径28.1cmを測り、口縁端部外面はハケメ調整の上刻目と頸部に直線文が施されている。（2）は復元口径26.3cmを測り、口縁部は外反し、端部は下方にやや拡張する。端部には簾状文に刻目が施され、内外面はハケメ調整。（4）は口径25.8cm、器高36.5cm、最大腹径24.2cmを測り、体部は算盤玉状を呈し、頸部は筒状で、口縁部は外反する。頸部から胴部にかけてハケメ調整の上に10条の直線文を施され、内面は口頸部がナデ調整、体部がハケメ調整である。外面下半部に煤が付着する。（5・6）の頸部は筒状で、口縁部は大

$L = T.P. + 5.60m$



第153図 SD3028遺構平面図（1/40）

きく開く。端部は上下にやや拡張する。(5)は復元口径30cmを測り、端部外面に波状文と刻目を施す。頸部外面はハケメ調整の上に直線文を施す。内面はヘラミガキ調整である。(6)は復元口径21.9cmを測り、端部に波状文と刻目を施す。頸部外面はハケメ調整の上を直線文で飾る。内面はハケメ調整である。2次的に火を受け、全体に磨滅が著しい。(7)は最大腹径21.8cm、底径5.8cmを測り、体部は球形で、頸部は長い筒状である。腹部に1ヶ所焼成後穿孔する。頸部から腹部にかけてハケメ調整の上に直線文を飾る。内面は指押えか、ハケメ調整を施す。底部外面にヘラミガキ調整を施す。(8)は復元口径15cmを測り、筒状の頸部で、口縁部は外反し、端部は上下(主に上)に拡張する。端部は列点文と簾状文を飾る。頸部はハケメ調整の上を直線文で飾り、内面はハケメ調整である。(9)は復元口径21.1cmを測り、頸部は筒状で、口縁部は外反し、端部は上下に拡張する。端部外面を扇形文と簾状文で、頸部外面を簾状文で飾る。内面はナデ調整である。(10)は復元口径14.7cmを測り、口頸部はやや外反気味に直口する。端部は内外に肥厚し、刻目を施す。頸部にヘラ押え凹帯を施す。内外面はハケメ調整である。(11)は復元口径19.4cmを測り、頸部は短い筒状で、口縁部は外反する。端部は上下にやや肥厚する。頸部外面はハケメ調整の上を波状文で飾り、内面は口縁部がハケメ調整、頸部がナデ調整である。(12)は最大腹径12.3cm、底径5.8cmを測る。胴、底部は細長い。外面上半部はハケメ、下半部はヘラケズリ調整、内面はハケメ調整である。外面下半部に煤が付着する。(14)は頸部から肩部にかけての破片で、(20)に似る形態と思われる。直線文を施し、内面はナデ調整である。(15)は復元口径21.9cmを測り、外反する短い口頸部をもち、端部は面をなす。端部に10条の直線文を縦に施し、頸部に10条の直線文を施す。(16)は復元口径14.2cmを測り、口縁部は外反する。内外面はハケメ調整で、口縁部外面に煤が付着する。(17)は復元口径12.6cmを測り、口頸部は短く外反する。外面はヘラミガキ、内面は指押え調整である。口縁部外面に煤が付着する。(20)は口径10.6cm、器高28.8cm、最大腹径23.2cmを測り、体部は胴が張り、頸部は短く細い筒状で、口縁部は外反する。端部は下に拡張する。端部外面に簾状文、頸部に直線文、肩部に簾状文を施す。頸部内面にしぼり目が見られる。(26・27・33)は底部片である。(26)は底径6cmを測り、内面はハケメとナデ調整である。(27)は底径6.4cmを測り、外面はヘラケズリである。(33)は、復元底径11cmを測り、内外面ヘラミガキ調整で、底部外面もヘラミガキ調整である。(43)は復元口径24cmを測り、頸部は外に開き、口縁部は稜をもち、屈曲し直口する。端部は内方やや肥厚する。端部に刻目、口縁部外面に波状文と直線文を施す。内面はナデ調整である。(2・7・8・16・20)は胎土が生駒西麓型である。

小型壺形土器(13) 復元口径8.1cm、最大腹径12.2cmを測り、体部は丸く、口縁部は短く外反する。外面はハケメ、内面はナデ調整で、頸部から肩部にかけてしぼり目が見られる。

壺形土器(18・21・22・23・24・25・28・29・30・31・32・41・42) (18)は口径20.3cmを測り、体部は胴が張り、口縁部は丸く外反する。外面はナデの上をヘラミガキ、内面はナデ調整である。(21・22)は口縁部が丸く外反し、端部は上下にやや肥厚する。(21)は復元口径27.9

cmを測り、外面はハケメ、内面はヨコナデ調整である。(22)は復元口径16.3cmを測り、口縁部は、丸く外反し、端部は上下に肥厚し面をなす。外面はヘラミガキ、内面は調整不明である。

(23)は口径31.2cm、器高53cm、最大腹径38.2cmを測り、口縁部は「く」の字に外反し、端部は面をなす。内外面はハケメ調整で、底部外面をヘラケズリ調整である。内面の胴下半部は2次的に火を受けている。(24)は復元口径13.8cm、最大腹径12.4cmを測り、体部は胴が張らず、口縁部は丸く外反する。外面はハケメ、内面は指ナデ調整である。(25)は復元口径15cmを測り、体部は胴が張らず、口縁部は丸く外反する。外面はハケメの上をヘラミガキ調整を施す。内面ハケメとヘラミガキ調整である。外面に煤が付着する。(28・29・30)は底部片である。(28)は底径6.3cmを測り、底部に焼成後穿孔する。外面はハケメ、内面はヘラミガキ調整で、2次的に火を受ける。表面が全体と剝離している。(29)は底径5.6cmを測り、外面はハケメ調整で、内面に煤が付着する。(30)は底径5.8cmを測り、突出する厚い底部である。内面はナデ調整である。(31)は復元口径11.2cmを測り、体部から口縁部にかわるところに稜があり、口縁部は外反する。口縁部外面はヘラケズリの上をヨコナデ調整、体部外面はヘラケズリ調整、体部内面はナデの上をヘラミガキ調整である。(32)は口径12.2cm、器高13.7cm、最大腹径11.6cmを測り、口縁部は「く」の字に外反する。内面はナデ調整である。(25・28・29・30・32)は生駒西麓の胎土である。(41・42)は底部片である。(41)は底径8.8cmを測り、内面はナデ調整である。(42)は底径7.3cmを測り、外面上半部はハケメ、下半部はヘラミガキ調整、内面はハケメ調整である。

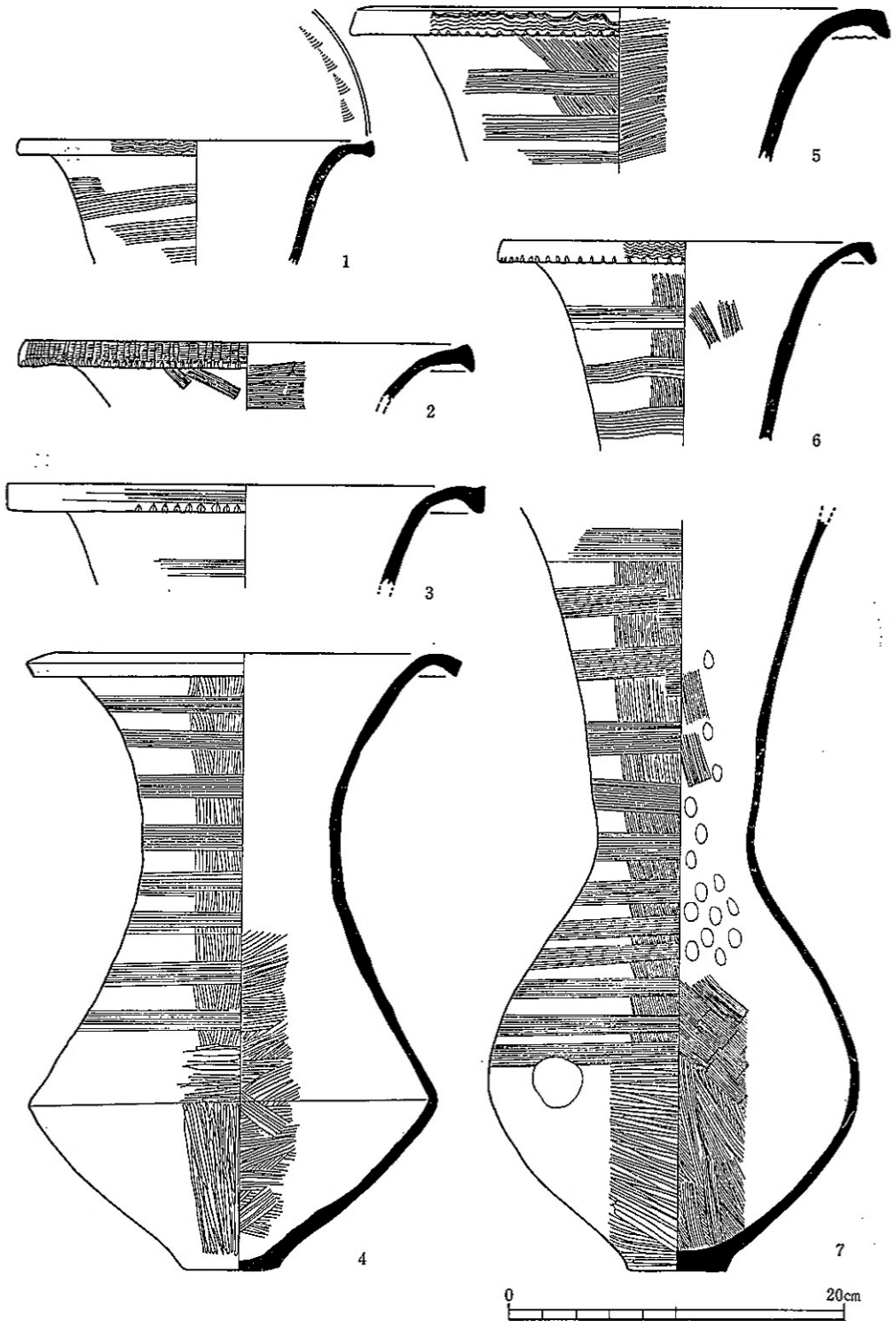
高杯形土器 (36・39) (36)は復元口径20cmを測り、口縁部外面に列点文を施す。2次的に火を受けたと思われる、磨滅が著しい。生駒西麓型胎土である。(39)は復元口径24.1cmを測り、口縁部は水平である。内外面ヘラミガキ調整である(端部と凸帯はヨコナデ調整)。

鉢形土器 (34・35・37・38・44・45) (34)は復元口径14.7cmを測り、体部は丸みをもち、口縁部は水平に屈曲し、端部は上下にやや肥厚する。内外面はハケメ調整である。外面から口縁部内面にかけて煤が付着する。(35・38)は碗状を呈し、端部は丸い。(35)は復元口径16.1cmを測り、外面は直線文の上に扇形文を施す。内外面はナデ調整であるが、磨滅が著しい。(38)は口径15.7cm、器高11.9cmを測る。2次的に火を受け、内外面一部が赤褐色になる。(37・44)は碗状を呈し、端部は面をなす。(37)は復元口径21.8cmを測り、口縁外面に3条の凹線文を施す。内面はハケメの上をヨコナデ調整である。外面はナデ調整である。(44)は復元口径27cmを測り、端部に刻目を施し、口縁部外面に2条の凸帯をつけ、刻目を施す。内外面はナデ調整である。(45)は復元口径27.4cm、最大腹径28.4cmを測り、体部は屈曲し、口縁部は短く外反する。端部はやや肥厚し面をなす。口縁部に簾状文、体部に直線文と扇形文を施す。内外面はヘラミガキ調整である。

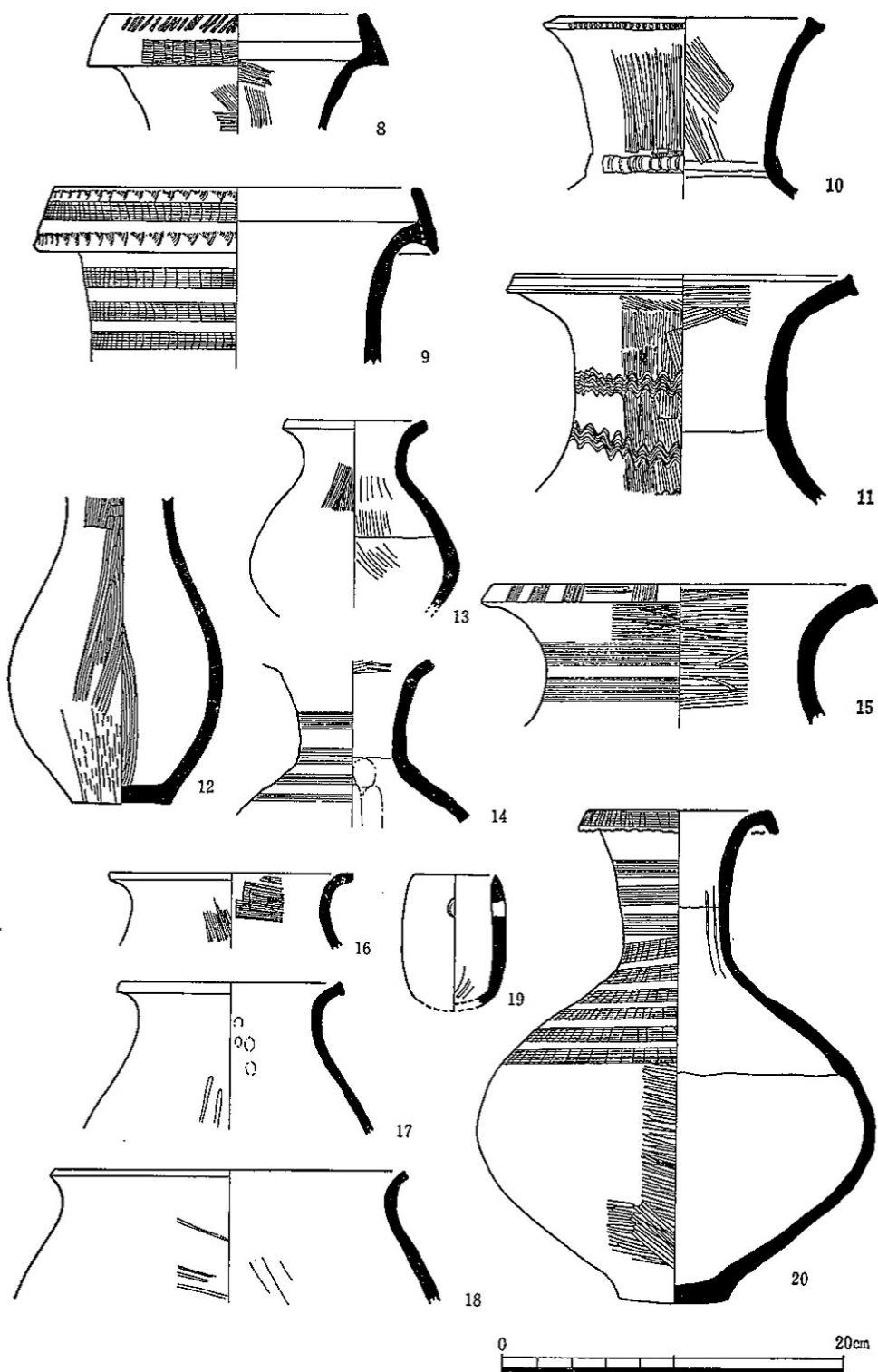
甕用蓋形土器 (40) 復元口径17.4cmを測り、外面はヘラミガキ、内面はヨコナデ調整である。口縁端部内外面に煤が付着する。

蛸壺形土器 (19) 復元口径4.7cmを測り、口縁部は直立し、体部は筒状で、丸底に終わる縦

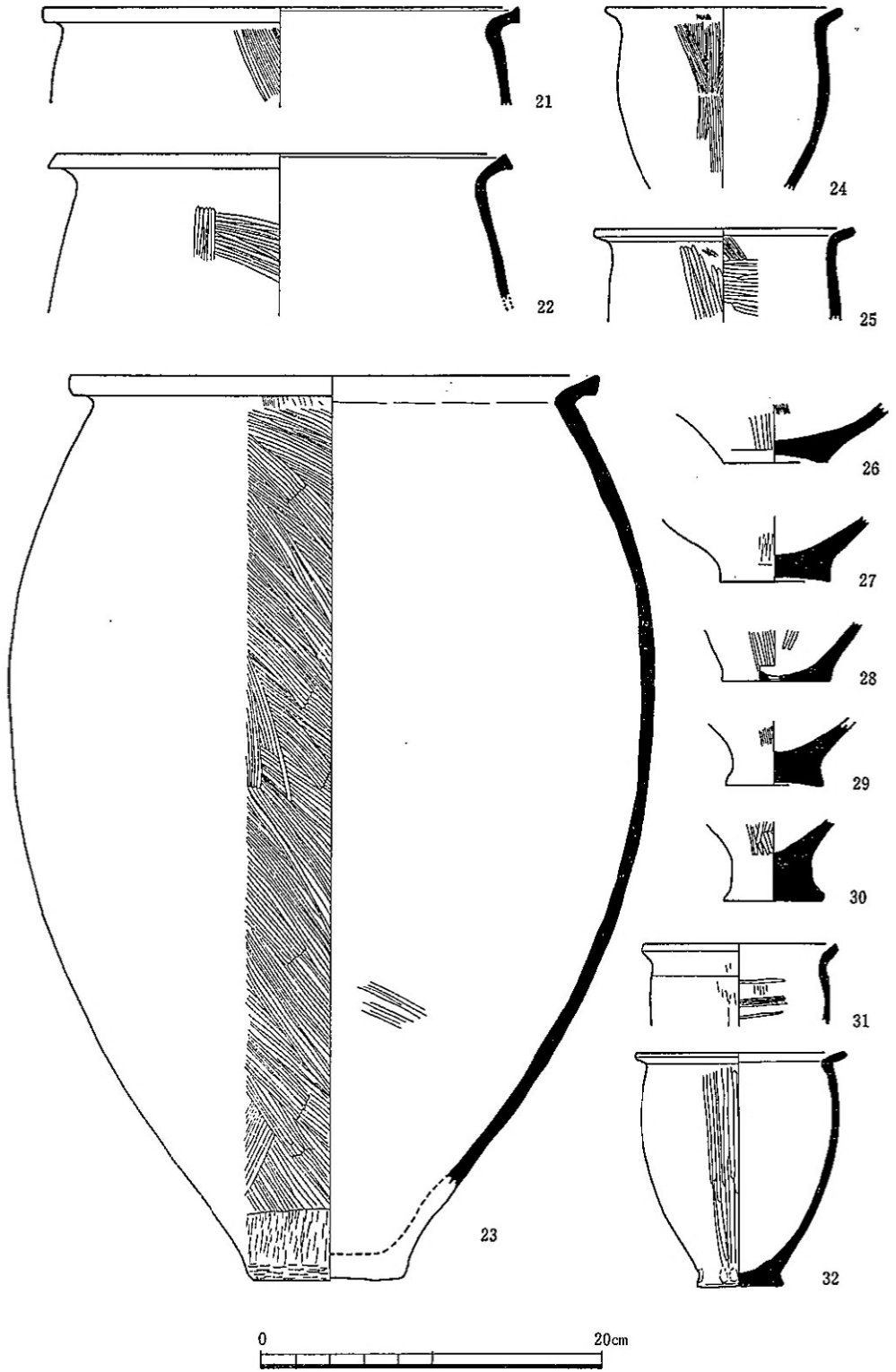




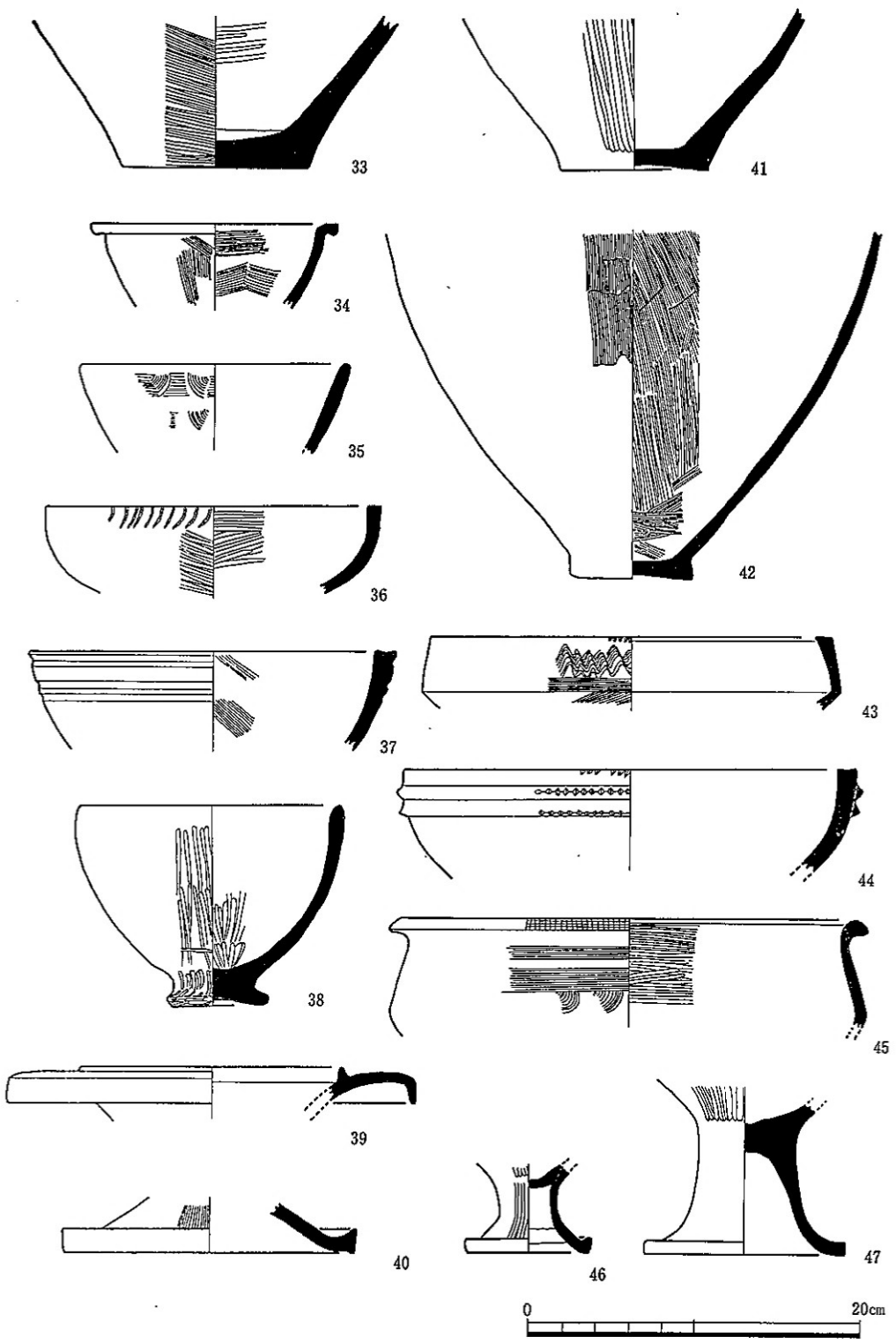
第154図 SD3028出土遺物実測図



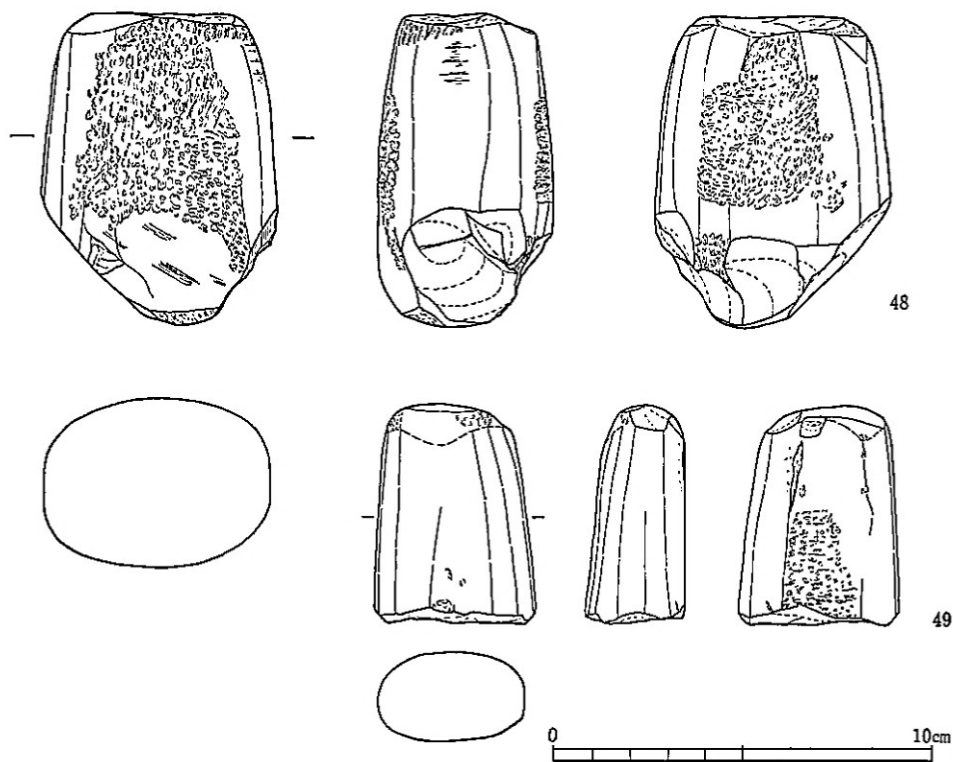
第155图 SD3028出土物实测图



第156図 S D 3028出土遺物実測図



第157图 SD 3028出土遗物实测图



第158図 SD3028出土遺物実測図

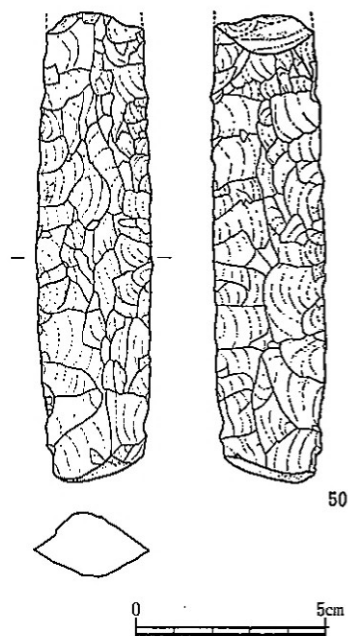
長のものである。口縁部に1ヶ所紐孔が残存する。

脚部片(46・47) (46)は復元裾部径7.3cmを測り、脚部内面はヘラケズリ調整である。

〔石器〕(48~50) 大型始刃石斧2点、石槍1点が出土した。

大型始刃石斧(48・49) (48)は基部のみ残存している。残存長8.2cm、幅6.2cm、厚さ4.6cm、基端は中央部がやや凹み気味である。A面折損部近くに右下りナナメ方向の擦痕がある。A・B両面の中央部と、A面側折損端部には二次的敲打痕があり、敲石に転用されたものと考えられる。(49)は基部のみ残存している。残存長5.7cm、幅4.2cm、厚さ2.6cm、基端は丸く作られている。B面中央部には、製作時の敲打痕が残る。全体に肌荒れが目立つ。石質は(48)が玢岩で、(49)が安山岩である。

石槍(50) 現存長12.5cm、幅3.1cm、厚さ1.7cmを測る。先端部は欠損。基端に自然礫面をもつ平基式の石槍で



第159図 SD3028出土遺物実測図

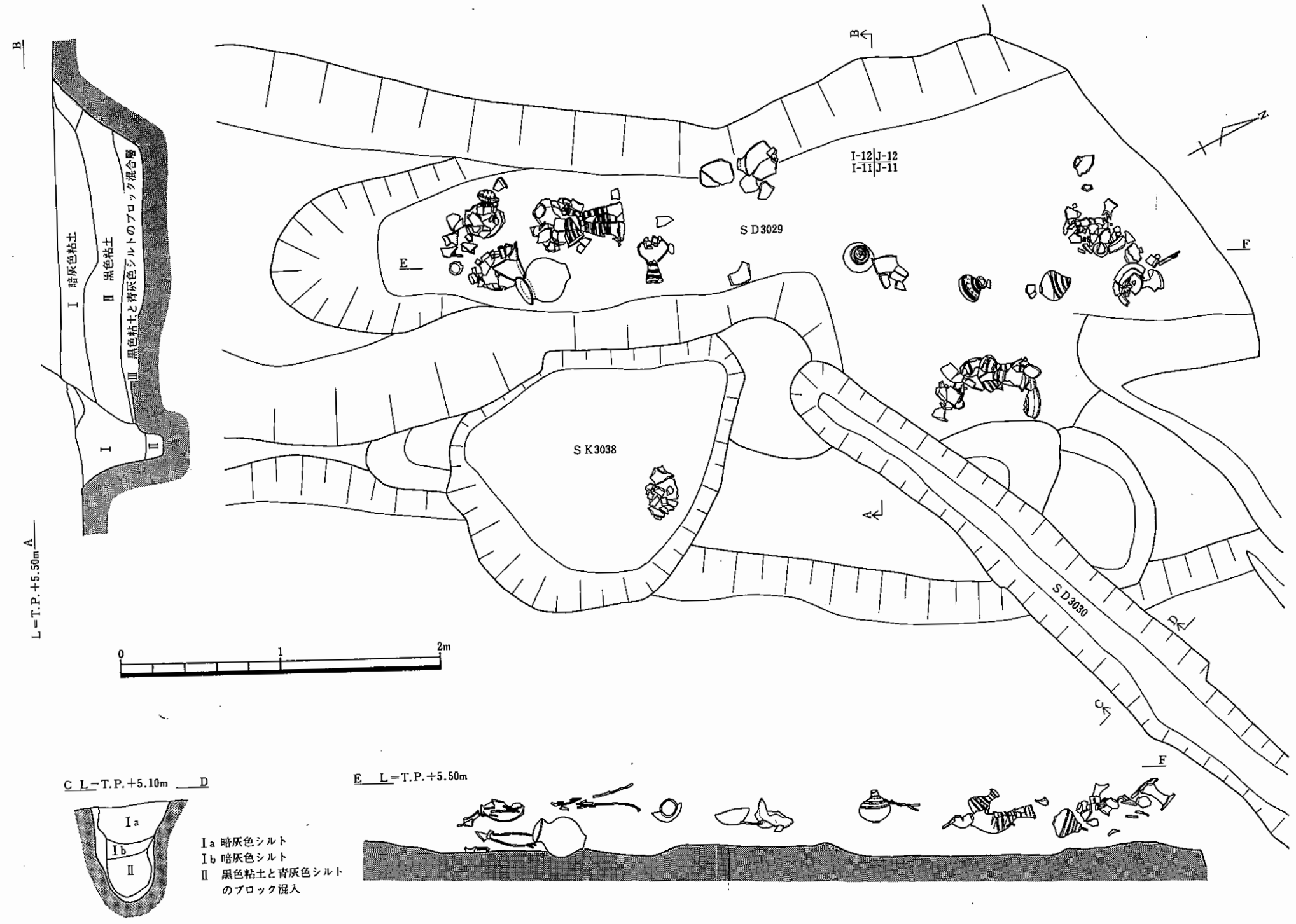
ある。基辺は中軸線に対して斜めである。両面とも全体に両側辺から剝離調整を施す。基部はわずかに扶られ、エッチは潰されている。

SD3029 (第160図) I・J-11・12区、地山面で検出した。SD3032・SK3038と重複する。南側はSD3032によって削られており、北側でSK3038によって東肩が削られている。更に北側はNR9001によって削平されている。全長9mを検出した。断面形は、逆台形を呈する。底部幅1.3m、上部幅2.2m、深さ0.5mを測る。埋土は、Ⅰ層—暗灰色粘土、Ⅱ層—黒色粘土、Ⅲ層—青灰色シルトと黒色粘土のブロック混合層の3層に大別できる。Ⅱ層からは、多量の土器が一括で出土した。

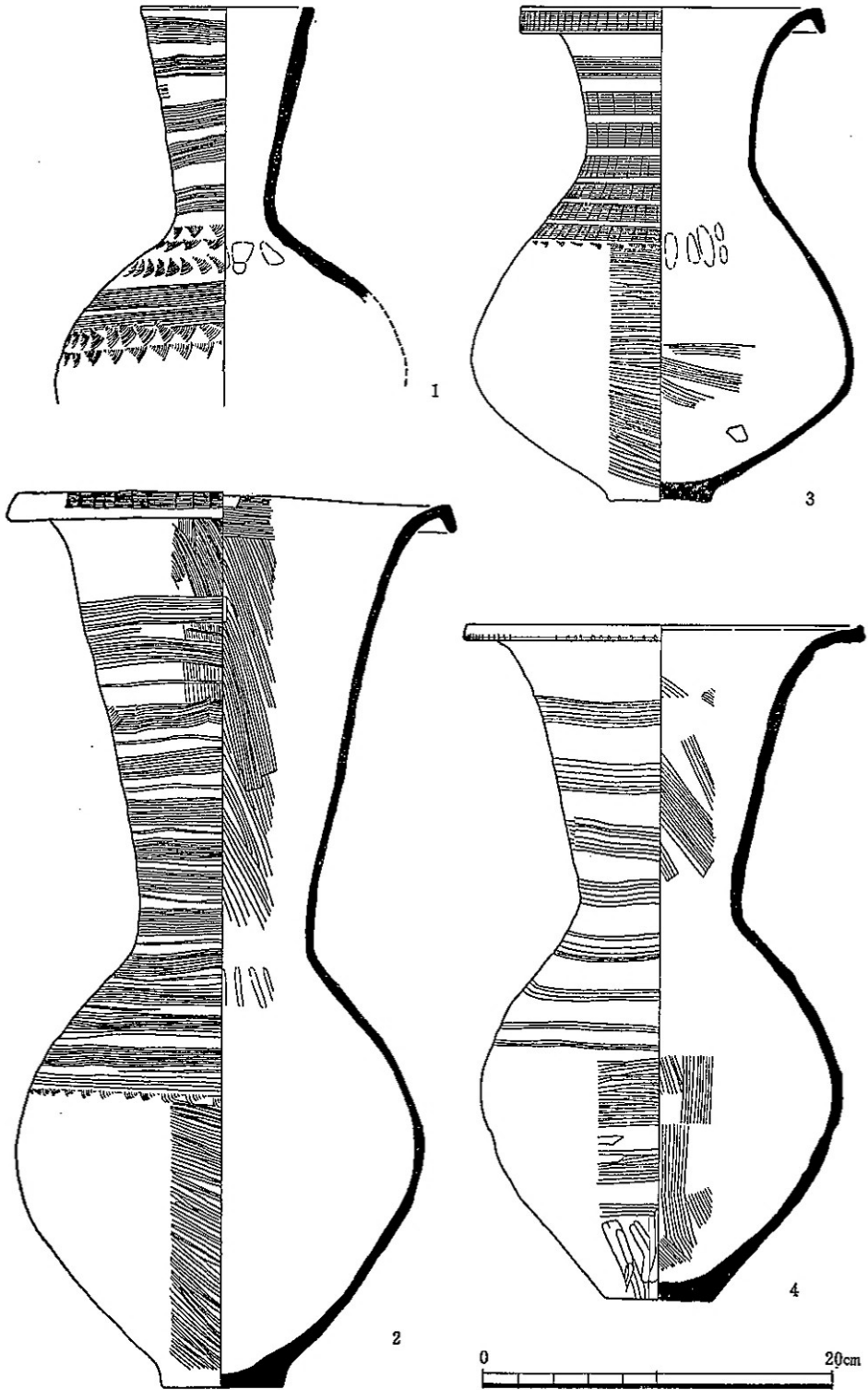
出土遺物 (第161・162・163・164・165・166図)

〔土器・土製品〕 (1~32) 壺形、細頸壺形、無頸壺形、小型壺形、甕形、高杯形、鉢形土器、土製円板等が出土した。第Ⅲ様式古段階である。

壺形土器 (2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12) (2)は口径24.8cm、器高51cm、最大腹径23.3cmを測り、形態は(4)に類似し口縁端部は下に拡張する。端部外面に簾状文、頸部から腹部にかけて直線文を施し、直線文と直線文の間に1条のヘラミガキ調整を施す。最下段の直線文の下に扇形文を施す。内面はハケメ調整である。(3)は口径17cm、器高28.3cm、最大腹径21.8cmを測り、算盤玉状の体部に、短い筒状の頸部から外反する口縁部をもつ。端部は下に拡張する。胴下半部に焼成後1ヶ所穿孔している。口縁部外面には頸部から肩部にかけ8条の簾状文を施し、その下に扇形文を1帯施す。内面はハケメ調整である。体部下半部外面に煤が付着する。生駒西麓型胎土である。(4)は口径22.5cm、器高38.6cm、最大腹径20.6cmを測り、球形の体部に筒状の頸部から大きく開く口縁部をもつ。端部は上下にやや肥厚し、刻目を施す。頸部から腹部にかけてハケメ調整の上を直線文で飾る。内面はハケメ調整である。(5・6・8)は算盤玉状の体部をもち、短く細い筒状の頸部から外反する口縁部をもつものである。端部は(6)に見る限り、突き込んで肥厚する。(5)は最大腹径19cm、底径5.2cmを測り、体部上半部外面は直線文を施す。内面は指ナデ調整である。(6)は口径7.2cm、器高20.2cm、最大腹径17.9cmを測る。口縁部外面に列点文、頸部から腹部にかけて直線文を施し、その間に扇形文を施す。内面の調整は見えず、不明である。外面下半部のヘラミガキは4回に分けてヘラミガキ調整している。(8)は最大腹径19.8cm、底径5.3cmを測る。肩部に列点文と扇形文、その上に直線文を飾る。内面は見えず不明である。(7)は口径16.6cm、器高31.5cm、最大腹径25.2cmを測り、丸みのある体部に短く外反する口頸部をもつ。外面下半部の太いヘラミガキ以外は、内面ハケメ調整である。(9)は復元口径36cmを測り、大きく開く口縁部をもち、端部は下に拡張し、刻目を施す。頸部に直線文を施す。外面はハケメ、口縁部内面はヘラミガキ調整である。生駒西麓の胎土である。(10)は復元口径32cmを測り、外反する口縁部をもち、端部は上下に拡張し、外面に列点文、上下向きの違う扇形文2帯を飾る。頸部外面は15条の直線文を施し、内面はナデ調整で煤が付着する。生駒西麓型胎土である。(11)は復元口径12.8cmを測り、胴部のふくらみは破

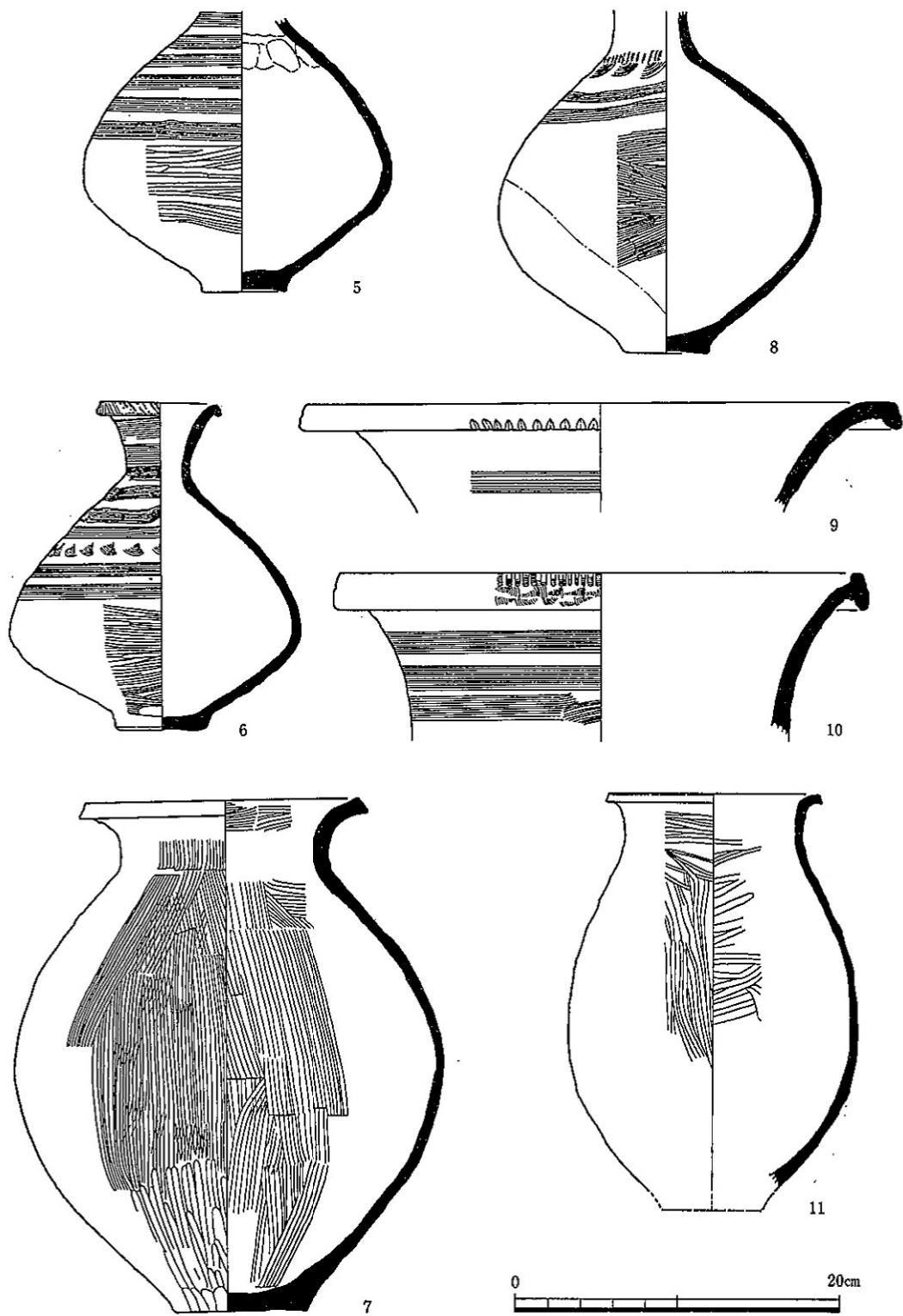


第160図 SD3029・SD3030・SK3038遺構平面図及び土層断面図

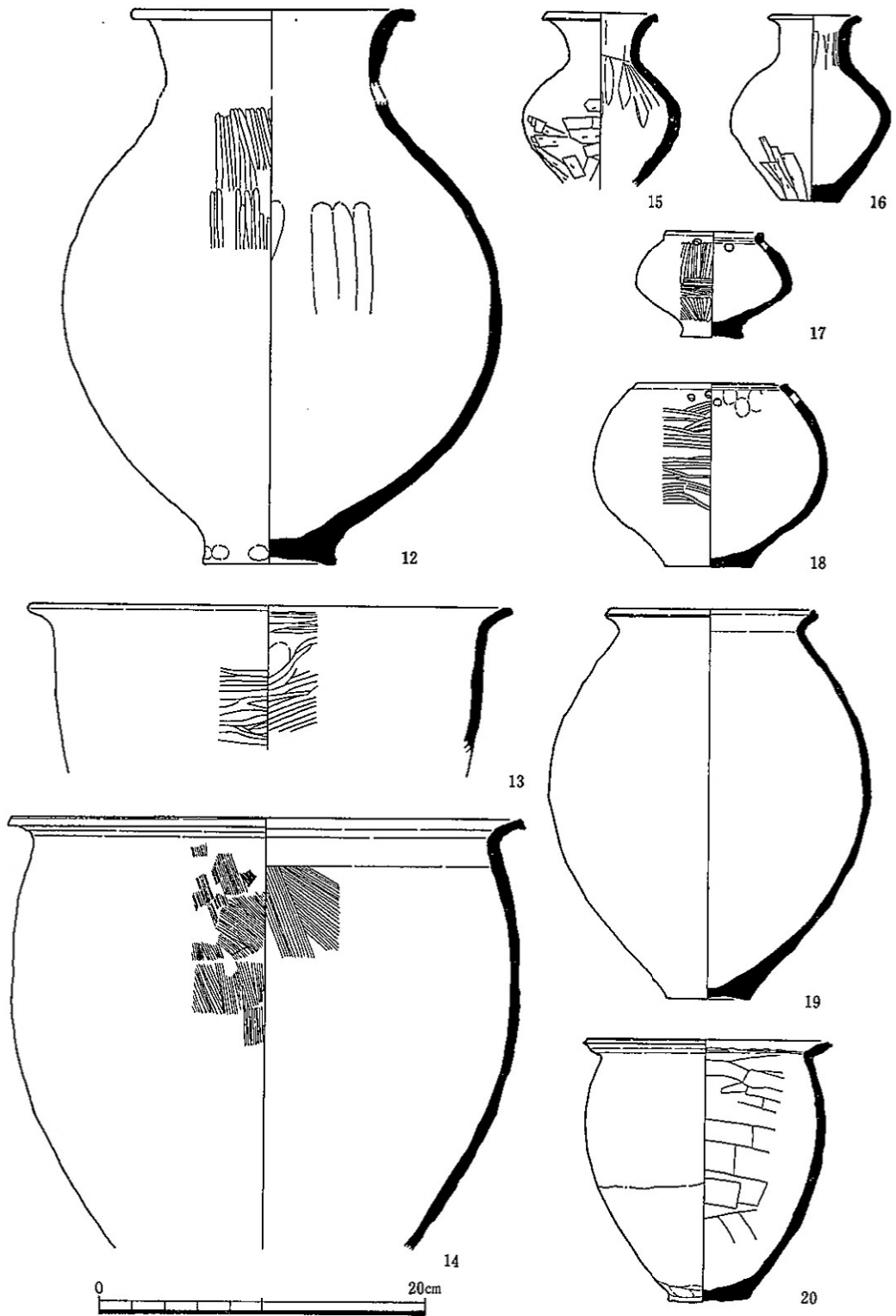


第161図 SD3029出土遺物実測図

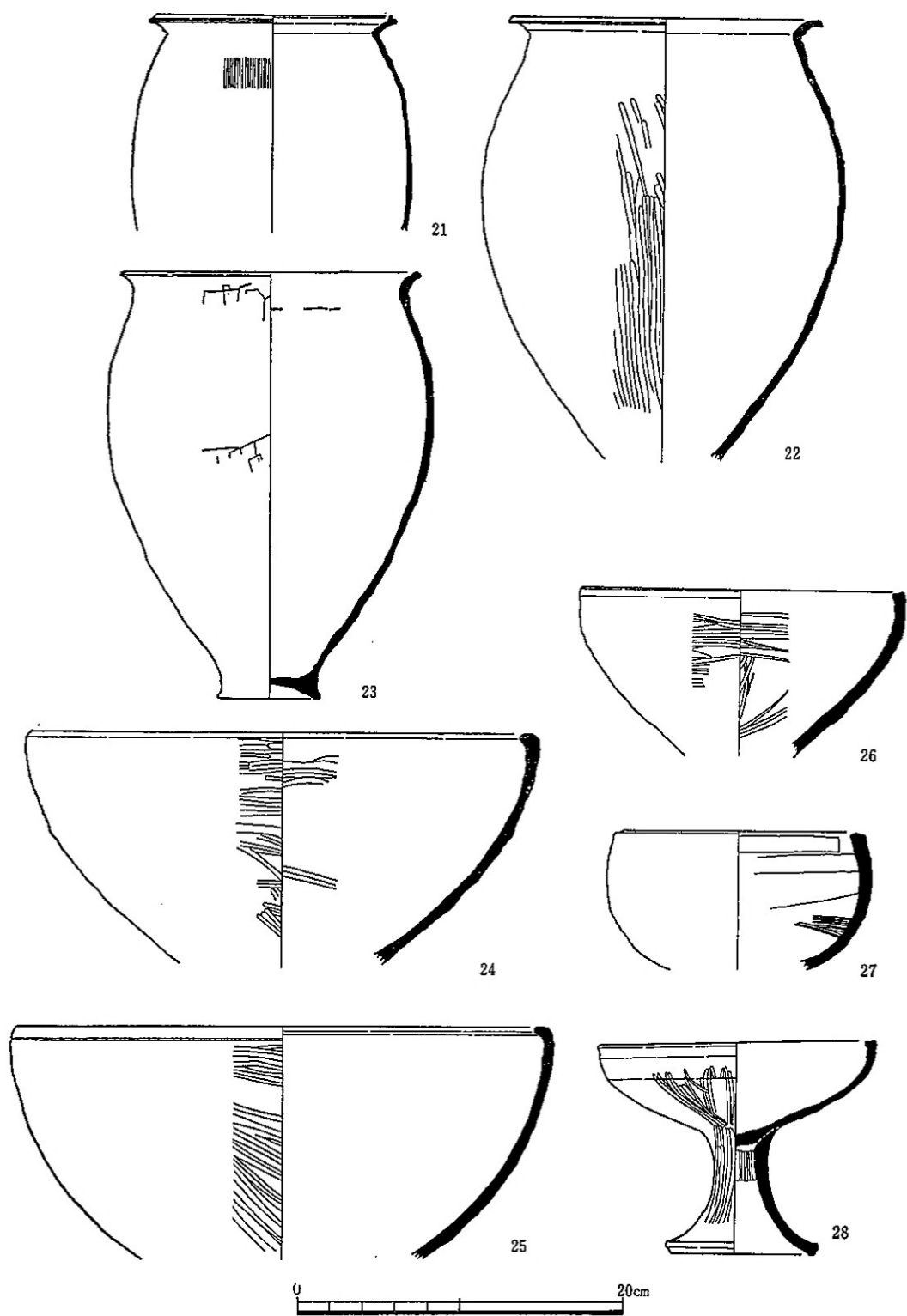




第162图 SD3029出土遗物实测图



第163図 SD3029出土遺物実測図



第164图 SD8029出土遗物实测图

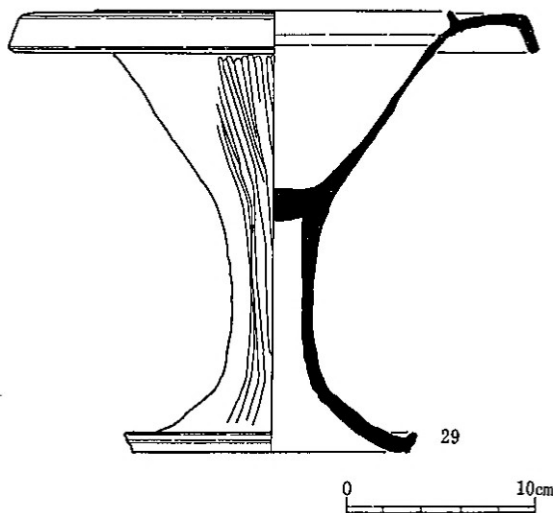
片をつなぎ合わせたものなので、実際にはもう少しあると思われる。体部下半部に煤が付着する。(12)は丸みのある体部に短い筒状の頸部に短く外反する口縁をもつ。復元口径17cm、最大腹径26.8cmを測り、内面は指ナデ調整である。腹部外面に煤が付着する。

細頸壺形土器(1) 口径9.9cm、復元最大腹径20.1cmを測り、口頸部外面は直線文、肩部は3段の扇形文、腹部は直線文と扇形文が2段ずつ施されている。口頸部内面はナデ、体部内面は指押え調整である。

無頸壺形土器(17・18) (17)は復元口径5.8cm、器高6.5cm、最大腹径9.6cmを測る小型のものである。体部に稜をもち、口縁部は短く直立する。口縁部直下に2ヶ所1対の紐孔がある。対称の位置にも1対あると思われる。内面はナデ調整である。生駒西麓型胎土である。(18)は復元口径9.2cm、器高11.2cm、最大腹径14.3cmを測り、丸い体部から内傾する口縁部をもつ。口縁部に2ヶ所1対の紐孔がなされ、対称の位置にもう1対あると思われる。内面もヘラミガキと思われるが、剝離して調整不明である。

小型壺形土器(15・16) (15)は口径6.7cm、最大腹径9.7cmを測り、胴の張る体部に外反する口頸部をもつ。体部下半部外面はヘラケズリ、上半部はナデ調整で、内面は頸部から肩部にかけてしぼり目が見られる。(16)は口径5.7cm、器高11.3cm、最大腹径9.8cmを測り、胴の張る体部に短い筒状の頸部から、短く外反する口縁部をもつ。体部下半部外面はヘラケズリ、その他外面は指押えナデ調整、内面頸部はしぼり目が見られ、体部内面は指押えと思われる。

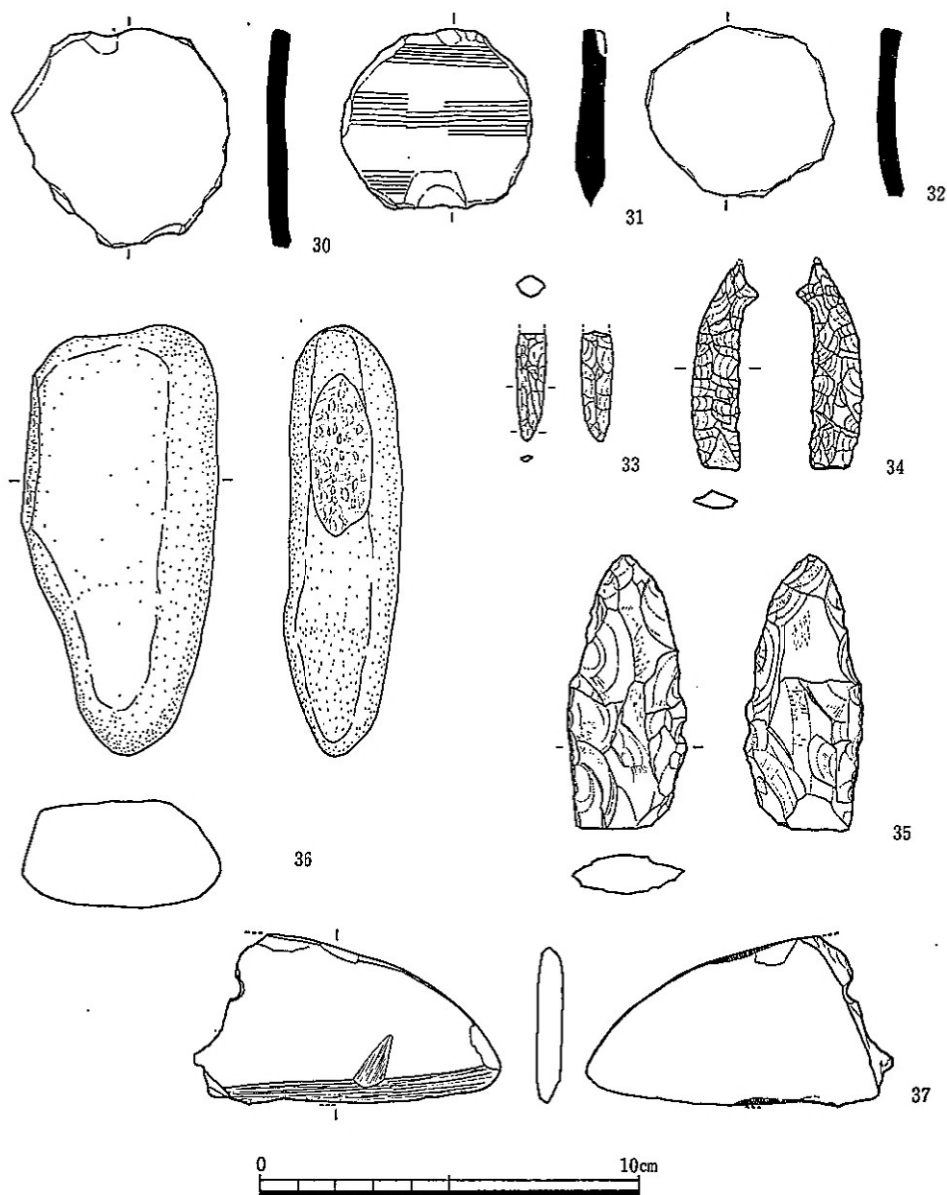
甕形土器(13・14・19・20・21・22・23) (13)は復元口径29.4cmを測り、胴の張らない体部になだらかに外反する口縁部をもつ。生駒西麓型胎土である。(14)は復元口径31.2cm、最大腹径31.1cmを測り、胴の張らない体部に外彎する口縁部をもつ。外面上半部はハケメ、下半部はナデ、内面は荒いハケメ調整である。(19)は復元口径12.6cm、器高24cm、最大腹径19.5cmを測り、丸みのある体部に「く」の字に外反する口縁部をもち、端部はやや肥厚し、面をなす。外面はヘラミガキ、内面は剝離が著しく、調整は不明である。外面胴部と内面底部に煤が付着する。(20)は口径14.7cm、器高16.2cm、最大腹径14.7cmを測り、胴の短い体部に「く」の字に外反する口縁部をもつ。外面はヘラケズリ、及びナデ、内面はハケメ調整である。外面全体に煤が付着する。(21)は復元口径14.6cmを測り、「く」の字に外反する口縁部をもち、端部は上方につまみ、面は凹み、非常に器壁が薄い。外面はハ



第165図 S D3029出土遺物実測図

ケメ、内面はハケメ、及びナデ調整である。外面下半部に煤が付着する。(22)は復元口径19.2cm、最大腹径22.1cmを測り、やや胴の張る体部に外彎する口縁部をもつ。外面はハケメの上をヘラミガキ、内面は指ナデ調整で、一部はハケメ調整である。(23)は上半部と下半部の破片はつかず、器高は推定である。口径は18.4cm、最大腹径は20.2cmを測り、あまり胴の張らない体部に短く丸く外反する口縁部をもつ。外面はヘラケズリ、内面はナデ、指ナデ調整である。体部外面に煤が付着する。

高杯形土器 (28・29) (28)は口径17.2cm、器高13.2cmを測り、外に開く体部から屈曲して直口する口縁部をもち、端部は内外に肥厚し、面をなす。脚部内面はしぼり目が見られる。杯部



第166図 S D 3029出土遺物実測図

内面は剝離しているため調整は不明である。(29)は復元口径26.4cm、器高23.3cmを測り、水平口縁部をもつ。脚部内面はしぼり目が見られる。

鉢形土器(24・25・26・27) (24・25・26)は、外に開く体部から、やや内彎する口縁部をもち、内外面はヘラミガキ調整である。(24)は復元口径30.6cmを測り、口縁端部は内へ肥厚する。(25)は復元口径32.5cmを測り、口縁端部は内へ肥厚し、口縁部に沈線を1条施す。(26)は復元口径19.8cmを測り、端部がやや凹む。(27)は復元口径15.4cmを測り、丸みのある椀状のもので、内面はヘラナデ調整で、外面は調整不明である。

土製円板(30・31・32) いずれも土器片を再加工したもので、周縁を打ち欠いている。(30)は径5.6cmを測り、重量は25.4gである。(31)は径5cmを測り、外面に直線文が見られる。重量は23.1gである。(32)は径5cmを測り、重量は19gである。生駒西麓型の胎土である。

#### 〔石器〕(33～37)

石庖丁(37) わずかに外彎する片刃の刃部をもち、背部は彎曲する。直線刃半月形である。又、背部とともに刃潰れ、背潰れがみられ、刃稜に斜行して、幅0.6cmの研磨痕が認められ、2次使用の際のものかと思われる。現存長8.2cm、幅4.4cm、厚さ0.7cmを測る。石質は緑泥石緑簾石片岩である。

石錐(33) 頭部上半欠損、棒状の石錐である。現存長2.9cm、幅0.8cm、厚さ0.6cm、錐長0.5cm、錐幅0.3×0.2cmを測る。両面全体を剝離調整し、A面は、中軸線上に稜を形成する。錐部の使用痕は確認できない。

スクレイパー(35) 長さ7.2cm、幅3.2cm、厚さ1cm、両面ともほぼ中央部に大剝離面を残し、側辺から剝離調整を施す。右側辺下半は刃潰れする。

小刀(34) 長さ5.5cm、幅1.2cm、厚さ0.5cmを測る扁平な小刀である。全体がゆるやかに彎曲し、先端で二又に分れる。断面は先端に向かって薄くなり、先端は鋭い。両面とも両側辺から丁寧に剝離調整を施す。A面基部に大剝離面が残存する。

敲石(36) 扁平な自然礫の一縁を利用している敲石である。全長11.3cm、幅5cm、厚さ3cmを測った。敲打痕と若干の擦痕が見られる。石質は和泉砂岩である。

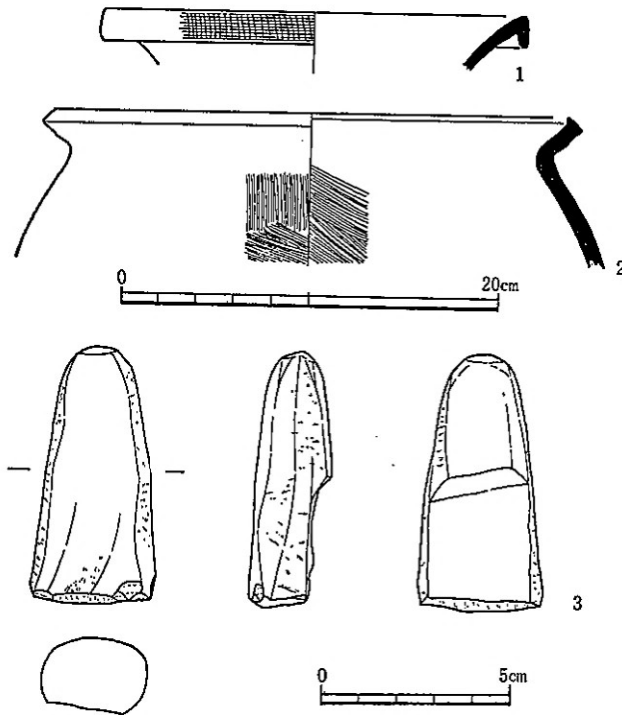
SD3030(第160図) J-11区、地山面で検出された。東側はNR3001によって削平されている。全長5mを検出した。断面形は、U字形を呈する。底部幅0.26m、上部幅0.5m、深さ0.6mを測る。埋土は、I層—暗灰色シルト、II層—黒色粘土がブロック状に混入する青灰色シルト層の2層に大別できる。

#### 出土遺物(第167図)

〔土器〕 壺形(1)、甕形(2)土器等が出土した。第Ⅲ様式である。

壺形土器(1) 復元口径22cmを測り、外反する口縁部をもち、端部は下に拡張する。口縁部外面に簾状文を施す。生駒西麓型の胎土である。

甕形土器(2) 復元口径27cmを測り、「く」の字に外反する口縁部をもち、端部は上にやや



第167図 SD3030出土遺物実測図

肥厚する。内外面はハケメ調整である。

〔石器〕

太型蛤刃石斧（3） 基部のみ残存しているが、B面は残存部の約2分の1が剝離している。残存長 6.8cm、幅 3.3cm、厚さ 2cm、基端は丸く作られている。側面には製作時の敲打痕が残るが、磨きは全体に丁寧である。石質は和泉砂岩。

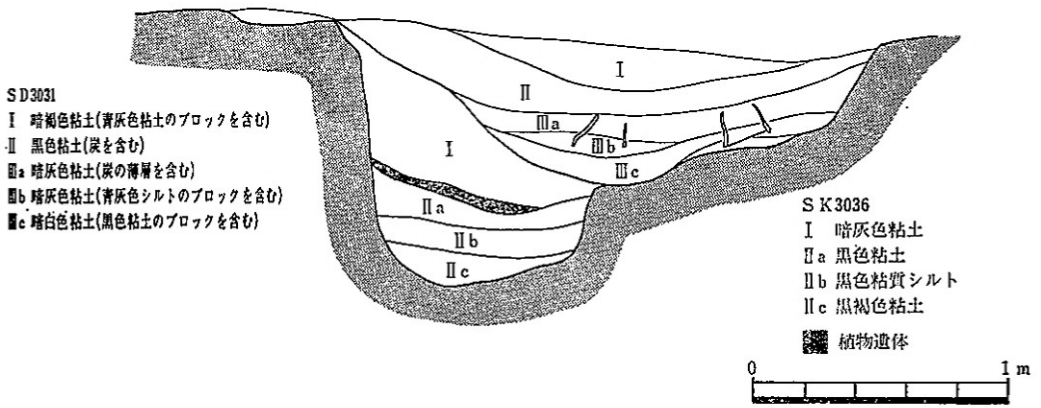
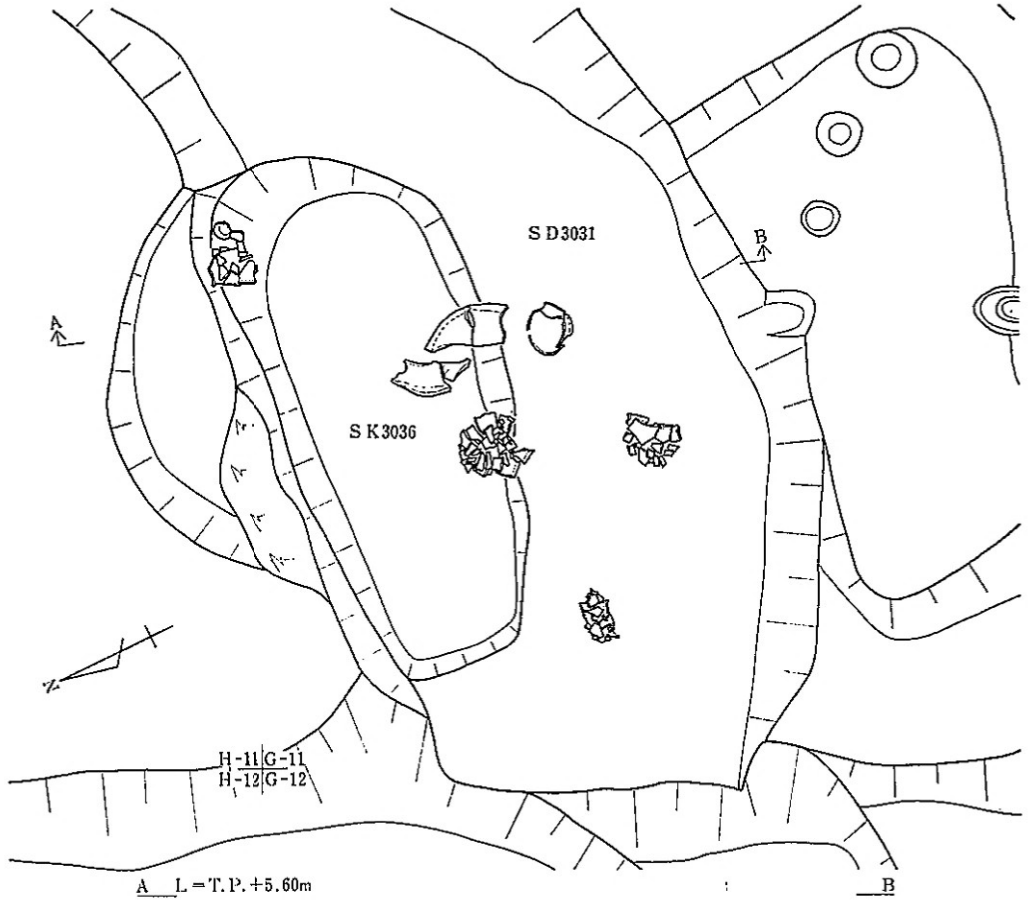
SD3031（第168図） G-11・12区、地山面で検出された。SD3032、SK3036、NR3001と重複する。東側はNR3001によって、西側はSD3032によって失なわれている。SK3036の上部を削平する。全長6mを検出した。断面形は、逆台形を呈する。底部幅1.5m、上部幅2.2m、深さ0.6mを測る。埋土は上位からⅠ層—暗褐色粘土、Ⅱ層—黒色粘土、Ⅲ層—暗灰色粘土の3層に大別できる。

Ⅱ層からは一括で土器が出土した。

出土遺物（第169・170・171・172・173・174図）

〔土器・土製品〕（1～40） 壺形、無頸壺形、甕形、高杯形、鉢形土器、銅鐸形土製品が出土した。第Ⅲ様式である。

壺形土器（1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・18）（1・2）は短い筒状の頸部に外反する口縁部をもち、端部は上下にやや拡張する。頸部外面はハケメ調整であ



第168図 SD3031・SK3036遺構平面図及び土層断面図(1/50)



る。(1)は復元口径21cm、(2)は19cmを測る。(3)は復元口径12.8cmを測り、短く細い筒状の頸部に外反する口縁部をもち、端部は上下にやや拡張する。口縁端部外面に刻目、頸部から腹部にハケメ調整の上に8~9条の直線文を施す。体部内面は指押えとハケメ調整である。(4・5)は算盤玉状の体部に短く細い筒状の頸部をもち、外反する口縁部をもち、端部は下に拡張する。(4)は復元口径9cm、最大腹径17.6cmを測り、口縁端部外面は、雑な簾状文、頸部から腹部にかけて直線文を施す。頸部内面は絞り目が見られる。体部内面は剝離が著しく調整不明である。(5)は復元口径7.7cm、最大腹径19.4cmを測り、口縁端部外面は簾状文、頸部から腹部にかけて簾状文、その間に扇形文が一带施される。内面上半部はナデ調整である。下半部は剝離が著しく不明である。(6)は復元口径24.6cmを測り、大きく開く口縁部をもち、端部はやや上下に拡張する。口縁端部外面は波状文、頸部には直線文を施す。内外面はヨコナデ調整である。

(7・12)は大きく開く口縁部をもち、端部は下に拡張する。生駒西麓の胎土である。(7)は復元口径24.6cmを測り、口縁部外面に刻目と簾状文を施す。内面はハケメの上にヘラミガキ調整を施す。(12)は復元口径31.6cmを測り、口縁端部は、雑な波状文と刻目を施す。頸部外面はハケメ調整の上に12条の直線文を施す。内面は指押えの上をハケナデ調整を施し、若干のヘラミガキ調整を施す。口縁部内面は矢印状の線刻が1ヶ所、反対向きの矢印状の線刻が1ヶ所施される。この記号は、Ⅱ様式からⅤ様式まで畿内でよく見られる。(8)は復元口径31.8cmを測り、短く外反する口頸部をもち、端部は上下にやや拡張する。端部に刻目を施し、頸部に刻目凸帯を施す。内外面はハケメ調整である。(9)は復元口径12cmを測り、外開きの短く細い頸部に外反する口縁部をもち、端部は上方に拡張する。口縁部外面、頸部外面に直線文を施す。生駒西麓型胎土である。(10)は復元口径13.1cmを測り、外反する口縁部をもち、端部は下部に粘土を付加して拡張する。端部外面に列点文を施し、内面はハケメ調整である。生駒西麓型胎土である。

(11)は復元口径17.8cm、最大復径26.3cmを測り、下脹れの体部に短い筒状の頸部から外反する口縁部をもち、端部は上下に拡張する。端部外面は2段の簾状文を施し、口縁部直下に、断面半円の突起状の浮文が4ヶ所に付く。頸部から腹部にかけて直線文を施し、頸部と体部のつなぎめに簾状文を一带施す。頸部内面は絞り目が見られ、体部上半部内面はナデ、下半部はハケメ調整である。(13)は復元口径15cmを測り、短く丸く外反する口頸部をもち、内面はハケ状のナデ調整である。(18)は底部片で復元底径21.1cmを測り、底部は内面から粘土を付加している。内外面はハケメ調整である。外面のハケメの原体は少なくとも2種ある。

無頸壺形土器(38・39) (38)は復元口径15cmを測り、口縁部は内傾し、端部は内に肥厚し、内傾して面をなす。外面は直線文を施し、内面はハケメ調整である。(39)は復元口径20.2cmを測り、体部から短く外反する口縁部をもち、外面はハケメ調整、内面は不明である。

甕形土器(14・15・16・17・19・20・21・22・23・24・25・30・31) (14・20・21・22)はやや胴の張る体部に「く」の字に外反する口縁部をもち、(14)は復元口径15.6cm、最大腹径16cmを測り、内外面はハケメ調整で、外面に煤が付着する。(20)は復元口径13.9cm、最大腹径

14.5cmを測り、内外面はハケメ調整である。(21)は復元口径14.8cmを測り、外面肩部はハケメ、その下部はヘラミガキ、内面はハケメ調整である。(22)は復元口径15.1cm、最大腹径16cmを測り、「く」の字に外反する口縁部をもち、端部に刻目を施す。内外面はハケメ調整で、外面に煤が付着する。(15・19)は胴のあまり張らない体部から、なだらかに外反する口縁部をもち、

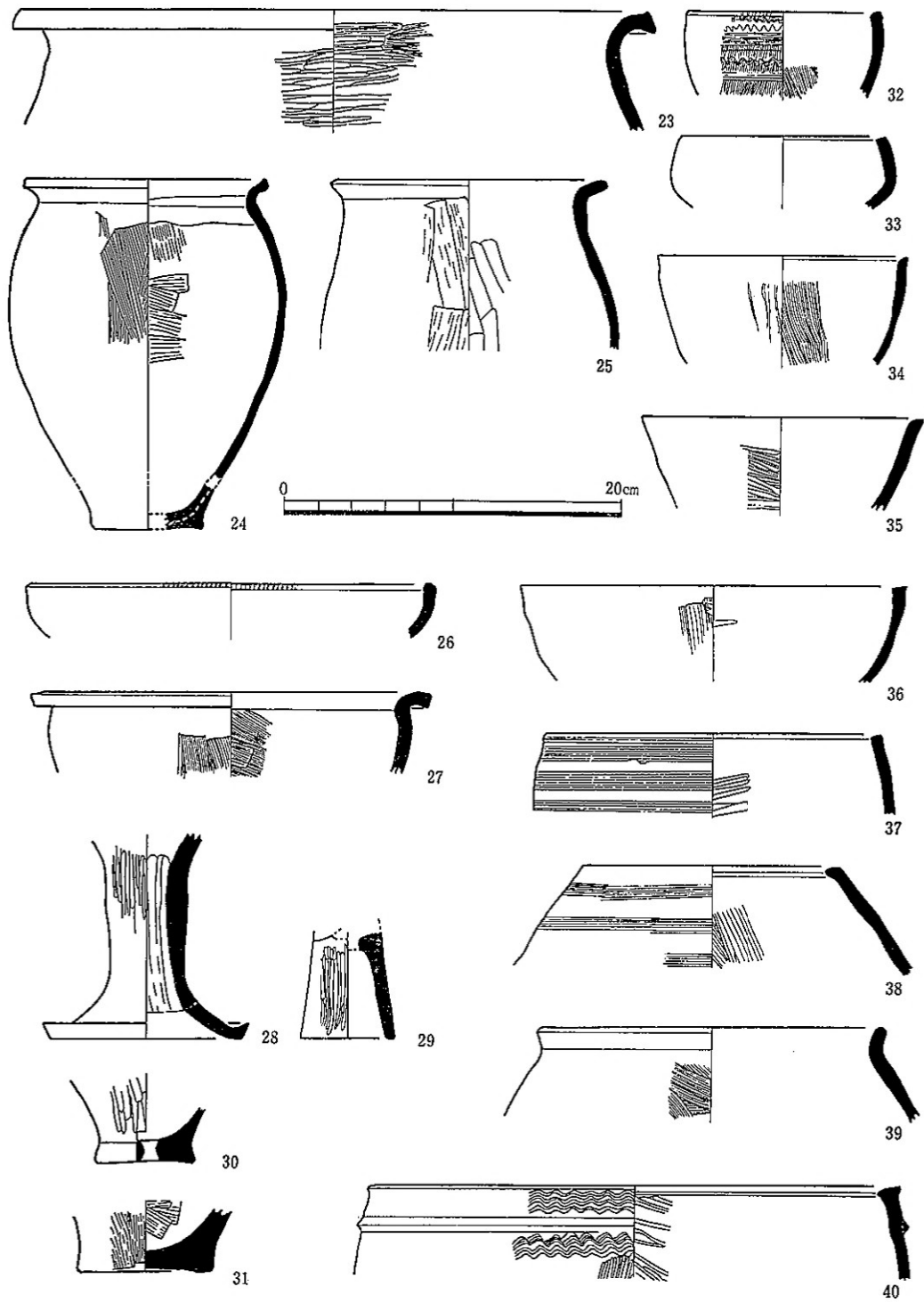
(15)は復元口径20.8cmを測り、外面は剝離が著しく不明で、内面はハケメの上をヘラミガキ調整を施す。(19)は復元口径13.6cmを測り、内外面ハケメの上をヘラミガキ調整を施す。(16・17)は胴の張らない体部に外反する口縁部をもち、端部は上下に肥厚する。内外面ハケメ調整である。(16)は復元口径25.8cm、(17)は26.4cmを測る。(23)は復元口径37cmを測り、丸く外反する口縁部をもち、内外面はハケメ調整で、外面に煤が付着する。(24)は復元口径13.9cm、最大腹径16.2cmを測り、胴の張る体部に短く丸く外反する口縁部をもち、内外面はハケメ調整で、外面に煤が付着する。(25)は復元口径15.8cm、最大復径17.5cmを測り、下ぶくれの体部に丸く外反する口縁部をもち、外面はハケメ、内面はヘラナデ調整である。外面に煤が付着する。

(30・31)は底部片で(30)は底径5.6cmを測り、底部に穿孔を施す。外面はヘラミガキ調整である。(31)は底径7.6cmを測り、内外面はハケメ調整である。

高杯形土器(26・28・32) (26)は復元口径23.7cmを測り、外に開く体部から屈曲し、直口する口縁部をもち、端部に刻目を施す。(28)は復元裾部径11.2cmを測り、柱状の脚片で、内面にしぼり目が見られる。生駒西葎型の胎土である。(32)は復元口径12cmを測り、外に開く体部から、屈曲してやや内彎する口縁部をもち、端部は面をなす。

鉢形土器(27・32・34・35・36・37・40) (27)は復元口径23.6cmを測り、丸みをもつ体部から短く水平気味に外反する口縁部をもち、内外面はハケメ調整である。(32)は復元口径11.3cmを測り、端部はやや肥厚し丸みを帯びる。端部に刻目、外面に波状文と直線文を交互に施し、内外面はハケメ調整である。(34・35・36)はカーブをもって外に開く体部をもち、口縁端部は面をなす。(34)は復元口径14.8cmを測り、外面はヘラナデ、内面はハケメ調整である。(35)は復元口径16.5cmを測り、内面はヨコナデ調整である。(36)は復元口径22.9cmを測り、外面はヘラナデ、内面はヘラミガキ調整である。(37)は復元口径19.8cmを測り、やや内傾する口縁部をもち、外面を直線文で飾る。内面は丁寧なヘラミガキ調整である。生駒西葎型胎土である。(40)は復元口径31.4cmを測り、やや内傾する口縁部をもち、端部は内外にやや肥厚する。口縁部直下に凸帯を施し、それを境に上下に7条の波状文と、4条と4条の波状文を施す。

銅鐸形土製品(29) 鐸身と思われる破片である。復元裾部径5.6cmを測り、裾広がり筒状の形態で、上部に鈕がつくような痕跡がある。内面はナデ調整である。銅鐸形土製品として疑問な点は筒状の体部が楕円形でなく円形なことである。



第171图 S D 8031出土遗物实测图

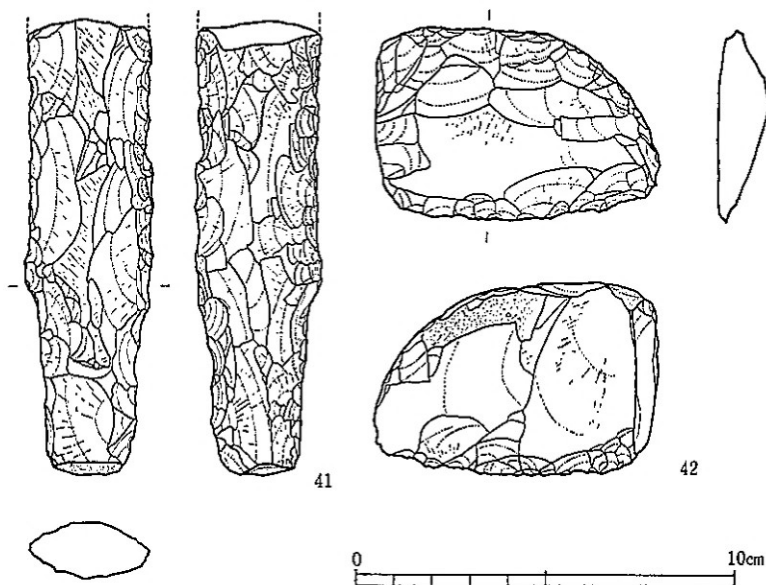
## 〔石器〕 (41~46)

石庖丁 (43・44) (43) は直線の刃部をもち、背部は欠けている。刃稜は明確でない。刃部は刃先に平行して研磨痕が認められる。長さ6cm、幅4.7cm、厚さ0.7cmを測る。(44) は直線の片刃の刃部をもち、背部は彎曲する。刃先は剝離し、背部は研磨されている。両面に研磨痕がみられ、表面には敲打痕が認められる。現存長4.9cm、幅3cm、厚さ0.45cmを測る。石質は(43)・(44)ともに緑泥片岩である。

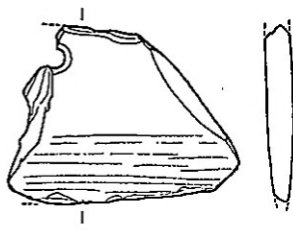
太型蛤刃石斧 (45・46) (45) は刃部及び基部の一部のみ残存する。現存長6.7cm、幅6.1cm、厚さ4.5cm、基部A・B両面の中央部には、2次的な敲打痕があり、刃先は潰れている。また折損端部には、2次的な敲打痕がほぼ全周する。意識的に打ち割り、敲石に転用したものと考えられる。石質は閃緑岩である。(46) は完形である。長さ10.4cm、幅6cm、厚さ3.7cm、基端は小さく平坦に作られている。基部には全体に製作時の敲打痕が残る。刃先はやや右上りである。刃部A面には、やや右下りナナメ方向の、B面には左下りナナメ方向の使用痕と考えられる擦痕がある。基部上半部には、着柄によっても考えられる光沢がみられる。以上のことから右側を手前にして使用されたものと考えられる。石質は凝灰角礫岩である。

石槍 (41) 現存長12.1cm、幅3.3cm、厚さ1.5cmを測る。凸基有茎式。先端部欠損する。断面はレンズ状を呈する。逆刺はなだらかであり、挟りは浅い。基端に自然礫面を残す。両面とも粗く整形した後、両側辺から剝離調整を加える。基部両側辺ともエッチを漬す。

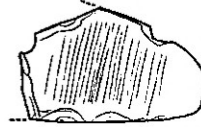
スクレイパー (42) 長さ7.5cm、幅5cm、厚さ1.3cmを測る。横長の剝片を利用する。外彎する刃部に、自然礫面を残した背部をもつ。A面は大剝離面、B面は周辺を整形した後、刃部に両面からの剝離調整を施す。



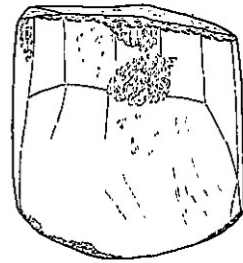
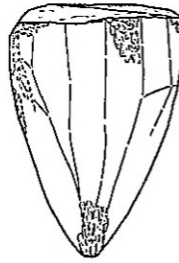
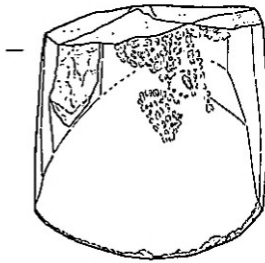
第172図 SD3031出土遺物実測図



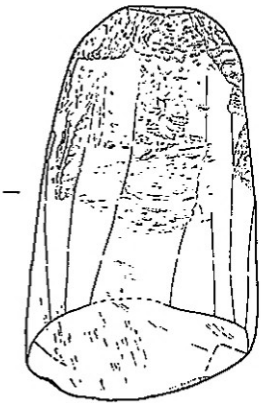
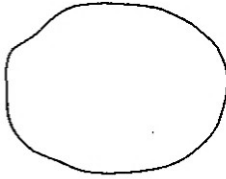
43



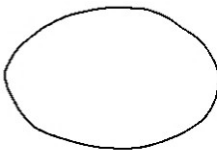
44



45



46



第173图 SD3031出土遺物実測図

〔木器〕

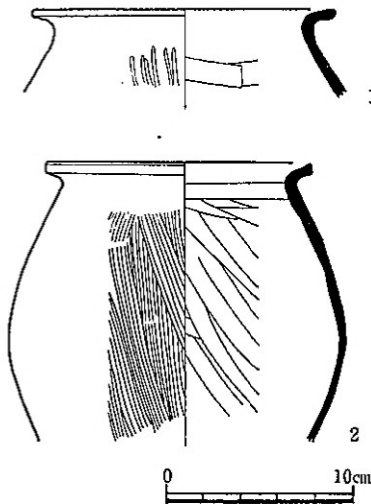
鋤(47) 最下層から出土した。ほぼ完形である。全長113.5cmを測る。身・柄・把手が一木作りである。把手は、幅10cm、厚さ0.5cmを測り、平面形は三角形を呈する。柄は長さ81cmを測る。断面形は、幅2.3cm、中央で厚さ0.7cm、側縁部で0.2~0.5cmを測り扁平な三角形を呈する。肩は柄軸に対してほぼ直角に張る。身は、幅16.6cm、長さ23.2cm、最大厚1cm、側縁厚0.2cmを測る。刃先の尖ったスコップ状を呈する。身の上下両面には柄軸方向に、幅2.5cm、深さ0.2cm、長さ10cmの溝状のくぼみが見られる。身は深さ1.2cmで若干内彎している。

SD3038(第288図) J・K-3・4区、第Ⅱd層で検出された。周辺のピット群、SD3041、SE3007と重複する。南側はSD3041によって、K-3区でSE3007によって削平されている。東南←→北西方向に延びる。SE3007の北側で2条に分かれる。断面形は、U字形を呈する。底部幅0.25m、上部幅0.4m、深さ0.2mを測る。埋土は、地山の青灰色シルトをブロック状に含む黒色粘土層の一層である。

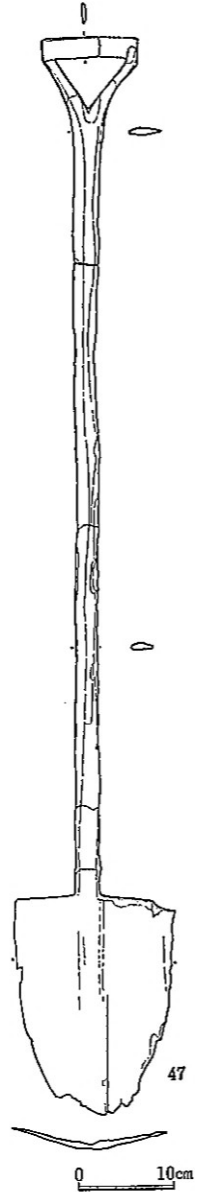
出土遺物(第175図)

〔土器〕 甕形土器(1・2)等が出土した。第Ⅲ様式である。

(1)は復元口径16cmを測り丸く水平に屈曲する口縁部をもつ。内面はナデ調整で、外面に煤が付着する。(2)は復元口径14cm、最大腹径17.7cmを測り、胴の張る体部に丸く外反する口縁部をもつ。外面はハケメ、内面はヘラナデ調整である。外面に煤が付着する。



第175図 SD3038出土遺物実測図



第174図 SD3031  
出土遺物実測図

SD3039(第288図) J-3区、包含層Ⅳで検出された。周辺のピット群、SD3041、SK3015と重複する。南側はSD3041によって、西側はSK3015によって削平されている。断面形は、U字形を呈する。底部幅0.4m、上部幅0.8m、深さ0.1mを測る。埋土は地山の青灰色シルトをブロック状に含む黒色粘土層の1層のみである。

出土遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

**SD3040** I-1区の包含層中より、全長3mが検出された。西側へ更にのびるものと思われるがI-2区では検出されず、全容は明らかにできなかった。上部幅2m、底部幅0.9m、深さ0.6mを測る。断面形はU字形を呈する。SD3004の上部を削平している。埋土は、黒褐色粘土で、焼土、灰を多く含む。上層からは多量の土器が出土している。

出土遺物（第176・177・178・179・180・181・182図）

〔土器〕（1～36） 壺形、細頸壺形、無頸壺形、甕形、高杯形、鉢形、器台形、甕用蓋形土器、ミニチュア土器等が出土した。第Ⅲ—Ⅳ様式である。

壺形土器（1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・13・14・16・17・26）（1・2・3・4・5・9・14）は生駒西麓の胎土である。（1・2）は短く細い筒状の頸部に外反する口縁部をもち、端部は下に拡張する。端部外面は簾状文、頸部外面は直線文を施す。（1）は復元口径8.8cmを測る。（2）は復元口径11cmを測り、内面はヨコナデ調整で、両面黒色物質を塗布する。（3）は復元口径16.4cmを測り、短い筒状の頸部に外反する口縁部をもち、端部は下に拡張する。内外面ヨコナデ調整（頸部内面は不明）で端部外面に煤が付着する。（4）は復元口径20.4cmを測り、外反する口縁部をもち、口縁端部と頸部に簾状文を施す。内面はナデ調整である。（5）は復元口径20.8cmを測り、外反する口縁部をもち、端部は下に拡張する。内外面はハケメ調整である。口縁部内面に煤が付着する。（9・14）は外反する口縁部をもち、端部は上に拡張する。（9）は復元口径22.8cmを測り、口縁端部外面はハケメ調整の上を簾状文、頸部外面は直線文を施す。内面は調整不明である。（14）は復元口径41cmを測る大形で、端部外面は下に列点文を施し、その上に縦の直線文を施す。頸部外面はハケメ調整の上に直線文を施す。内面はハケメの上にヘラミガキ調整を施す。（6・16）は短い筒状の頸部に外反する口頸部をもち、端部は上方につまむ。（6）は復元口径14.6cmを測り、外面はハケメ、内面はナデ調整である。口縁部外面に煤が付着する。（16）は復元口径22.5cmを測り、口縁端部に1ヶ所斜線文を施す。外面はハケメ、内面は極細のハケメ調整である。（7）は最大腹径14.8cm、底径6cmを測り、胴長の体部をもつ。肩部外面に簾状文状の文様を施す。外面はナデ調整で部分的にヘラミガキ調整を施す。内面は極細のハケ状のナデ調整である。（8・11）は短い筒状の頸部に外反し、稜をもって直立する口縁部をもつ。端部は内外にやや肥厚し面をなす。（8）は復元口径22.4cmを測り、口縁部外面は波状文を施し、外面はハケメ調整で、内面はハケメの上をナデ調整である。（11）は復元口径14.4cmを測り、口縁部外面はハケメ調整の上に波状文、頸部外面はハケメ調整の上に直線文を施す。内面はナデ調整である。（10）は復元口径24.5cmを測り、外反する口縁部をもち、端部は上に拡張する。口縁端部と頸部外面に直線文を施す。内外面一部にハケメ調整が見られる。（13）は復元口径11.4cmを測り、やや外開きの直口する口頸部をもつ。内外面はナデ調整である。（17）は口径15.2cm、最大腹径30.1cmを測り、底部は残存しない。胴長の体部に外開きでやや内彎気味の直立する口頸部をもつ。端部は内外にやや肥厚し面をなす。内外面はハケメ調整で、胴部下半部はヘラミガキ調整である。胴部両面に煤が付着し、内面に炭化物が付着する。

細頸壺形土器 (12) (12) は復元口径6cmを測り、口縁部はやや内彎する。外面は直線文を施し、内面はナデとハケメ調整である。(26) は復元口径17.5cmを測り、内彎気味の口縁部をもち、端部はやや肥厚する。口縁上部外面に凹線文を施し、その上に列点文を施している。頸部外面には直線文を施し、内面はハケメの上をナデ調整をする。(34) は脚片である。裾部径は5.9cmを測り、内外面はヘラナデ調整である。体部と脚部との接合部に赤色顔料を塗る。生駒西麓型の胎土である。

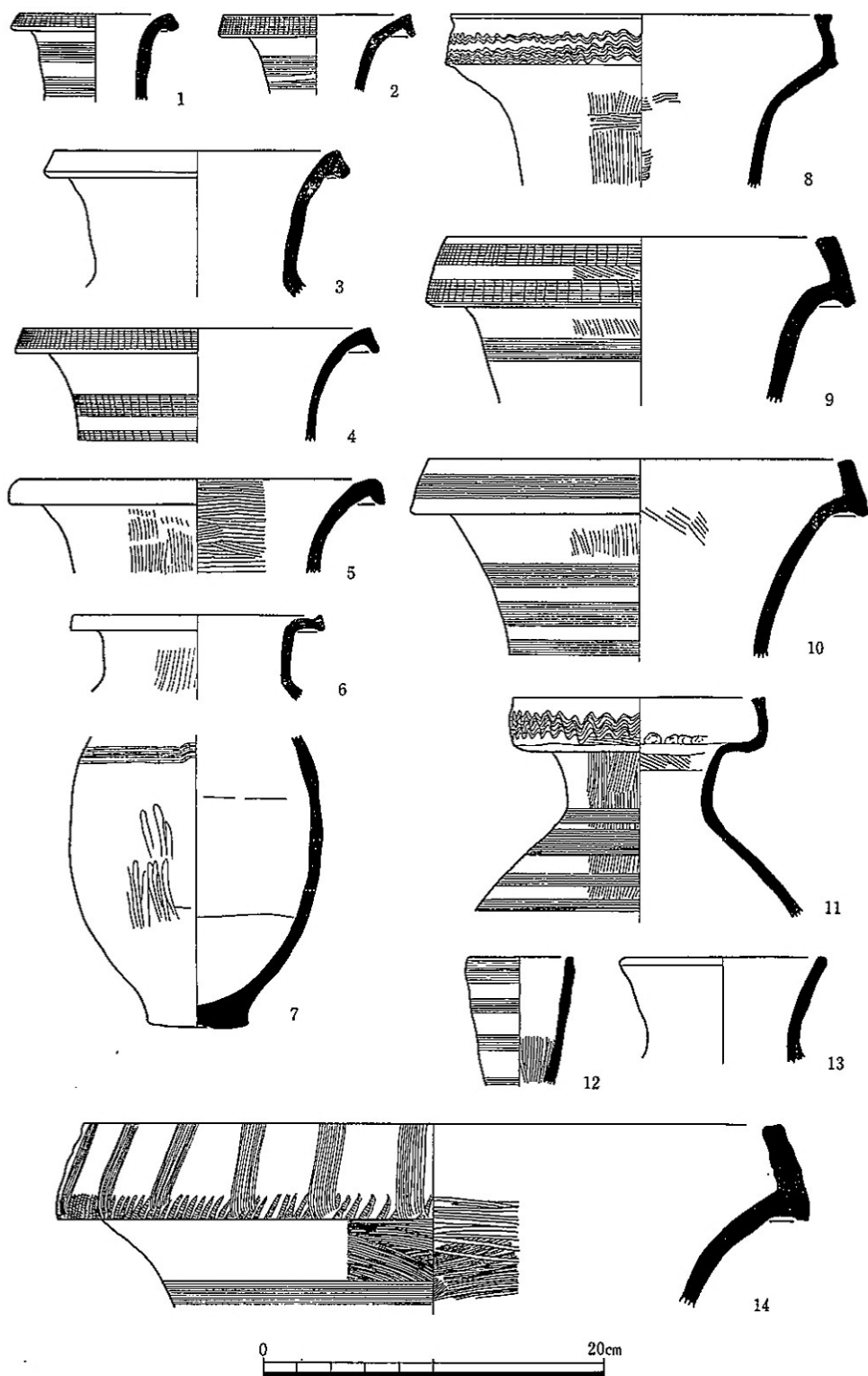
無頸壺形土器 (25・32) (25) は復元口径15.8cm、最大腹径18.2cmを測り、丸い体部に短く外反する口縁部をもつ。外面は2次のな火を受けたためか、全体に赤く変色し、剝離しているところがある。外面下半部は煤が付着する。(32) は復元口径9cmを測り、胴の張る体部から短く直立する口縁部をもつ。口縁部直下に2個1対の紐孔が残存する。内面はヘラケズリ調整である。

甕形土器 (15・18・19・20・21・22・23・24) (15) は復元口径14.8cmを測り、「く」の字に外反する口縁部をもち、端部は上下にやや肥厚し、外面に3条の凹線文を施す。外面はハケメ内面はヘラケズリ調整である。端部外面に煤が付着する。(18) は復元口径13.9cm、最大腹径15cmを測り、外面上半部はハケメ、下半部は火を受け剝離が著しいが、ヘラミガキ調整である。内面はハケメ調整である。外面に煤が厚く付着する。(19) は復元口径13.7cm、最大腹径14.8cmを測り、口縁端部に刻目を施す。外面上半部はハケメ、下半部はヘラミガキ調整である。内面はハケメ調整である。外面に厚く煤が付着する。(20) は口径12cm、器高19.9cm、最大腹径13.4cmを測り、やや胴の張る体部に、外反する口縁部をもつ。外面は極細のハケナデ、内面はヘラナデ調整である。外面全体に煤が付着し、底部外面は2次のな火を受け、剝離が著しく赤く変色している。(21) は口径13.8cm、器高19cmを測り、倒鐘形の体部に短く外反する口縁部をもち、外面上半部はタタキメの上をナデ、下半部はハケ状のもので削るようにナデた後、その上をヘラミガキ調整を施す。底部外面は指押え、内面は極細のハケ状のナデ調整である。(22) は復元口径27.8cmを測り、丸く外反する口縁部をもつ。端部は面をなす。外面はヘラナデ、内面はナデ調整である。口縁部外面に煤が付着する。(23) は復元口径13.2cmを測り、胴の張る体部に外反する口縁部で、端部は上方につまむ。端部外面は1条の凹線を施し、外面はハケメ、内面はヘラミガキ調整である。外面に煤が厚く付着する。(24) は復元口径35cmを測り、短く「く」の字に外反し、端部は上下にやや拡張し、刻目を施す。内外面はハケメ調整で、内面に一部指頭圧痕を残す。

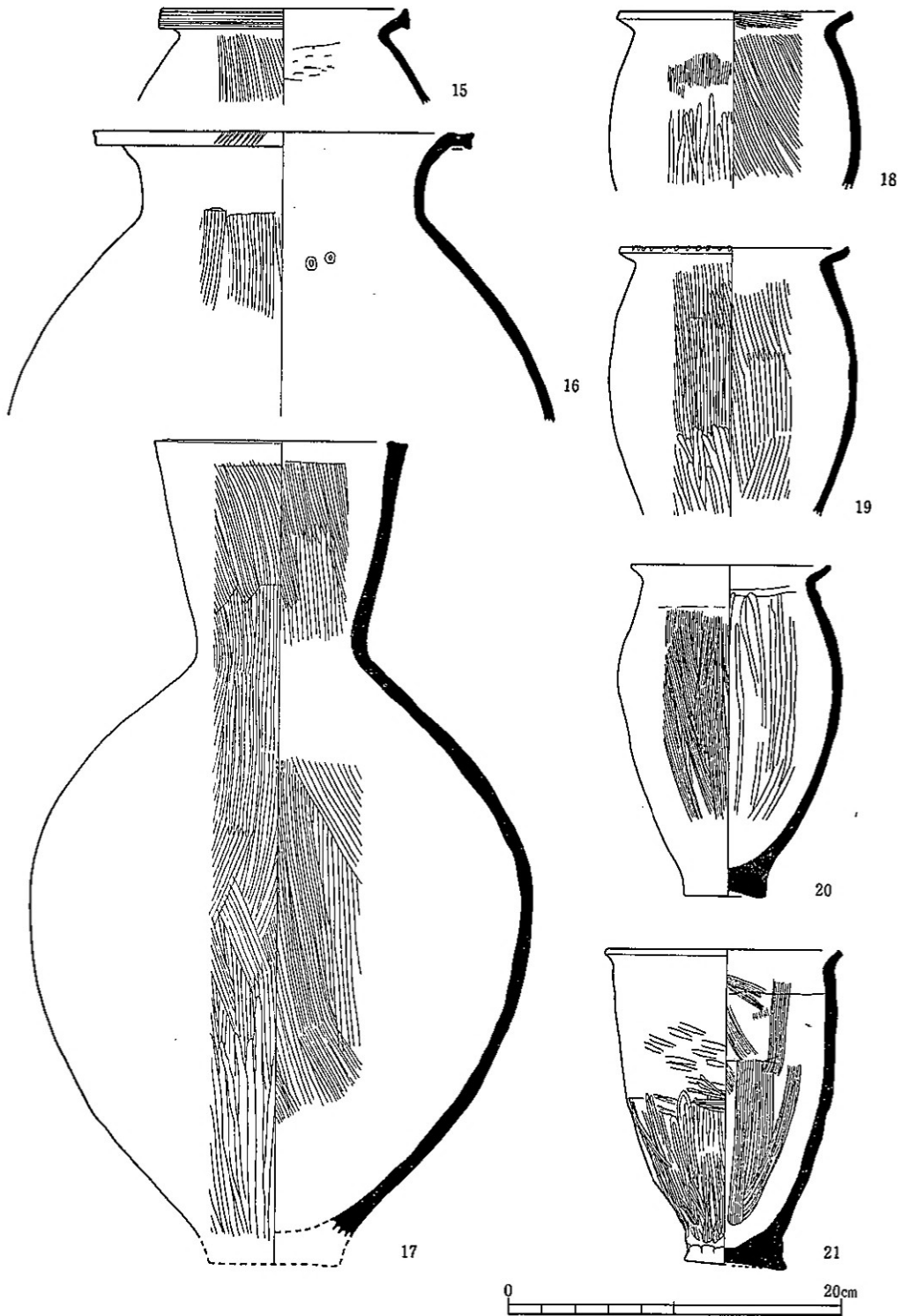
高杯形土器 (33) 復元口径16cmを測り、体部から屈曲して直口する口縁部をもち、上半部中実の脚をもつ。内外面に黒色物質が付着する。

鉢形土器 (27・28・35) (27) は復元口径20.8cm、最大腹径21.8cmを測り、胴の張る体部に短く外反する口縁部をもち、端部は上下にやや拡張する。口縁端部、体部上半部外面に列点文を飾る。体部の文様間はヘラミガキ調整を施す。内面はナデ調整である。(28) は復元口径31.4cmを測り、外に開く体部に短く直立する口縁部をもち、端部は上下に肥厚し面をなす。内面に一部黒色物質が付着する。(35) は復元口径42.6cmを測り、大きなものである。やや内傾する体部に

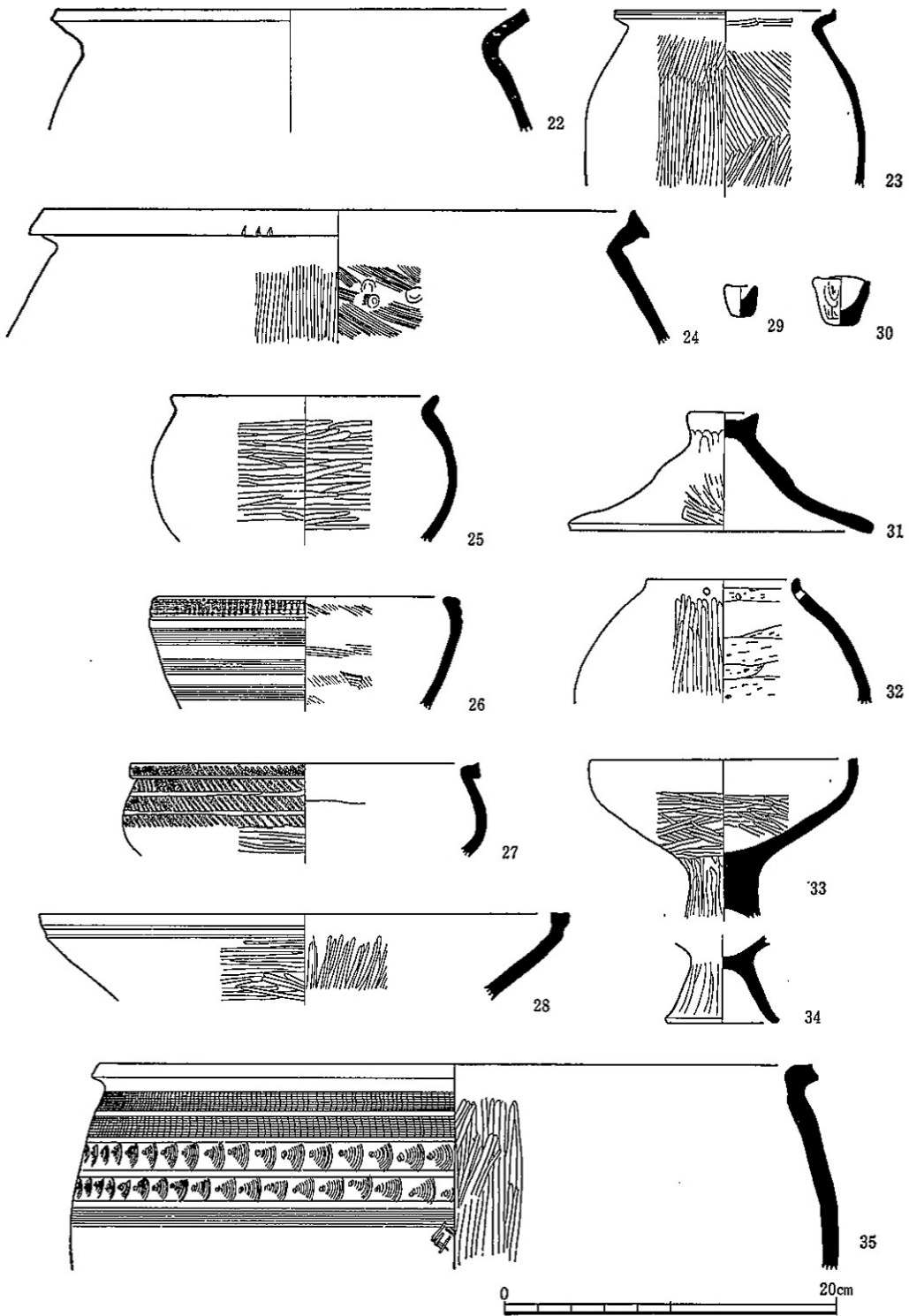




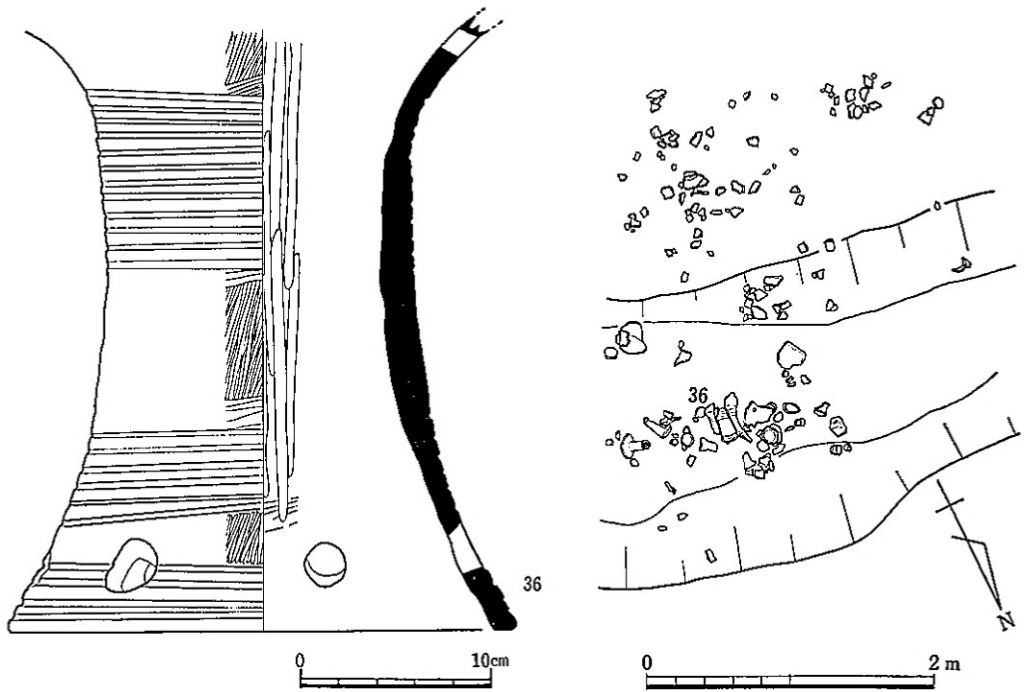
第176图 SD3040出土遗物实测图



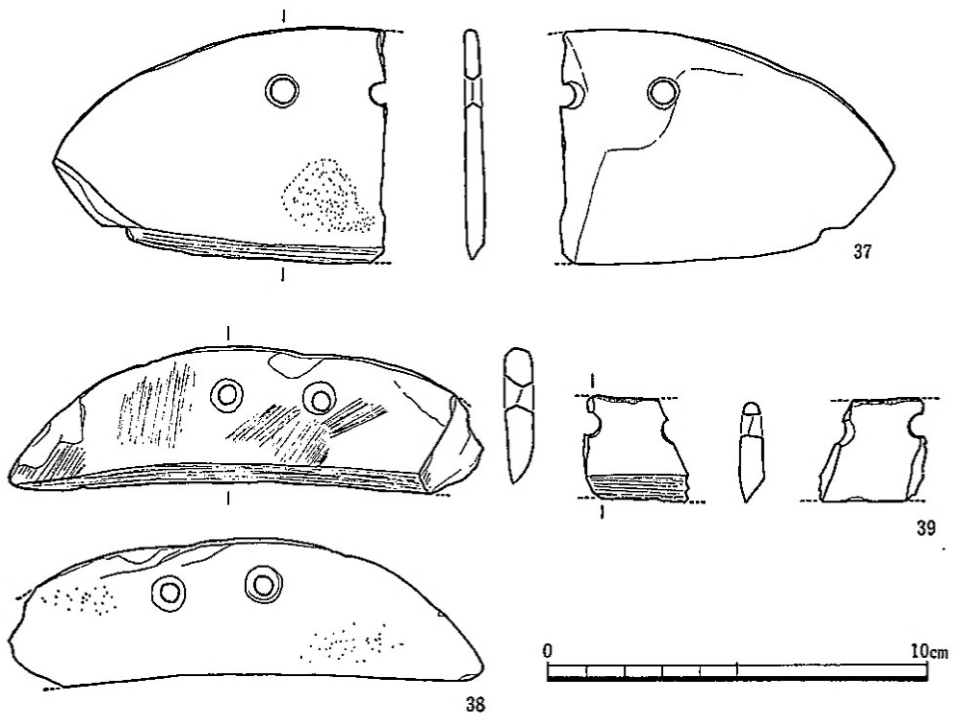
第177図 SD3040出土遺物実測図



第178图 SD3040出土遺物実測図



第179図 SD 3040遺構平面図及び遺物実測図



第180図 SD 3040出土遺物実測図

短く外反する口縁部をもつ。体部外面に籐状文、扇形文、直線文を施す。直線文の下に斜格子文が続くと思われるが、一部しか残存せず、詳細は不明である。内面は煤、又は黒色物質と思われるものが付着する。

器台形土器 (36) 裾部径26.6cmを測り、口径が裾部径より大きい鼓形を呈する。外面の筒状上半部と脚部に凹線文を施す。透し穴は6ヶ所である。

甕用蓋形土器 (31) 復元口径18.1cm、器高7cmを測り、中凹みのつまみをもつ。外面はヘラケズリ調整で、内面は煤が付着し調整不明である。

ミニチュア土器 (29・30) (29)は口径2cm、器高1.9cmを測る鉢形を呈す手づくねの土器である。(30)は口径3.3cm、器高3cmを測り、鉢形を呈す手づくねの土器である。

#### 〔石器〕 (37～52)

石庖丁 (37・38・39) (37)は外彎する片刃で、背部は彎曲する杏仁形である。刃先に平行して研磨痕がみられる。背部は研磨されている。A面刃先よりに敲打痕が認められる。長さ8.8cm、幅6.25cm、厚み0.5cmを測る。石質は緑泥片緑簾片岩である。(38)はわずかに内彎する片刃で、背部は彎曲する。A面には研磨痕がみられ、刃先に平行して研磨痕がみられる。B面には敲打痕が認められる。現存長12.5cm、幅3.65cm、厚み0.75cmを測る。石材は頁岩である。(39)は直線の片刃で、背部も直線的である。刃先に平行して研磨痕がみられ、背部は背潰れがみられる。現存長2.7cm、幅2.75cm、厚み0.65cmを測る。石質は緑泥片岩である。

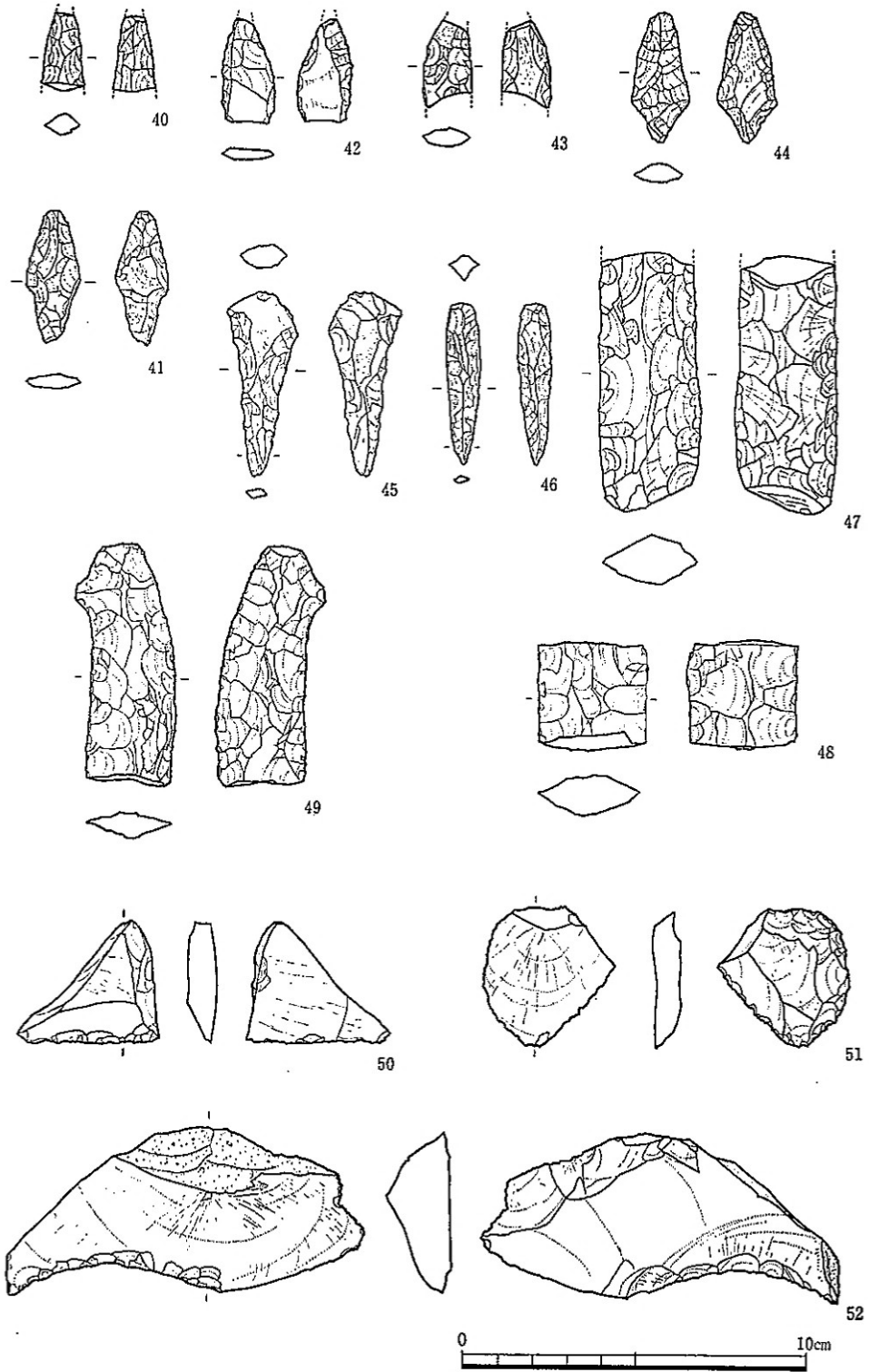
石鏃 (41・44) 凸基有茎式の石鏃が2点ある。(41)は長さ3.9cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm、重量2.7g、(44)は長さ3.8cm、幅1.7cm、厚さ0.5cm、重量3.3gである。両者とも先端は丸く、逆刺はなだらかで、扱いは浅い。後者は基部が短く、前者は幅広く長い基部をもつ。両者ともB面に大剝離面を残し、全体を剝離調整する。

石槍 (47・48) (47)は上半部は欠損するが、基辺が中軸線に対して斜めの平基式の石槍である。現存長7.5cm、幅3cm、厚さ1.4cmを測る。基端に自然面を残し、両面とも全体を整形した後、両側辺に両面からの剝離調整を施す。(48)は中央部のみ残存し、幅3.1cm、厚さ1.2cmで断面がレンズ状を呈する石槍である。両面とも全体を剝離調整する。

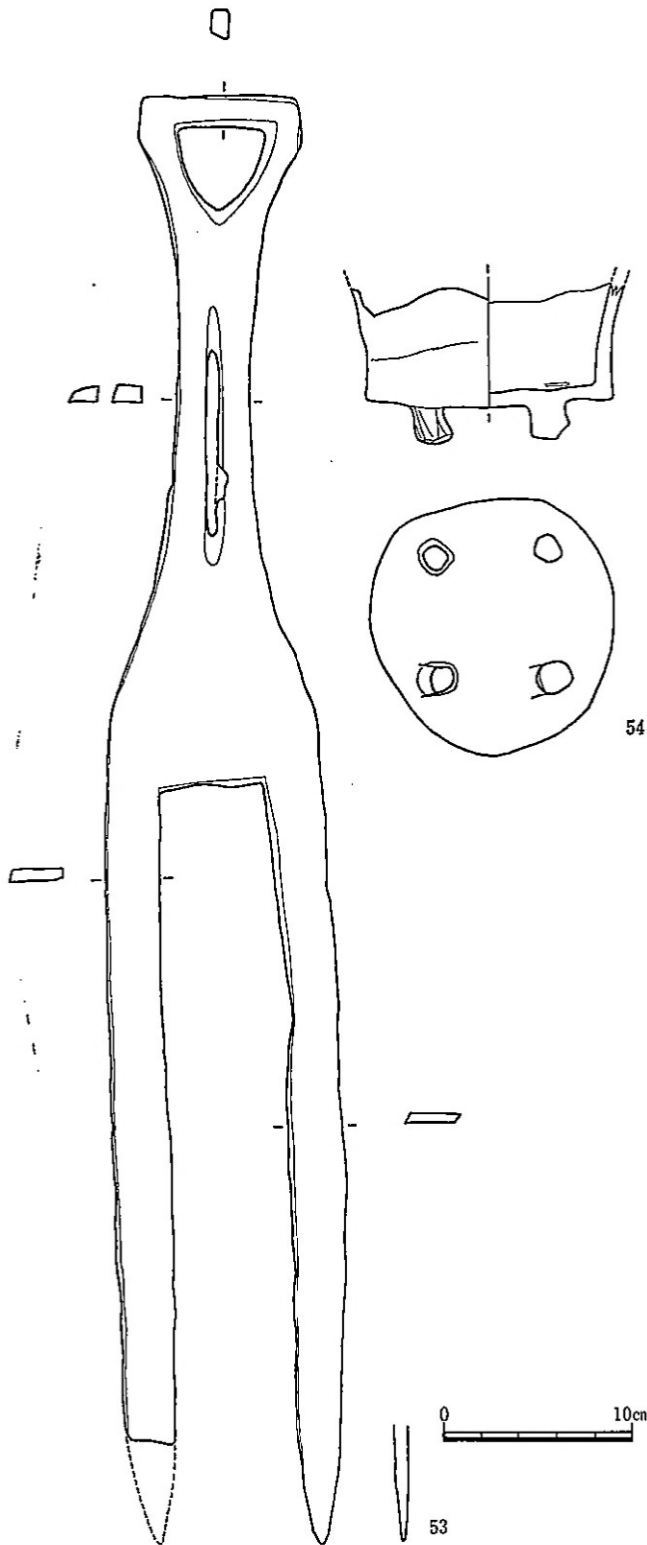
石錐 (45・46) 簡単に調整した頭部に先細りの錐部がつくもの(45)と、全体が棒状のもの(46)がある。両者とも頭部と錐部の区別が明確でない。(45)は長さ5.4cm、幅1.9cm、厚さ0.7cm、錐長2.5cm、錐径0.9×0.5cmを測り、頭部A面に自然礫面、B面に大剝離面を残して、全体を側辺から剝離調整する。(46)は長さ4.8cm、幅0.9cm、厚さ0.8cm、錐長2.2cm、錐径0.7×0.5cmを測り、両面を両側辺から剝離調整して、中軸線上に稜を形成する。

小刀 (49) 長さ6.8cm、幅2.5cm、厚さ0.8cmを測る。彎曲した先端が2叉に分かれる石器である。先端は欠損する。両面とも両側辺から丁寧に剝離調整を加える。刃部は薄く鋭い。

スクレイパー (51・52) (51)は長さ4.1cm、幅3.7cm、厚さ0.8cmを測り、B面半周に細かい剝離を加えて刃を形成する。(52)は大きな横長剝片を利用したもので、長さ10.4cm、幅4.9



第181図 SD3040出土遺物実測図



cm、厚さ 1.8cmを測り、内彎した部分に両面からの剝離調整を施して刃部を形成し、背部には自然礫面を残す。

〔木器〕 (53~54)

鋤 (53) 下層から出土した。ほぼ完形の二又鋤である。全長76.8cmを測る。身、柄、把手は1本作りである。把手は幅8.6cm、厚さ1cmを測る。柄には、長さ9.8cm、幅0.7cmの溝状の穴があげられている。柄と身の境は不明瞭で、肩はなだらかに基部へ至る。歯は、基部で幅2.7cm、厚さ0.75cmを測る。全体幅は12.3cmを測る。

四脚器 (54) 下層から出土した。現存高 8.2cm、底径13.2~13.5cm、脚高2cm、胴部最大径4.7cmを測る。体部は、若干外反しながら立ち上がる。器壁厚0.5~1cm、底部厚0.8cmを測る。底部外面は、平坦である。脚は、4.1~4.5cmのほぼ等間隔に付く。断面形は、1.5~2cmの円形を呈する。

第182図 SD3040出土遺物実測図

## 小 結

出土遺物から時期の明らかになったものは18条で次の通りである。

第Ⅱ様式—SD3016

第Ⅲ様式—SD3004・3006・3009・3011・3013・3014・3020・3028・3029・3030・3031・3038

第Ⅳ～Ⅴ様式—SD3004・3006・3009・3021・3023・3040

中期の溝は、後期の溝やNR3001によって切断され相互の関係をあまり明らかにすることができなかつた。個々の溝の中では、SD3014・3029・3031が境となつて、ピットの集中する地区とピットが全く検出されなかつた地区に分かれていることから、集落を画する目的を有していた可能性が考えられる。

埋土には砂層が含まれず、全て粘土、粘土質シルト、地山の青灰色シルト及び黒色粘土のブロックを含む層であつた。このことから水の流れは強くなかつたと考えられる。SD3004の上層には、他の溝では見られなかつた焼土、灰が堆積しており、注目される。

遺物は、大半が埋土中より同時期のものが出土した。SD3001・3023では木製品の出土が目立つた。これらの中で、SD3013・3021・3028・3029・3031からは、ほぼ完形に復元できる土器が一括で出土した。器種構成では、壺・甕・高杯・鉢形土器が見られる。SD3028では腹部に穿孔された壺形土器が加わる。

以上のように、上記の溝からは土器片や木器などの多量の遺物が出土しており、またその埋土の状況からも溝周辺が生活の場となっていることを思わせる。

## 5 その他の遺構

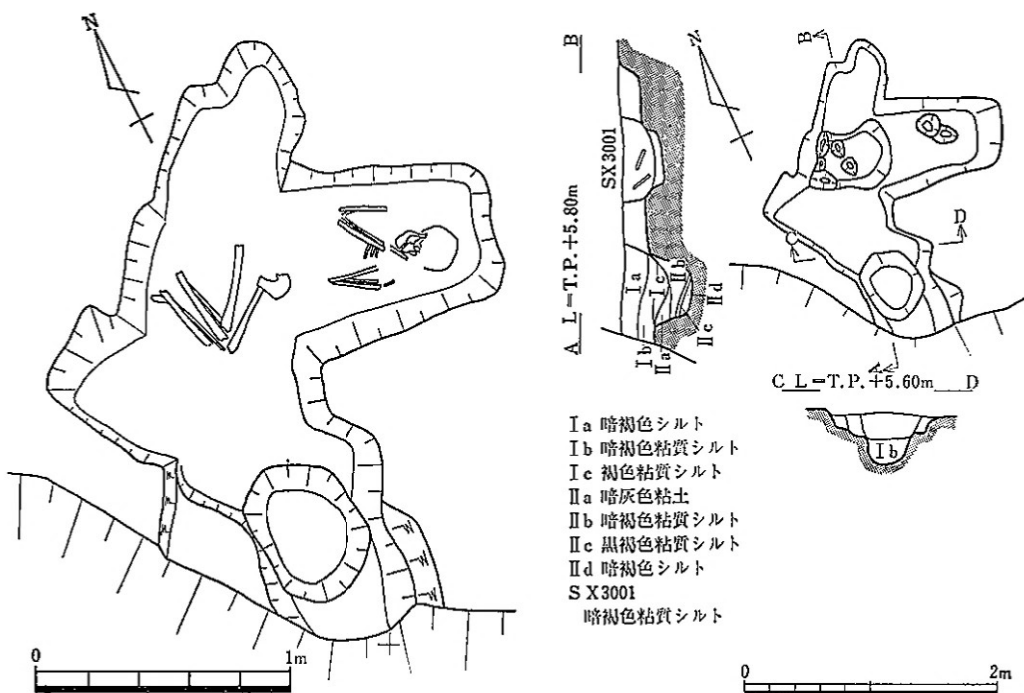
**SX3001** (第183図) H-12・13区地山面で検出された土壙墓である。地山面精査時には、他の土壙との切合い関係が認められないため、不定形の遺構と思われたが、掘り下げるに従い、その一つから人の頭蓋骨、上腕骨、骨盤、大腿、下腿骨が検出されるに至つて土壙墓であることが判明した。掘方は長さ約1.5m、幅0.7m、深さ0.25m、主軸方向(N-70°-W)の長方形土壙墓である。人骨の出土状態は頭部を東に埋置され、手は胸で組み、ひざを曲げている。遺物は土器のごく細片と埋土中からスクレイパーが出土したにとどまる。

出土遺物 (第184図)

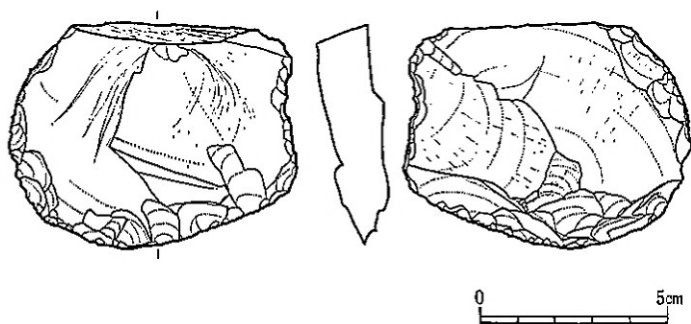
〔石器〕

スクレイパー 長さ7.4cm、幅6.0cm、厚さ1.5cmを測る。自然礫面のある一辺のみを残して剥片の周辺両面を剝離調整し、刃部を形成する。





第183図 SX 3001遺構平面図及び土層断面図(1/30)



第184図 SX 3001出土遺物実測図

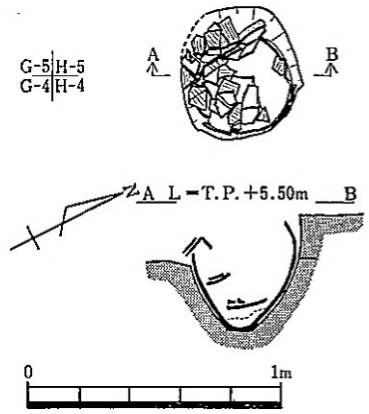
SX 3002 (第185図) H-5区で検出された甕棺墓である。墓壇は南側のSK3007を切って掘り込まれている。掘方は楕円形を呈し、径1.05m、深さ0.92mを測り、甕胴部径よりやや大きめに掘削されている。この掘方に口縁部が一部欠けた甕が垂直に埋置され、蓋には腹部下半を打ち欠いた甕が使われている。甕底部には、乳児骨が遺存していた。

出土遺物(第186・187図)

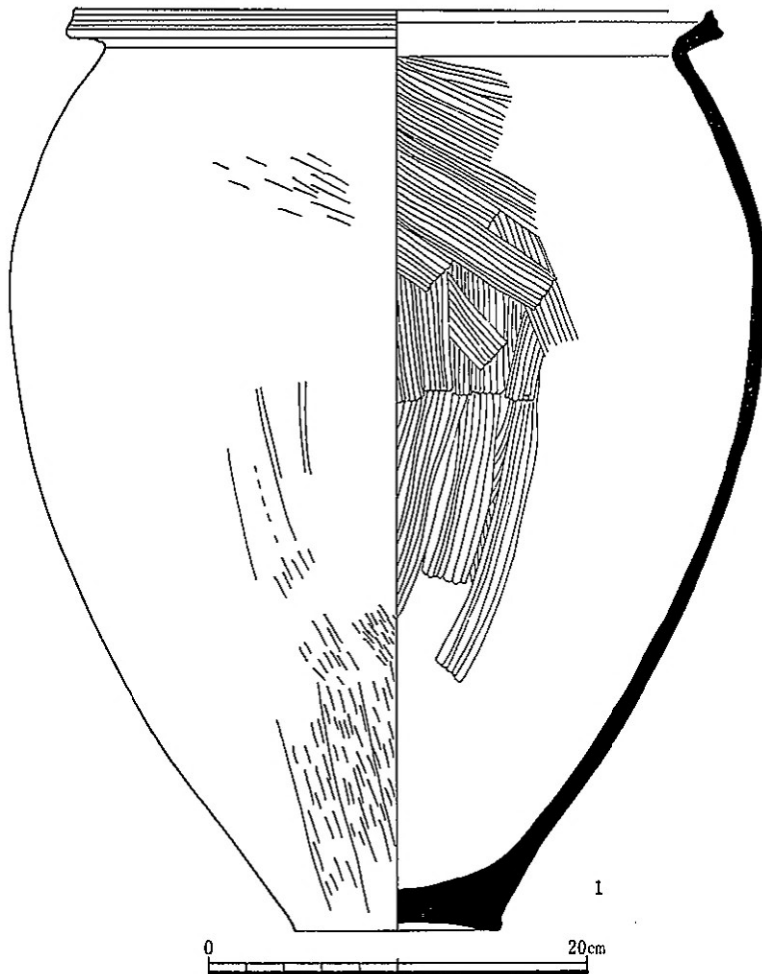
〔土器〕

(1)は棺として使われていた。内面底部に幼児骨が残っていた。口径33.6cm、器高48.3cm、最大腹径40.1cmを測り、肩の張る体部に「く」の字に外反する口縁部をもつ。端部は上下に肥厚し、外面に2条の凹線文が施される。外面は腹部がヘラミガキ、その他はヘラケズリ調整であ

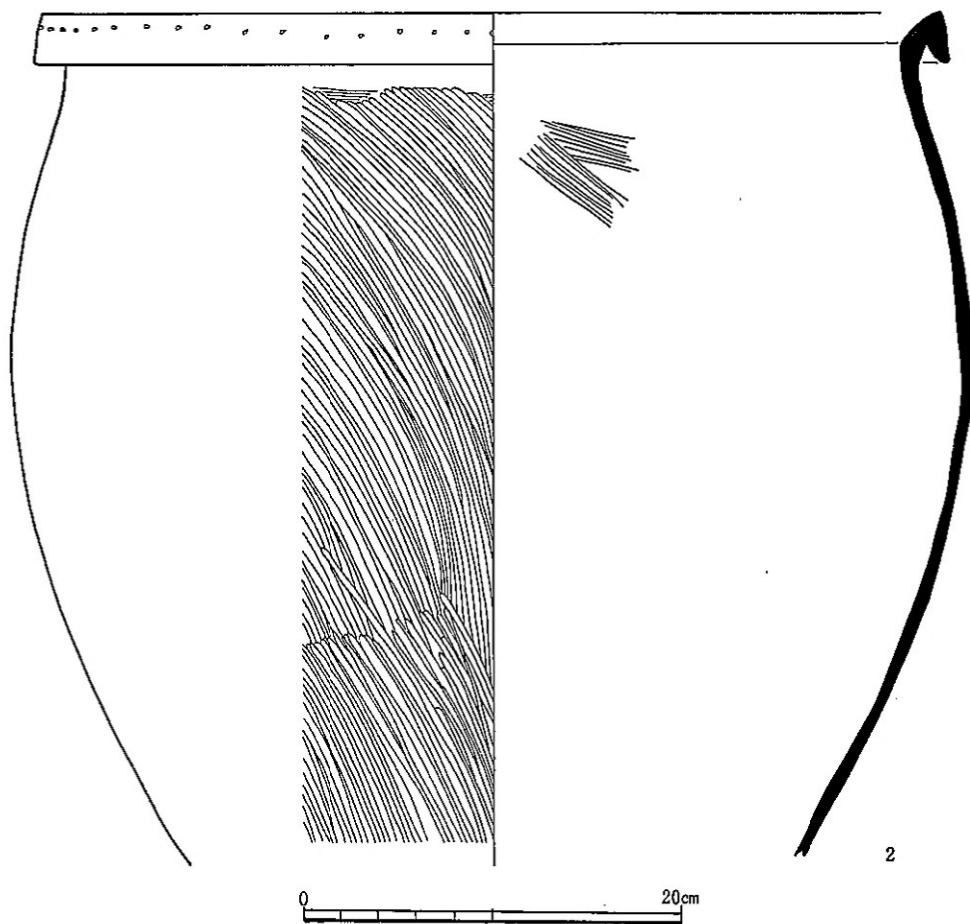
る。内面はハケメ調整である。外面一部分に煤が付着する。(2)は蓋として使われていた。復元口径47.0cm、最大腹径50.4cmを測り、やや胴の張る体部に短く外反する口縁部をもち、端部は下方に拡張する。端部外面に刺突文が施される。内面はナデ調整である。外面腹部に煤が付着する。生駒西遊型の胎土である。(1)、(2)は第Ⅲ様式新段階—Ⅳ様式である。



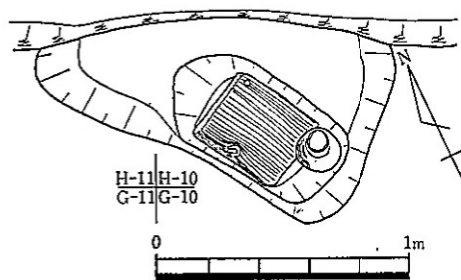
第185図 SX 3002遺構平面図 (1/50)



第186図 SX 3002出土遺物実測図



第187図 SX3002出土遺物実測図



第188図 SX3003遺構平面図(1/40)

SX3003 (第188図) H-10区で検出され、北側をSD3031に切られ、全体に上部をNR3001に削られている。掘方は方形を呈し2段に掘られており、上段は長さ1.35m、幅はSD3031に削られているが、0.8m以上で、下段は長さ0.74m、幅0.4mを測る。ともに方形である。外側から底まで0.3m、内側の掘方内に、方形の板を置き、その東側に把手を打ち欠き、腹部下半に焼成後に、穿孔を施した水差形土器が置かれている。祭祀に関係するものかと思われる。主軸方向は、N-30°-Wである。

出土遺物 (第189図)

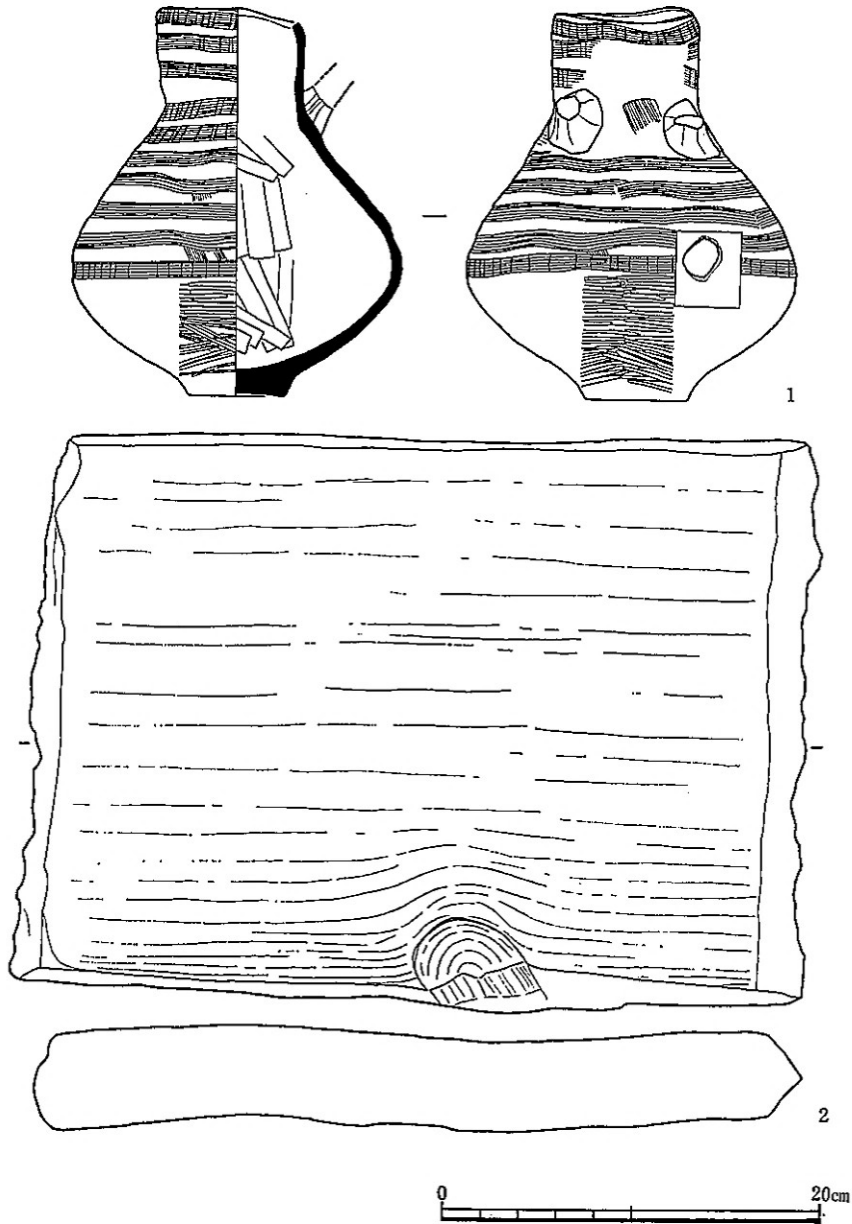
〔土器〕

(1) は口径7.2cm、器高20.4cm、最大腹径17.6cmを測る水差形土器である。第Ⅳ様式である。

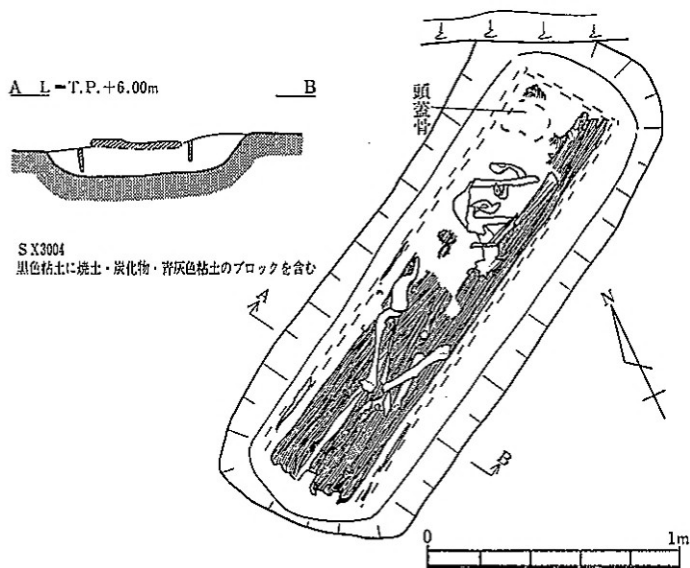
算盤玉状の体部に直立する頸部に口縁部はやや内彎する。口縁部は把手側がやや底くなっている。腹部中央に穿孔が1ヶ所あけられる。口縁部から腹部にかけて直線文と籐状文で飾るが口縁部上端の籐状文だけが左まわりで施される。内面は体部上半部がハケメ状ナデ、下半部はハケメ調整である。

〔木器〕

板状木製品(2) 長軸0.82m、短軸0.40m、深さ8.0cmのS X 3003の底面に据え置かれた状



第189図 S X 3003出土遺物実測図



第190図 S X 3004遺構平面図 (1/50)

態で出土した。現存長40.6cm、幅29.8cm、厚さ 4.8cmの長方形を呈する。加工痕は明瞭には確認できなかった。

**S X 3004** (第190図) K-4区で検出された。組合式木棺である。包含層(第Ⅱ層)(T. P.+5.7m)を、精査中に人骨の一部が検出された。蓋板、小口板は遺存せずわずかに側板の一部と、底板を残すのみである。掘方は、包含層である黒色粘土に掘られ、長さ2.25m、幅 0.8mを測り深さは不明である。主軸方向は、N-30°-Eである。人骨は、遺存状態が極めて悪かったが、頭蓋骨、上腕骨、大腿骨が検出された。頭部を北東に向けて埋置されていた。副葬品は検出されなかった。土器細片のみ出土した。木棺の側板は木質のみ遺存する部分も含め現存長1.79m、幅0.5m、厚さ0.01m、小口板は推定幅0.4m、底板は現存長1.86m、幅0.34m、厚さ0.04mを測る。側板は、底板にのっけおらず底板の外側に立てられていた可能性もある。掘方内埋土は炭化物、焼土を含む灰黒色粘土の包含層の一部である。

出土遺物 木棺以外には副葬品は出土しなかった。